

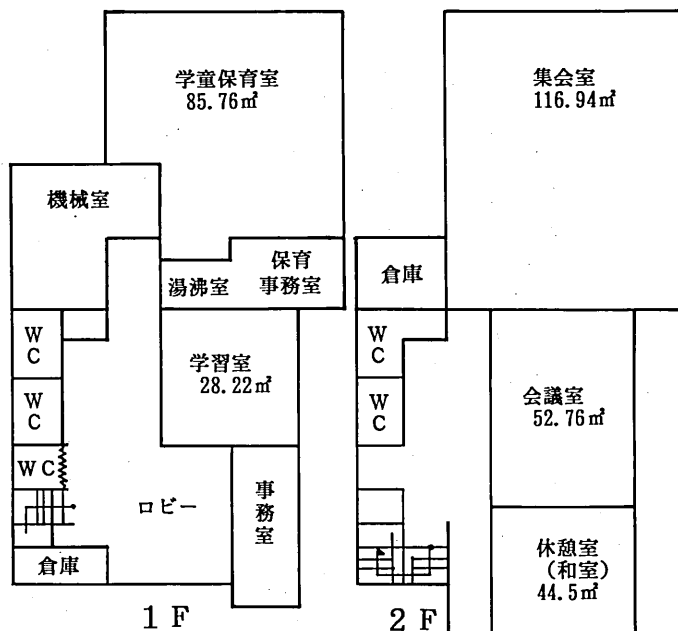
1 白梅分館ってこんなところ



白雲山記



入り口付近からの白梅分館





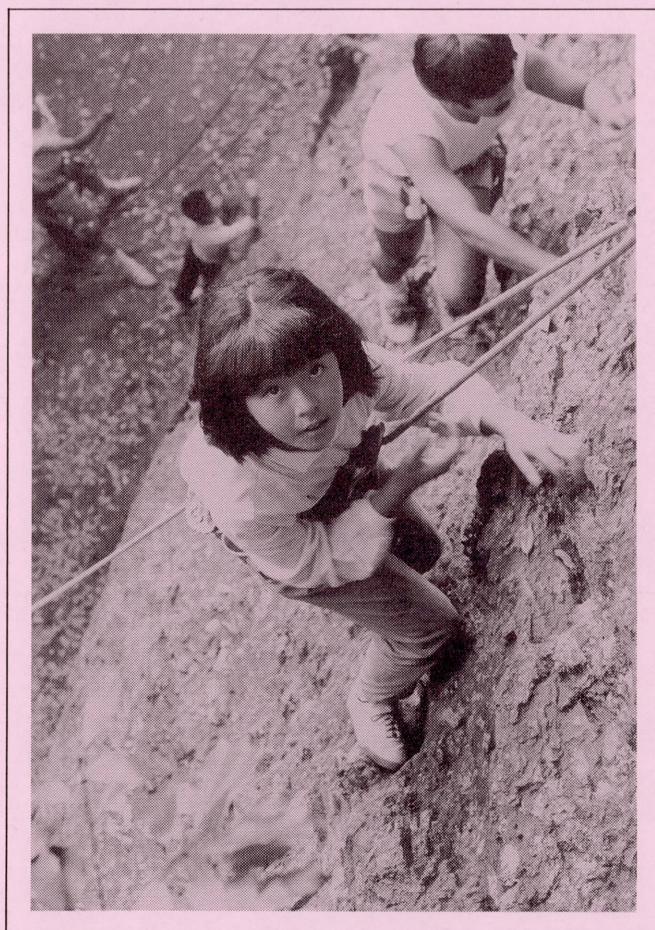
1989年7月「家族新聞をつくる」

1981年11月「第1回子どもまつり」



1991年8月「たんけん教室沢のぼり」

2 10年間を振り返って



白雲山記

1 はじめに

1980年（昭和55年）5月、福生市立福生第2小学校プール跡地に白梅分館は開館しました。

熊川地区には、すでに図書館の分館でもある「わかたけ会館」が開館していたこともあり、白梅分館周辺の住人の間では、「町会の建物ができるらしい」ともっぱらの噂だったそうです。

開館以来早くも10年の月日が流れ、今日（1991年12月）まで30万人以上の市民の方々に利用していただきました。あっという間の10年でしたが、職員（高齢者事業団＝現シルバー人材センターからの派遣されている方も含め）も替わり、開館当時のこともよく分からないというようになってきています。

このような状況の中での10年誌の編集に携わり、利用者の方々の力を借りてこの記録集が作成されました。まず、利用者の方皆さん方にお礼を申し上げます。

さて、白梅分館の位置している「熊川」という地区は、福生の歴史の中でもかなり古くから人々が生活していた地域で、東京都の文化財もある熊川神社、福生市の史跡としての熊川分水、古くからの町並みの中に調和しつつ現在でも営業を続けている酒造場、多摩川の段丘沿いにつながるようにしてしつとりと存在する3つのお寺とその周囲の辻に残る石仏など、歴史が町並みに残っている地域でもあります。

より詳しくは、福生市文化財保護審議会委員の立川愛雄さんに『温故知新熊川村あれこれ』（147ページ）を書いていただいていますので、そちらを読んでいただければ幸いです。

最近ではアパート・マンションが増えたとはいえ、白梅分館の周囲は熊川地域で生まれた方々の「新家」として住居を構えた方が多く、閑静な住宅街という状況です。

職員として窓口を通して地域の方々と接し、昔からこの地域で生まれ育った方々が持つ地域への愛着と人間関係は、単なる職員としてやってきた身では理解出来ないものも相当あると感じました。

この10年誌の中に登場するほとんどの方が白梅分館の近くで生活していて、毎日顔を合わせるような方々です。その地域の人々が作り出す白梅分館の雰囲気は伝わるのかどうか若干心配ではありますが、読んでいただく方の身になってこの記録集を作成しました。これから、白梅分館の10年を一緒に振り返ってたいと思います。

2 白梅分館の変遷と職員の変遷

1980年（昭和55年）5月に開館した当時、この白梅分館には若い男女各1名の職員と、パートタイムに来ていただいた方（高齢者）の3人で開館しました。高齢者の方は地域の人間関係に明るく、若い職員に有益なアドバイスを与えてくれたとの事です。この高齢者の方は後にシルバー人材センターからの派遣という形になり、以後、現在まで十数人の方に関わっていただいています。職員の不在や能力不足を補ってくれる方々ばかりで、白梅分館を円滑に運営している大きな力になっています。

さて、公民館は職員の顔がそのままその館を代表するような雰囲気があります。そのような意味で、職員の交替に伴い白梅分館の”顔”も少しずつ変化してきました。以下に、職員の異動と白梅分館の変化を追ってみたいと思います。

在職職員名	在職期間	備考
名 取 明 美	1980年4月～1984年3月	公民館本館へ異動
金 子 幸 夫	1980年4月～1985年3月	田園会館（児童館的施設）へ異動
松 坂 直 人	1984年4月～1991年3月	公民館本館へ異動
伊 東 静 一	1985年4月～	公民館本館から
海老沢 泰 弘	1991年4月～	建設部都市開発課から

上記のような変遷の中で職員による分類をしてみれば、開館当時から勤務していた名取が本館に異動した1984年3月までを第1期とすれば、松坂が在籍した1991年3月までを第2期と言えると思います。

そこで、以降に第1期と第2期に分けて、”白梅分館の顔”の変化・変遷を見ていきたいと思います。

<第1期>

開館当時の多忙も一段落し、職員も利用する市民の方もお互いが白梅分館に慣れてきました。しかも、職員はようやく日常業務が軌道に乗ってきて主催事業を開くまでにこぎつけ、夏休みに子ども対象の事業を開くことが出来ました。

白梅分館が開館した当時は、現在の田園会館＝児童館機能を持つ地域会館もなく、福生市の場合は公民館が少年教育の事業を積極的に行っていたのです。

開館した年は子ども対象の事業と女性対象の事業しか開くことが出来なかったのですが、それでも子ども対象の映画会のチラシを福生市立第二小学校の校門の前で配布し、子ども達への浸透を図った様子が残っています。

開館の翌年には職員もだいぶ余裕を持つことが出来、子ども対象と女性対象の事業の他に高齢者対象の事業も開いています。

また、資料からも理解できます、子ども対象の事業はコース数・回数・参加人数などが増加し、子ども達の中に白梅分館の存在が浸透していった様子が分かります。そしてこの浸透が、翌年からの「子どもまつり」の大きな力の蓄積となりました。

この子どもまつりに関わった「おしゃべり文庫」のお母さん達の中には、「子どもが何でもよいから、子ども自らの力で準備し成し遂げたという実感を持てる機会が必要だと思う」と話しているところをみると、本当に子どもも大人も一緒に準備し作り上げてきたものが、実は地域に住む大人と子どもという関係から、地域に住む人間同士の関係につながってきていることを実感しているからだと思います。

そして、開館から3年目には今までの年に比べ、主催事業のコース数、回数、参加者数も大幅に増加しています。

特にこの年には青年を対象にした8ミリ映画製作のコースや、市民大学講座「社会」、女性講座「歴史に学ぶ」の場合は準備会と本コースに開かれ、職員の落ち着きと共にじっくりとした取り組みが始まった様子がよく分かります。そして、初めての「白梅ハイキング」では、多くの利用者の交流の機会になったようです。

3年目ということもあり、自主グループ活動の様子においても白梅分館の知名度が上がったようで、大変多くの市民に利用された様子が別添のグラフなどからもよく分かります。

また、この年には多くの準備を重ねた初めての「利用者発表会」が開くことが出来ました。その後、この「利用者発表会」は、白梅分館が地域の文化の発信地としての役割を果たして行くことになり、毎年盛況に行なわれています。

<第2期>

1984年（昭和59年）4月、開館以来4年間白梅分館で仕事をした名取が公民館本館に異動し、本館より異動してきた松坂が、金子とのコンビで白梅分館を運営していくことになりました。

松坂が来て1年目は、予算の関係や前任の残した仕事などの継承や分担などもあり、大きく色合いを変えることは出来なかったようですが、それでも女性対象の事業の分野で「イブニング広場」が開かれ、新たな参加者層を開拓し利用者層が広がったようです。

また、高齢者対象の事業が始められました。この年は大きな展開にはなっていませんが、今から振り返って見ると、翌年からの「白梅熟年ひろば」の準備段階としての時期であったと言えます。また、女性の事業については、金子と二人で分野を分けて行っていたため、ずいぶん充実していたことが事業の内容でも分ります。

1985年（昭和60年）には、開館当時からの職員の金子が田園会館に異動し、公民館本館より伊東が異動してきたため、開館当初の職員は二人ともいなくなりました。

この年以降は、松坂・伊東で白梅分館の”2枚目の顔”を作ってきました。金子の担当していた事業に代わり、自然に関する事業・講座や子どもに関する事業が多くなりました。

この年の具体的な子どもに関する事業は、「ワイワイ子どもひろば」「子どもの合唱教室」や、「たんけん教室」「おもしろ科学教室」などで、広い分野で子ども達の要望に応えてきました。

また、この年には、まちづくりに緑（自然）の果たす役割を市民に訴えた「グリーンセミナー」という講座が始まり、現在の「市民参加のまちづくり講座」に発展していくキッカケになりました。

1986年（昭和61年）、この年には「子どもまつり」が2年ぶりに開かれたり、「子ども囃し教室」が開かれたりして、子どもの事業にも新たな取り組みが増えました。また、健康ブームを背景に中高年によるハイキング人気が出だした頃で、これに対し

て、いち早く「サンデーハイキングクラブ」という教室を開き、地図やコンパスの使い方、山歩きに必要の装備や知識の獲得、そして実践練習と、かなり本格的な学習の機会を提供しました。

この教室は人気が高く、翌年も開きました。現在では、その教室に参加していた方々は仲間と一緒に山歩きの楽しんでいる様子で、時折、事務所の窓口で楽しい山歩きの話を伺うことが出来ます。

その他に、この年には白梅分館で初めて英会話教室を開きました。これは、市民の要望が大きかったのと、英会話を通して地域に住む大人が（特に主婦）、福生にやってきた外国人の生活全般にボランティア的に関わってもらうようになって欲しいという希望もあって開いたものでした。しかし、この時点では職員の力も不足していて、本来の目的に達成したとは言いきれませんでした。この年の英会話教室の参加者は現在でも活動が続けていて、この教室の参加者が市民に呼掛け、新たな外国人の方との交流の機会は増えています。

また、白梅分館を利用している共同保育サークルのお母さん同士で、「ちょっと早いクリスマス会」を開きはじめました。これは、白梅分館を異なった曜日で利用している共同保育サークルの母親同士が、各自の持っている力を出しあい、地域に暮らす子ども達全部（というところですが）を対象に子どもと親の交流する機会を作り、準備の過程を通して乳幼児を抱えるお母さん同士の新たな交流の場として始めたのです。

このように、この年は新たな取り組みを積極的に行い、主催事業参加者数もこの10年の最高を記録しています。また、自主的なサークル活動として利用した方も最高の数値を示しています。

6年以上過ぎて、白梅分館の位置も果している役割もようやく地域の中に定着してきたことが分かります。

1987年（昭和62年）には、幼児を抱える女性対象に人形劇を本格的に学ぶ機会を開きました。これは、日常生活の中で他人と口をきくことも少なくなっている女性（主婦）の、孤立分散している状況をどのような方法で解消したらよいのかと考えたあげく、人形劇を実施すれば必然的に言葉も喋らなければならないし、小道具や大道具などの作成の段階では自分一人ではなく数人の共同作業になり、日常的に忘れかけてきている「他人と一緒に一つ一つの物を作り上げる過程を体験しなおす」という考えにたどり着いたのです。

この人形劇の出来栄ははかなり高く評価され、数回の依頼公演をこなしたほどでしたが、女性であり主婦であることから、妊娠や夫の転勤で活動が続けられなくなったというメンバーが多くなり、人形劇としては続けられなくなってしまいました。このあたりはどのように解決していったらよいのか課題として残っていますが、未だに有効な対策が見いだせません。

この年のたんけん教室は、年間48回で1200人の参加がありました。ほぼ毎週子ども達と顔を合わせたのですが、特に9月以降の毎週土曜日の午後、たんけん教室主催の

「ファミリーオリエンテーリング」の準備を行いました。子ども達がオリエンテーリングの中身＝コースの設定・クイズの問題やゲームの作成をし、そして、それらの道具や景品なども手作りで作りました。

当日は、たんけん教室のリーダー達がついていましたが、子ども達が主催者となって地域の神社や仏閣を見て歩く、ファミリーオリエンテーリングを成功させることが出来ました。

「裏方」を経験するというのは、今日では非常に貴重な経験です。と言うのは、兄弟も少なく大切に育てられている今日の子供達にとって、お客さんの立場は数多く経験することはあっても準備する側に回るなどとはほとんどなく、またそのような立場にたつ必要もないので考える機会もありません。実際に学校とは異なり地域で大人から子どもまでを相手にゲームやクイズを説明したり指導するのですから、異質な体験であることは間違いありません。

このような経験を通して、仲間を思いやり全体の流れを感じることの出来る人間になっていくのだと思います。また、何よりも自分で計画を立て実行に移していくというプロセスを経験出来ることが、将来自分の人生そのものの全体像を描き、具体的な計画を作っていくことの出来る人間になっていくのだと思います。

1988年（昭和63年）には、松坂の担当する女性の事業が拡大発展し、回数や参加者数も大幅に増えています。また、同様に高齢者の事業も発展し深まっている様子が分かります。

この年には、「PTAって何？」というテーマで、地域のPTA役員を対象にした事業を開きました。しかし、大切な問題にもかかわらず参加者はさほど多くなく、また、固い話を真剣に考えるというような姿勢よりも、去年の役員がやったことを波風立てることなく自分の任期を過ごすほうが得策と考えることが多いらしく、なかなか人が集まりませんでした。しかし、参加した各役員は深刻な問題を抱えているため、少ない人数ながらも話の内容は深まり、各自が持ち帰ったものは大きかったようです。

1989年（平成元年）には、白梅分館の知名度や公民館の分館としての実質的な中身が地域の方々に浸透し、多岐に渡る事業の展開がありました。

ワープロ教室は今日ではどこでも開かれていて、そのこと自体はさほど珍しい事ではないのですが、白梅分館で開いたワープロ教室は、「家にあるワープロを持ち寄る」という形で開きました。このような教室は講師や職員に非常に負担が大きいのですが、家庭にあるワープロを利用したい人は、新たに買い替えるということは考えられません。それなら、今持っているワープロを利用する方法が一番良いということになり、講師と職員、そしてアシスタントの3人で、ほとんどの国内メーカー対象にしたワープロの教室を開いてみました。

案の定、かなり難しい面もありましたが、市民の方々からは大変な反響を得ました。その後、教室終了後も職員の所に聞きに来ることがあり、職員が分からない点については、分かる人が情報を伝えるという関係が生まれました。

また、教える側からすれば一つのメーカーにしばらく一律に同じ機種で教えた方がはるかに効率が高いのは明らかで、白梅分館で開いたようなワープロ教室の方が難しいと思います。

少年の事業においては、「夏休み自然教室」でこの年の夏以降に造成される「多摩川中央公園予定地」を、子ども達と一緒に植物・昆虫を中心に調べ、貴重な記録を残すことが出来ました。この記録を市民が参加し残しておくことがどれだけ大切な事なのかは、参加した子ども達が理解するまで今しばらくの時間が必要ではないかと思いますが、大きく変化した公園とそれ以前の自然の河川敷、そのどちらが将来的に求められて行くのか、地域の変貌を科学的にとらえ将来の展望を的確に編み出すための、一つの実験的な取り組みになっています。もちろん、現在での結論は出ていません。

その他に、「夏休み子ども音楽教室」で新たな子どもの層を開拓し、たんけん教室では前年に引続き地域の自然や文化財を見てあるき、子ども達が生きている時代の福生を認識できるよう意識的に環境教育を進めました。

女性対象の事業では、乳幼児を抱えるお母さんを対象に「家族新聞を作る」教室を開き、大きな反響を呼びました。それは、子育てそのものに目がいてしまい、子どもの人格を育てる大人側の意識の確認がされずに毎日を過ごしていることがほとんどのため、自分の家族や子育ての意味、そして自らの生き方を振り返る場として、記録に残す作業をすることとしたのです。

結果的には各参加者が家族新聞を発行し、現在まで引き続き発行している人も多くいます。夫の転勤や家族の都合で転居してしまった人も多いのですが、家族新聞は地域を越えて人と人とを結びつけています。蛇足になりますが、どういうわけかこの家族新聞作りがテレビ番組で紹介されたりして、最近では新たに家族新聞を発行する人(家族)も増え、家庭や家族を中心にしながら、地域や仲間を確実に身近なものにしていることが分かります。

また、この年に初めて「国際交流事業」を開きました。これは、市内に在住の外国人の方々が、日本人と接触を持ちたくてもその術を知らず、ひたすら「壁とにらめっこ」の生活を送っていて、中には心身症にさえなってしまう人がいるということを知り、それなら、日本語を同じ様な主婦の会話の中から体得するような機会を用意しようと、国際交流ボランティアの方々の協力を得ながら始めてみました。福生市の広報に日本語と英語の募集記事を出したところ、外国人の方の参加希望が多く寄せられました。白梅分館のすぐそばに住んでいる外国人女性が、だれとも会話をすることなく非常に苦しい毎日を過ごしていたと聞いた時は、地域の方々といろいろな話をしてきたつもりでしたが、実際には手も目も届いていない実情に、自分の力不足を感じました。

この教室はボランティアの方々の絶大なる支援のおかげで、多くの外国人と日本人の接点を作り出すことに成功しました。

過去の10年間の主催事業を中心に、白梅分館の動向を見てきました。開館した当時の職員の名取が記しているように、のんびりとした雰囲気を持つ白梅分館のイメージ

は今日でも変わりません（変える必要がないと感じていて、かえってこのまま維持しようと考えている）が、開館当時では予想もしなかったであろう国際理解のための営み（内なる国際化と言われている）が、白梅分館を中心にして広がってきています。

今後は、ますます高齢化の問題や国際化の問題を考えて事業を行う必要があるでしょう。そして、それは単なる流行だからではなく、“同じ地域に生きる弱者”としての認識を持ち、高齢者の問題や国際化の問題・取り組みをすべきことは明らかなです。

公民館の職員は常に新たな問題を感じ取る感性を求められ、また市民要求という形で要求されてきました。

白梅分館が本当に地域に住む全ての人にとってかけがえの無い公民館となるかどうかは、10年を過ぎたこれからが本当のスタートではないかと思います。

以降には、各分野別に取り組んできた主な事業を分析し、将来に向けての考え方も模索してみたいと思います。

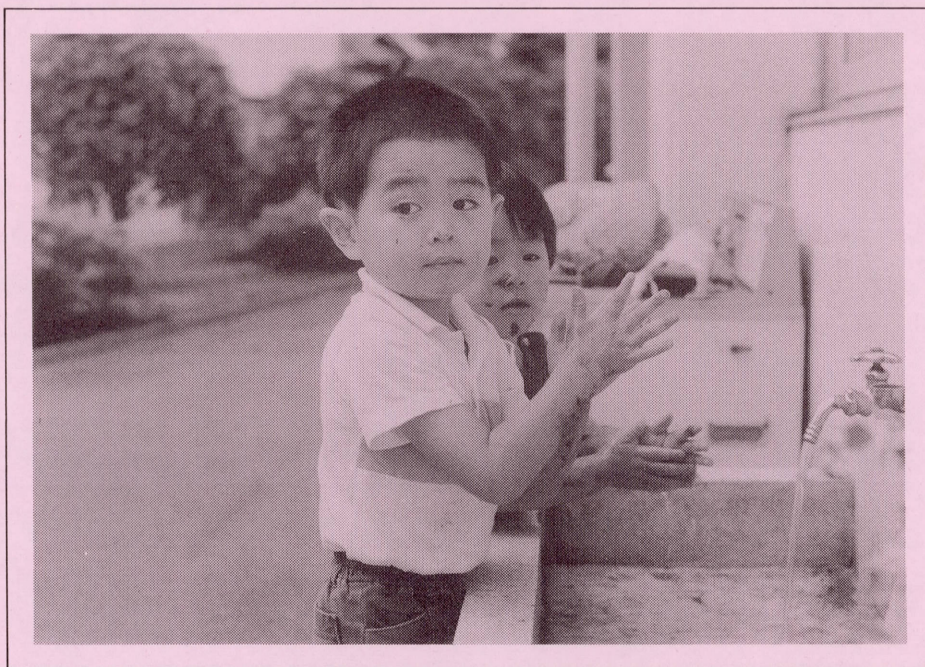
なお、各年ごとの主催事業の一覧と、各事業のプログラムについては後述してありますので、関心のある方は目を通していただければ幸いです。

<記述者名が無いものは、現在の白梅分館の職員が記述したものです>





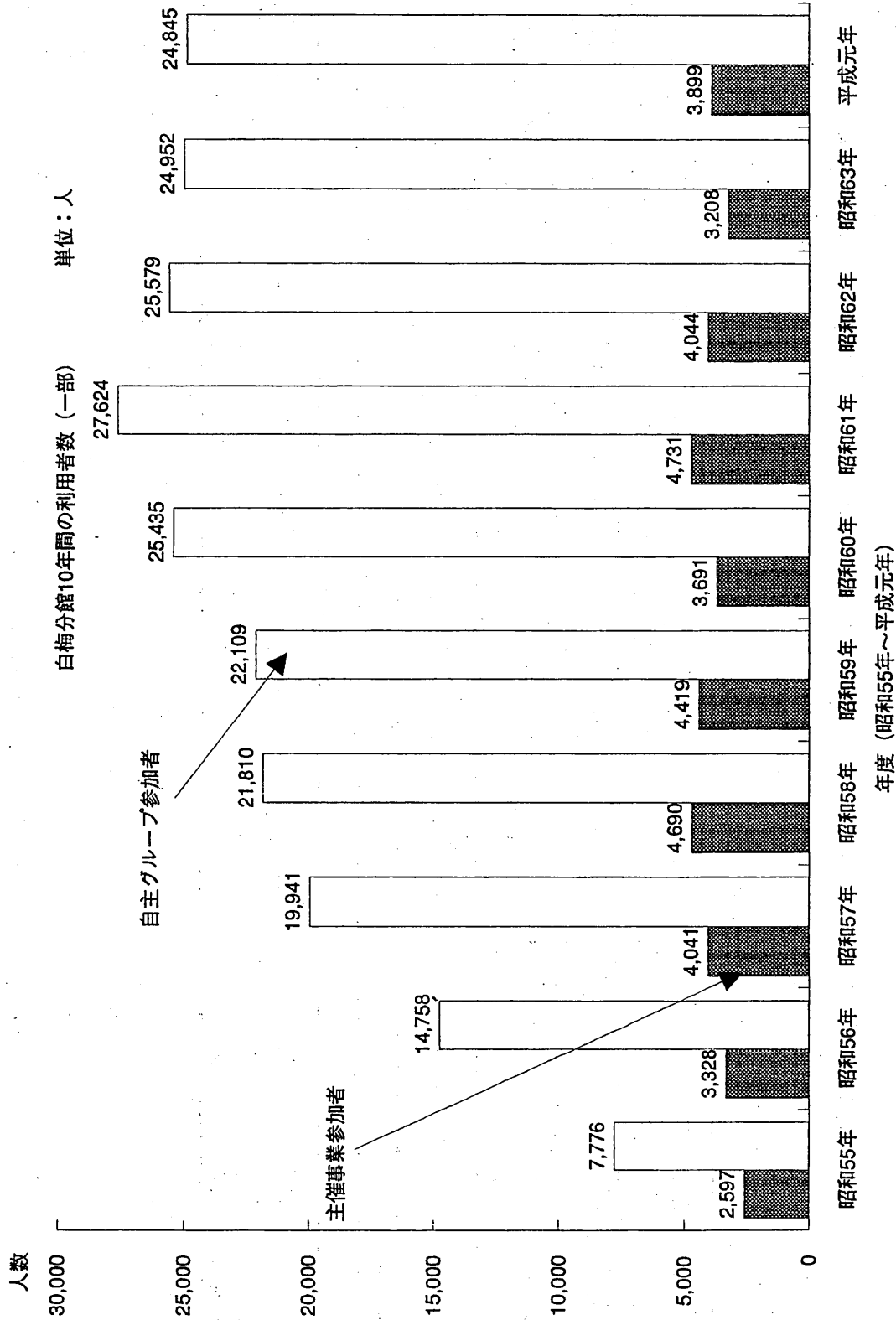
3 白梅分館10年の歩みの記録



白雲山記

福生市公民館白梅分館10年の利用者統計（単位：人）

	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	合計
	件数	200	191	206	192	165	201	169	179	188	1786
主催事業	人数	2597	3328	4041	4690	4419	4731	4044	3208	3899	38648
	件数	472	840	1193	1378	1503	1846	1722	1723	1783	14256
住民の活動	人数	7776	14758	19941	21810	22109	27624	25579	24952	24845	214829
	件数	20	8	17	17	8	4	27	3	4	112
公共的団体	人数	578	255	409	567	385	115	331	100	130	3080
	件数	9	4	5	2	10	25	10	8	4	86
政治宗教団体	人数	440	120	200	60	420	542	210	379	125	2811
	件数	2	2	8	8	6	27	5	1	8	87
企業	人数	44	66	324	310	58	657	90	20	143	2178
	件数	19	10	41	79	32	23	21	11	64	308
その他	人数	588	368	678	1318	439	486	559	408	856	5827



昭和 55年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児教室	幼児	10月9日～11月20日	8	120
わんぱく教室	子ども	7月9日～8月20日	8	240
子ども手芸教室	子ども	7月28日～8月4日	5	125
子ども指人形教室	子ども	10月8日～1月28日	14	140
冬のわんぱく教室	子ども	12月6日～1月31日	7	224
家庭教育学級	女性	10月9日～11月20日	8	184
婦人学級（女の一生を考える）	女性	2月2日～3月30日	9	99
子ども会指導者研修会	一般	3月4日～3月18日	3	42

昭和 55年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
6月7日	ピッピの新しい冒険	午後2時・4時	254
8月7日	トム・ソーヤの冒険	午前10時・午後2時	210
10月26日	ピッピの宝島	同上	135
12月20日	雪の女王	午後2時・3時30分	203
2月22日	サミーは小さな大選手	午前10時・午後2時	160
3月13日	忍ぶ川	午前10時・午後7時	50

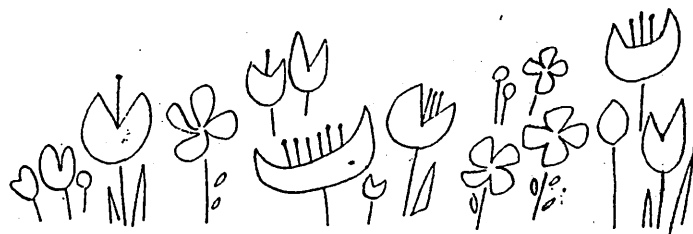


昭和 56年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児教室	幼児	11月11日～3月24日	18	252
子どもまつり(リカー研修会)	子ども	9月26日～11月29日	10	189
子ども指人形教室	子ども	9月30日～12月23日	11	143
冬のわんぱく教室	子ども	1月30日～3月13日	7	147
わんぱく教室	子ども	7月8日～8月12日	7	196
子ども教室	子ども	7月29日～8月7日	6	180
婦人学級(文学にみる女性)	女性	6月26日～7月24日	5	95
女性講座「歴史に学ぶ」	女性	11月9日～3月15日	13	325
ヤングミセスの教室	女性	11月11日～3月24日	18	162
親と子の広場	子ども	10月14日～3月26日	3	69
子ども会指導者研修会	一般	3月12日～3月19日	2	52
市民大学講座「社会」	一般	3月3日～3月31日	5	50
語らいの広場「白梅コース」	高齢者	6月24日～11月19日	11	231

昭和 56年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
4月26日	ピッピ船にのる	午前10時30分	70
6月27日	ニルスのふしぎな旅	午後1時30分・3時	200
8月22日	ゆかいなアシカ騒動	午前10時・午後3時	45
9月20日	どですかでん	午後2時	37
10月25日	森はいきている	午前10時30分・午後3時	50
12月5日	ふしぎなおじさんとわんぱくジョージ	午後1時30分・3時	85
2月28日	ちびっ子エミール	午前10時・午後2時	100



昭和 57年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
白梅木曜幼児室	幼児	1月13日～3月17日	10	140
白梅金曜幼児室	幼児	1月14日～3月25日	10	140
子どもまつり	子ども	8月25日～10月20日	10	189
わんぱく教室	子ども	6月30日～8月11日	7	105
冬のわんぱく教室	子ども	12月8日～1月26日	8	184
親と子のひろば	子ども	8月26日～11月28日	2	17
子ども手芸教室	子ども	7月28日～8月2日	4	73
中級8ミリ製作教室	青年	2月2日～3月2日	5	25
婦人学級「女性がのびやかに 生きるために」準備会	女性	9月13日～11月12日	6	32
婦人学級「女性がのびやかに 生きるために」本講座	女性	1月27日～3月3日	5	44
家庭教育学級	女性	1月14日～3月25日	10	94
女性講座「歴史に学ぶ」準備会	女性	4月9日～7月16日	10	50
女性講座「歴史に学ぶ」本講座	女性	9月8日～2月16日	10	94
子ども会指導者研修会	一般	3月4日～3月18日	3	69
市民大学講座「社会」	一般	3月2日～3月30日	5	54
白梅ハイキング	一般	5月30日・11月14日	2	40
白梅利用者研修会	一般	9月22日	1	17
白梅利用者交流会	一般	2月6日	1	25
第1回利用者発表会	一般	5月21日・22日	1	400
第2回利用者発表会実行委員会	一般	2月19日～3月20日	5	80

昭和 57年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
4月25日	やさしいライオン・みつばちマヤの冒険	午前10時・午後2時	165
5月22日	新子鹿物語	午後1時15分・2時	190
6月27日	ホセリートの父をたずねて	午前10時・午後2時	75
8月22日	禁じられた遊び	午前10時・午後2時	65
9月19日	衝動殺人”息子よ”	午後2時	35
10月24日	のどか森の動物大作戦	午前10時・午後2時	30
12月11日	森のおじいさんと3つのものがたり	午後2時・3時	132
2月27日	トンデモネズミ大活躍	午前10時・午後2時	86

昭和 58年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
白梅水曜幼児室	幼児	5月11日～9月28日	15	225
白梅木曜幼児室	幼児	5月9日～9月29日	15	225
白梅金曜幼児室	幼児	5月13日～10月7日	15	240
わんぱく教室	子ども	7月25日～8月11日	6	94
親と子のひろば	子ども	8月12日～3月10日	4	77
子ども手芸教室	子ども	7月29日～8月17日	6	103
婦人学級「健康に生きるために」	女性	10月7日～12月16日	10	140
女性講座「女性史入門」	女性	10月17日～3月30日	19	254
婦人学級	女性	5月11日～9月28日	15	188
市民大学講座「少年非行と家庭」	一般	2月29日～3月28日	4	34
教育講座「中学生」	一般	6月17日～7月8日	4	122
子ども会指導者研修会	一般	11月10日～11月21日	3	51
第2回利用者発表会準備会	一般	4月6日～5月30日	5	75
第2回利用者発表会	一般	5月28日・29日	1	526
白梅利用者研修会	一般	3月1日	1	31
第3回利用者発表会準備会	一般	3月15日～3月30日	3	34
子どもまつり	子ども	9月3日～11月5日	10	114
白梅ハイキング	一般	11月20日	1	28

昭和 58年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
4月24日	はだかの王様	午前10時・午後2時	125
5月28日	竜の子太郎	午後1時30分	120
6月26日	がんばれ、がんばれ、サッカーズ	午前10時・午後2時	30
8月25日	おこりじぞう・ピカドン・ヒロシマのうた	午前10時・午後2時	135
10月22日	イーハトーブの赤い屋根	午後7時30分	33
10月23日	〃	午前10時	35
12月24日	アラジンとふしぎなランプ	午後1時30分・3時	115
2月25日	すばらしい友だちアントニーノ	午後1時30分・3時	75
3月24日	ちびっ子ギャング	午後1時30分・3時	45

昭和 59年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
白梅水曜幼児室	幼児	6月6日～10月31日	15	270
白梅木曜幼児室	幼児	6月7日～11月1日	15	285
白梅金曜幼児室	幼児	6月1日～10月26日	15	285
わんぱく教室	子ども	7月25日～8月9日	7	140
親と子のひろば	子ども	8月27日～3月17日	3	89
子どもまつり	子ども	9月22日～11月18日	10	135
高齢化社会と女の老後	女性	2月28日～3月20日	4	52
家庭教育学級	女性	6月7日～11月1日	15	195
お母さんのための教育講座	女性	10月8日～10月29日	4	48
しらうめワニグ・ひろば	女性	2月4日～3月25日	7	126
教育講座「思春期の子育て」	一般	6月14日～7月12日	5	165
父母のための子育て講座	一般	2月4日～3月11日	5	90
現代家族の教育的役割	一般	3月20日・3月27日	2	12
第3回利用者発表会準備会	一般	4月6日～6月4日	4	72
第3回利用者発表会	一般	5月26日・27日	1	485
第4回利用者発表会準備会	一般	3月16日・30日	2	44
白梅ハイキング	一般	10月28日	1	13
白梅利用者研修会	一般	3月3日	1	26
白梅利用者交流会(利用者の広場)	一般	9月14日	1	15

昭和 59年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
4月29日	大どろぼうホッツエンブロッツ	午前10時	15
6月24日	さよならぼくの犬ロッキー	午前10時・午後2時	22
8月25日	冒険ハンスとふしぎな子猫たち	午前10時・午後2時	50
10月27日	ふたりのローラー	午後1時30分・午後2時	80
11月23日	鉄道員	午後2時	11
12月22日	いたずら天使ミッシェル	午後1時30分・午後3時	45
1月20日	彫る一棟方志功の世界・手漉和紙	午前10時30分	10
2月24日	ピーターラビットとなかまたち	午前10時・午後2時	160
3月23日	朱鷺・ふるさとを棄てたサギ	午後2時	10

昭和 60年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児室事業白梅月曜コース	幼児	5月13日～9月9日	15	240
幼児室事業白梅水曜コース	幼児	5月15日～10月9日	15	240
ワイワイ子どもひろば	子ども	7月14日～10月6日	11	341
子ども合唱教室	子ども	7月13日～10月7日	11	165
たんけん教室	子ども	4月27日～3月23日	35	875
おもしろ科学あそび教室	子ども	7月25日～8月26日	5	35
幼児教育学級	女性	5月15日～10月9日	15	195
児童文学を考える	女性	5月13日～9月9日	15	255
しらうめ仲間ひろば	女性	11月11日～12月23日	7	119
父母の子育てひろば	一般	7月13日～10月5日	6	96
第4回利用者発表会準備会	一般	4月3日～5月8日	5	83
第4回利用者発表会	一般	5月25日・26日	2	515
第5回利用者発表会準備会	一般	2月23日～3月27日	3	68
白梅利用者研修会	一般	2月5日	1	30
グリーンセミナー	一般	10月30日～12月4日	7	125
自然観察会	一般	5月19日～3月30日	8	215
うちのおとうさんはすごい	一般	6月7日～7月7日	6	36
白梅ファミリーキング（広徳寺）	一般	11月23日	1	32
白梅熟年ひろば	高齢者	11月16日～3月1日	12	240

昭和 60年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
4月13日	典子は、今	午前10時	35
7月31日	素晴らしい風船旅行	午後7時30分	20
8月17日	禁じられたあそび	午後1時・午後7時3	25
9月28日	トム・ソーヤのぼうけん	午後2時	25
10月26日	野生のエルザ	午前10時・午後2時	50
11月23日	野生のポリー	午前10時	15
12月14日	赤い仔馬	午後2時	25
1月18日	ふるさと	午前10時・午後2時	55
3月1日	ジャングルブック	午後2時	50
3月15日	ほのぼの人形劇	午後2時	150

昭和 61 年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児室事業白梅水曜コース	幼児	5月14日～10月8日	17	272
子どもはやし教室	子ども	4月28日～8月11日	15	300
たんけん教室	子ども	4月26日～3月29日	35	805
子どもまつり	子ども	9月6日～11月23日	11	220
おもちゃを考える	女性	5月14日～10月8日	17	272
しらうめイニングひろば	女性	10月6日～2月9日	13	299
父母の子育てひろば	一般	4月28日～8月25日	7	126
第5回利用者発表会準備会	一般	4月6日～5月9日	3	65
第5回利用者発表会	一般	5月24日・25日	2	554
第6回利用者発表会準備会	一般	3月5日・3月29日	2	52
白梅利用者研修会	一般	2月25日	1	30
サンデーハイキングクラブ	一般	5月28日～10月3日	12	324
私たちのまちづくり	一般	11月6日～12月10日	7	98
自然観察会	一般	6月1日～3月22日	7	149
英会話教室基礎コース	一般	1月8日～3月27日	10	150
ちょっと早いクリスマス	一般	12月21日	1	60
白梅熟年ひろば	高齢者	6月27日～3月6日	23	621
熟年陶芸教室	高齢者	7月4日～10月17日	8	184

昭和 61 年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
5月24日	ベルと怪獣王子・天狗まつりとがき大将	午後2時30分	30
6月21日	チャップリン名作特集	午後7時30分	7
6月22日	〃	午前10時	3
7月30日	怪獣と少年たち	午後7時30分	15
8月16日	この子を残して	午後2時	20
8月17日	〃	午後2時	22
9月27日	チルベンとあざらし	午後2時・午後7時	20
10月25日	マリンエクスプレス	午後2時・午後7時	25
12月13日	こむぎ色の天使	午後2時	45
12月14日	〃	午前10時	15
12月26日	ダンボ	午前10時	120
12月27日	〃	午後2時	30
2月1日	うさぎの眼	午前10時・午後2時	26
3月7日	クマのプーさん・ビーバーの谷	午後2時	90
3月8日	〃	午前10時	30

昭和 62年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児室事業白梅木曜コース	幼児	5月21日～9月17日	15	165
たんけん教室	子ども	4月25日～3月27日	48	1200
子どもはやし教室	子ども	8月3日～9月28日	10	200
人形劇を創る	女性	5月21日～9月17日	15	135
しらうめ婦人の広場	女性	10月5日～3月28日	21	500
サンデーハイキングクラブ	一般	6月24日～9月6日	8	200
私たちのまちを考える	一般	10月28日～12月9日	8	120
自然観察会	一般	5月17日～3月13日	10	300
第6回利用者発表会準備会	一般	4月4日～5月27日	5	100
第6回利用者発表会	一般	5月23日・24日	2	530
第7回利用者発表会準備会	一般	3月17日・3月30日	2	50
白梅会館利用者研修会	一般	3月9日	1	30
白梅熟年ひろば	高齢者	7月3日～3月11日	25	880

昭和 62年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
6月20日	ひょっこりひょうたん島	午後2時30分	70
6月21日	同上	午前10時	30
7月17日	わんぱく戦争	午後2時	15
9月19日	日本ザル母の愛・めだかの卵など	午後2時	25
9月20日	同上	午前10時	25
10月24日	セロひきのゴーシュ	午後3時30分	50
10月25日	同上	午後2時	30
11月21日	テンプルちゃんの小公女	午後3時	50
12月12日	がんばれスノーピー	午後3時30分	60
12月13日	同上	午前10時30分	25
2月27日	二十四の瞳	午後2時	40
2月28日	同上	午前10時	20
3月25日	白梅親子人形劇	午後2時	70

昭和 63年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児室事業白梅水曜コース	幼児	6月8日～10月5日	14	140
たんけん教室	子ども	4月23日～4月2日	39	390
しらうめ婦人の広場	女性	10月17日～3月30日	9	135
婦人のひろばスポーツ活動	女性	11月7日～3月6日	5	75
婦人懇談会	女性	10月31日～2月27日	6	90
私たちのまちづくり	一般	11月20日～2月1日	8	96
P T A って何?	一般	5月26日～7月7日	7	32
自然観察会	一般	6月5日～3月19日	8	195
第7回利用者発表会準備会	一般	4月3日～5月23日	7	148
第7回利用者発表会	一般	5月21日・22日日	2	486
第8回利用者発表会準備会	一般	3月24日	1	25
白梅会館利用者研修会	一般	2月22日	1	30
白梅会館利用者交流会	一般	9月7日～1月28日	4	85
白梅熟年ひろば	高齢者	10月7日～3月24日	10	250
人生をうたおう会	高齢者	6月10日～12月6日	10	400
老壮懇話会	高齢者	11月25日～3月17日	5	125

昭和 63年度白梅親子映画会・名画劇場

上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
7月16日	スイミー・クマのプーさん	午後2時	70
8月27日	六鈴・ヒカールの発生・地球の自転	同上	10
10月1日	季節と生き物の様子他	同上	40
11月19日	おてんばルッチー	同上	30
12月10日	よい子の楽しいクリスマス他	同上	40
1月21日	ゆず・白い鳥	同上	30
2月18日	若草物語	午後3時30分	30
2月19日	若草物語	午前10時	15
3月11日	桃次郎のぼうけん	午後1時30分	60

平成元年度白梅分館主催事業

事業名	対象	実施期間	回数	参加者数
幼児室事業白梅木曜コース	幼児	6月1日～10月5日	15	225
幼児室事業白梅月曜コース	幼児	11月13日～3月26日	15	300
夏休み自然教室	子ども	7月31日～8月28日	14	102
たんけん教室	子ども	4月22日～4月1日	27	353
夏休み子ども音楽教室	子ども	7月27日～8月31日	7	210
幼児教育学級	女性	11月13日～3月26日	5	300
婦人のひろば	女性	7月3日～8月21日	5	125
家族新聞をつくる	女性	6月1日～10月5日	15	195
国際交流事業	一般	11月10日～3月2日	15	165
自然観察会	一般	6月4日～3月11日	19	203
私たちのまちを語り合う	一般	11月29日～2月7日	8	75
ワープロ教室	一般	7月5日～8月2日	5	100
第8回利用者発表会	一般	5月27日・28日	2	681
第8回利用者発表会準備会	一般	4月12日～5月31日	5	118
第9回利用者発表会準備会	一般	3月14日	1	30
白梅会館利用者研修会	一般	2月26日	1	15
白梅会館利用者交流会	一般	7月15日～1月14日	3	80
熟年ひろば	高齢者	11月10日～3月30日	14	490
人生をうたおう会	高齢者	7月14日～11月12日	9	315

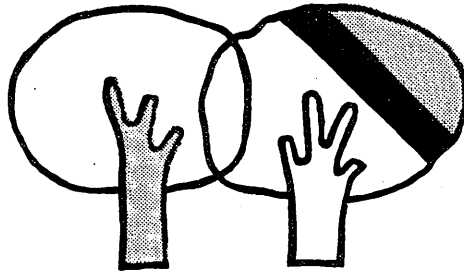
平成元年度白梅親子映画会・名画劇場

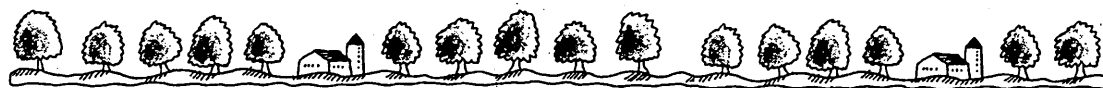
上映日	上映作品名	上映時間	入場者数
6月3日	おかしなおかしな星の国他	午後2時	20
7月1日	まいごのてんとうむし他	同上	40
8月26日	ふたりのロッセ	同上	20
10月21日	ホーエンディング・ストーリー他	同上	10
11月25日	スペースキッドの宇宙探検他	同上	20
12月16日	ガリバー旅行記	同上	22
1月27日	ナイカとリス・ぼくの犬キング	同上	10
2月19日	冒険者たち	午前10時上映	66
3月17日	白梅親子人形劇	午後2時	50

この10年間の記録

10年間の主催事業件数（含む映画会）	1542 人
10年間の映画会上映回数	133 回
10年間の映画上映日数	96 日
10年間の映画会鑑賞者数	5644 人
10年間の主催事業参加者数	36518 人

内 訳	回数（回）	人数（人）
幼児対象教室	242	3764
子ども対象教室・講座	423	8169
女性対象教室・講座	326	4877
青年対象教室・講座	5	25
一般対象教室・講座	286	9354
高齢者対象教室・講座	127	3736
映画会	133	5644
当日参加者（子どもまつりなど）		949
合 計	1542	36518





4 白梅分館の実践記録から



白雲山記

少年教育事業について

福生市公民館では少年を対象とした事業を数多く展開してきましたが、それは児童館の発達が遅れていたからという理由があります。しかし、児童館に対する認識がなかったとか、全く対策を考えていなかったということではありません。

昭和40年代の後半に作成された「福生市社会教育計画」の審議の過程では、児童館の計画的建設と配置について論議されていたようでしたが、諸般の事情で児童館の建設が見送られ、結果的に配置が遅れたようでした。

しかし、今日では田園会館という児童館機能を持った地域会館が出来、多くの事業を実施し地域の方々にも利用していただいています。

福生市公民館が建設される以前には、福生市教育委員会社会教育係が文化財から女性対象や少年対象の事業を実施してきました。1977年（昭和52年）に公民館が建設され、社会教育係の職員が公民館に移り、引続き少年対象の事業を実施し、1979年（昭和54年）に松林分館が、そして翌1980年（昭和55年）に白梅分館が開館し、職員も分館が出来ると共に各館2名ずつ増え、少年対象の事業も質・量共に充実してきました。

従来、公民館というと青年と女性対象の事業が多くプログラムされ、東京の三多摩各市の公民館でも、少年対象の事業を行っている公民館の方がはるかに少ないと思います。

全体的には、公民館が少年を対象とする事業を行う事の方が少ない中で、福生市公民館では、単に児童館がないから公民館が代わって事業をおこなうというのではなく、「全ての市民一人ひとりの学習の場と機会を保障する」ことを原則に運営してきていますので、幼児から高齢者までの全ての年齢層に対応する事業展開をしてきています。

上記のような理由で、白梅分館が開館した当初から少年対象の事業は開かれて来ました。また、「相手が子どもだからいい加減に対応しても大丈夫」ということは全く考えていません。

逆に、将来の福生を担う地域に生きる人間を、公民館で遊んだり地域のことや仲間関係のことを学習する機会を、子ども時代から公民館にやって来ることを通して身につけていって欲しいと考えていました。

このため、子ども達が地域の自然の仕組みや働き、そして文化財の歴史や成り立ちなどを学ぶ機会にする他、同じ地域に住むお兄さんお姉さんといった高校生や大学生等と、人間的な関係を深くするような内容を中心に事業を展開してきています。

上記のような事業に参加することで、子ども達は地域をそして地域に住む人間とその営みを知り、郷土である福生を学習していくことになると考えています。

この方針は、公民館が開館する以前から（社会教育係の時代から）少年対象の事業を開いてきた職員が、公民館が開館した後もずっと同じ方針で事業の展開をしてきましたので、福生市の公民館における少年対象事業は、実施する中身や担当する職員は変わっても、基本的な線は一定で実施してきています。

このような背景を持って白梅分館の少年対象事業が開かれてきました。以下に大ざ

っぱではありますが年度を追って見てみたいと思います。

なお、福生市公民館の少年対象事業の詳しい内容に関心のある方は、福生市公民館が毎年発行している「紀要」を参照していただければ、より具体的な事業の流れや詳細なプログラムなどが理解していただけるとと思います。

1980年（昭和55年）には、夏休み直前から「わんぱく教室」が始まり、そして夏休み中に「子ども手芸教室」が始まりました。そして秋には「子ども指人形教室」、冬には「冬のわんぱく教室」と年間を通じて子ども達対象の事業が行われました。

上記の教室は翌年以降も続き、この年に参加した子ども達を中心になって翌年の「子どもまつり」や「親と子の広場」を作り運営して行くことになりました。

1981年（昭和56年）には前年の4コースの教室を継続し、そのうえ「子どもまつり」が子ども達による10回の準備を経て、当日には100人以上の参加者を迎え大きなイベントをやり遂げるまでになっています。

また、「親と子の広場」では、地域に住む高齢者の方に来てもらい、昔ながらの民具の製作や年中行事に必要なものの製作なども、試めています。

1982年（昭和57年）と1983年（昭和58年）には、前年と同じように「子どもまつり」、「親と子の広場」に精力的に時間を割き、両事業とも当日参加の市民の参加が増え、白梅分館の知名度を上げました。

しかし、開館当初からの女性職員の名取が、主に女性に関する事業の内容や回数を広げてきたために、子ども指人形教室などが開催出来なくなってきたという経過もあります。白梅分館全体の事業数と市民の方々からの要望を考えると、初期の頃に行ってきた事業が発展的に解消したり新たな要望の元に開かれた事業もあり、しかたない事ではないかと思っています。

1984年（昭和59年）4月、名取が公民館本館へ異動した事によって、この年は金子一人が子ども対象の事業を行っていました。特に地域での年中行事化した「子どもまつり」は、当日参加者が300人を越える大盛況となっていました。金子はこの子どもまつりの準備に多くの時間を割いたことが分かります。このおかげで多くの人が白梅分館を気安く利用できるようになったと、市民の方から聞いたことがあります。

1985年（昭和60年）4月に、金子も児童館機能を持った田園会館に異動し、金子は子ども対象の施設で本格的に事業を担当するようになりました。

公民館の職員がその力を評価され、新しく開館する初めての施設の運営を見込まれたの異動でした。金子の異動については、職員組合と理事者側で十分な話し合いがなされておらず、専門的な力を持った職員を簡単に異動させられては困ると、公民館の職員も組合に働きかけた経緯がありました。

しかし、専門的な力を評価されてのことであり、本人も了解しての異動ということになりました。このことは、最高学府で社会教育の勉強をして採用された職員の初めての異動ということで、今日まで関心を引きずっています。

さて、金子の異動に伴って公民館本館から伊東が異動してきて、少年の事業を担当することになりました。伊東は1979年（昭和54年）から公民館本館で少年教育の事業を担当していましたので、事業の中身は変化しましたが、少年に関する事業そのもの

は回数・内容とも劣るといふことにはなりませんでした。

伊東の行う事業は、大人や高校生・大学生等と一緒に野外で活動する実践的な内容が多く、特に「たんけん教室」では身近な多摩川や近隣の丘陵で活動するスタイルが多くなりました。

また、市内に住む理科大学の大学院生を講師に科学の実験を行う「おもしろ科学あそび教室」を夏休みに開き、今までとは全く異なる参加者が白梅分館にやって来るようになりました。

同様に、この年には松坂の担当した「子ども合唱教室」「ワイワイ子ども広場」も開かれ、多くの子どもが参加しました。これも、幅広い事業の中身によるものだと思います。

1986年（昭和61年）には、子ども達だけで11回の準備過程を経て「おばけ屋敷」作りが行われ、11月に開かれた当日には、地域の子どもの中心に多数が参加し、大賑わいになりました。しかし、このころから子どもの中で「お客さんの」な参加が目立つようになり、また、たんけん教室も年間40回近い回数を開くようになって、担当者の時間的な配分が不可能になってきて、おばけ屋敷は翌年には実施出来ませんでした。

一方、松坂の担当する「子ども囃し教室」が始まりました。この教室には地域の囃し連の大人が指導し、現在ではこの子ども囃し連が地域のお祭りや白梅分館利用者発表会にも十分な力を見せてくれています。地域に伝わる伝統的な文化（芸能）の部分を、地域の大人が地域に住む子どもに伝えていく場を公民館がバックアップしているという、きわめて有効な実践の場にもなっています。

1987年（昭和62年）には、たんけん教室は年間50回程開き、地域の中でファミリーオリエンテーリングを主催するまでになっていました。以前行われていた子どもまつりではどうしても回数がネックになり、子ども同士も十分に目的意識を持てないまま期日までに作り上げるという無理な部分が発生し、それを解決するためには大人（職員や大学生などのリーダー）の力を注がざるを得ない状況が起きていました。この状況を解消するためには、年中顔を合わせお互いの意志疎通が前提条件で、これさえ越えることが出来れば多くの事が可能になると考え、実践してみたのです。

この成果は、「ファミリーオリエンテーリング」の企画からコース設定、そしてゲームの道具からクイズなどの出し物まですべての準備が子ども達を中心に行われ、当日も子ども達が裏方となって参加の市民に説明したりしました。このことで、準備に携わった子ども達は、イベントの準備などでお互いの力を共同・協力する必要性を理解できたようでした。

1988年（昭和63年）、1989年（平成元年）と少年対象の事業は続きましたが、特に1989年の夏に開かれた「夏休み自然教室」では、その年の秋から公園造成が始まる地域の自然の様子を、植物・昆虫を中心に観察記録を作成しました。

今では「多摩川中央公園」となってしまっている地域の、川辺植生や昆虫などの生物の生の営みを現場で観察記録したことは、地域の自然は地域に住む人間が記録を残す事以外に、地域の方に問題を提起できないため、子どもと一緒に地域の大人も参加した事業となりました。

この自然教室で残された記録は、現在の福生市にとっては貴重な記録であり、それ以上に地域に住む子ども達の手で残されたことが、将来に大きな意味を残す事業になったと考えられます。

現在開かれている事業は、開館当初にくらべ内容・回数とも変化してきています。いつまでも変わらない内容のものを要求されることもあれば、常に時代の要求にそった内容を提供する必要の物もあると思います。

公民館の行う少年を対象にした事業というものは歴史もノウハウも蓄積が浅く、今後の問題を数多く含んでいることは明らかなです。

しかし、子ども達の生活エリアの大きさを考え、しかも地域に育つ子ども達に対する公民館としての援助や配慮は決して過小評価すべきものではなく、かえって将来の地域を担う世代を早い段階から関係を持っておくことで、公民館としての意味を広く深く根付かせることになるのではないのでしょうか。



白梅分館での女性対象事業の取組み

昭和55年度から58年度まで

名取明美

白梅分館における女性対象の事業は私だけが行ったわけではないが、自分が担当した4年間の取組みを整理してみたいと思う。

昭和55年に白梅分館に配属が決まり、白梅分館に行ってみたらその年の女性対象事業の予算が、新入職員の私に用意されていることが分かった。何の経験も無いのにいきなり主催事業を任されることになったのである。この時の驚きとといったらない。

私は先輩の職員からいろいろ教えてもらってから何かするのだろうと思っていたのだが、先輩たちと同じ土俵で一斉にスタートなのである。何のハンデもなかった。そして、何日か過ぎていくうちに、仕事に関しても自分から聞いていかなければ何も教えてもらえないということが分かった。黙って待ってはいつまで経っても仕事は始まらない。引き継ぎというようなものは全くないのである。

そんな中で始めた女性対象事業の第1号が、「家庭教育学級 子どもの生活と親の役割」だった。10月9日の午前中から全8回保育室併設で行い、参加者は24人だった。(保育希望の親は12人、子どもは20人)

9月の広報で募集するため、初夏から企画を練り、講師折衝を始めなければならない。とにかくやらねばと必死の思いで、松林分館の加藤さんに電話でいろいろ教えてもらいながら進めた。

職員として、まず講座のねらい、各回のねらい、次回へのつながりをノート1冊に整理しておくことや、テーマに関する本を読んでおくこと。参考図書の紹介をすることなどアドバイスを受けた。また、テーマにふさわしい講師の紹介もしていただいた。

私は言われるままに、一生懸命頭を悩ませながらノートに書き込んだことを思い出す。ノート1冊がそれで終わりになった。初めての講師依頼も心臓がどきどきして飛び出しそうだった。

この事業は、子どもの成長・発達の問題を、子どもの生活を見直す中から考え、家庭や地域での取組みを考える場として実施した。テーマと講師は、「子どもの生活と遊び」「親の役割」(木全力夫氏)、「子どもとテレビ」(石子順氏)、「子どもの学力と日常生活」(南里悦史氏)、「子どものからだ」(正木健雄氏)であった。

講義と話し合いの形式で進めた。学級終了後は、「学級が終わってもこれで解散しないで、子どもの問題を考えていきたい」という意見が出され、全員の賛成によって自主グループ化した。無我夢中で始め、無我夢中のうちに終わったという感じであった。

次に実施したのは、「婦人学級 女の一生を考える」である。これも予算がついていたから何かしなければとの思いがあり、何をしたらよいか考え続けていた。そんな

時、社会教育会館（当時）主催の職員研修「婦人教育セミナー」に参加して、女性問題（当時は「婦人問題」と呼んでいた）を知り、事業として取り組む必要性を感じ企画したものである。参加者は12人であった。

1980年（昭和55年）は「国際婦人年の10年」にあたっていたが、当時は女性問題という言葉さえ一般に知られていなかった。しかし、女性問題こそ公民館が事業として取り組むべきであるという結論から、たとえ参加者は少なくともあきらめずに続けていくべきであると覚悟し、これ以降さまざまな方法で女性問題にせまる事業を組んでいった。

ある職員からは「女性問題ばかりやらずに、食品添加物のこととか他のことも婦人学級でやるべきではないか」と批判されたこともあったが、女性問題を柱とした事業という方針は変えなかった。10年経た今、この方針は間違っていないと思う。

しかし、当時の白梅分館がエリアとしていた地域はどちらかと言えば古くから住んでいる方が多く、この地域で問題を取り上げていくには難しい点もあった。それこそ、迷いながら、悩みながら進めた時期もあった。が、1年2年と続けていくうちに女性問題に関心を持つ市民がポツポツと現われ始めた。

事業としては、昭和55年度の「婦人学級 女の一生を考える」に始まり、翌56年度は「文学に見る女性」「女性講座 歴史に学ぶ」「ヤングミセスの教室」、57年度は「婦人学級 女性がのびやかに生きるために」「家庭教育学級 金曜幼児室」「女性講座 歴史に学ぶ」、58年度は「女性講座 女性史入門」「婦人学級 水曜幼児室」を実施した。

昭和56年度からは、市民の意見や要望・地域の女性問題を反映させる目的から、講座に先立ち準備会形式を取り入れ、市民と共にプログラム作りを考えていく事業も始まった。

はじめは女性問題という言葉からの学習であったものが、時を経て女性問題そのものの学習へと変わっていった。そして現在は女性問題解決のための学習・実践へ、個人の問題に収めず、地域を変えていく行動へと変わりつつある。細くか弱いものであった流れも今では太く力強くなり、これからも多くの支流を巻き込みながら営々と流れていくことであろう。公民館としてその流れを絶やさないよう、市民による女性問題解決のための学習活動を援助していく時代に入ったと思う。



昭和59年度以降の女性対象事業について

1980年（昭和55年）4月から1984年（昭和59年）3月までの4年間、初代の職員として女性対象の講座を開き実践してきた名取が公民館本館に異動し、松坂が女性対象の事業を行う事になりました。

開館以来から異動までの4年間に開いた女性対象の講座の中身と名取の想いは、前段に記述されていますので、ここでは名取以降松坂が担当していた部分で振り返ってみたいと思います。

1984年（昭和59年）に松坂が公民館本館から異動してきて、名取が対象と考えていた年齢範囲から若干広げ、50歳代の女性が抱える問題に着目し、「白梅イヴニング広場」という名称で始めました。また、「高齢化社会と女性の老後」というテーマでの講座も開き、子育て以降の女性＝人間の生き方について、各自が身近な問題を話し合う中で問題の所在と解決のための方策を考えあうという、高齢化社会における女性のライフサイクルとの関連を提案した内容でした。

これらの教室には、地域の40歳代以降の方が参加し、夜間仕事を終って駆けつける女性もいました。

白梅イヴニング広場はこの後もずっと継続して行い〔1987年（昭和62年）から「白梅婦人のひろば」という名称に変化〕、松坂が公民館本館に異動した今日でも「婦人のひろば」という名称で、自主的なサークル活動しています。また、「高齢化社会と女性の老後」は、翌年から今日まで継続されている「熟年ひろば」に中身が移され、同じように「熟年ひろば」という同名の自主的なサークル活動として、今日まで継続されています。

1988年（昭和63年）には「婦人の広場」の他に、「婦人の広場スポーツ活動」「婦人懇談会」の2つの講座が生まれ、中身がより分かりやすくプログラムされて好評でした。家庭で運動の機会や話し合う機会が少なくなってしまった女性にとっては、そのこと自体に気が付く機会であったり、また、身体を動かすことで自分の老後と夫の老後の健康にまで配慮する機会になったりしました。

そして、時には地域の歴史や現在の問題について講師の話を聞くことで、地域の抱えている様々な問題・課題などを学習する機会となりました。昼間の時間帯に地域で生活している女性の人数は少なくなったとはいえ、実体としては女性が多く、その女性達が自分の現在から将来を学ぶことで、地域を作っていく原動力になることは疑いのないことだと思います。

一人暮らしの高齢者に給食を配るボランティア活動に参加している方も見受けられますが、このような地域の問題を地域に住む人間が力を出し合っていくことの、共通理解を作れるのは、公民館の事業のような場が重要な機会になると思われます。

そのような意味では、開館以来10年にわたって名取・松坂が果してきた役割は大きく、また、今後も自主的なサークル活動には求めに応じて援助するのが、白梅分館の役割ではないかと思っています。

なお、詳しい事業の経過に関心のある方は、各年度の主催事業一覧表と女性対象事業プログラムをご覧ください。

自然に関する事業について

福生市公民館では1977年（昭和52年）の開館当時から、自然に関する事業を行ってきました。

具体的には、野鳥観察会・植物観察会・水生昆虫観察会・鳴く虫の観察会などで、年間12回位実施しています。年によっては天候の都合で開催出来ない観察会もありましたが、多くの観察会と貴重な観察データを蓄積しています。

その他には、「自然環境に配慮したまちづくり」の講座が開かれています。以下に自然観察会から話を始めてみましょう。

自然観察会

公民館が開館する以前の自然観察会は社会教育係の事業として行われていたわけですが、公民館開館以降も担当する職員が公民館に移ったために、公民館が自然観察会を実施してきました。

自然観察会を公民館で開くようになった経緯は、1974年（昭和49年）5月に市内で活動していた青年サークル「ビショップ」が、市民対象の野鳥観察会を五日市町の白杵山で開きました。

その時当時の社会教育課職員で現在の公民館職員が観察会に同行し、翌、昭和50年2月から野鳥観察会が定期的に開かれるようになったのです。このあたりの経緯や観察会をどのような視点・方法論で開くのかといった内容をより詳しく知りたい方は、1988年（昭和63年）3月に発行しました「福生市公民館10年のあゆみ」を参照ください。

白梅分館で観察会を開くようになったのは、伊東が公民館から白梅分館に異動してきた翌年からです。異動した年には、公民館本館の職員が担当し伊東も手伝いましたが、実際に野鳥や植物の観察や調査をしている伊東の方が、観察会を運営することにも負担が少ないということで、翌昭和61年度から白梅分館の事業として行われるようになったのです。ですから、野鳥観察会についての、データの連続性はあります。

先述したように、1975年（昭和50年）から観察会を開いて来ましたが、福生市の場合の特徴というようなものをいくつか記しておきたいと思います。

1 講師は市内在住の自然の分野の研究者（専門家）

これは、市内の自然観察会に、違う場所に住んでいる方に講師に来てもらっても効果が無いとは言えませんが、観察する行為と記録を残す事が最終目標ではなく、地域の自然の移り変わりとお私たちの暮らしの有様を考える事が地域のまちづくりに直結するわけで、愛着を持って福生に住んで、福生というまちを真剣に考えている方の中から講師をお願いしてきています。

植物観察会では明治大学の宮岡教授、野鳥観察会では市内小学校教諭の栗原先生・高校教諭の岡田先生、水生昆虫観察会では水質の専門家の田中さん、鳴く虫の観察会では上記の栗原先生と、みんな福生に住んでいて福生のことを詳しく調べている方々ばかりです。

なお、数年前に岡田先生は多摩市に転居されましたが、現在の福生市では岡田先生の育てた若い世代が独自に観察会を主催し、運営するようになりました。しかし、岡田先生が環境庁から委託され行っている、多摩川や奥多摩での野鳥の調査の手伝いに参加させていただくことで、若い世代は専門的な知識を身につけ、環境と人間の生きざまについて多くのことを学ぶ機会になっています。

2 観察会の主体は若い世代

公民館主催の野鳥観察会では、市内で観察を続ける若い世代が観察会での具体的なプログラムを提案したり当日の役割など、観察会全体の運営が出来る力を持っています。公民館の主催事業ですから、岡田先生や栗原先生を講師としてお願いしていただけますが、栗原・岡田先生は、若いリーダー達から助けを求められた時や、総合的な視点からの観察ポイントなどを参加者に伝えることが多く、公民館の事業の中身に市民が深く関わっています。

しかし、これは職員が手を抜いているわけではありません。職員は、観察会での若いリーダー達と綿密な打ち合せと準備、そして意識の統一のためにかなり多くの時間を割いています。

3 参加者に子どもが多い

福生の市内の小学校の中には、市立第5小学校が「愛鳥モデル校」にしていされて、愛鳥クラブがあります。この愛鳥モデル校になるまでに実践を積み上げたのが栗原先生で、現在の市立第4小学校でも自然クラブを作って、子ども達の目を野外に向けています。このような子ども達が観察会に参加してきますので、子ども達の関心も深く的確な指導を求められますが、その場に前述の若い世代が活躍していますので、年代の開きがそれほど大きくなく子ども達にも好評です。

自然観察会に関することは、前記の「福生市公民館10年のあゆみ」に詳述されていますので、関心のある方はそちらを参照ください。

観察会以外では、伊東が異動してきた1985年（昭和60年）に「グリーンセミナー」が開かれ、翌年以降は「私たちのまちづくり」という名前に変化しましたが、内容的には無意識の「自然」が日常的に暮らす私達のまちにどのような影響を与え、それを無視したまちを作ったらどのような危険があるのかなど、身近な河川・丘陵・公園の意味などを考えながら講師に話題を提供してもらい、市民が話し合う場となっています。

この講座の中身の概略は、生物としての営みを離れて人間の生活は有り得ないわけで、この生物としての「ヒト」の側面から身近な自然環境や建造物をどのように作り

配置したらよいのかといった、まちづくりにおけるハードウェアとソフトウェアの接点をどこにおくのかといったことが中心になっています。

以前の内容では、福生市内で野鳥や生物の観察している方に各々の専門の研究を発表してもらっていましたが、関心の領域が広がり、今日のような内容にまで話が発展してきたのです。

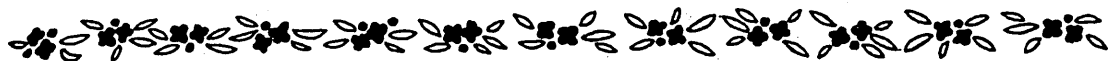
また、この場に行政の企画部門や建設部門の管理職に参加していただき、直接市民の方々と意見を交換する場になっています。市民は行政の内部の動きをかいまみる事が出来ますし、行政の担当者にとっては市民の生の声を聞くことが出来るわけです。

特に公園作りについての「市民参加」ですが、今までの公園作りでは行政側の一方的な案が決定された段階で市民に公表されてきたために、例え不足の部分があるような設計でも止めることが出来ませんでした。今後は設計の段階から市民が参加できるよう準備を進めています。

白梅分館での講座に参加している方々の中には、植物や昆虫に詳しい複数の方が協力しあい、公園予定地の生物調査を行っています。それらの調査結果や観察している方々の想いや意見を、職員が公園を造成する施設課との間に入って連絡調整をしています。

講座に参加するだけではなく、市民が毎日暮らし利用する公共施設等について、専門的な力を市民が提供し、そのノウハウをハードウェアとして行政が保障出来るようになれば、本当の市民参加になると思われませんが、現在の時点では行政側の方に市民参加の意識が低く、また、市民と一緒に作り出していくというノウハウが不足している状態ですので、もう少し時間はかかると思います。内容的には、市民が学習しあるいは持っている専門的な知識を、ようやく公民館を通して全体に役立てるようになってきたと言えます。

学びたいことを学べるのが公民館ですが、その学んだ成果を市民全般に返していくことが出来なければ、公民館本来の学習という視点は陽の目を見ないことになります。学びたいことと同様かそれ以上に、学ばなければならないことを公民館は事業として提供していく必要があると考えています。この自然に関する事業（観察会と講座）はその意味で重要な働きをしていると思われれます。



熟年の活動について

松坂 直人

公民館が開いてきた高齢者対象の事業は、1980年度（昭和55年度）の「高齢者事業準備会」を契機に、1981年（昭和56年）、公民館3館と扶桑会館という地域会館での事業を加えて、4館で「語らいのひろば」と名付けられ試行されました。

この取り組みをするようになった背景には、急速な高齢化や平均寿命の伸張により、元気に高齢期を過ごす場の設定が強く要望されてきていました。そしてこの取り組みの結果は、地区状況や実施条件などで一部単発事業となった経緯もありますが、今日まで「熟年ひろば」として主に白梅分館を中心に活動してきました。

1985年（昭和60年）、白梅分館で「熟年ひろば」なるものを始めていこうということになり、当時の白梅分館利用者代表の公民館運営審議会委員の佐久間登世子さんの協力を得てこの地域の年輩の方々と会い、また、かつての東京都の巡回図書館「むらさき号」熊川ポストの読書会の年輩の方々とも出会い、準備を進めました。

そして、1980年（昭和55年）から高齢者の活動をリードしていただいている立川愛雄さん、元老人ホームの生活指導員で現在保護司をされている川辺進さんと交わる機会も得ました。

この1985年度（昭和60年度）の内容は、誘いかけによって参加者を集め、交流を中心とした内容とし、その後、人生や生活について今後の場作り・内容作りの検討に時間を割きました。

翌1986年度（昭和61年度）には、白梅分館で本格的に高齢者対象の事業がスタートしました。特にこの年の事業・活動が、以後の活動の土台となって定着していくことになります。

以下にこの年の内容などを列記しておきたいと思います。

現況：都市化・核家族化・産業化・情報化の各社会変化の中で、当福生市も高齢化が進展している。退職後の生活・生き方や生活年齢的な地域での役割変化の中で、いかに高齢期を健康で生きがいのある生活をしていくかが、求められている

目標：これまでの生活経験をもとに、その集積から考えられる人間生活の基本となる”生きる確かなもの”を社会変化の中で見つめ、絶えず自己を養い、異なる世代とともに自らの地域での生活を創造する

条件：設定コース 2コース＝①語らい総合コース、②陶芸コース

- ・実施回数 ①全23回 ②全8回
- ・対象 概ね60歳以上の男女及び関心ある若い世代
- ・場所 白梅分館及び野外（福生全域）
- ・日時 原則として金曜日、午前10時～正午

準備：前年参加者と公民館とで、“ひろば”事業の企画打ち合せ。広報ふっさ6月号に募集記事を掲載するとともに、白梅分館至近の3地区福寿会と3町会にチラシ配布する。

運営：運営主体は当面公民館とする。開始後は、参加メンバーの運営参加を促す。

内容：① 参加者一人ひとりが持つ人生の歩みを話し合い、互いの理解を深め、これからの生活作りに話題を設定する

- ② 随時お願いする講師からの提起で、現代の生活・社会動向・生物としての人間等を考える
- ③ 郷土としての福生の民俗・文化・歴史の話題からこの町を知り、地域の自治作りへ
- ④ 世代を越えた交流・話し合いを行い、地域行事・文化財・自然・各種施設の見学や参加体験を行う

展開：以下の通り

[illegible]

以上の内容の事業に、語らい総合コース27人、陶芸コースに23人の参加を得、以後自主活動として展開すると共に、毎年公民館との共催事業で一定期間実施するスタイルが形成されました。また、この年には上記の主催事業に参加した人達を中心になって、白梅分館利用者発表会に「語らい茶屋」の場を作り、参加しました。

1987年（昭和62年）には「人生を歌おう会」を主催事業として実施し、以後、語りコースと陶芸コースを合わせた3グループの連携で、高齢者の参加者増をみるようになりました。

また、平成2年の市制20周年「寿市民ひろば」の事業では、熟年ひろばに参加するみなさんが実施の核となり、企画・運営からPR（市内在住の高齢者対象に約7,000通のチラシを発送）作業まで実施しました。

今日では、公民館本館と２つの分館の計３ヶ所で高齢者対象の事業が開かれることになり、広がり定着をみせています。今後は、現在の中高年対象に、高齢期への備えとなる場の設定、“まちづくり”という課題へ取り組むことなどを通して、高齢期を元気に生きるまち福生を目指し、今後も積極的に取り組みたいと考えています。

白梅会館利用者発表会について

松坂 直人

1980年（昭和55年）5月、白梅分館の開館により、すでに地域で活動していた自主サークル（文化活動中心）の利用や、公民館主催の各種の学級・講座が始まりました。

開館してからの一年間、職員は主催事業を開くことに精力を注ぎ込んでいました。地域に住む利用者の方々も、自分達のサークル利用のために会場を利用するだけという利用形態が続いていました。

開館の翌年、職員も利用者の方々もようやく落ち着くことができ、利用者の交流会を開くことになりました。その交流会の席上、一人の利用者から提案された利用者発表会ですが、数回の準備の後に、1982年（昭和57年）5月に第1回目の発表会を開くことができました。このように、開館から早期にこのような催しものが出来たのは、利用者のみなさんの積極的な取り組みによるところがあったと伺っています。

この利用者発表会の主旨ですが、

- ① 日頃の各サークル活動の成果の発表の機会とする
- ② 個々のサークルが同一目標に向かって活動することにより、交流・親睦を深める機会とする
- ③ 利用者発表会の準備から当日までの過程を通して、人と人との出会いを広げる
- ④ 熊川地域の市民の生活・文化創造の“ひろば”になっていくようにする

1984年（昭和59年）、私（松坂）が白梅分館に異動してきた時は、「第3回利用者発表会」を迎えようとしている時でした。演示の部・展示の部に加え、「親と子のひろば」「茶席」という構成の定着の中、この年は演示・展示の両部門の責任者において、実行委員会を進めるものとなり、より一層の充実が図られました。

このころ、白梅分館を利用するサークルの数の増加や利用形態の広がりを見ていたので、より多くのサークルの参加出来る場作りにしようということになりました。

1985年（昭和60年）の「第4回利用者発表会」では、「フィナーレのひろば」を設定。白梅分館の前庭の青空の下、老いも若きも主催者も来館者も一体となり童心にかえて、催しの最後を楽しく飾る機会となりました。この年には、新たにエアロビクス・軽体操・社交ダンス・ボーイスカウトが参加し、民謡・民踊・コーラスなどとの協同の取り組みとなりました。

1986年（昭和61年）の「第5回利用者発表会」は、語らい・学び総合活動のグループ参加の機会として、「語らい茶屋」の設定をしました。お茶・草餅・お新香で気軽な「ひとつばなし」。外国にはサロンとか……、日本の茶屋をもじって、生活・社会の話題と人の交流の場作りとして設置しました。このことは、高齢者サークル・婦人のひろば（中高年）・ヨガサークル・幼児を抱える若い母親達の交流と一般参加による、「話のひろば」が生まれました。

1988年（昭和63年）の「第7回利用者発表会」では「白梅音頭作り」の声が上がり、

約3ヶ月の実行委員会の過程で取り組まれ、みふじ会の吉岡喜代造さんの原案に実行委員の意見を加えた歌詞案が出され、この案に民謡家澤田春駒氏の補作・作曲による曲作りと進み、また民謡・新舞踊家の松本泰子氏の振付けにより、ついに「白梅音頭」が完成しました。

5月の発表会当日に「お披露目」となり、夢が実現したことに利用者・職員で喜びを分かち合いました。このようにして、利用サークルの参加と表現の機会として様々なジャンルを網羅する催しの形態が生み出されました。

1989年（平成元年）の「第8回利用者発表会」、1990年（平成2年）の「第9回利用者発表会」は、主に来場者増に向けてのPR・誘いかけに力点を置き、催し・出品・出演の市民を一般募集し、参加の輪を広げることで現在に至っています。

さて、この利用者発表会の性格は単なる利用者の発表と言うだけではなく、地域の文化の祭典（まつり）というものになりつつあると思えます。

今後の発表会については、今までの利用者みなさんの過去の蓄積をもとに、「年々（日々）新た」と言うように、創意・工夫をして、より一層の輝きを増すような中身を作っていくことではないかと考えています。

以下に、この利用者発表会の歴代役員の方々を紹介しておきたいと思います。

（敬称は略させていただきました）

- ・ 第1回利用者発表会実行委員長
 児島 宗作（鍋一囃し連）
- ・ 第2回利用者発表会実行委員長
 宮野 元一（菊民会）
- ・ 第3回利用者発表会実行委員長
 吉岡 喜代造（みふじ会）
- ・ 第4回利用者発表会実行委員長
 中島 福治（親風会）
- ・ 第5回利用者発表会実行委員長
 広瀬 光枝（鵬城会）
- ・ 第6回利用者発表会実行委員長
 綿貫 石三（鍋一詩吟愛好会）
- ・ 第7回利用者発表会実行委員長
 及川 三枝子（クレヨン）
- ・ 第8回利用者発表会実行委員
 大原 くに子（ひこばえコーラス）
- ・ 第9回利用者発表会実行委員長
 立川 愛雄（熟年ひろば）

- 第1回利用者発表会副実行委員長
 在原 博（親風会）
- 第2回利用者発表会副実行委員長
 綿貫 石三（鍋一詩吟愛好会）
 新井 光子（静華会）
- 第3回利用者発表会副実行委員長
 佐久間 登代子（ヨガサークル）
- 第4回利用者発表会副実行委員
 綿貫 石三（鍋一詩吟愛好会）
- 第5回利用者発表会副実行委員長
 芝田 基子（簾細工愛好会）
 田中 節子（わらべ会）
 清水 和良（社交ダンス同好会）
- 第6回利用者発表会副実行委員長
 山形 アサノ（あじさいの会）
- 第7回利用者発表会副実行委員長
 森田 規子（静華会）
- 第8回利用者発表会副実行委員長
 富田 朝子（鍋一三味線愛好会）
- 第9回利用者発表会副実行委員長
 安田 俊一（ボーイスカウト）

白梅音頭

詩案 古岡喜代造・白梅利用者

歌詩補作・作曲 澤田 春駒

踊り振り付け 松本 泰子

一 春は 花さく 白梅の
花のかおりにさそわれて
みんな来るゝ輪になってソレ
白梅音頭でおどりゃんせ
ほんによいところ よいところ
よいところ

二 広場を うずめた 顔とかお
若葉もえたつ熊川の
みんな来るゝ輪になってソレ
白梅音頭でおどりゃんせ
ほんによいところ よいところ
よいところ

三 仲よし どうしの このつどい
あすのしあわせ思いつつ
みんな来るゝ輪になってソレ
白梅音頭でおどりゃんせ
ほんによいところ よいところ
よいところ

白梅分館だよりについて

白梅分館は1980年（昭和55年）5月に開館したわけですが、わずか1ヶ月半後の6月25日、記念すべき第1号の「公民館白梅分館だより」が、発行されています。

第1号の表紙には、「今後隔月で発行を目標とし、主催事業や各サークルの情報を伝え、白梅分館と地域のみなさんを結ぶ絆として発展していきたい」という、強い意志が見えています。

分館だよりは当初1,000部を印刷し、職員2人とパートタイムに来ていてくれた地域の高齢者の方で、周辺の民家に配布したそうです。大体の半径200mくらいの範囲を各戸配布し、その他にも第2小学校の校門で子ども達にも配ったそうです。

その後、配布エリアも福生団地にまで広げたり、町会の回覧版を利用するようにしたため、印刷部数も2,000部を越すようになりました。

表紙の絵は、白梅分館に遊びにやってくる子ども達が描くことになっていて、現在では描くことを楽しみにしている子どももいます。

この分館だよりの発行も職員の金子が異動したことによって、内容などが変化してきました。熊川団地まで配布エリアを広げたりしましたので発行部数も3,000部を越え、内容的にも主催事業のお知らせ記事と共に、地域の歴史的な言伝えや建造物の歴史、そして、文化財の内容やその意味など、また、福生の昭和史の中で欠かすことのできない「横田基地」の歴史的変遷を、陸軍航空学校や整備学校当時に勤務していた方々に登場してもらい、地域の人間が地域の歴史を振り返り、分館だよりを通して歴史を伝えていく場にしてきました。

分館だよりの記事を見て問い合わせをしてくれたり、中には内容の間違いを訂正してくれたり新たな証言を寄せてくれることもありました。

白梅分館だよりは職員が歩いて（遠い場所には自転車とバイクの時もある）配布していますが、「お茶の時間帯」に配布していると声がかかり、お茶をごちそうになったりして分館だよりの内容について説明したり、時には利用上の問題点などを聞かれることもよくありました。

また、街角で利用者の方と話が広がって、配布時間が大幅に延びてしまったことなどよくありました。そして、子ども達の中には手伝いと称して、ずっと配布についてくるようなこともよくありました。

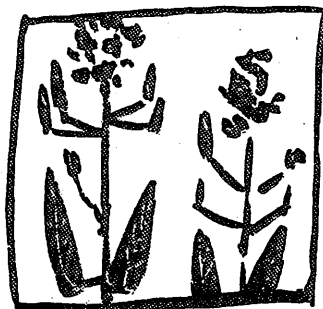
分館だよりの発行は、地域の歴史や今日的で付加価値のある情報を白梅分館に来館出来ない方々に伝えることはもちろん、歩いてあるいは自転車で地域をみて回り、窓口からでは見えてこない地域の状況を察知することが、一番大きな収穫だと思っています。

これからも積極的に地域に出て、しかも地域の方と話をする機会を白梅分館自らが作らないと、利用者だけとの接触の公民館では、地域に根付いた活動は期待できないでしょう。

職員が窓口だけで仕事をしようと考えようになると、結果的には職員も不要な建

物という事になりかねず、将来的には市民の方々にも付加価値を感じる事の無いつまらない施設になってしまうかもしれません。

分館だよりの発行と配布そのものは簡単なことではありますが、案外その重要性については多くのことが語られていないような気がします。



公民館



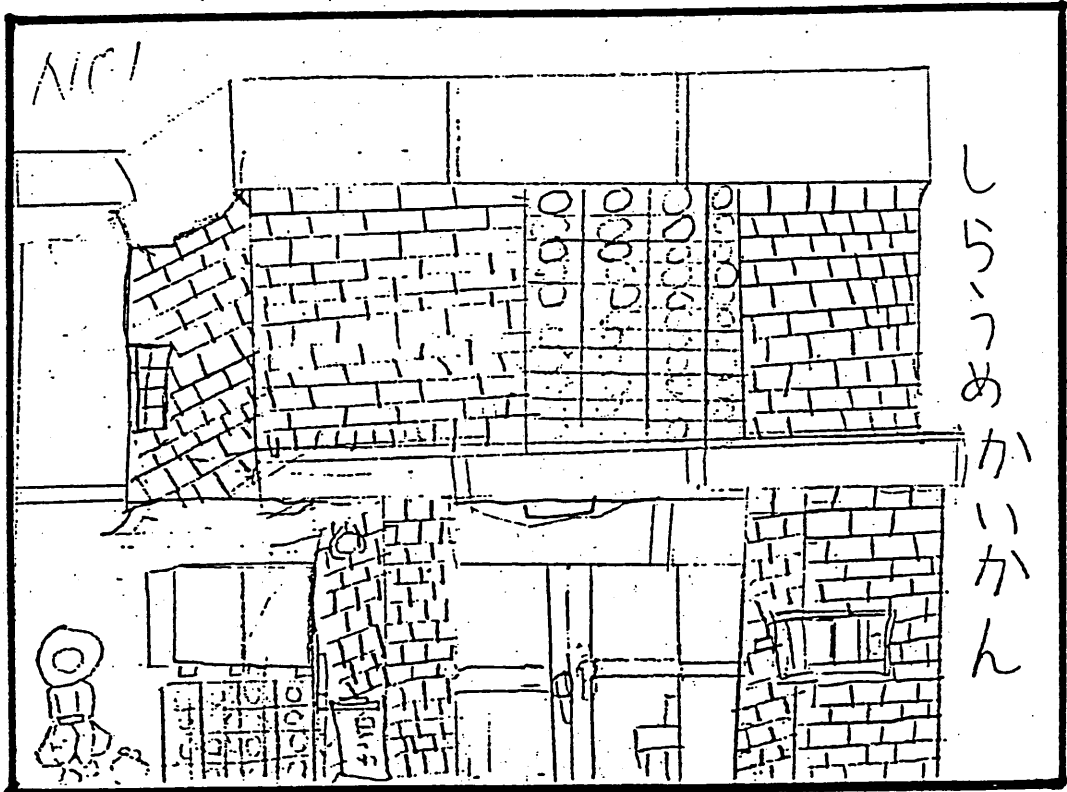
白梅分館だより

福生市公民館白梅分館

福生市熊川559番地1

☎53-3454

昭和55年 6月25日



二小三年とやまなおみさん

発行にあたって

白梅会館がオープンして一ヶ月半がたち、早くも民謡などいくつかのグループが、毎週活動するようになりました。また、七月からは、各種の教室や講座が始まります。そこで、これらの活動の情報をたくさんの方に知っていただくために、「分館だより」を発行することにしました。

今後、隔月発行を目標として、白梅分館と地域のみなさんを結ぶ絆として発展させていきたいと考えています。

子ども手芸教室 1980（昭和55）年度

期 間 7月28日(月)～8月4日(月) 午後1時30分～4時 全5回

参加者 25人×5回＝125人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 28	オリエンテーション	自己紹介、班分け、プログラムの説明	担当職員
7. 30	軍手人形づくり ①	マスコット人形(ブタ)	〃
7. 31	〃 ②	動物(クマ)	〃
8. 1	〃 ③	人形(女の子)	〃
8. 4	〃 反省会	〃 手芸教室の反省	〃

子ども手芸教室 1981（昭和56）年度

期 間 昭和57年7月29日(水)～8月7日(金) 午後2時～4時30分 全6回

会 場 白梅会館

参加者 30人×6回＝180人

月 日	内 容	講 師
7. 29	自己紹介、班分け	担 当 職 員
7. 30	マスコット人形製作(ヒヨコ)	〃
8. 3	〃 (タヌキ)	〃
8. 5	小物入れ製作	〃
8. 6	ぬいぐるみ製作(ネコ)	〃
8. 7	反省会	〃

子ども手芸教室 1982（昭和57）年度

期 間 昭和57年7月28日(木)～8月2日(月) 午後2時～4時 全4回

会 場 白梅分館

参加者 20人 延人数 73人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 28	ポシエットをつくろう	班わけをしよう、糸をかけよう	担 当 職 員
7. 29	"	毛糸であもう	"
7. 30	"	ひもをつけよう	"
8. 2	"	どんなものができたかな	"

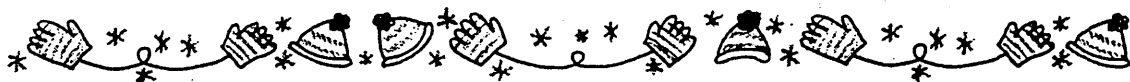
子ども手芸教室 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年7月29日（金）～8月17日（水） 全6回

会 場 白梅分館

参加者 24人 延103人

月 日	テ ー マ	内 容	指 導
7. 29	はじめまして	自己紹介、班わけ、ゲーム	担 当 職 員
8. 3	布を染めよう	古い白布を染める	"
8. 5	布で織ろう	糸かけ、布をさいて織る	"
8. 10	"	布をさいて織る	"
8. 12	"	" 肩ひもをつくる	"
8. 17	どんなものができたかな	しあげをする	"



子ども指人形教室（子ども会リーダー研修会）1980（昭和55）年度

期 間 10月8日（水）～1月28日（水） 午後2時～4時30分 全14回

参加者 10人×14回＝140人

月 日	テ ー マ （内 容）	月 日	テ ー マ （内 容）
10. 8	どんな人形劇をするか話し合い 紙ねんどづくり	12. 3	けいこ
		12. 10	〃
10. 15	人形の顔づくり	12. 17	舞台づくり
10. 22	〃	12. 24	〃 舞台げいこ
10. 29	人形の顔に色をぬる	1. 14	発表会のためのポスターづくり
11. 12	人形の衣装づくり	1. 21	舞台げいこ
11. 19	〃	1. 28	発表会『あぶないうさぎどん』
11. 26	人形の動かし方		『ぞうのはなはなぜながい』 二本上演

子ども指人形教室 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年9月30日（水）～12月23日（水）午後2時～4時30分 全11回

会 場 白梅会館

参加者 13人×11回＝143人

月 日	内 容	月 日	内 容
9. 30	どんな人形劇をするか話し合い 紙ねんど作り	11. 11	人形の衣装づくり
		11. 18	〃
10. 7	人形の顔づくり	12. 2	人形の動かし方、セリフの言い方
10. 14	〃	12. 9	発表会のためのポスターづくり
10. 21	人形の顔に色をぬる	12. 16	舞台げいこ
10. 28	人形の衣装づくり	12. 23	発表会『大きなかぶ』上演

親と子のひろば 1981（昭和56）年度

会 場 白梅分館

参加者 延人数69人 全3回

日 時	内 容	指 導 者	参 加 者
昭和56年10月 4日(日) 午後2時～5時	竹馬作りと映画「手づくりあそびと 子どもの手」鑑賞	山本 信男氏	24人
昭和56年12月12日(土) 午後2時～4時30分	お手玉作り	中村千恵子氏 他	12人
昭和57年 3月26日(金) 午前10時～正午	ベタベタ工作	松本加代子氏	33人

親と子のひろば 1982（昭和57）年度

会 場 白梅分館

参加者 延人数 17人

日 時	内 容	指 導 者	参加者
昭和57年 8月26日(木) 午前10時～正午	ベタベタ工作	松本加代子 氏	61人
昭和57年11月28日(日) 午後2時～4時30分	竹馬づくり	担 当 職 員	13人

親と子のひろば 1983（昭和58）年度

会 場 白梅分館

参加者 77人

テ ー マ	日 時	指 導 者	参加者
陶 芸 教 室	昭和58年8月12日(金) 午後2時～4時	箕田寅生氏	14人
	8月26日(金) 午前10時～午後4時	担 当 職 員	14人
藤 細 工 教 室	昭和58年8月29日(月) 午前10時～正午	山崎初江氏他	22人
あやとり教室	昭和59年3月10日(出) 午後2時～4時	神谷和男氏	27人

親と子のひろば 1984（昭和59）年度

会 場 白梅分館

参加者 89人

テ ー マ	期 日	講 師	参加者
藤 細 工 教 室	昭和59年8月27日(月) 全1回	山崎初江他	35人
あやとり教室	昭和60年2月 9日出 "	神谷和男氏	33人
ファミリー・ハイキング	昭和60年3月17日(日) "	担 当 職 員	21人

わんぱく教室（白梅分館） 1980（昭和55）年度

期 間 7月9日（水）～8月20日（水） 午後2時～4時30分 全8回

参加者 30人×8回＝240人

月 日	テ ー マ （内 容）	講 師	場 所
7. 9	ゲームを覚えよう 班編成	担 当 職 員	白 梅 分 館
7. 16	ゲームを覚えよう	"	"
7. 24	草花で遊ぼう	佐 藤 文 子 氏	南 公 園
7. 30	水でっぼうを作ろう	担 当 職 員	白 梅 分 館
8. 6	竹馬を作ろう	山 本 信 男 氏	"
8. 11	デイキャンプ打合せ	担 当 職 員	"
8. 13	デイキャンプ	担当職員・中学生指導員	柳 山 公 園
8. 20	まとめ	担 当 職 員	白 梅 分 館

冬のわんぱく教室 1980（昭和55）年度

期 間 12月6日（土）～1月31日（土） 午後2時～4時30分 全7回

参加者 32人×7回＝224人

月 日	テ - マ	講 師
12. 6	班編成・ゲームでたのしもう	担当職員
12. 13	かん馬をつくってあそぼう	"
12. 20	映画「雪の女王」をみよう	"
12. 26	お正月に家族で楽しめるゲームをおぼえよう	"
1. 17	みんなですもうをしよう	"
1. 24	わりばし鉄ぼうをつくってあそぼう	"
1. 31	まとめ・ひょうしょうしき	"

わんぱく教室 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年7月8日（水）～8月12日（水）午後2時～4時30分 全7回

会 場 白梅会館、羽村町阿蘇公園

参加者 28人×7回＝196人

月 日	テ - マ	講 師
7. 8	オリエンテーション・班をつくろう	担 当 職 員
7. 15	ゲームでともだちをつくろう	"
7. 22	水でっぼうをつくろう	"
7. 29	手打ちうどんをつくろう	川嶋 米子氏 他3人
8. 3	デイキャンプ打合せ	担 当 職 員
8. 5	デイキャンプ	高校生指導員・担当職員
8. 12	ひょうしょうしき・まとめ	担 当 職 員

冬のわんぱく教室 1981（昭和56）年度

期 間 昭和57年1月30日（土）～3月13日（土）午後2時～4時30分 全7回

会 場 白梅会館、多摩川

参加者 21人×7回＝147人



月 日	テ マ	講 師
1. 30	みんなであそぼう	担 当 職 員
2. 6	かん馬をつくろう	”
2. 13	わりばしてっぽうをつくろう	”
2. 20	コマをつくろう	”
2. 27	タコをつくろう	”
3. 6	連ダコをつくろう	”
3. 13	タコをあげてあそぼう	”

わんぱく教室 1982（昭和57）年度

期 間 昭和57年6月30日(木)～8月11日(木) 原則として午後2時から4時30分
全7回

会 場 白梅分館、羽村町阿蘇公園

参加者 15人×7回＝105人

月 日	テ マ	講 師
6. 30	オリエンテーション・ゲームを覚えよう	担 当 職 員
7. 7	水でっぽうを作ろう	”
7. 14	手打ちうどんを作ろう	”
7. 28	竹トンボを作ろう	河久保金蔵 氏
8. 2	ゲームを覚えよう	担 当 職 員
8. 9	デイキャンプ打合せ・準備	”
8. 11	デイキャンプ	”

冬のわんぱく教室 1982（昭和57）年度

期 間 昭和57年12月8日(木)～昭和58年1月26日(木) 午後2時～4時 全8回

会 場 白梅分館・多摩河原

参加者 23人×8回＝184人



月 日	テ - マ	講 師
12. 8	みんなであそぼう	担 当 職 員
12. 15	かん馬をつくろう	"
12. 22	けん玉をつくろう	"
12. 27	お正月に家族で楽しめるゲームをおぼえよう	"
1. 5	コマであそぼう	"
月 日	テ - マ	講 師
1. 12	タコをつくろう	担 当 職 員
1. 19	連ダコをつくろう	"
1. 26	タコをあげてあそぼう	"

わんぱく教室 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年7月25日(月)～8月11日(木) 原則として午後2時～4時

全6回

会 場 白梅分館、公民館、野外

参加者 22人 延94人

月 日	テ - マ	指 導 者	会 場
7. 25	ゲームで仲間をつくろう	担 当 職 員	白 梅 分 館
7. 29	手打ちうどんをつくろう	村野 栄子氏	公 民 館
8. 2	高尾山たんけん	上田千鶴子氏	八王子市高尾山
8. 4	竹トンボをつくろう	河久保金蔵氏	白 梅 分 館
8. 10	ディキャンプ打合せ	担 当 職 員	"
8. 11	ディキャンプ	"	青梅市風の子・ 太陽の子広場

わんぱく教室 1984（昭和59）年度

期 間 昭和59年7月25日(木)～8月9日(木) 原則として午後2時～4時

全7回

会 場 白梅分館、公民館、野外

参加者 20人×7回＝140人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 25	ゲームで仲間を作ろう	自己紹介、班わけ、ゲーム	担 当 職 員
7. 27	水でっぼうを作ろう	水でっぼうの製作を通して班の連帯を計る	担 当 職 員
7. 30	パンを作ろう	パン作りの楽しさを教える	片 野 共 子 氏
8. 1	デイキャンプ打合せ	キャンプの準備、打合せ	担 当 職 員
8. 2	デイキャンプ	自炊することにより子供の自主性を育てる	担 当 職 員
8. 3	竹トンボを作ろう	竹トンボを作り、物をつくることの難しさを味わう	河久保金蔵氏
8. 9	高尾山たんけん	自然と接することの楽しさを味わう	上田千鶴子氏

子どもまつり（子ども会リーダー研修会）1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年9月26日（土）～11月29日（日）午後2時～4時30分 全10回

会 場 白梅分館

参加者 21人×9回＝189人 当日参加者105人

月 日	テ ー マ	内 容
9. 26	オリエンテーション	プログラムの説明・自己紹介
10. 3	おまつりの企画	どんなおまつりにしていくか話し合う
10. 17	〃	〃
10. 24	〃	〃
10. 31	当日向け詳細準備活動	割ばし鉄砲、あめちゃんのつくり方を仲間同士教え合う
11. 7	〃	ポスター・チラシづくり
11. 14	〃	王冠バッチのつくり方を学ぶ
11. 21	〃	割ばし鉄砲、あめちゃんのつくり方を再確認する
11. 28	〃	当日の役割分担・会場づくり
11. 29	子 ど も ま つ り	

子どもまつり 1982（昭和57）年度

期 間 昭和57年8月25日(木)～10月20日(木) 午後2時～4時 全10回

会 場 白梅分館

参加者 21人×9回＝189人 当日参加者182人

月 日	内 容	内 容
8. 25	オリエンテーション	プログラムの説明・自己紹介
9. 1	おまつりの企画	どんなおまつりにしていくか話し合う
9. 8	〃	〃
9. 22	当日向け詳細準備活動	割ばし鉄砲、あめちゃんのつくり方を仲間同士教え合う
9. 29	〃	王冠バッヂのつくり方を学ぶ
10. 6	〃	ペタペタ工作を学ぶ
10. 13	〃	ポスター・チラシづくり
10. 16	〃	当日の役割分担、会場づくり
10. 17	子 ど も ま つ り	
10. 20	反省会	まとめ

子どもまつり 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年9月3日(出)～11月5日(出) 午後2時～4時(10月30日のみ
午前10時～午後4時) 全10回

会 場 白梅分館

参加者 実行委員会参加者23人 延114人

当日参加者260人

月 日	テ ー マ	内 容
9. 3	オリエンテーション	プログラムの説明、自己紹介
9. 10	おまつりの企画	どんなおまつりにするか話し合う
9. 17	当日向け詳細準備活動	割ばし鉄砲づくり
10. 1	〃	ポスター・チラシづくり
10. 8	〃	かん馬づくり、王かんバッヂづくり
10. 15	〃	王かんバッヂづくり
10. 22	〃	当日の役割分担

月 日	テ ー マ	内 容
10. 29	"	アンケート用紙づくり、会場づくり、チラシ配布
10. 30	子 ども ま つ り	
11. 5	反 省 会	ま と め

子どもまつり 1984（昭和59）年度

期 間 昭和59年9月22日(出)～11月18日(回) 全10回

会 場 白梅分館

参加者 実行委員会参加者 15人

当日参加者 328人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
9. 22	オリエンテーション	プログラムの説明、自己紹介、ゲーム	担当職員
29	おまつりの企画	どんなおまつりにするか話し合う	"
10. 6	"	"	"
13	当日の詳細準備活動	出しものごとに準備	"
20	"	"	"
27	"	ポスター、チラシづくり	"
11. 3	"	出しものごとに準備	"
10	"	"	"
17	"	会場づくり、役割分担	"
18	子どもまつり	割ばし鉄砲、あめちゃん、オリジナルバッヂ、らくがき、めいう、かん馬、わたあめの各コーナーを設ける	"

子どもまつり 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年9月6日(土)～11月23日(日) 全11回

会 場 白梅会館

参加者 20人×11回＝220人

月 日	テ ー マ	内 容
9. 6	オリエンテーション	自己紹介ゲーム 子どもまつりの内容の紹介
9. 13	何をやろうか I	各自がやりたいことを出し合う
9. 20	〃 II	〃 〃
9. 27	お化けやしきを作る	お化けやしきの材料集めと製作、竹トンボ作りを並行
10. 4	〃	〃 〃
10. 18	〃	〃 〃
10. 25	〃	〃 〃
11. 1	〃	〃 〃
11. 8	〃	〃 〃
11. 15	〃	〃 〃
11. 22	お化けやしき準備	お化けやしきの準備
11. 23	子どもまつり 当日	今まで準備してきた子ども達が主役になって活動

おもしろ科学あそび教室 1985（昭和60）年度

期 間 昭和61年7月25日（木）～8月26日（月） 午前10時～正午 全5回

会 場 白梅会館

参加者 7人×5回＝35人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 25	温度計を作ってみよう	不用になったボールペンで作成	宮岡 武志氏
8. 8	ふしぎなふんすい	体積の変化を実験で知る	〃
8. 10	色水であそぼう	酸性、アルカリ性を知る	〃
8. 24	ふしぎな色水	酸とアルカリの具体的実験	〃
8. 26	色を染めよう	酸、アルカリ、中和の応用	〃

ワイワイ子どもひろば「挑戦、なんでも遊び教室」1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年7月14日（日）～10月6日（日） 午前10時～正午 全11回

会 場 白梅会館及び野外

参加者 31人×11回＝341人

月 日	内 容	講 師
7. 14	自己紹介・すすめ方・1週間の生活・ゲーム	田村 光男氏（瑞穂中教諭）
7. 21	竹うまづくり	児島 宗一氏
8. 4	水デッポー、しのデッポーづくり	田村 光男氏
8. 14	手うちうどんづくり	村野 栄子氏（同 上）
8. 18	子どもゲートボール I	河久保金蔵氏 同 上
8. 25	” II	
9. 1	” III	
9. 8	はん盒すいさん・ゲーム・竹馬遊び	子どもと職員で打合せ
9. 15	はん盒すいさん（カレーづくり）	田村 光男氏ほか
9. 22	ゲームとフォークダンス I	中森 章一氏
10. 6	” II	（フォークダンス愛好会）

父母の子育てひろば 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年7月13日（土）～10月5日（土） 午後7時30分～9時30分

全6回

会 場 白梅会館

参加者 16人×6回＝96人

日 時	講 義	指導者・父母交歓	講 師
7月13日（土）	① ② ③ 子ども教室各コースの 各指導者の 父母・指導者 内容紹介 紹介 の交歓		2教室、指導者 父母・職員
7月24日	この夏の有意義な過ごし方について	指導者・父母交歓	・川辺 進氏（保護司） ・2教室指導者

日 時	講 義	指導者・父母交歓	講 師
8月24日	2教室の進行と子育て交歓		2教室指導者
9月14日	・子どもの発達への環境づくり ・集団活動や遊びと発達	指導者・父母の交歓	・酒匂一雄氏 (駒沢大・都 社全教育主事) ・2教室指導者
9月15日	親・子はん盆すいさん		
10月 5日	生物としての人間と、 子育てについて	指導者・父母の交歓	・宮岡一雄氏 (明治大学) ・2教室指導者

父母の子育てひろば 1986 (昭和61) 年度

期 間 昭和61年4月28日(月)～8月25日

午後7時30分～9時30分 全7回

会 場 白梅会館

参加者 子どもはやし教室参加の父母とPTA地区活動ほか一般

18人×7回=126人

内 容 地域での子どもの仲間集団形成と親の役割や係わりについて

回	月・日・曜	内 容		講 師
1	4. 28 (月)	父母会	子どもはやし実施説明会	野口裕教氏(はやし関係者)
2	5. 31 (土)	一般参加	私達おとなの子ども時代と今の子どもの環境	川辺 進氏 (保 護 司)
3	6. 16 (月)		いま 地域での子ども仲間集団づくりの大切さ	田村光男氏 (瑞穂中教諭)
4	7. 7 (月)		子どもの集団づくりと父母会づくりについて	野口裕教氏(はやし関係者)
5	7. 25 (金)	父母会	夏祭り参加打ち合せ	—
6	8. 11 (月)		夏祭り参加反省会	野口裕教氏 (”)
7	8. 25 (月)		子どもはやし連父母会結成について	—



子どもはやし教室 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年4月28日（月）～8月11日（月）

午後7時30分～9時（全15回）

会 場 白梅分館

参加者 小・中学生の男女 20人×15回＝300人

内 容 重松ばやし 仁羽の習得（おどりは、おかめ・ひよっとこ）

回	日 時	内 容		指 導
1 ↓ 5	4月28日(月) 以後毎週月曜日	小太鼓・大カン・踊り	・仁羽せりふ習得 ・打ち方の基礎練習	鍋一はやし連
6 ↓ 10	6月9日(月) 以後毎週月曜日		・リズム間のとり方練習 ・おどり全員の取組	〃
11 ↓ 15	7月14日(月) 以後毎週月曜日	↓若干名は 「屋台」へ	・夏祭り参加練習 ・仁羽の完成	〃

子どもはやし教室 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年8月3日（月）～9月28日（月）

午後7時30分～9時 全10回

場 所 白梅会館・熊川神社

参加者 小・中学生の男女 20人×10回＝200人

内 容 重松ばやし 仁羽・屋台

回	日 時	内 容			指 導	
1	8月3日(月)	小太鼓	大カン	踊り	・仁 羽	熊川囃し経験者
↓	8月10日		父母会同時実施			
3	毎週月曜日					
4	8月24日	地	絡み	大カン	・屋 台	同 上
↓	9月1日(火)		熊川神社祭参加実演			
↓	9月7日(月)		午前中父母会実施			
10	毎週月曜日					
	10月18日(日)	希望追加活動：子ども・親・おとな指導者合同バーベキュー				

子ども合唱教室 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年7月13日（土）～10月7日（月） 午後2時30分～4時30分

全11回

会 場 白梅会館及び野外

参加者 15人×11回＝165人

月 日	内 容	講 師	
7. 13	自己紹介・1週間の生活・リトミック・教室紹介	小波津 隆氏（国立音大卒）	
7. 20	発声練習、リトミック、曲の練習、楽典	〃	
8. 4	（曲 目）		
8. 24	・歌えパンパン		
8. 31	・まっしろいころ		
9. 7	・グリーン・グリーン		
9. 14	・森の熊さん		
	・歌はともだち		
	・十五夜お月さん		
9. 15	親子はん盒すいさん（カレーづくり）	田村 光男氏ほか	
9. 21		小波津 隆氏	
9. 27			
10. 7			

白梅親子飯ごう炊さん 1986（昭和61）年度

実施日 昭和61年8月31日（日） 午後8時30分～午後5時

場 所 五日市町館谷の河原

参加者 子ども16人+父母8人（父3人）+おじいさん・おばあさん3人＝27人

日 時	内 容	備 考
8月31日（日）	9:30～11:30 三世代ゲートボールゲーム	五日市町館谷 の河原にて
8:30	11:30～14:00 飯ごう炊さん・バーベキュー	
～17:00	14:00～16:00 つり大会・スイカ割り大会・川遊び	

夏休み子ども音楽ひろば 1989（平成元）年度

期 間 平成元年7月27日～8月31日 午前10時～正午 全7回

会 場 白梅分館

参加者 30人×7回＝210人

回	月 日	内 容	備 考
1	7. 27	オリエンテーション	指 導（ピアニスト） 山下 やよい氏
2	8. 10	楽しい歌の練習（10曲）数曲二部合唱	
3	13		
4	17	リトミック及び音楽遊び（各種）	
5	24		
6	27	リコーダー、打楽器による上記歌の合奏	
7	31	まとめ ミニおさらい会	

子ども会指導者研修会「子どもの成長とおとなの役割」1982（昭和56）年度

期 間 昭和57年3月12日（金）～3月19日（金）午前10時～正午 全2回

会 場 白梅分館

参加者 26人×2回＝52人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
3. 12	子どもの生活実態と問題点	子どもの生活実態、体や成長に対するゆがみ等、いま子どもにあらわれている問題を明らかにする。	南 里 悦 史 氏 （都立教育研究所）
3. 19	子どもの成長と地域の役割	地域での異年齢集団活動が、子どもの発達にとってどういう意義をもっているのか。いま子どもたちにとって、地域にどのような生活・文化活動が必要なのか。また、それをつくりだし育てるために、父母や地域の住民はどうしたらよいかを考える。	比 嘉 佑 典 氏 （東 洋 大 学）

子ども会指導者研修会「子どもの生活とおとなの役割」1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年3月4日(金)～3月18日(金)

会 場 白梅会館

参加者 23人×3回＝69人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
3. 4	失なわれた子どもの 遊びと労働	子どもの遊びや手労働の現状を通して、今日の子どものたちの生活の危機的状況を明らかにする。	寺内 定夫 氏 (子どもとつくる 生活文化研究会)
3. 11	子どもの体と心	子どもをめぐって、どのような問題が起きているかを明らかにする。	坂本 玄子 氏 (小学校教諭)
3. 18	子どもの成長と 地域の役割	地域に生き生きとした子どもの生活をつくって行くために、いまおとなは何をすればよいのかを考える。	田村 武夫 氏 (青山学院大学 助教授)

たんけん教室 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年4月27日(土)～昭和61年3月23日(月) 全35回

会 場 白梅会館、市内河原・公園、草花・滝山丘陵

参加者 25人×35回＝875人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
4. 27	オリエンテーション	自己紹介・教室の説明等	岡田 紀夫氏他
5. 18	地図とコンパス	それぞれの使い方の説明	〃
6. 1	市内オリエンテーリング I	実際の使い方の練習	〃
6. 9	滝山オリエンテーリング	— 雨天中止 —	〃
6. 22	市内オリエンテーリング II	市内の文化財を見て歩く	〃
7. 20	夏休みプログラム	夏休み中のプログラムの説明	〃
7. 26	崖の動植物調査	市内の林・河原などの生態調査	〃
7. 29	〃	〃	〃
7. 31	〃	〃	〃

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
8. 2	崖の動植物調査	市内の林・河原などの生態調査	〃
8. 7	〃	〃	〃
8. 9	〃	〃	〃
8. 12	昆虫の利用	都天蚕指導所見学	岡田 紀夫氏他
8. 14	多摩川の水生生物	水生昆虫の観察	〃
8. 16	} たんけんキャンプ	市内の河原で24時間の体験	〃
8. 17			
8. 19	公園の植物観察	野生植物と人工的植物の比較	〃
8. 21	} 合同キャンプ	公民館の他の事業に参加している仲間との合同キャンプ	〃
8. 22			
8. 23			
8. 26	まとめ - I	市内の自然の様子を、調べる範囲で	〃
8. 28	〃 - II	まとめる	〃
8. 30	〃 - III	〃	〃
9. 16	草花たんけん	草花でオリエンテーリング	〃
10. 10	じねんじょ探し	滝山でじねんじょを食べる	〃
10. 26	奥多摩たんけんⅠ打合せ	秋の御前山へ行くための準備	〃
11. 4	奥多摩たんけんⅠ	— 雨天中止 —	〃
12. 15	多摩川の野鳥観察	冬鳥の観察を多摩川で行う	〃
1. 25	奥多摩たんけんⅡ打合せ	冬の奥多摩へ行くための準備	〃
2. 9	奥多摩たんけんⅡ	冬の二次林を観察に浅間尾根へ	〃
2. 23	冬の滝山あそび	身近な二次林の中で仲間と遊ぶ	〃
3. 1	ファミリーハイキング打合せ	} 子どもたちによる企画、下見、 資料作りを通して、一年間に 身につけたものを表現する	〃
3. 9	〃 下見		
3. 15	資料作り		
3. 23	本番		

たんけん教室 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年4月26日（土）～62年3月29日（日） 全35回

会 場 白梅会館、市内河原、滝山丘陵、草花丘陵、奥多摩など

参加者 23人×35回＝805人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
4. 26	オリエンテーション	自己紹介、教室の説明など	岡田紀夫氏他
5. 31	地図とコンパス	地図に磁北線を引く	〃
6. 15	オリエンテーリングⅠ	滝山で地図とコンパスを使う練習	〃
7. 19	夏休みオリエンテーション	夏休みの計画の説明	〃
7. 31	ナイフを作ろう	グラインダーを使ってナイフを作る	〃
8. 1	〃	〃 〃	〃
8. 6	木を切り出す	山の立木を切ってみる	〃
8. 7	皮をむく	切ってきた杉や桧の皮をむく	〃
8. 8	年輪を調べる	年輪の中から成長過程を知る	〃
8. 11	たんけんキャンプ	市内の公園で1泊キャンプ	〃
8. 12	〃	〃 〃	〃
8. 13	イスとテーブル作り	丸太でイスやテーブル作りを行う	〃
8. 14	〃	〃 〃	〃
8. 15	〃	〃 〃	〃
8. 16	〃	〃 〃	〃
8. 18	合同キャンプ準備	キャンプでの食糧などの買出し	〃
8. 20	合同キャンプ	五日市町青少年旅行村でキャンプ	〃
8. 21	〃	〃 〃	〃
8. 22	〃	〃 〃	〃
8. 25	イスとテーブル作り	イスとテーブル作りの続き	〃
8. 29	〃	〃 〃	〃
9. 7	オリエンテーリングⅡ	滝山で2回目のオリエンテーリング	〃

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 10	なんでも食べちゃおう	滝山丘陵でクリやアケビを食べる	岡田紀夫氏他
10. 25	奥多摩たんけんⅠ 準備	御前山へやぶこぎに行く準備の確認	〃
11. 2	〃	御前山で未開ルートを下る	〃
11. 24	滝山林間サッカー	秋の滝山丘陵でおもいっきり遊ぶ	〃
12. 7	野鳥かんさつしよう	市内多摩川で冬鳥を観察する	〃
2. 7	奥多摩たんけんⅡ 準備	冬の生藤山を登るので事前準備	〃
2. 11	〃	〃 登山	〃
3. 14	ファミリーハイキング打合せ	子どもたちの立案による場所探し	〃
3. 22	〃 下見	梅ヶ谷峠から福生まで下見調査	〃
3. 25	〃 資料作り	下見調査の結果から当日用の資料を	〃
3. 26	〃	作成する	〃
3. 27	〃	〃	〃
3. 28	〃	〃	〃
3. 29	ファミリーハイキング本番	梅ヶ谷峠から福生までハイキング	〃

たんけん教室 1987（昭和62）年度



期 間 昭和62年4月25日（土）～63年3月27日（日） 全48回

会 場 公民館白梅分館・市内河原・滝山丘陵・草花丘陵・奥多摩など

参加者 25人×48回＝1,200人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
4. 25	オリエンテーション	自己紹介や年間スケジュールの案内	岡田 紀夫氏他
5. 16	市内オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の練習	〃
5. 31	滝山たんけん	地図とコンパスの使い方の実践練習	〃
6. 28	草花丘陵たんけん	草花の自然や地形を見て歩く	〃
7. 18	夏休み計画作り	夏休み中のプログラムの案内など	〃
7. 27	植物分布を調べる	熊川団地の植物調査 1	宮岡 一雄氏と
7. 29	同 上	熊川団地の植物調査 2	佐藤 文子氏
7. 31	同 上	熊川団地の植物調査 3	〃
8. 1	同 上	熊川団地の植物調査 4	〃
8. 3	同 上	熊川団地の植物調査 5	〃
8. 5	同 上	福生団地の植物調査 1	〃
8. 6	同 上	福生団地の植物調査 2	〃
8. 7	同 上	福生団地の植物調査 3	〃
8. 10	同 上	福生団地の植物調査 4	〃
8. 12	} たんけんキャンプ	柳山公園でキャンプを行い、身近な自	〃
8. 13		然の中で一日の移り変わりを知る	〃
8. 17	植物分布を調べる	福生団地の植物調査 5	〃
8. 19	} 合同キャンプ	公民館 3 館で合同キャンプを行う	実技指導員 他
8. 20		会場：五日市青少年旅行村	〃
8. 21			〃
8. 26	調査のまとめ	調査結果を図示化し緑の様子を再現	職 員 他
8. 27	同 上	同 上	〃
8. 28	同 上	同 上	〃
8. 29	同 上	同 上	〃
8. 31	同 上	同 上	〃
9. 12	自転車調整	翌日の狭山丘陵たんけんの準備	岡田 紀夫氏
9. 13	狭山丘陵たんけん	狭山丘陵を自転車で走破する	〃
9. 19	ウォークラリー準備	参加者用名札の制作	実技指導員 他
9. 26	同 上	同 上	〃

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 3	同 上	参加賞用の七宝焼の制作	〃
10. 10	滝山丘陵食べ歩き	滝山で果実を収穫し、味覚を楽しむ	〃
10. 17	ウォークラリー準備	参加賞の七宝焼の制作	〃
10. 24	同 上	同 上	〃
10. 31	同 上	魚釣りゲームの制作	〃
11. 7	同 上	同上、奥多摩たんけんの打ち合せ	〃
11. 14	同 上	コース地図の制作	〃
11. 15	同 上	当日用看板の制作など	〃
11. 21	同 上	最終チェックと予行演習	〃
11. 22	ウォークラリー当日	17チーム約50人の参加者で終る	〃
12. 5	ウォークラリー反省会	ウォークラリーの反省を行った	〃
12. 25	おしるこパーティー	今年のたんけん教室を振り返る	〃
1. 10	野鳥観察	多摩川で冬鳥の観察を行う	岡田 紀夫 氏
2. 6	奥多摩たんけん打ち合せ	奥多摩たんけんの具体的な打ち合せ	
2. 11	奥多摩たんけん	大仁田山に出かけ冬の山を経験する	
3. 19	ファミリーハイキング	行き先や交通手段などの検討	
3. 20	同 上	下見調査に出かける	
3. 23	同 上	調査結果からパンフレット作成	
3. 27	同 上	今熊神社～五日市にハイキング	



たんけん教室 1988（昭和63）年度

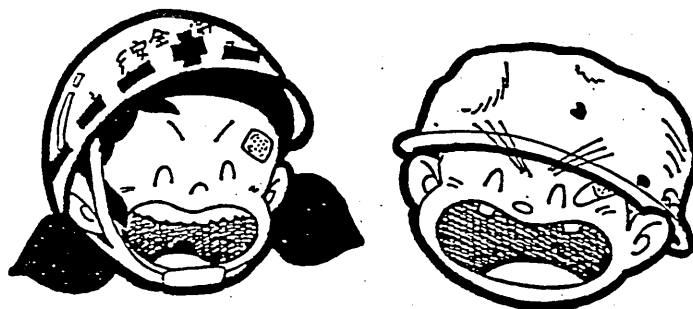
期 間 昭和63年4月23日（土）～平成元年4月2日（日） 全39回

会 場 白梅会館、市内河原・公園、滝山丘陵・草花丘陵・奥多摩など

参加者 延べ人数 390人

月 日	テ　　マ	内　　　　　　容	講　　師
4. 23	オリエンテーション	教室の説明と各自の自己紹介	岡田紀夫氏 栗原　仁氏 宮岡一雄氏
5. 14	市内オリエンテーリング	市内で地図とコンパスの練習	
5. 28	磁北線を引く	地図上の実際の“北”を知る	
5. 29	滝山オリエンテーリング	滝山で地図とコンパスの練習	
6. 19	草花オリエンテーリング	草花で地図とコンパスの練習	
7. 16	夏休みオリエンテーション	夏休みプログラムの説明	の各氏の他、 実技指導員 数人が毎回 スタッフと して参加し た。
8. 1	滝山の遊び場をさがす 1	滝山丘陵で遊びの可能性を探る	
8. 4	滝山の遊び場をさがす 2	滝山丘陵で遊びの可能性を探る	
8. 5	滝山の遊び場をさがす 3	滝山丘陵で遊びの可能性を探る	
8. 7	滝山の遊び場をさがす 4	滝山丘陵で遊びの可能性を探る	
8. 17	キャンプの打ち合わせ	夏休み中のキャンプの打ち合わせ	
8. 18	合同キャンプ	3館合同でキャンプを行なった 場所は川井キャンプ場	
8. 19			
8. 20			
8. 24	たんけんキャンプ	滝山丘陵で野宿のキャンプの体験をし てみる。キャンプに必要な施設などの 設営を行なう	
8. 25			
8. 29	夏休みまとめ	今年の夏休みのまとめ	
9. 3	ウォークラリー準備	ウォークラリーを子ども達の発案と準 備で開催する。そのために各種の準備 を毎週行なう	
9. 10	ウォークラリー準備		
9. 17	ウォークラリー準備	同	
10. 1	ウォークラリー準備	同	上
10. 8	ウォークラリー準備	同	上
10. 10	何でも食べちゃおう	滝山丘陵で秋の味覚を食べてみる	

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 15	ウォークラリー準備	ウォークラリーを子ども達の発案と準備で開催する。そのために各種の準備を毎週行なう。	
10. 22	ウォークラリー準備		
10. 29	ウォークラリー準備	同 上	
11. 5	ウォークラリー準備	同 上	
11. 12	ウォークラリー準備	同 上	
11. 19	ウォークラリー準備	同 上	
11. 20	ウォークラリー当日	熊川地区と河原を利用して開かれた	
11. 27	奥多摩たんけん 1	秋の大高山で地形を地図上で確認	
12. 4	冬鳥観察会	多摩川にやってくる冬鳥の観察	
12. 18	滝山たんけん	二次林の成り立ちを滝山で観察	
2. 4	奥多摩たんけん2打合せ	冬山登山に必要なことの説明	
2. 11	奥多摩たんけん 2	雪の残る三頭山に登って冬山体験	
3. 24	ファミリーハイキング打合せ	子ども達の一年間の成長を父母にみてもらうことや、仲間を誘ってハイキングにいける力をみせる	
3. 27	ファミリーハイキング下見調査		
3. 29	ファミリーハイキング資料作成	下見の資料をパンフレットに作成	
4. 2	ファミリーハイキング当日	今年は高水三山に登山した	



たんけん教室 1989（平成元）年度

期 間 平成元年4月22日（土）～平成2年4月1日（日） 土曜日は午後2時～5時、
日曜日・祝祭日は、午前8時位から午後5時まで 全27回

会 場 白梅分館、多摩川、滝山丘陵、草花丘陵など

参加者 延べ参加者数 353人

講 師 岡田紀夫氏の他、実技指導員数名を依頼した。

月 日	テ ー マ	内 容
4. 22	オリエンテーション	自己紹介とこの教室、スタッフや用具の紹介など
5. 21	滝山オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方を実際の山の中で学ぶ
7. 2	自転車で遊ぶ	滝山丘陵を自転車で走り回ってみる
15	夏休み打ち合せ	夏休みの事業の具体的な説明と注意点を説明する
24	沢遊びに挑戦	川井駅近くに流れ込む大丹波川で沢登りの体験をする
25	岩登りに挑戦	天覧山に行き、フリークライミング初級コースに挑戦
9. 2	ウォークラリー準備	子ども達の企画立案によるウォークラリーを準備
9	〃	〃
23	菅生丘陵を歩く	草花丘陵の奥に位置する菅生丘陵の林の観察に行く
30	ウォークラリー準備	子ども達の企画立案によるウォークラリーを準備
10. 7	〃	〃
8	なんでも食べちゃおう	滝山丘陵でクリ・アケビ・ジネンジョを食べてみる
14	ウォークラリー準備	子ども達の企画立案によるウォークラリーを準備
21	〃	〃
28	〃	〃
11. 11	〃	〃
18	〃	〃
19	ウォークラリー本番	ウォークラリーの本番。熊川地域を半日かけて歩く
23	奥多摩たんけん	棒の折山の二次林の様子を観察
12. 9	たんけん忘年会	今までのビデオや写真などで振り返ってみる

月 日	テ ー マ	内 容
12. 10	滝山の冬を経験する	滝山丘陵でネイチャ―ゲームを実践する
2. 3	奥多摩たんけん打合せ	冬の奥多摩に出かけるための詳細な注意事項の確認
11	奥多摩で雪合戦	雷電山の二次林の様子やそこに住む野鳥などの観察
3. 10	ファミリーハイキング打合せ	奥多摩ハイキングのコース検討をする
25	ファミリーハイキング下見調査	子ども達の立案したコースを実際に歩いて調査する
26	ファミリーハイキング資料作り	調査に基づき資料を作成し仲間や家族を誘う
4. 1	ファミリーハイキング	一年間の成果を家族や仲間の前で披露する

夏休み自然教室 1989（平成元）年度

期 間 平成元年7月31日（月）～8月28日（月） 全14回

会 場 白梅分館、多摩川中央公園予定地

参加者 12人 延べ参加者数102人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
7. 31	オリエンテーション	自己紹介と教室の説明	担当職員
8. 3	昆虫の観察Ⅰ	草地の昆虫を観察記録する	栗原 仁氏
4	植物の観察Ⅰ	河原の樹木を観察記録する	宮岡一雄氏
7	植物の観察Ⅱ	林の下草を中心に観察記録する	同 上
9	植物の観察Ⅲ	水辺の植物を中心に観察記録をする	同 上
10 11	滝山丘陵キャンプ	秋川市のグリーンキャンプ場でキャンプをする。24時間の自然の変化を体験し、秋川の様子なども観察記録する	担当職員 実技指導者
17	昆虫の観察Ⅱ	堤防付近の草地の昆虫を観察記録する	栗原 仁氏
18	植物の観察Ⅳ	水辺から高台の間の植物の観察記録する	宮岡一雄氏
21	植物の観察Ⅴ	全般的に不足していた部分の観察を行う	宮岡一雄氏
24	野鳥の観察	早朝に野鳥を観察記録する	担当職員
25	昆虫の観察Ⅲ	不足していた部分の昆虫を観察記録する	栗原 仁氏
28	まとめ	地図の中に植物・昆虫・野鳥を記録する	担当職員

婦人学級「女の一生を考える」 1980（昭和55）年度

期 間 2月2日（月）～3月30日（月） 午前10時～正午 全9回

参加者 11人×9回＝99人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
2. 2	女性のあゆみ ①	婦人問題とは、女性の歴史－原始～江戸時代－	折井美耶子氏 (歴史科学協会)
2. 9	〃 ②	女性の歴史－明治時代以後－	
2. 16	女性と教育	女性がうけてきた教育、女子教育	
2. 23	主婦とは何か	主婦とは、女の役割、家庭の中の人間関係	
3. 2	女性と職業	働くことの意味、女性の労働をめぐる問題	
3. 11	子育てを終えてから	子育て後の女性の問題、社会参加の方法	
3. 16	女性と老後	老後の3大問題－貧・病・孤－、夫婦のあり方	
3. 23	〃	高齢化社会の諸外国の状況、老人文化	
3. 30	ま と め	女性の生き方について	

婦人学級「文学にみる女性」 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年6月26日（金）～7月24日（金） 午前10時～正午 全5回

会 場 白梅分館

参加者 19人×5回＝95人

月 日	テ ー マ	講 師
6. 26	はじめに、朗読をきく 樋口一葉「十三夜」	折井美耶子氏 (歴史科学協会)
7. 3	樋口一葉「十三夜」 忍従の女性・お関	
7. 10	長塚節「土」 農村の女性・お品	
7. 17	祖母、母の時代	
7. 24	宮本百合子「伸子」 大正期の新しい女性像・伸子	

婦人学級「女性がのびやかに生きるために」 1982（昭和57）年度

婦人問題について学習し、女性の生き方を考える機会として実施した。本講座に先立ち準備会をもち、内容を検討した。準備会参加者 10 人 延 32 人

準備会日程

日 時	内 容	備 考
昭和57年 9月13日(月) 午後7時30分～9時	自己紹介 準備会について	参加者と担当職員
昭和57年 9月20日(月) 午後7時30分～9時	婦人問題をどのように学習するか	"
昭和57年 9月27日(月) 午後7時30分～9時	"	"
昭和57年 10月29日(金) 午後1時～3時	婦人問題とは	"
昭和57年 11月 5日(金) 午後1時～3時	私たちの婦人問題	"
昭和57年 11月12日(金) 午後1時～3時	プログラムづくり	"

本講座

期 間 昭和58年1月27日(木)～3月3日(木)

午後1時30分～3時30分 全5回

会 場 白梅分館

参加者 21人 延人数 44人

月 日	テ ー マ	講 師
1. 27	映画鑑賞「男女平等への道」	担 当 職 員
2. 3	婦人問題って何だろう	折井美耶子 氏（歴史科学協会）
2. 10	女性が働くということは	島田とみ子 氏 （東海大学教授）
2. 24	女の老後を考える	
3. 3	婦人問題のまとめ	折井美耶子 氏（歴史科学協会）

婦人学級 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年5月11日㈪～9月28日㈪ 全15回

会 場 白梅分館

参加者 14人 延188人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
5. 11	はじめに	自己紹介、幼児室について	担 当 職 員
5. 18	いま考えていること	作文発表	〃
5. 25	〃	〃	〃
6. 1	〃	〃	〃
6. 8	女性の生き方	どんな生き方をしたいか	〃
6. 15	女性と仕事	子どもをあずけて働くということは	〃
6. 22	女の子はつくられる	女の子の育て方としつけについて	〃
6. 29	共働きと育児	共働きと子育て	〃
7. 6	女性と仕事	女性が働くということは	〃
7. 13	子育て後の人生	子育て後の人生をどうするか	〃
7. 20	これまでのまとめ	これまで出てきた問題の整理	〃
9. 7	集団の中で子供はどのように育っていくか。	子どもの集団がどのようにまとまっていたか。どのように子供が成長したか。	高 橋 登 美 子 氏 (幼児室指導者)
9. 14	主婦の再就職	女性のライフサイクルの変化 主婦の再就職の実態	桜 井 陽 子 氏 (フリーライター)
9. 21	これまでのまとめとこれから	これからの活動について	
9. 28	女性が働くとき	主婦の再就職の問題と再就職活動	桜 井 陽 子 氏

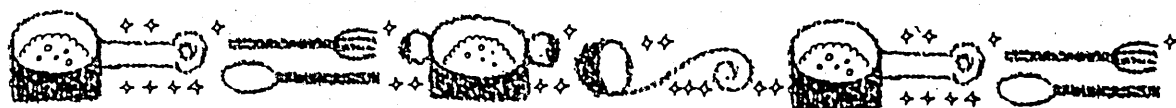
婦人学級「健康に生きるため」 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年10月7日㈪～12月16日㈪ 午前10時～正午（4回目のみ午後2時～4時） 全10回

会 場 白梅分館

参加者 21人 延140人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 7	オリエンテーション	自己紹介、映画「すばらしい明日のために」鑑賞	担 当 職 員
10. 14	老人保健制度について	老人保健制度とはどういうものなのか。 また、それにとりまう福生市の保健活動はどうなっているのかを学ぶ。	阿 部 セ ッ 氏 (福生市健康センター)
10. 21	薬の副作用	薬が身体に与える悪影響について学ぶ。	久 保 山 昇 氏 (日本大学薬理学教室)
10. 28	合成洗剤の安全性	石けんと合成洗剤はどこが違ふのか。 また、合成洗剤は身体にどのような影響を与えるのかを学ぶ。	小 林 勇 氏 (川崎市衛生研究所)
11. 11	乳ガンを自分で見分ける	乳ガンの自己検診法を学ぶ。	伊 藤 民 子 氏 (福生保健所)
11. 18	食品添加物の安全性	食品添加物とは何か。また、安全性にどのような問題点があるのかを学ぶ。	能 勢 征 子 氏 (都立立川短大)
11. 25	更年期を健康に過ごすために	更年期障害とはどういうものなのか。 また、更年期を健康に過ごすためには、どのようなことに心掛けたらよいのかを学ぶ。	鎌 奥 サ ダ 子 氏 (福生保健所)
12. 2	成人病予防と食事	高血圧、動脈硬化などの成人病にならないためには、どのような食生活を送ったらよいかを学ぶ。	中 川 光 子 氏 (福生保健所)
12. 9	身体を動かすことと健康	手軽にできる軽体操の実技を学ぶ。	吉 野 チ エ 氏 (福生市体育指導委員)
12. 16	ま と め		担 当 職 員



婦人学級「高齢化社会と女の老後」 1984（昭和59）年度

期 間 昭和60年2月28日(木)～3月20日(木) 全4回

会 場 白梅分館

参加者 13人×4回＝52人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
2. 28	高齢化社会とは	高齢化社会の問題点	坂田周一氏
3. 7	女の老後の実態	老後でなぜ“女の老後”が問題になるのか	長嶋紀一氏
3. 14	老後のための生活設計	どうすれば、豊かで充実した老後が迎えられるのか	鳥田とみ子氏
3. 20	地域ぐるみで豊かな老後を	地域の老後問題への取り組み	二瓶万代子氏

婦人学級「しらうめイブニングひろば」 1984（昭和59）年度

期 間 昭和60年2月4日(月)～3月25日 全7回

会 場 白梅会館

参加者 18人×7回＝126人

回	月 日	内 容	備 考
1	2. 4	参加者自己紹介 学級の性格と内容づくりについて	健康軽体操と話し合い 指導・話題 吉野チエ氏
2	2. 18	教育の場はふるさと、夫婦あい和すために	〃
3	2. 25	子どもの育ち独立から、同居・別居について	〃
4	3. 4	子どもの独立・夫婦・老後(生活の愉しみ方)	評論家 鷺津美栄子氏
5	3. 11	高度情報化と高齢化社会について	同 上
6	3. 18	かつての生活、人と人との関係と、これからのコミュニケーション	健康軽体操と話し合い 指導 吉野チエ氏
7	3. 25	私達の生活づくりと、この場の集まりについて	〃

婦人学級「しらうめイブニングひろば」 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年11月11日（月）～12月23日 夜間 全7回

会 場 白梅会館、ほか

参加者 17人×7回＝119人

月	日	内		容	講	師
11	11	おしゃべり軽体操、自己紹介・交歓、学級の紹介・希望、打合せ			・指導助言 吉野 チェ氏 (元小・中教諭)	
	18	おしゃべり軽体操	I	話し合い 息子・娘の成長・独立・結婚、私の今・夫婦の今		
	25	”	II			
12	2	場をかえて、「会長」と「ボーリング」				
	9	”	III	老後について		
	16	”	IV	家庭・地域・仕事		
	23	講演会“生活をともにする共有の地域生活空間づくりについて”			群馬大教授 林 知子 (住生活学)	

婦人学級「しらうめイブニングひろば」 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年10月6日（月）～昭和62年2月9日（月）

午後7時30分～10時 全13回

会 場 白梅会館（2小体育館ほか）

参加者 おおむね40～50代の婦人 23人×13回＝299人

内 容 子育て以後の婦人の生き方、仲間づくりについて

回	日 時	会 場	内 容		備 考
1	10. 6 PM7:30 ～10:00	白梅会館	自己紹介、学級の進め方、おしゃべり軽体操、そのI		吉野チエ氏 (体育指導員)
2	10. 13 ”	”	おしゃべり軽体操II	話題・息子、娘の成長・独立 ・ ” の結婚(同居・別居) ・ 老後について ・ 趣味、仕事、私の活動 他	”
3	10. 20 ”	館外活動	会食・ボーリング		”
4	10. 27 ”	2 小 体 育 館	軽スポーツを楽しもう I		”
5	11. 3 ”		” II	・ テニボン ・ インディアカ ・ ユニホック(他)	”
6	11. 10 ”	白梅会館	合 唱	誰でも知っている歌と一緒に	瀬川 武氏 (国立音大)

回	日 時	会 場	内 容	備 考
7	11. 17 "	"	高齢期を活々と過ごすために	川辺 進氏 (保護司)
8	1. 12 "	"	老後の生活と地域福祉Ⅰ 私達の備え	倉橋良子氏 (小金井老問研)
9	1. 19 "	"	Ⅱ 地域活動について	"
10.	1. 25 "	"	おしゃべり軽体操Ⅲ “仲間づくりのこれから”	吉野チエ氏 (体育指導員)
11	2. 2 AM9:00 PM4:00	日の出 ホーム	特別養護老人ホーム 旧体験学習	市バスにて。熟年 ひろばと合同
12	2. 2 PM7:30 ~	白梅会館	合 唱	なつかしいうた
13	2. 9 "	"		今、楽しくうたう

しらうめ「婦人のひろば」 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年10月5日（月）～昭和63年3月28日（月）

午後7時30分～10時 全21回 3コース

会 場 白梅会館・熊川体育館・ほか野外

参加者 スポーツ・レクリエーション20人×5回+語らい総合25人×12回+婦人
懇談会20人×5回＝500人

スポーツ・レクリエーション活動

回	月 日	内 容	備 考
1	10月 5日(月)	リズム体操・ダンス・ストレッチ体操	吉野チエ氏 (体育指導員)
2	26日	インディアカ・テニボン・バドミントン	
3	11月 2日	その他各種軽スポーツ	
4	12月 7日	(熊川体育館)	
5	3月 7日(月)		
*	このほかメンバーの自主活動で野外ハイク神代植物公園・高尾山など実施。		

語らい総合活動

回	月 日	内 容	備 考
1	10月12日(月)	ふっさ地名考・地域福祉そのⅠ	立川氏・川辺氏
2	10月19日	うたおう・語ろう人生よもやま	話し合い
3	11月 9日	福生の歴史・民族・文化財	立川愛雄氏
4	11月16日	地域福祉そのⅡ	川辺 進氏
5	11月23日	熊川見て歩き	立川愛雄氏
6	12月21日	忘年会、それぞれのこの一年	懇親話し合い
7	1月18日	新年の希望を語る	話し合い
8	1月25日	映画と話し合い	川辺 進氏
9	2月 8日	片倉(製糸→自転車)・福生今昔	立川愛雄氏
10	2月15日	うたおう語ろう人生よもやま	話し合い
11	2月22日	地域福祉そのⅢ	川辺 進氏
12	3月21日	ゆったりハイク・百草園	ハイキング

婦人懇談会

回	月 日	内 容	備 考
1	11月30日(月)	中高年期の婦人の健康管理について	健康センター阿部
2	12月 4日	国・都の老人福祉施策、施設等	都老研 岡本多喜子氏
3	2月29日	停車場(福生駅)の今昔	橋本孝蔵氏
4	3月14日	生物としての人間・緑の街づくり	宮岡一雄氏(明大教授)
5	3月28日	21世紀への大都市像 (婦人の生活をめぐる都市の状況)	松田雄孝氏 (大東学園専門学校)

しらうめ「婦人のひろば」 1988(昭和63)年度

ふれあい、仲間づくり、生活を交わし合うための総合活動として実施。

期 間 昭和63年10月17日(月)～3月30日 午後7時30分～10時

全9回

会 場 白梅会館

参加者 15人×9回=135人

	月 日	内 容	備 考
1	10月17日	婦人のひろば紹介、老人ホーム・ボケ	紹介と話し合い
2	24日	ゴキブリ退治だんごづくり(発生苦慮から)	つくり方講習・作業
3	11月14日	うたとよもやま話し(老ホと市民文化祭)	話し合い
4	11月28日	婦人の健康と市健康センターの仕事	市健康センター 阿部
5	12月 9日	忘 年 会	年末懇親会
6	1月 9日	天皇崩御 皇室の社会	話し合い
7	2月13日	うたとよもやま話し	〃
8	3月13日	異質な人・場でのコミュニケーションづくり	話題提供 大堀容子氏
9	3月20日	今年度のまとめとこれから	話し合い

「婦人のひろばスポーツレクリエーション活動」1988(昭和63)年度

期 間 昭和63年11月7日(月)～平成元年3月6日 午後7時30分～10時

全5回

会 場 白梅会館・熊川体育館

参加者 15人×5回＝75人

	月 日	内 容	備 考
1	11月 7日	中・更年期の婦人の健康・体力・運動	指 導 吉野チエ氏 (市体育指導委員)
2	12月 5日	リズム軽体操とインディアカ	
3	1月23日	ストレッチ体操とインディアカ	
4	2月 6日	インディアカ交流ゲーム	
5	3月 6日	体を害したときの心と健康の幸せ	

「婦人懇談会」 1988(昭和63)年度

期 間 昭和63年10月31日(月)～平成元年2月27日 午後7時30分～10時

全6回

会 場 白梅会館

参加者 15人×6回＝90人

	月 日	内 容	備 考
1	10月31日	挨拶・はなし言葉・敬語について	川辺 進氏(保護司)
2	11月21日	老人ホーム 設置基準・運営	"
3	12月12日	私達の老後と地域福祉	倉橋良子氏(老後問題研究者)
4	1月30日	日本の高齢者福祉 欧米比較から	"
5	2月20日	婦人の生活と税、今消費税について	持田 力氏(税理士)
6	2月27日	21世紀の都市と婦人の生活	松田雄孝氏(大東学園専門学校)

婦人のひろば 1989(平成元)年度

期 間 平成元年7月3日(月)～8月21日 午後7時30分～10時 全5回

会 場 白梅分館

参加者 25人×5回=125人

回	月 日	内 容	備 考
1	7. 3	・ボール板を使用しての織物づくり、毛糸で、 ウェア・帽子・飾りベルトづくり ・作業と同時に生活よもやま話し、地域福祉等 について話し合い。	小金井老問研 ボード織り指導 倉橋 良子氏
2	10		
3	17		
4	8. 7		
5	21		



女性講座「歴史に学ぶ」 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年11月9日（月）～昭和57年3月15日（月）

午前10時～正午 全13回

会 場 白梅分館

参加者 25人×13回＝325人

月 日	テ ー マ	講 師
11. 9	オリエンテーション、映画「日本歴史の流れ」鑑賞	担 当 職 員
11. 16	近代日本の開幕——明治維新	折 井 美 耶 子 氏 （ 歴 史 科 学 協 会 ）
11. 30	民権か国権か——自由民権運動	
12. 7	富国強兵をささえた人々——日清、日露戦争	
12. 14	自由と権利を求めて——大正デモクラシー	
1. 18	戦争への足音——昭和恐慌	
1. 25	戦時体制——十五年戦争Ⅰ	
2. 1	焦土となって——十五年戦争Ⅱ	
2. 8	近代史のまとめ	
2. 15	何を学んだか、学べたか	
2. 22	文集づくり	
3. 1	”	
3. 15	草の根憲法の里を訪ねて	新 井 勝 紘 氏 （ 市文化財保護審議会委員 ）

女性講座「歴史に学ぶ」 1982（昭和57）年度

準備会

期 間 昭和57年4月9日（金）～7月16日（金） 午前10時～正午 全10回

会 場 白梅分館

参加者 5人 延人数 25人

月 日	内 容	講 師
4. 9	自己紹介、準備会のすすめ方	担 当 職 員
4. 16	講座でどんな学習をしたいか	参加者と担当職員
4. 23	なぜ歴史を学ぶのか	〃
5. 7	歴史をどのように学習するのか	〃
5. 14	戦後史をどのように学習するのか	〃
5. 28	戦後史をプログラムづくり	〃
6. 11	講義の流れを考える	〃
6. 25	戦後史のプログラムづくり	〃
7. 2	〃	〃
7. 16	〃	〃

本講座

期 間 昭和57年9月8日(木)～昭和58年2月16日(木)

午前9時30分～正午 全10回

会 場 白梅分館

参加者 23人 延人数 94人

月 日	テ ー マ	講 師
9. 8	なぜ戦後の歴史を学ぶのかー社会の歴史と私の歴史	川村善二郎 氏
9. 22	現代の日本の出発点ー8.15の意味を考える	(東京経済大学講師)
10. 6	わたしの8月15日	担 当 職 員
10. 13	変ったもの変わらなかったものー民主改革とその限界	川村善二郎 氏 (東京経済大学講師)
10. 27	対日占領政策の移り変わりー朝鮮戦争と講和問題	
11. 10	戦後の国際関係と日本の役割ー60年安保問題	
11. 17	わたしの戦後史	担 当 職 員
12. 8	これまでをふり返って	
1. 12	戦後教育のあゆみと私たちー教科書問題を中心に	川村善二郎 氏
1. 26	戦争と平和を考えるー私たちの課題は何か	(東京経済大学講師)

女性講座「女性史入門」 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年10月17日(月)～昭和59年3月30日(金) 全19回

会 場 白梅分館及び野外

参加者 20人 延254人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 17	はじめに	女性史を学ぶにあたって	折井美耶子氏
10. 24	原始時代から古代国家の成立まで	ひみこから古事記・万葉の時代	(女性史研究者)
10. 31	古代の女性	源氏物語、今昔物語の時代	〃
11. 7	中世の女性	政子から淀君までの時代	〃
11. 21	近世の女性	近松の時代、女大学の時代	〃
11. 28	明治維新	女性にとっての明治維新とは	〃
12. 5	憲法、民法の制定	家族制度の中の女性	〃
12. 12	資本主義の成立	富国強兵と女性	〃
1. 9	大正デモクラシー	大正デモクラシーと青鞥運動	〃
1. 23	新しい女たちの運動	婦人参政権と女性	〃
1. 30	昭和恐慌	昭和恐慌下の女性たち	〃
2. 6	レポート発表	「戦前の農村婦人」 「私の戦争体験」	
2. 13	ファシズムの時代	戦時下の女性たち	折井美耶子氏
2. 20	レポート発表	「五日市憲法」「片倉製糸」	
2. 27	戦後民主主義	戦後民主主義と女性	折井美耶子氏
3. 5	高度経済成長	草の根の婦人運動	〃
3. 19	現代の女性	国際婦人年がもたらしたもの	〃
3. 26	おわりに	これからの女性の生き方	〃
3. 30	消えゆく絹の道を歩く	八王子から町田の絹の道を歩く	新井勝紘氏 (福生市文化財保護審議会委員)

家庭教育学級「子どもの生活と親の役割」 1980（昭和55）年度

期 間 10月9日（木）～11月20日（木） 午前10時～正午 全8回

参加者 23人×8回＝184人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 9	オリエンテーション	自己紹介、プログラム、運営について	担 当 職 員
10. 16	子どもの生活と遊び	子どもの生活の現状、遊びの意味	木全力夫氏
10. 23	子どもを通して	子どもの問題を話し合う	野沢久人氏
10. 29	子どもとテレビ	子ども番組とCM	石 予 順氏
11. 6	〃	テレビの影響力、テレビの活用	〃
11. 13	子どもの学力と日常生活	子どもの能力、学力と日常生活の関係	南里悦史氏
11. 16	子どものからだ	子どものからだはどうなっているか	正木健雄氏
11. 20	親の役割	子どもの問題に対する親の役割とは	木全力夫氏

ヤングミセスの教室 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年11月11日（水）～昭和57年3月24日（水）

午前10時～正午 全18回

会 場 白梅分館

参加者 9人×18回＝162人

月 日	内 容	講 師
11. 11	オリエンテーション	担 当 職 員
11. 18	子どもを育てながら思うこと	
12. 2	〃	
12. 9	〃	
12. 16	保育者、子どもと一緒に	
1. 13	私の子育て	
1. 20	子どもたちの生活	
1. 27	前回テーマについての話しあい	
2. 3	次回講義内容について検討	

月 日	内 容	講 師
2. 7	自主性を伸ばす家庭教育	村 田 和 子 氏 (白梅短大附属幼稚園長)
2. 10	前回講義について話しあい	担 当 職 員
2. 17	映画「わるくなったというけれど」鑑賞	
2. 24	次回講義内容について検討	
3. 3	「子どもからの自立」(伊藤雅子著) レポートより	
3. 7	お母さんの悩みに答えて	村 田 和 子 氏 (白梅短大附属幼稚園長)
3. 10	前回講義について話しあい	担 当 職 員
3. 17	これまでのまとめ	
3. 24	これからの活動について	

家庭教育学級 1982 (昭和57) 年度

期 間 昭和58年1月14日(金)～3月25日(金) 午前10時～正午 全10回

会 場 白梅分館

参加者 延人数 94人

月 日	テ ー マ	講 師
1. 14	はじめに	担 当 職 員
1. 21	私と子育て	〃
1. 28	〃	〃
2. 4	〃	〃
2. 18	〃	〃
2. 25	公民館保育室を考える	〃
3. 4	子どもと絵本	澁谷 清視氏 (児童文学評論家)
3. 11	4月からの活動について	担 当 職 員
3. 18	子育て後の生き方	折井美耶子 氏 (歴史科学協会)
3. 25	子どもの心と身体の発達	大堀 容子 氏 (ひこばえ幼稚園)

家庭教育学級 1984（昭和59）年度

期 間 昭和59年6月7日(木)～11月1日 全15回

会 場 白梅会館

参加者 13人×15回＝195人

回	月 日	内 容	備 考
1	6. 7	幼児室・当学級	職員の説明紹介と話し合い打合
2	14	の紹介と打合せ	
3	21	育児体験から思うこと	参加者全員レポートと話し合い
4	28	幼 児 期 の	幼児教育研究者 大 堀 容 子 氏
5	7. 5	発 達	話し合いと七夕飾りづくり
6	12	子どもの世界の捉え方 動作・行動力からつかむもの	大 堀 容 子 氏
7	19	保護者学習会Ⅰ	報告 公民館保育者 増田公子さん 話 し 合 い
8	9. 6	生 物 と し て	明治大学教授 宮 岡 一 雄 氏
9	13	の 人 間	話 し 合 い
10	20	家庭・地域での子育てとこれから	群馬大学教授 萩 原 元 昭 氏
11	27	保護者学習会Ⅱ	報告 公民館保育者 湯野川雅子さん 話 し 合 い
12	10. 4	基 礎 生 活 習 慣 と	話 し 合 い
13	18	自主化にむけて	話 し 合 い
14	25	保護者学習会Ⅲ	報告 公民館保育者 稲木道子さん 話 し 合 い
15	11. 1	まとめとこれから（自主活動への条件づくり等）	話し合い、打合

お母さんのための教育講座 1984（昭和59）年度

“幼児後期（4～6歳）の子どもの発達”

期 間 昭和59年10月8日（月）～10月29日 全4回

会 場 白梅会館

参加者 12人×4回＝48人

回	月 日	内 容	備 考
1	10. 8	幼児後期の発達の特徴	お茶の水女子大学教授 浅見千鶴子氏
2	10. 15	子どもの発達に係わる親・おとなのあり方	幼児教育研究者 細谷勇太郎氏
3	10. 22	遊びによる社会性と知力の発達	日本総合愛育研究所 野田雅子氏
4	10. 29	地域の子どもの場づくり（現状とこれから）	話題提供 都社教主事 服部照親氏 話し合い

児童文学を考える 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年5月13日（月）～9月9日（月） 全15回

会 場 白梅会館

参加者 17人×15回＝255人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
5. 13	オリエンテーション	自己紹介・内容の説明等	
5. 20	児童文学 -1	児童文学の現在の課題	渋谷 清視氏
5. 27	” -2	物語絵本、民話の絵本の説明	”
6. 3	科学読み物って何だろう	科学読み物の大切さを知る	山辺 昭子氏
6. 10	児童文学 -3	読み聞かせ方法や絵の問題を知る	渋谷 清視氏
6. 17	子どもの生活を語る	日常生活の様子を話し合う	公民館保母
6. 24	子ども文庫から -（1）	全国子ども文庫調査報告から	末廣いくこ氏
7. 1	” -（2）	子どもたちの成長について	”
7. 8	” -（3）	親の読書の大切さ、必要性	川島 恭子氏
7. 15	” （4）	富士町文庫の中で	”

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 22	子どもの育ちあい	子ども同士の成長を考える	公民館保母
8. 26	地域文庫から	「海賊艦」の活動から	赤木 幹子氏
8. 28	"	おしゃべり文庫の活動から	高橋 洋子氏
9. 2	世界の絵本から (1)	おはなしキャラバンの活動から	石竹 光江氏
9. 9	" (2)	世界の絵本の紹介等	"

幼児教育学級 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年5月15日（水）～10月9日（水） 全15回

会 場 白梅会館

参加者 13人×15回＝195人

月 日	内 容		講 師
5. 15	幼児室・学級の	幼児室事業の内容紹介と実施について	
22	紹介と打合せ	学級のすすめ方と保護者会形成・運営会議について	
29	幼児期の発達Ⅰ	幼児前期の子どもの発達と自立的な生活習慣	幼児教育専門家 大堀 容子氏
6. 5	保護者学習会	幼児室、初期段階での子ども達の適応状況	幼児室保育者 萩原千恵子氏
12	幼児期の発達Ⅱ	子どもの世界、動作・行動と子どものこころ	幼児教育専門家 大堀 容子氏
19	"	育児体験の交歓と日常の親子交流について	
26	子ども育成活動交歓「幼児と絵本＝読み聞かせについて」		おしゃべり文庫 高橋洋子さん
7. 3	生物としての	生物である人間と育児（現代社会の中で）	明治大学教授 宮岡一雄氏
10	人 間	私達の子育て観をふりかえり	
17	保護者学習会	幼児室中期段階の子ども達の様子	幼児室保育者 宍戸夏子氏

月 日	内 容	講 師
9. 4	この夏の子どもと私達の生活・行動	
1 1	自 由 交 歓 運営会議話題・生活のリズムづくりほか	
1 8	開かれた日常（家庭・地域）でのおつき合い	
1 0. 2	保護者学習会 後半の子ども達の結びつきの様子	幼児室保育者 会田久美子
9	家庭・地域での子育てとこれから	群馬大学教授 萩原元昭氏

オモチャを考える 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年5月14日（水）～10月8日（水） 全17回

会 場 白梅会館

参加者 16人×17回＝272人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
5. 14	オリエンテーション	自己紹介、教室の説明など	
5. 21	公民館保育の始まった理由	公民館保育の歴史的背景など知る	熊谷 真弓氏
5. 28	福生の公民館保育は？	上記の内容を深める	
6. 4	母親の学習する意味とは？	子どもをあずけて学習する意味など	熊谷 真弓氏
6. 11	幼児の様子から－(1)	子どもたちの様子や問題などを聞く	公民館保育者
6. 18	豊かな遊びを創出するために	オモチャ図書館の歴史や現状を聞く	小林るつ子氏
6. 25	〃	オモチャの遊び方・利用方法など	〃
7. 2	オモチャを考える	前2回の話から私たちの方向を出す	
7. 9	オモチャを作る－(1)	具体的なオモチャ＝人形劇作り開始	原嶋 卓三氏
7. 16	〃－(3)	人形の製作やシナリオについて	〃
7. 23	幼児の様子から－(2)	夏休みの過ごし方や日常の様子など	公民館保育者
7. 30	オモチャを作る－(3)	人形や背景の製作	原嶋 卓三氏
8. 27	〃－(4)	シナリオの完成	〃
9. 3	〃－(5)	配役や動きの練習	〃
9. 10	〃－(6)	小道具などの完成	〃
10. 1	幼児の様子から－(3)	子どもたちの様子を聞く	公民館保育者
10. 8	まとめと反省	人形劇の上演	原嶋 卓三氏

人形劇をつくる 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年5月21日（木）～9月17日（木） 全15回

会 場 公民館白梅分館

参加者 9人×15回＝135人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
5. 21	オリエンテーション	自己紹介・保育室の説明など	職 員
5. 28	人形劇とは何か？	人形劇の持つ多様な意味を話してもらう	原嶋 卓三氏
6. 4	人形の製作	自分の好きな人形の頭部を製作する	〃
6. 11	公民館保育とは何か1	公民館保育の生れてきた状況などの説明	加藤 有孝氏
6. 18	人形の製作	頭部の製作の終了した人は、表情の書込み	原嶋 卓三氏
6. 25	保育の様子1	保育室に参加して1ヶ月の様子を聞く	保 育 者
7. 2	人形の製作	衣服や小道具の製作	原嶋 卓三氏
7. 9	シナリオの完成	シナリオの完成に伴い、背景などの製作	〃
7. 16	公民館保育とは何か2	子どもをあずけてまでして学ぶ意味は何か	職 員
7. 23	背景の製作・他	背景や小道具の製作をつめる	原嶋 卓三氏
7. 30	保育の様子2	保育室に参加して2ヶ月の様子を聞く	保 育 者
8. 27	本読み稽古	シナリオを読みあうなど、稽古に入る	原嶋 卓三氏
9. 3	効果音などの作製	色々な道具や背景など最終確認をする	〃
9. 10	立ち稽古	本番と同じセットでリハーサルを行う	〃
9. 17	保育の様子3・人形劇	保育の様子を聞く。子どもの前で劇を上演	〃

幼児教育学級 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年6月8日（水）～10月5日（水） 午前10時～正午 全14回

会 場 白梅会館

参加者 10人×14回＝140人



	月 日	内 容	備 考
1	6月 8日	オリエンテーション・自己・内容紹介	話し合い紹介
2	15日	私達の育児の実際から、その課題 I	話し合い
3	22日	” II	”
4	29日	保護者学習会 保育室での子どもの様子	保育者報告と話し合い
5	7月 6日	幼児期の発達と原体験	大堀容子氏（幼児教育研究者）
6	13日	動作・行動からの発達の理解と応答	同 上
7	20日	保育室での子どもの変化（親の目から）	話し合い
8	27日	保護者学習会 保育室だよりから	保育者と親の交歓から
9	8月31日	生物としての人間と育児	宮岡一雄氏（明治大学教授）
10	9月 7日	この夏の子ども達と私達（親子）の様子	話し合い
11	14日	保護者学習会 運営会議・たよりから	保育者と親の交歓
12	21日	青少年期の発達 非行と幼児期（親子）	川辺 進氏（保護司）
13	27日	子育てを巡る地域の仲間づくりと公民館	話し合い
14	10月 5日	運営会議、この学級・保育室に参加して	保育者・親・職員の話し合い

幼児教育学級「たのしい子育てひろば」 1989（平成元）年度

期 間 平成元年11月13日（月）～平成2年3月26日（月） 午前10時～正午 全15回

会 場 白梅分館

参加者 20人×15回＝300人

回	月 日	テ ー マ	内 容	備 考
1	11. 13	内容紹介	保育室参加の話し合い	話 し 合 い
2	20	”	自己紹介・幼児教育学級紹介	”
3	27	幼児期の発達 I	幼児期の発達段階と原体験	大堀 容子氏
4	12. 4	保護者学習会 ①	保育室での子どもの様子	保 育 者
5	11	幼児期の発達 II	動作・行動と子どもの発達	大堀 容子氏
6	18	生物である人間	生物としての人間と育児	宮岡 一雄氏
7	1. 22	自由交歓	私達の生活の歩みと育児	話 し 合 い
8	29	保護者学習会 ②	保育室での子どもの様子	保 育 者

回	月 日	テ ー マ	内 容	備 考
9	2. 5	自由交歓	子育てよもやま話し	話 し 合 い
10	19	非行の芽	少年非行と幼児期の発達	川辺 進氏
11	26	保護者学習会③	保育室での子どもの様子	保 育 者
12	3. 5	自由交歓	夫の子育て参加、親の仲間作り	話 し 合 い
13	12	遊び場づくり	思いっきり遊べるプレイパーク	天野 秀昭氏
14	19	保護者学習会④	保育室での子どもの様子	保 育 者
15	26	まとめ	これからの私達の活動について	話 し 合 い

家族新聞をつくる 1989（平成元）年度

期 間 平成元年6月1日（木）～ 10月5日（木） 全15回

会 場 白梅分館

参加者 母親16人 延べ参加者数195人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 1	オリエンテーション	この教室の説明・自己紹介など	担当職員
8	女性のライフサイクル	子育て以降の自分の生活の視点を考える	担当職員
15	子どもの成長と私	子どもの育つ力と育てる側の問題	大堀 容子氏
22	保育室の様子を聞く	子どもの成長の様子を保育者から聞く	中村けい子氏
29	家族新聞を作る	家族新聞とは何か、具体的な作り方	竹縄 良一氏
7. 6	家族新聞を作る	具体的な家族新聞の紹介	竹縄 良一氏
13	〃	割付、文字などのレイアウトなど	〃
20	〃	作品の講評と次号の作り方のアドバイス	〃
27	保育室の様子を聞く	夏の過ごし方や育ちの状況などを聞く	坂本由美子氏
8. 31	家族新聞を作る	カットの描き方などについて学ぶ	榎本 隆氏
9. 7	〃	〃	〃
14	保育室の様子を聞く	夏休み後の子どもの育ちの変化を聞く	高崎 文江氏
21	家族新聞を作る	実際の家族新聞作りを自分たちで行う	担当職員
28	家族新聞を作る	各自で作った新聞をみんなで評価しあう	担当職員
10. 5	保育室の様子を聞く	子どもの育ちを仲間関係の中で確認する	宍戸 夏子氏

自然観察会 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年5月19日（日）～昭和61年3月30日（日） 全8回

会 場 市内河原

参加者 215人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
5. 19	水生昆虫観察会	多摩川の水生昆虫の実態を知る	田中 和明氏
6. 2	植 物 "	初夏の多摩川の植物を観察する	宮岡 一雄氏
9. 22	" "	林の植物を観察する	"
2. 23	野 鳥 "	冬の多摩川で見られる鳥を知る	} 栗原 仁氏 岡田 紀夫氏
3. 2	" "	広い水面にいるカモ類を観察する	
3. 9	" "	丘陵の鳥を観察する	
3. 16	" "	草はらと水面にいる鳥の違い	
3. 30	植 物 "	早春の多摩川の植物を観察する	宮岡 一雄氏

自然観察会 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年6月1日（日）～昭和62年3月22日（日） 全7回

会 場 市内河原

参加者 149人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 1	植物観察会	初夏の多摩川を観察する	宮岡 一雄氏
7. 20	水生昆虫観察会	多摩川と平井川の水生昆虫の実状を観察する	田中 和明氏
10. 5	植物観察会	初秋の多摩川の植物と「河原のうごき」について	宮岡 一雄氏
2. 22	野鳥観察会	広い水面に生活するカモ類を中心に観察する	} 栗原 仁氏 岡田紀夫氏 他
3. 1	"	河原で見られる鳥全般を観察する	
3. 15	"	狭山湖のカンムリカイツブリなどを観察する	
3. 22	"	草花丘陵の「林の鳥」を観察する	

自然観察会 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年5月17日（日）～63年3月13日（日） 全10回

会 場 市内河原・基地周辺の草原・狭山湖

参加者 合計 300人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
5. 17	植物観察会	初夏の多摩川の植物を観察する	宮岡一雄氏
6. 21	水性昆虫観察会	水性昆虫を観察し、水質と生活の関係を知る	田中和明氏
9. 5	鳴く虫の観察会	草原で鳴く虫を観察する	栗原 仁氏
9. 27	植物観察会	秋の多摩川の植物の観察	宮岡一雄氏
11. 29	野鳥観察会	冬鳥の第一陣（カモ類）を多摩川で観察する	岡田紀夫氏 と栗原仁氏
2. 14	〃	冬の多摩川で観察できる野鳥の観察	
2. 21	〃	同 上	
2. 28	植物観察会	植物の冬芽を観察する	植物観察会
3. 6	野鳥観察会	冬の多摩川で観察できる野鳥の観察	は宮岡一雄氏
3. 13	〃	狭山湖で観察できる大型の水鳥を観察する	氏

自然観察会 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年6月5日（日）～平成元年3月19日（日） 全8回

会 場 市内河原・滝山丘陵・高尾山

参加者 延べ人数195人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
6. 5	植物観察会	春の河原の植物観察	宮岡一雄氏
9. 3	鳴く虫の観察会	鳴く虫を通して昆虫の生息条件を知る	栗原 仁氏
12. 4	野鳥観察会	久しぶりの水鳥を中心に観察する	岡田紀夫氏 栗原 仁氏
2. 19	野鳥観察会	冬鳥のカモ類を中心に観察する	
2. 26	野鳥観察会	草原の冬鳥を中心に観察する	
3. 5	植物観察会	植物の冬芽を観察する	宮岡一雄氏
3. 12	野鳥観察会	滝山丘陵に住む冬鳥の観察をする	岡田紀夫氏 栗原 仁氏
3. 19	野鳥観察会	高尾山の冬鳥の観察をする	

自然観察会 1989（平成元）年度

期 間 平成元年6月4日（日）～平成2年3月11日（日） 午前9時～正午 全9回

9月2日は午後6時～8時30分、滝山丘陵観察は午後3時30分まで

会 場 市内多摩川・滝山丘陵・殿ヶ谷緑地

参加者 延べ参加者数 203人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 4	夏の滝山	滝山丘陵の初夏の植物の観察。イネ科を中心に観察	宮岡 一雄氏
9. 2	鳴く虫の観察	殿ヶ谷緑地で鳴いている昆虫の観察	栗原 仁氏
3	秋の滝山	滝山丘陵の秋の植物を観察。下草を中心に観察	宮岡 一雄氏
10. 29	多摩川の野草	多摩川の紅葉している水辺植物の観察	宮岡 一雄氏
12. 3	冬鳥の観察	半年ぶりにやってきた冬鳥の観察	岡田 紀夫氏
2. 18	水辺のカモ類	昭和用水堰で見られるカモ類の観察	岡田 紀夫氏
25	草原の鳥	柳山公園周辺の草原の鳥を中心に観察	栗原 仁氏
3. 4	植物の冬芽	上水緑地で植物の冬越しの様子を観察	宮岡 一雄氏
11	滝山の冬鳥	滝山丘陵の冬の野鳥と植物を観察	

白梅ハイキング 1982（昭和57）年度

日 時	場 所	参 加 者
昭和57年5月30日(日) 午前7時30分～午後5時	高麗丘陵 物見山 日和田山 巾着田	29 人
昭和57年11月14日(日) 午前7時40分～午後4時40分	高水三山 高水山 岩茸石山 惣岳山	11 人

白梅ハイキング 1984（昭和59）年度

実施日時 昭和59年10月28日(日) 午前7時45分～午後4時

ところ 檜原村浅間尾根

参加者 13人

コ ー ス	案 内 者
風張峠——浅間領——時坂峠——北秋川橋	上田千鶴子さん

白梅ファミリーハイキング 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年11月23日（祝日） 全1回

会 場 五日市町「広徳寺」と逆沢・今熊山

参加者 32人

コ ー ス	案 内 者
五日市駅 ＝ 沢渡橋 ＝ 逆沢 ＝ 今熊山 ＝ 広徳寺 ＝ 五日市駅 バス	佐久間直冬氏



市民大学講座「子どもとテレビ」 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年7月4日（土）～7月18日（土）午後2時～4時 全3回

会 場 白梅分館

参加者 15人×3回＝45人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 4	子どもはテレビをどう見ているか	子どものテレビ視聴の現状とテレビが子どもの成長に与える影響を明らかにする。	片 岡 輝 氏 （子どものテレビの会）
7. 11	テレビコマーシャルと子ども	テレビコマーシャルの実態と子どもに与える影響を明らかにする。	小 室 加 代 子 氏 （子どものテレビの会）
7. 18	テレビを子どもの味方に	テレビのことで家庭で困っていること、工夫していることなどを出し合い、子どもにテレビをどう見せたらよいかを考える。	鈴 木 み どり 氏 （子どものテレビの会）

市民大学講座 社会「わたしたちの暮らしと社会保障」1981（昭和56）年度

期 間 昭和57年3月3日（水）～3月31日（水）午後7時～9時 全5回

会 場 白梅分館

参加者 10人×5回＝50人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
3. 3	社会保障と人口問題	社会保障と人口問題のかかわりについて	佐々木交賢氏 （創価大学教授）
3. 10	医療問題	医療改善のためにどうしたらよいか	
3. 17	年金制度	年金制度の現状とその問題点	
3. 24	福祉行政と地方自治	福祉行政をめぐる問題について	児 島 亀 之 助 氏 （福祉事務所長） 佐々木交賢氏
3. 31	福祉政策への提言	福祉政策のあり方	佐々木交賢氏

講座「子どもの生活と文化」 1982（昭和57）年度

期 間 昭和57年10月7日（木）～11月18日（木） 午前10時～正午 全6回

会 場 白梅分館

参加者 27人×6回＝162人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
10. 7	開校にあたり	プログラム紹介、自己紹介 映画「心を育てる子どもの遊び」鑑賞	担 当 職 員
10. 14	子どもとテレビ	テレビ視聴の現状と、テレビが子どもの成長に与える影響を明らかにする。	岩佐 京子 氏 (レナ子ども相談所)
10. 21	子どもとマンガ	最近の少年少女漫画の傾向と問題点を明らかにする。	石子 順 氏 (マンガ評論家)
10. 29	子どもの本と読書	最近の子どもの本の傾向と子どもの読書の実態を明らかにし、子どものためによい本をどのように選び、与えたらよいかを考える。	鳥越 信 氏 (早稲田大学 教授)
11. 11	子どもの生活と文化を育てる大人の役割	子どもの生活や文化を豊かなものにするために、私たちおとなは、いま何ができるのか、読書運動を中心に考えていく。	斉藤 尚吾 氏 (日本親子読書 センター)
10. 18	学んだことをどう家庭で活用するか	学習の成果を家庭や地域で、どのように活用していくか話し合う。	担 当 職 員

市民大学講座 社会「今日の家庭問題」 1982（昭和57）年度

期 間 昭和58年3月2日(木)～3月30日(木) 午後1時30分～3時30分 全5回

会 場 白梅分館

参加者 17人 延人数 54人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
3. 2	社会と家族	社会と家族の関係、家族の特質、 家族構成の変化、家族機能の変化	西村 洋子 氏 (創価大学助教授)
3. 9	夫婦関係	結婚の意義と結婚の動向、離婚と再婚、ライフサイクルの変化と夫婦関係	”

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
3. 16	親子関係	家族と子どもの社会化、親子関係の 病理、少産少死の時代の親子関係 しつけの意味とその変化	〃
3. 24	老親の扶養と家族関係	変るライフサイクルと高齢化社会 同居と別居、老親扶養	〃
3. 30	家族の国際比較と 家族の未来像	日本の家族の特徴と動向 先進諸国の家族の動き 家族はどこへ行くか	〃

教育講座「中学生」 1983（昭和58）年度

期 間 昭和58年6月17日(木)～7月8日(金) 午後7時30分～9時30分

全4回

会 場 白梅分館

参加者 52人 延122人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 17	いま中学生は	今日の中学生の生活や意識を明らかに する。	山 田 暁 生 氏 (中学校教諭)
6. 23	中学生の恋愛と性	今日の中学生の男女交際や性に対する 意識を明らかにし、親として、それに どのように対応していったらよいかを 考える。	山 本 直 英 氏 (吉祥女子高校教頭)
6. 30	荒れる中学生	今日の少年非行の実態を明らかにし、 非行をのりこえる手だてを考える。	浅 川 道 雄 氏 (東京家庭裁判所)
7. 8	親の役割	中学生の親として、いま子どもにどの ように対応していったらよいかを考え る。	関 根 庄 一 氏 (総合教育研究所)

市民大学講座「現代家族の教育的役割」 1984（昭和59）年度

期 間 昭和60年3月20日（水）～3月27日 全2回

会 場 白梅会館

参加者 6人×2回＝12人

回	月 日	内 容	講 師
1	3. 20	家庭と地域社会（葬儀等めぐって）	群馬大学教授 萩原元昭氏
2	27	家庭成員の生活サイクルと生涯の学習	同 上

教育講座「思春期の子育て」 1984（昭和59）年度

期 間 昭和59年6月14日（水）～7月12日（水） 全5回

会 場 白梅会館

参加者 33人×5回＝165人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 14	いま、中学生は	今日の中学生の生活や意識を明らかにする。	長嶋安男氏
6. 21	中学生の男女交際と性	今日の中学生は男女交際や性に対してどのような意識を持っているのか。親としていかに対応するのか。	佐橋憲次氏
6. 28	中学生と進路	中学生にとって進路選択とはどういう意味があるのか。親としていかに対応するのか。	山田暁生氏
7. 5	中学生と非行	今日の中学生非行の現状を明らかにし、子どもたちが非行へ走る原因を探る。	関根庄一氏
7. 12	思春期の家庭教育	受験や非行など中学生を取り巻く環境が悪化していく中で、中学生の親として子どもにどのように対応していったらよいのか。	望月一宏氏

父母のための子育て講座 1984（昭和59）年度

期 間 昭和60年2月4日(月)～3月11日 全5回

会 場 白梅会館

参加者 18人×5回＝90人

回	月 日	テ ー マ	内 容	講 師
1	2. 4	健康・興味関心・意欲	・子どもの成長に思う・日常の体力づくり・夜の運動クラブづくり	都社会教育主事 折 笠 良 文 氏
2	1 8	児童期の発達Ⅰ	児童期全般の発達について	駒沢大学講師 酒 匂 一 雄 氏
3	2 5	Ⅱ	活々した仲間遊び集団活動がもたらすもの	同 上
4	3. 4	子ども集団活動とは	子ども集団活動づくりとその試みについて	都社会教育主事 服 部 照 親 氏
5	1 1	生物としての人間の発達	生きものである人間(子ども)の遊びと生きる力	明治大学教授 宮 岡 一 雄 氏

市民大学講座「グリーンセミナー」 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年10月30日(水)～12月4日(水) 全7回

会 場 白梅会館

参加者 25人×7回＝175人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 30	何故「緑」なのか	生活と緑の関係を多方面から考案	宮岡 一雄氏
11. 4	市内の緑を遠望してみると	草花丘陵から市内の緑を見る	
11. 6	多摩川を歩いてみたら	人間の生活と河川の関係を知る	大和田一紘氏
11. 13	私たちの街の歴史Ⅰ	滝山城跡と福生の関係	中田 正光氏
11. 20	森林の働きと林業	森林の現状と役割について知る	小机 晃氏
11. 27	私たちの街の歴史Ⅱ	熊川の水喰土の歴史を知る	高崎 勇作氏
12. 4	私たちの街の将来は？	どのような街を創出できるのか	

私たちのまちづくり 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年11月6日（木）～12月10日（水）

会 場 白梅会館・草花丘陵

参加者 14人×7回＝98人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
11. 6	オリエンテーション	私たち自らが参加するまちづくりとは？	
11. 12	都市作りの今日的動向	都市作りの中に占める自然環境の果す意味	井原 満明氏
11. 16	市内を眺めてみよう	草花丘陵から市内の緑の様子を眺めてみる	宮岡 一雄氏
11. 19	福生市の都市計画	都市計画担当者から過去と将来の話を聞く	関口 清氏
11. 26	市内の河原の問題	市内の多摩川で今何が問題となっているか	〃
12. 3	草地・農地の利用	オープンスペースの意味を再考する	宮岡 一雄氏
12. 10	ま と め	まちづくりに具体的な参加方法を話合う	〃

私たちのまちを考える 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年10月28日（水）～12月9日（水）

会 場 公民館白梅分館・市内

参加者 15人×8回＝120人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
10. 28	オリエンテーション	自己紹介や福生市の現状などを語り合う	
11. 5	市民参加のまちづくり	市民参加の意味・都内での実践例を聞く	井原満明氏
11. 8	市内ウォッチング	町並みを再発見しようと熊川地区を歩く	
11. 11	福生市の現状と将来1	都市計画の現状と将来を聞く	関口 清氏
11. 18	うるおいのあるまちづくり	美的感覚でまちを見るとどうなる？	
11. 26	福生市の現状と将来2	直面している行政課題とこれからの話題	野沢久人氏
12. 2	住みよい環境って？	生物的な視点からまちづくりを考える	宮岡一雄氏
12. 9	私のアイディア集	参加者各自の「まちづくり」を話し合う	

私たちのまちづくり 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年11月20日（水）～平成元年2月1日（水） 全8回

会 場 白梅分館

参加者 延べ人数96人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
11. 30	まちとは何か？	まちの発生と歴史的な意味を考える	宮岡 一雄氏
12. 7	三多摩の現状と将来1	三多摩の置かれている状況や展望を語る	鳥海 賢三氏
12. 14	三多摩の現状と将来2	豊かな将来像の“影”の部分を知る	大和田一紘氏
12. 21	情報化社会とは？	情報化社会と私たちの生活の変化を知る	佐藤 正幸氏
1. 11	福生市の現状と将来	福生市の将来像と今日の行政課題を聞く	野澤 久人氏
1. 18	市民の語る国際化1	意欲的な取り組みの商店主に聞く	伴内伊三郎氏
1. 25	市民の語る国際化2	外国人から見た国際化とは何か？ (同時通訳)	TED MILLER 本間マリ子氏
2. 1	私たちのまちを語る	参加者同士の構想を語り合う	

私たちのまちを語り合う 1989（平成元）年度

期 間 平成元年11月29日（水）～平成2年2月7日（水） 全8回

会 場 白梅分館

参加者 14人 延べ参加者数75人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
11. 29	オリエンテーション	自己紹介、具体的な展開などの説明他	担 当 職 員
12. 6	福生を考える	三多摩の情勢と福生市の将来	宮岡 一雄氏
13	変貌する西多摩	秋留台開発と西多摩の変貌予定を聞く	大和田一紘氏
20	東京の中の福生	都の長期計画と三多摩周辺の現実的動向	渡邊 孝信氏
1. 10	福生市の将来は？	福生市の基本計画と今後の対応	野澤 久人氏
24	公園の利用について	環境教育の場としての公園のあり方	中島 慶二氏
31	私達のまちの公園は	福生市の自然と公園の今後について	小野 光朗氏
2. 7	私の考える福生	青年会議所の町づくりアイディア	石井 勇氏

ちょっと早いクリスマス 1986（昭和61）年度

月 日 昭和61年12月21日（日）

会 場 白梅会館

参加者 60人

人形劇公演（白梅親子人形劇） 1987（昭和62）年度

日 時 昭和63年3月25日（金） 午後2時から

会 場 公民館白梅分館

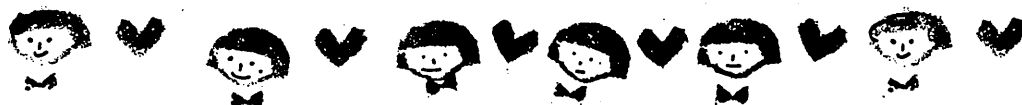
参加者 70人

人形劇公演（白梅親子人形劇） 1989（平成元）年度

日 時 平成2年3月17日（土） 午後2時から

会 場 白梅分館

参加者 50人



うちのおとうさんはすごい 1985（昭和60）年度

期 間 昭和60年6月7日（金）～7月7日（日） 全6回

会 場 白梅会館

参加者 6人×6回＝36人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 7	自転車を直しちゃおう	パンク修理等の力を身につける	伊藤真基雄氏
6. 14	手品であっ!!と言わせる－Ⅰ	かんたんな手品を覚える	高橋 邦彦氏
6. 21	” ”－Ⅱ	”	”
6. 28	刃物を研いでみせる	ほうちょうの研ぎ方を学ぶ	高水 一男氏
7. 5	アウトドアライフに挑戦	登山用具等の使い方の実践	島田 高広氏
7. 7	アウトドアライフ実践	テント設営などの実践	”

サンデーハイキングクラブ 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年5月28日（水）～10月3日（金） 全12回

会 場 白梅会館、滝山丘陵、高尾山、浅間嶺

参加者 27人×12回＝324人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
5. 28	オリエンテーション	自己紹介、教室の内容と説明	佐久間直冬氏
6. 6	用具に強くなろう	ハイキング用具について詳しく学ぶ	
6. 13	地図とコンパス	コンパスの使い方と磁北線の引き方	
6. 22	オリエンテーリング(1)	滝山で地図とコンパスを使う	
7. 11	岩に出会ったら？	具体的な場面での技術を学ぶ	山崎 順一氏
7. 19	夏山の気候を知る	夏山での具体的変化と対応を学ぶ	高橋 忠儀氏
8. 23	登山計画の作り方	登山計画書の意味や作り方を学ぶ	”
9. 5	計画書を作る－(1)	高尾山へ登る計画を作る	佐藤 文子氏
9. 7	オリエンテーリング(2)	滝山丘陵でオリエンテーリング	
9. 15	奥多摩を歩く－(1)	高尾山へハイキングに行ってみる	
9. 19	計画書を作る－(2)	浅間嶺へ登る計画を作る	
9. 28	奥多摩を歩く－(2)	浅間嶺へ登り未開ルートを下る	

サンデーハイキングクラブ 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年6月24日（水）～9月6日（日）

会 場 白梅会館・滝山丘陵

参加者 25人×8回＝120人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 24	オリエンテーション	日帰りハイキングの用具の説明など	佐久間直冬氏
7. 1	事故に対応する力	事故の対応方法を救急隊員に聞く	消防署職員
7. 8	地図とコンパス	磁北線の意味やコンパスの説明	職 員
7. 12	地図とコンパスの実践	滝山で実践練習	職 員
7. 15	日常のトレーニング	日常トレーニングの具体的説明	体育館職員
7. 22	コースの設定や選定	コース選定のノウハウを聞く	山崎順一氏
7. 26	滝山丘陵歩き	滝山の地形を見ながら歩く	雨天中止
7. 29	夏山計画	反省とこれからの計画作り	職 員
9. 6	滝山丘陵歩き	7月に中止になった分の実践	職 員

英会話教室基礎コース 1986（昭和61）年度

期 間 昭和62年1月8日（木）～3月27日（木） 全10回

会 場 白梅会館

参加者 15人×10回＝150人

月 日	内 容	講 師
1. 8	自己紹介の仕方を学ぶ	C・チュン氏
1. 22	あいさつの仕方を学ぶ	〃
1. 29	天気についての表現を知る	〃
2. 5	家族についての表現方法を知り、各自実践する	〃
2. 19	自分の出身地の紹介や特産物の紹介の仕方を知る	〃
2. 26	日常生活上必要な会話について学習する	〃
3. 5	道を聞かれた時の教え方の学習	〃
3. 12	道のたずね方の学習	〃
3. 19	時間の聞き方、伝え方について学習する	〃
3. 26	ていねいな表現や習慣について学習する	〃

PTAって何？ 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年5月26日（木）～7月7日（木） 全7回

会 場 白梅会館

参加者 延べ人数 32人

日 時	テ ー マ	内 容	講 師
5. 26	PTAとは何か	今日の福生市のPTAの問題点を探る	
6. 2	PTAの現状	各地の抱えている問題を話合う	後藤重三郎氏
6. 9	PTAの歴史	戦後の歩んできた歴史をふりかえる	同 上
6. 16	民主的運営とは	運営や組織の形態を考える	同 上
6. 23	PTAと地域関係	地域とのつながり方を考える	同 上
6. 30	今日的な問題とPTA	いじめ・進学問題等とPTAの取り組み	同 上
7. 7	まとめ	今後の活動と公民館の関係	

ワープロ教室 1989（平成元）年度

期 間 平成元年7月5日（水）～8月2日（水） 午前10時～正午 全5回

会 場 白梅分館

参加者 20人 延べ参加者数100人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
7. 5	オリエンテーション	ワープロ各部の名称や機能の紹介	成田 彦六氏
12	ワープロにさわる	書式設定や入力モードの選択のしかた	成田 彦六氏 榎本 隆氏
19	内蔵機能を知る	文字の拡大や移動コピー機能等を知る	〃
26	文書作成にトライ	簡単な文章を作ってみる	〃
8. 2	文書作成実践	均等割付や拡大文字などの機能を使って文章を作ってみる	〃

国際交流事業 1989（平成元）年度

期 間 平成元年11月10日（金）～平成2年3月2日（金） 午前10時～正午
全15回

会 場 白梅分館

参加者 外国人女性12人、ボランティア8人 延べ参加者数 165人

月 日	テ ー マ	内 容
11. 10	オリエンテーション	自己紹介とこの教室の説明
17	日本語と文化の学習	16ミリ映画（英語版）を利用して地震の対策を学ぶ
12. 1	"	日常的に記入する必要のある書類の記入例を学ぶ
8	"	市民課職員から、市役所での対応方法などを学んだ
15	"	前回の書類に、家族の名前などを記入する練習を行った
22	"	主婦としての知恵をボランティアの人達と情報交換
1. 5	"	日本での正月の習慣や具体的な挨拶の方法などの紹介
1. 12	日本語と文化の学習	新聞広告の見方やその利用などを実践的に学ぶ
19	"	自宅近くの医療機関などを自分の地図上に記入した
26	"	電話のかけ方・応対を実際の事例から学ぶ
2. 2	"	"
9	"	"
16	"	身近な公園の利用方法などについて話を進めた
23	"	最終回の「ポットラックパーティー」の話合い
3. 2	"	15回を振り返りながら、反省と展望を出し合った

語らいの広場 白梅コース 1981（昭和56）年度

期 間 昭和56年6月24日（水）～11月19日（木）午前10時～正午 全11回

会 場 白梅分館（全体会・公民館）

参加者 21人×11回＝231人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
6. 24	プログラムづくり	自己紹介、プログラム作成	
7. 8	心と体の健康について	私の健康法 栄養のバランス	影 山 愛 子 氏 (市健康センター)
7. 22	全 体 会	福生のこれまでと今後 (現在私が思うこと)	石 川 常 太 郎 氏 (前福生市長)
8. 12	郷土の文化財	郷土めぐり(熊川)	立 川 愛 雄 氏 (市文化財保護審議会)
8. 26	懇談会	これまでの“語らい”をふり返って	
9. 9	全 体 会	最近の子供の様子 人生で心に残る出来事(聴取)	山 崎 茂 男 氏 (福生珠算学校長)
9. 30	家庭、地域での私たちの位置と役割	家庭、地域で高齢者がどのような状況にあるか	冷 水 豊 氏 (都老人総合問題研究所)
10. 15	若い世代との交流	若い世代に伝えたいこと 若い人の気持、年よりの気持	ひ だ ま り
10. 28	全 体 会	自然と人間について	宮 岡 一 雄 氏 (明治大学教授)
11. 11	これからの近隣地区のよきつながり	映画「豊かな高齢期」をみて、よき つながりについて考える	
11. 19	まとめ	語らいをふりかえって これからの語らいにむけて	

しらうめ「熟年ひろば」 1985(昭和60)年度

期 間 昭和60年11月16日(土)～61年3月1日 全12回

会 場 白梅会館

参 加 20人×12回=240人

月 日	内 容	講 師
11. 16	自己紹介、ひろば、内容・性格紹介、展開打合せ	話 し 合 い
3 0	生物としての人間と高齢期を生きるために	宮岡一雄氏(明治大学教授)

月 日	内 容	講 師
1 2. 7	私達の健康管理について（知恵の交換）	市健康センター、話し合い
1 4	高齢期の社会参加、若い世代とかかわるために	原田正二氏（大正大学教授）
2 1	年 末 懇 親 会	飲食・自由交歓
1. 1 1	私達の人生の歩み I	メンバー個々順に語る。
1 8	禅のはなし、“今を活かし、心を養うために”	服部照親（千手院住職）
2 5	私達の人生の歩み II	メンバー個々、順に語る
2. 1	” III 主に、終戦までの	
1 5	” IV 生活を中心に！	
2 2	身近な生活で（家庭：近隣地域）互いを養うために	萩原元昭氏（群馬大学教授）
3. 1	日本の高齢化社会と、国民的な生活課題	小林文人氏（東京学芸大学教授）

熟年ひろば 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年6月27日（金）～62年3月6日 午前10時～午後1時

原則隔週金曜日 後半毎週金曜日 全23回

会 場 白梅会館及び館外

参加者 60歳以上の高齢者20人+それ以下7人 27人×23回＝621人

内 容 高齢期の生活づくりと仲間づくり

回	月 日	内 容	備 考
1	61. 6. 27	企画案紹介・自己紹介	話し合い
2	7. 11	福生（熊川）の文化財	メンバーから話題
3	7. 25	私達の人生の歩み I	話し合い
4	8. 15	社会参加と世代交流	原田正二氏 （大正大学教授）
5	8. 29	生物としての人間	宮岡一雄氏 （明治大学教授）
6	9. 12	交流の場、語らい茶屋検討	話し合い
7	9. 26	福生防空日誌（戦中福生）	メンバー話題提供
8	10. 10	福祉制度、老人ホーム各種	”

9	10. 24	町 の 話 題 I	話し合い
10	11. 7	私達の人生のあゆみ II	〃
11	11. 21	町 の 話 題 II	〃
12	12. 5	年末懇談、それぞれの1年	〃
13	62. 1. 9	新 年 会	懇 親
14	1. 15	ドンドン焼見学参加	熊川神社
15	1. 23	子どもの生活能力、育成について	萩原元昭氏 (群馬大学教授)
16	1. 25	東京都公民館大会、参加	分科会分散参加
17	1. 30	大会参加感想と今後の活動	話し合い
18	2. 6	地域での子どもの育ち、おとなの姿勢	〃
19	2. 9	日の出ホーム一日体験学習	バス見学、婦人と合同
20	2. 13	体験学習の感想会	話し合い
21	2. 20	民俗文化と民衆の心	メンバー話題提供
22	2. 27	文化財の話、白梅利用者研、感想	話し合い
23	3. 6	都市の公民館について	小林 文人氏 (学芸大教授)

熟年陶芸教室 1986（昭和61）年度

期 間 昭和61年7月4日（金）～10月17日

午前10時～午後1時 全8回

会 場 白梅会館（陶芸作業室）

参加者 “60歳以上 10人+以下13人” 23人×8回＝184人

回	月 日	内 容	講 師
1	7. 4	自己紹介、作品のできるまで紹介、土粘土	柴田 繁 氏 (陶芸家)
2	7. 18	土粘土、茶わん製作	
3	8. 8	茶わん仕上げと自由製作	
4	8. 22	自由製作仕上げ、釉薬の調合	
5	9. 5	素 焼（事前に・の取り扱い、説明紹介）	
6	9. 19	素焼絵付け、釉薬かけ	
7	10. 3	本 焼	
8	10. 17	製作の茶わんでミニ茶席、合評、今後の活動について	

しらうめ「熟年ひろば」 1987（昭和62）年度

期 間 昭和62年7月3日（金）～63年3月11日

午前10時～正午 全25回

会 場 白梅会館 ほか野外・見学

参加者 人生を唄おう会40人×8回＋語らい総合活動30人×12回＋老壮懇話会40人
×5回＝880人

人生を唄おう会

回	月 日	内 容	備 考
1	7月17日（金）	人生をつづるなつかしい唄、今だれも	合唱・ピアノ 清水 文代氏 民謡・三味線 富田 朝子氏 *メドレーも作られる
2	7月31日	が歌う唄、私の思いでの曲、十八番の	
3	8月21日	曲など参加者みんなでうたいあげる。	
4	9月18日	・希望選曲で約10曲を全員のレパー	
5	10月16日	トリー（コーラス・民謡）	
6	10月30日	・参加者一人ずつ、毎回5人位が「思	
7	11月20日	い出の、好きな曲」を語らい、そし	
8	12月16日（水）	て唄う（みんなも声を合わせて）	
*	12月18日（金）	忘年会 「うたうパーティ形式で」	

語らい総合活動

回	月 日	内 容	備 考
1	7月 3日（金）	オリエンテーション・自己紹介	話 し 合 い
2	7月10日	私達の人生のあゆみ そのⅠ	〃
3	8月 7日	〃 そのⅡ	〃
4	8月14日	〃 そのⅢ	〃
5	9月 4日	片倉自転車見学、製糸業の歴史	見 学 会
6	10月 2日	ふっさ我がまちよもやま話しⅠ	話 し 合 い
7	10月 9日	多摩の河原でバーベキュー	野外懇親会

8	11月 6日	“語らい茶屋”育児期の母子との交流	交 流
9	11月13日	ふっさ我がまちよもやま話しⅡ	話 し 合 い
10	12月11日	うたうパーティ忘年会企画 ほか	”
11	12月18日	“うたうパーティ”忘年会	懇 親 会
12	2月19日	市内・基地内バス見学会	市 バ ス

老壮懇話会

回	月 日	内 容	備 考
1	7月24日(金)	福生の歴史・民俗・文化財・まちの話 題について	話題提供 メンバーの中から
2	8月28日	人間のふるさと自然をさぐる・緑ある まちづくりについて	宮岡 一雄氏 (明治大学教授)
3	9月25日	高齢期の生活・生きがいを築くために	原田 正二氏 (前大正大学教授)
4	10月23日	わがまち福生の動向と施策について	話題提供 田村福生市長
5	3月11日	21世紀への大都市像・高齢者の存在 とこれからの役割	松田 雄孝氏 (大東学園専門学校)



しらうめ「熟年ひろば」 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年10月7日（金）～平成元年3月24日

午前10時～正午 全10回

会 場 白梅会館

参加者 25人×10回＝250人

	月 日	内 容	備 考
1	10月 7日	熟年ひろば紹介・自己紹介・活動希望	話 し 合 い
2	10月21日	私達の人生のあゆみ Ⅰ	"
3	11月18日	“秋の味覚を食べる” 紅葉散策	五日市 光明山荘
4	12月 2日	禅 の は な し	服部照親氏（千手院住職）
5	12月 9日	私達の人生のあゆみ Ⅱ	話 し 合 い
6	12月16日	忘 年 会	年末懇親会
7	1月13日	新年の話し合い、天皇陛下崩御、昭和とは	話 し 合 い
8	1月20日	文集作成中の各自原稿紹介と話し合い	"
9	2月 3日	"	"
10	3月24日	今年度のまとめとこれからの活動	"

人生をうたおう会〔熟年ひろば一環〕 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年6月10日（金）～12月16日（金）

午前10時～正午 全10回

会 場 白梅会館

参加者 40人×10回＝400人

	月 日	内 容	備 考
1	6月10日	うたおう会紹介・自己紹介・私の希望曲・うた	指 導 秦 恵子氏 （コーラス指導・ピアノ） 澤田 春駒氏 （民謡指導・三味線）
2	7月15日	一人ひとりの希望曲を全員で歌う	
3	8月12日	↓	
4	9月 9日	↓ 全30曲を歌い上げる	
5	9月30日	文化祭“音楽の広場”参加曲練習	

	月 日	内 容	
6	10月14日	琵琶湖就航の歌 白梅音頭	
7	10月28日	花 花笠音頭	
8	11月11日	夕焼け小焼け 武田 節	
9	〃 13(日)	『市民文化祭“音楽の広場”』	
10	12月16日	おさらい会 練習全曲リクエストアンコールで	

「老壮懇話会」 1988（昭和63）年度

期 間 昭和63年11月25日（金）～平成元年3月17日

午前10時～正午 全5回

会 場 白梅会館

参加者 25人×5回＝125人

	月 日	内 容	備 考
1	11月25日	緑ゆたかな街づくりとは	宮岡一雄氏（明治大学教授）
2	1月27日	21世紀への都市像 PART Ⅱ	松田雄孝氏（大東学園専門学校）
3	2月17日	相続・贈与税、今消費税について	持田 力氏（税理士）
4	3月 3日	ガンを 知る	木下文雄氏（都立福生保健所長）
5	3月17日	私達の社会参加と活動について	原田正二氏（元大正大学教授）

熟年ひろば 1989（平成元）年度

期 間 平成元年11月10日（金）～3月30日 午前10時～正午 全14回

会 場 白梅分館

参加者 35人×14回＝490人

回	月 日	内 容	備 考
1	11. 10	オリエンテーション 今年度の進め方	話 し 合 い
2	17	「私達の人生の歩み」 そのⅠ	〃
3	12. 1	「 〃 」 そのⅡ	〃
4	8	市制20周年『寿市民ひろば』づくり①	企 画 検 討 会

5	15	平成元年 忘 年 会	懇 親 会
6	1. 12	新年の会 今年の各々の抱負と目標	話 し 合 い
7	20	「市の基本構想とまちづくり」について	宮岡一雄氏（明治大学）
8	2. 2	『寿市民ひろば』づくり ②	企 画 検 討 会
9	9	” ③	”
10	16	” ④公民館・福祉部厚生課職員との顔合せ	企 画 交 歓 会
11	3. 2	” ⑤企画作りから準備実践と社会参加	原田正二氏（元大正大）
12	9	『寿市民ひろば』づくり ⑥	企 画 検 討 会
13	16	” ⑦ 社協職員、事業団職員との顔合せ	企 画 交 歓 会
14	30	今年度まとめと花見、今後の活動について	話 し 合 い

人生をうたおう会 1989（平成元）年度

期 間 平成元年7月14日（金）～11月12日 午前10時～正午 全9回

会 場 白梅分館

参加者 35人×9回＝315人

回	月 日	内 容	備 考
1	7. 14	人生を綴る懐かしい唄、今だれもが歌う唄、私の思い出の曲、十八番の曲など参加者みんなでうたいあげる。 今回主に童謡・唱歌 ・希望選曲約10曲を全員のレパートリーに ・参加者一人ずつ、毎回5人位が「思い出、好きな曲」を選び、みんなで唄う。	合唱・ピアノ 山下やよい氏
2	28		
3	8. 25		
4	9. 8		民謡・三味線 富田 朝子氏
5	29		
6	10. 13		
7	27		(コーラスと民謡)
8	11. 9	文化祭出演のリハーサル練習	
9	12	市民文化祭“音楽の広場”に出演	

利用者研修会 1982（昭和57）年度

日 時	内 容	参 加 者	講 師
昭和57年9月22日(木) 午後7時30分～9時	公民館はどういうところなのか 公民館の意義と役割について	14団体 17人	奥田 泰弘 氏 (中央大学助教授)

利用者研修会 1983（昭和58）年度

期 日 昭和59年3月1日(木)

会 場 白梅分館

参加者 31人

月 日	テ ー マ	内 容	講 師
3. 1	公民館とは何か	公民館とは 公民館の役割	小 林 文 人 氏 (東京学芸大学)

利用者研修会 1984（昭和59）年度

実施日時 昭和60年3月3日(日) 午前10時～12時

会 場 白梅会館

参加者 26人

日 時	内 容	講 師
3月3日(日) 10時～正午	・地域のお茶の間としての公民館・活動 交流と表現が生み出すもの	小 林 文 人 氏 (学芸大学教授)

利用者研修会 1985（昭和60）年度

実施日時 昭和61年2月5日(水) 午後7時30分～10時

会 場 白梅会館

参加者 30人

日 時	内 容	備 考
2月5日午後7時30分～10時	現代社会・教育の状況と公民館の役割	小林文人氏(東京学芸大学教授)

利用者研修会 1986（昭和61）年度

実施日 昭和62年2月25日（水） 午後7時30分～10時

会場 白梅会館

参加者 白梅分館利用者 30人

実施日	内 容	講 師
2月25日（水）	公民館の今後の役割 「民衆の生活文化づくりと現生活社会問題の学習」	小林 文人氏 （学芸大学教授）

利用者研修会 1987（昭和62）年度

実施日 昭和63年3月9日（水） 午後7時30分～10時

会場 白梅会館

参加者 白梅会館利用者 30人

実施日	内 容	講 師
3月9日（水） 午後7:30～10時	公民館の役割について 都市における公民館と学習・文化活動の広がり	小林 文人氏 （東京学芸大学教授）

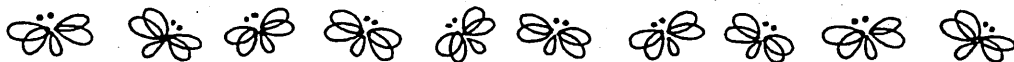
利用者研修会 1988（昭和63）年度

実施日 平成元年2月22日（水） 午後7時30分～10時 1回

会場 白梅会館

参加者 30人

月 日	内 容	備 考
2月22日	生涯学習と公民館	小林文人氏（東京学芸大学教授）



利用者研修会 1989（平成元）年度

実施日 平成2年2月26日（月） 午後7時30分～10時

会 場 白梅分館

参加者 15人×1回＝15人

2・26	「21世紀への都市生活と公民館」	大東学園専門学校 松田雄孝氏
------	------------------	----------------

利用者交流会 1981（昭和56）年度

日 時	内 容	参 加 者
昭和56年10月23日（金） 午後7時30分～9時30分	各グループ活動状況等の情報交換、館に対する 意見・要望について	12団体 27人

利用者交流会 1982（昭和57）年度

日 時	内 容	参 加 者
昭和58年2月6日（日） 午前10時～正午	各グループ活動状況等の情報交換 館に対する意見、要望	16団体 25人



利用者交流会 1984（昭和59）年度

日 時 昭和59年9月14日(金) 午後7時30分～10時

会 場 白梅会館

参加数 15人

日 時	内 容	備 考
昭和59年9月14日(金)	・グループの様子の交換・公運審とは ・館への意見・希望等	利用者間及び館との話し合い

利用者交流会 1988（昭和63）年度

実 施 昭和63年9月7日(水)～平成元年1月28日(土)

午後7時30分～10時 全4回

会 場 白梅会館

参加者 85人

月 日	内 容	備 考
9月 7日	公運審とは 白梅代表委員選出について	前任者任期満了のため 15人
14日	委員選出会議	推薦・互選・決定 30人
10月 8日	委員引き継ぎと交流会継続実施の検討	紹介・話し合い 20人
1月28日	公運審報告とグループ交流	話し合い 20人

利用者交流会 1989（平成元）年度

期 間 平成元年7月15日(土)～平成2年1月14日 全3回

会 場 白梅分館

参加者 15人+50人+1.5人=80人

回	月 日	内 容	世話役グループ
1	7. 15	公運審報告、施設利用について、活動交流	合唱グループ
2	12. 25	利用者の年末会館清掃及び交流会	有志多数グループ
3	1. 14	公運審報告、施設整備、活動交流について	詩吟グループ

第1回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1981（昭和56）年度

準備会日程

日 時	名 称	内 容	参 加 者
昭和56年11月27日(金) 午後7時30分～9時30分	準 備 委 員 会	発表会のイメージの検討	12団体 13人
昭和56年12月17日(木) 午後7時30分～9時	”	”	5団体 6人
昭和57年 2月10日(水) 午後7時30分～9時	”	発表会の趣旨検討	13団体 14人
昭和57年 2月25日(木) 午後7時30分～9時30分	実 行 委 員 会	実行委員会発足 実行委員長選出	17団体 18人
昭和57年 3月10日(水) 午前11時～午後12時30分	”	展示の部プログラムづくり	7団体 7人
昭和57年 3月10日(水) 午後7時30分～9時30分	”	演示の部プログラムづくり	11団体 12人

第1回「白梅会館利用者発表会」 1982（昭和57）年度

実行委員日程

日 時	内 容	参 加 者
昭和57年4月2日(金) 午後7時30分～9時30分	演示の部の役割分担をきめる	10団体 12人
昭和57年4月8日(木) 午後7時30分～9時30分	演示のプログラム最終検討	7団体 9人
昭和57年4月19日(月) 午後7時～9時30分	プログラム検討——決定	19団体 19人
昭和57年5月14日(金) 午後2時～4時	展示の部の部屋割り、役割分担	6団体 9人
昭和57年5月16日(日) 午後1時～4時30分	ポスター、立看板、めくり作成	19団体 20人

日 時	内 容	参 加 者
昭和57年5月21日(金) 午後1時～9時	作品搬入、展示	6団体 28人
昭和57年5月24日(月) 午後7時30分～10時	発表会ビデオ鑑賞、反省会	17団体 25人

発表会プログラム

5月22日(土) 展示 「手芸、籐細工、パッチワーク、木彫、生花、文集の作品展」
午前10時～午後5時

演示 映画 「新、子鹿物語」
午後1時15分～2時30分

5月23日(日) 展示 「手芸、籐細工、パッチワーク、木彫、生花、文集の作品展」
午前10時～午後4時30分

演示 「民謡、民踊、詩吟、囃子、コーラスの公演」
午前9時30分～午後4時30分

参加団体数 19団体 展示 6団体

演示 13団体

参加者数 189人 展示 68人

演示 121人

入場者数 約400人(参加者含む)



第2回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1982（昭和57）年度

実行委員会日程

日 時	内 容	参 加 者
昭和58年2月19日(土) 午後7時30分～9時30分	どんな発表会にしたいか	18団体 26人
昭和58年2月26日(土) 午後7時30分～9時30分	どんな発表会にしたいか 発表会の趣旨検討、実行委員長選出	18団体 20人
昭和58年3月12日(土) 午前10時～11時30分	展示の部、どんな発表をするか	7団体 7人
昭和58年3月12日(土) 午後7時30分～9時30分	演示の部、プログラムづくり	12団体 14人
昭和58年3月20日(日) 午後7時30分～9時30分	演示の部、プログラムづくり 発表会のP、Rの方法	10団体 13人

第2回「白梅会館利用者発表会」 1983（昭和58）年度

実行委員会日程

日 時	内 容	参 加 団 体
4月 6日 (水) 午後7時30分～9時30分	演示、展示からの報告 プログラム検討、これからの日程	15団体
4月16日 (土) 午前10時～正午	展示グループの部屋のかざりつけについて	8団体
5月 8日 (日) 午後1時～4時	プログラムづくり 立看板、めくり作成	22団体
5月27日 (金)	展示グループの作品搬入、展示	8団体
5月28日 (土)	第2回 白梅会館利用者発表会	22団体
5月29日 (日)		
5月30日 (月) 午後7時30分～9時30分	反省会、発表会ビデオ鑑賞 各グループからの意見、アンケート結果	22団体

発表会のプログラム

5月28日(土)

展示 手芸、籐細工、パッチワーク、木彫、生花、ヨガ、文庫

演示 お茶席

うたと映画のひろば

5月29日(日)

展示 手芸、籐細工、パッチワーク、木彫、生花、ヨガ、文庫

演示 民踊、民謡、詩吟、囃子、コーラス

参加団体数 22団体

入場者数 延526人

第3回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1983(昭和58)年度

日	時	内 容	参加団体
昭和59年3月15日(木)	午後7時30分～9時30分	どんな発表会にするか、発表会の日時 どんな参加のしかたをするか	17団体
昭和59年3月22日(木)	午後7時30分～10時	発表会のタイムスケジュールと会場 これからのすすめかた	11団体
昭和59年3月30日(金)	午後7時30分～9時30分	展示グループの部屋わり、当番について 展示に必要な消耗品	6団体

第3回「白梅会館利用者発表会」 1984(昭和59)年度

日	程	内 容	参 加 者
4月6日	午後7時30分 ～9時30分	演示の部役割分担	6団体 9人
4月18日	午後7時30分 ～9時30分	プログラムづくり、広報活動について	15団体 20人
5月16日	午後7時30分 ～9時30分	プログラム製本、最終打合せ	14団体 20人
6月4日	午後7時 ～10時	実行委員会反省会	19団体 23人

発表会プログラム

5月26日(土) 展示 「手芸・籐細工・パッチワーク・生花・七宝焼・ヨガサークル展」

午前10時～午後5時

演示 「お茶席」 午後1時～4時

「こどものひろば」 午後2時～3時

5月27日(日) 展示 「手芸・籐細工・パッチワーク・生花・七宝焼・ヨガ・ボーイス

カウト展」 午前10時～午後4時30分

演示 「籐細工手づくりコーナー」 午後1時～3時

「民謡・民踊・詩吟・囃子・コーラスのつどい」

午後12時30分～3時30分

「8ミリ映画上映会」 午後3時30分～4時

参加団体数 18団体 展示 10団体

演示 8団体

参加者数 170人 展示 75人

演示 95人

入場者数 485人 (参加者含む)

第4回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1984(昭和59)年度

実行委員会日程

日	程	内 容	参 加 者
3月16日	午後7時30分 ～ 10時	参加の広がりと今年の内容について	22団体 24人
3月30日	〃	今後の準備日程及び当日のスケジュール	18団体 20人



第4回「白梅会館利用者発表会」 1985（昭和60）年度

実行委員会日程

日	程	内 容	参 加 者
4月 3日	午後7時30分 ～ 9時30分	展示のひろば、配置・展示方法、役割分担	9団体 10人
4月 5日	同 上	演示のひろば、演示内容、プロ、進行表作成	12団体 12人
4月12日	同 上	“ 役割分担、当日設営方法	15団体 15人
4月15日	同 上	全体実行委、全体企画集約と総体分担	16団体 16人
5月 8日	同 上	全体実行委、全体企画確認・PR・当日準備	23団体 30人

利用者発表会当日

5月25日（土） 展示 「手芸・藤細工・生花・ピンクッション・七宝焼・子ども絵画・浮世絵、
手づくりはやし面、グループ活動展（3団体）」

午前10時～午後5時 （入場 155人）

お茶席 「久田流のお点前でなごやかなひとときを。」 （来 客 60人）

午後1時～4時

親と子のひろば、「映画と人形劇」 （入場者 70人）

午後1時30分～3時30分

〔25日入場者、203人〕

5月26日（日） 展示 「手芸・藤細工・生花・ピンクッション・七宝焼・子ども絵画・浮世絵・
手づくりはやし面・グループ活動展（3団体）」

午前10時～4時30分 （入場者 238人）

演示 「はやし、民謡、詩吟、コーラスのひろば」

正午 ～ 3時30分 （入場者約 300人）

フィナーレのひろば、「その場でたのしめる、ダンス・ゲーム・健康体操・民謡
合唱を一緒に」

午後3時30分～4時30分 （参加者約 120人）

〔26日入場者 312人〕

参加団体 23団体 全入場者数 515人

第5回「白梅利用者発表会」実行委員会 1985（昭和60）年度

実行委員会日程

日 時	内 容	参 加 者
2月23日(日) 午前10時 ～ 正午	昨年をふりかえり、今年第5回の目標と計画	23団体 25人
3月 9日(日) 同 上	参加グループ確認、準備日程、当日タイムスケジュール、分担	22団体 23人
3月27日(木) 午後7時30分 ～ 9時30分	「演示のひろば」プログラム・進行表作成・分担	15団体 20人

第5回「白梅会館利用者発表会」 1986（昭和61）年度

（実施期日、会場、参加者は、以下の表のとおり）

実行委員会実施日程

実 施 日 時	内 容	参 加 者
S 61年 4月6日(日) 午前10時～正午	「フィナーレのひろば」企画・進行・プログラムづくり	6団体 10人
4月16日(水) 午後7時30分～9時30分	「全体実行委員会」全企画の集約と分担	18団体 25人
5月9日(金) 午後7時30分～9時30分	「最終全体実行委員会」全企画確認・PR・当日向準備作業	25団体 30人

「第5回 白梅利用者発表会」

5月24日(土) 1日目

○展示「手芸・籐細工・生花・囃子面と衣装・子ども絵画・七宝焼・紙粘土細工・サークル活動展」 午前10時～午後5時 (入場 約209人)

○茶 席 「久田流お点前」 午後1時～4時 (入場 約70人)

○親と子のひろば 映画上映「ベルとかいじゅう王子」 午後2時～3時30分
「てんぐ祭りとかき大将」 (入場 約50人)

5月25日(日) 2日目

○展示「手芸・籐細工・生花・囃子面と衣装・子ども絵画・七宝焼・紙粘土細工・サークル活動展」 午前10時～午後4時 (入場 345人)

○語らい茶室 「世代を越えた交流の楽しさと高齢化社会への今」を語ろう

午前10時～正午

(入場 約45人)

○演示のひろば 「民謡・詩吟・おはやし・コーラス・踊りのひろば」

正午～午後3時30分

(入場 約330人)

第6回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1986(昭和61)年度

(実施期日、会場、参加者は、以下のとおり)

実行委員会実施日程

実施日時	内 容	参加者
S 62年3月5日(木) 午後7時30分～9時30分	これまでの積み上げ、昨年をふりかえり、今回 第6回の目標・計画	22団体 25人
3月29日(日) 午前10時～正午	参加グループ確認・準備日程・当日タイムスケ ジュール・分担	23団体 27人

第6回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1987(昭和62)年度

(実施期日、会場、参加者は以下の表のとおり)

実施日時	内 容	参加者
昭和62年4月4日(土) 午後7:30～10:00	「フィナーレのひろば」企画・進行・ プログラムづくり	6団体6人
4月13日(月) 午後7:30～10:00	「全体実行委員会」全企画の集約と分 担	20団体20人
4月17日(金) 午後7:30～10:00	「演示のひろば」企画・進行・プログ ラムづくり	14団体14人
5月10日(日) 午後10:00～正午	「最終全体実行委員会」全企画確認・ PR・当日向け準備作業	25団体30人
5月27日(水) 午後7:30～10:00	「反省会及び打ち上げ懇親会」	30団体30人

第6回白梅会館利用者発表会

5月23日(土)1日目

○展示のひろば「手芸・簾細工・新作囃し面と衣装・子ども絵画・生花・陶芸・レザーーク
ラフト・パッチワークの作品展。サークル活動展」 午前10時～午後5時

(入場 約210人)

○茶 席 「久田流お点前」

午後1時～4時

(入場 約70人)

○親と子のひろば 映画上映「さくらんぼ坊や」

午後2時～4時

親子でたのしいゲームと工作

(入場 約50人)

5月24日(日)2日目

○展示のひろば「手芸・簾細工・新作囃し面と衣装・子ども絵画・生花・陶芸・レザーーク
ラフト・パッチワークの作品展。サークル活動展」 午前10時～午後4時

(入場 約320人)

○語らい茶屋 「世代を越えて、地域での子どもの育ちを考える」

午前10時～正午

(入場 約60人)

○演示のひろば 「民謡・詩吟・囃し・コーラス・民謡のひろば」

正午～午後3時30分

(入場 約320人)

○フィナーレのひろば「その場で楽しめるダンス・民謡・エアロビ体操・ゲーム・

合唱を！」

午後3時30分～4時30分

参加団体32団体

全入場者数約530人

(参加者数 約180人)



第7回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1987（昭和62）年度

（実施日時、会場、参加者数は以下の表のとおり）

実施日時	内 容	参 加 者
昭和63年3月17日 午後7:30～10時	これまでの積み上げ、昨年をふりかえり、今回 第7回の目標・計画、白梅音頭づくり打合せ	22団体25人
3月30日（水） 午後7:30～10時	参加グループ確認・準備日程・当日タイムスケ ジュール・各ひろばの概要検討	25団体25人

第7回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1988（昭和63）年度

（実施期日、会場、参加者は以下の表のとおり）

実 施 日 時	内 容	参 加 者
昭和63年4月3日（日） 午前10時～正午	展示のひろば打合せ 出展種目、数量、部屋割、展示レイアウト	10団体12人
4月 3日（日） 午後1時～3時	演示のひろば打合せ 出演団体、演目、時間、プロ、演出等	13団体15人
4月10日（日） 午前10時～正午	フィナーレのひろば打合せ 担当団体、プロ・進行、演出、スタッフ等	5団体 6人
4月15日（金） 午前10時～正午	語らい茶屋打合せ テーマ、内容進行、手づくり飲食物打合せ	3団体15人
4月17日（日） 午前10時～正午	全体実行委員会（白梅音頭歌詞、曲紹介） 各ひろばの企画集約と以後の準備	27団体30人
5月11日（水） 午後7時～10時	最終全体実行委員会（白梅音頭踊り紹介） プロビラ、ポスターPR手分け、当日打合	32団体40人
◎5月23日（月） 午後7時～10時	反省懇談会 各ひろば、総体のまとめ、ビデオ映像から	27団体30人

「第7回白梅会館利用者発表会」

5月21日(土) 1日目

○展示のひろば「手編み物・藤細工・パッチワーク・生花・陶芸・レザークラフト・ちぎり絵・

新作雛子衣装(七福神)・習字展(れんげ作業所)・子ども絵画展」

午前10時～午後5時

○お茶席「久田流のお点前」 午後1時～4時

○親と子のひろば「合唱・みんなで歌おう・影絵と紙芝居・ゲームで楽しく」

午後2時～4時

来場者数195人

5月22日(日) 2日目

○展示のひろば「手編み物・藤細工・パッチワーク・生花・陶芸・レザークラフト・ちぎり絵・

新作雛子衣装(七福神)・習字展(れんげ作業所)・子ども絵画展」

午前10時～午後4時30分

○語らい茶屋「ふっさわがまち、よもやま話し」老いも若きも一つになって、「ふるさとふっさ」

を語りあかそう、 午前10時～正午

○演示のひろば「民謡・民踊・詩吟・おはやし(大人・子供)・三味線・コーラス・社交ダンス

演舞・『白梅音頭』歌唱指導と合唱」 正午～午後3時30分

○フィナーレのひろば「その場(雨天会館内)で楽しめるダンス・ゲーム・リズム軽体操・合唱

(コーラス・民謡)と『白梅音頭』振り指導と踊り」

午後3時30分～4時30分

来場者数291人

※来場者合計486人

第8回「白梅会館利用者発表会」実行委員会 1988(昭和63)年度

実 施 平成元年3月24日(金) 午後7時30分～10時

会 場 白梅会館

参加者 25人

月 日	内 容	備 考
3月24日	実施企画・日程・正副実行委員長決定	企画検討話し合い

第8回「白梅利用者発表会」実行委員会 1989（平成元）年度

（実施日、会場、参加者は以下のとおり）

実 施 日	内 容	参 加 者
4月12日（水）	“展示のひろば”打合せ会	8団体 15人
13日（木）	“演示のひろば”打合せ会	10団体 18人
17日（月）	実行委員会「企画集約、決定ほか」	25団体 25人
5月15日（月）	最終実行委員会「PR・準備作業」	30団体 30人
31日（水）	「反省会及び打ち上げ慰労会」	30団体 30人

第8回 白梅会館利用者発表会

5月27日（土） 1日目 入場者192人

- 展示のひろば 「藤細工・パッチワーク・レザークラフト・生花・陶芸・ちぎり絵・子ども絵画・夢の模型レールファン展・グループ活動展」 午前10時～午後5時
- お茶席 野だて「久田流お点前」 午後1時～4時
- 親と子のひろば 「うたとパネルシアター」 午後2時～4時

5月28日（日） 2日目 入場者489人

- 展示のひろば 「前日同様」、ゴキブリ退治だんご販売 午前10時～午後5時
- 語らい茶屋 「ふるさと福生を語り合おう」 午前10時～正午
- 演示のひろば 「民謡・民踊・詩吟・おはやし・三味線・コーラス・社交ダンス演舞」 正午～午後3時30分
- フィナーレのひろば 「その場で楽しめる、ダンス・ゲーム・軽体操・合唱・音頭を一緒に」 午後3時30分～4時30分
（来館入場者計681人）

第9回「白梅利用者発表会」実行委員会 1989（平成元）年度

実施日 3月14日（水） 午後7時30分～10時

会 場 白梅分館

参加者 30人×1回＝30人

3・14	“第1回実行委員会” 今年の発表会の趣旨・企画・参加団体について
------	----------------------------------



5 開館当時を振り返って



白雲山記

開館当時を振り返って

金子幸夫

開館10周年おめでとうございます。10年前、白梅分館の開館に携われたことは大変光栄だったと思っています。しかし、当時25歳の私にとっては、大変な重責を課せられたといった感がありました。

福生市の中でも古い地域である熊川地区と、それとは反対に新しい地域である南田園地区、この2つの地区を活動エリアとして建てられた白梅分館を、いかに地域に根付いたものにしていくかが課題でした。立派な建物は建ててみたものの、地域の人達に利用され、そして支持されなければ意味はありません。

そこで、私達（私と名取さん）は、白梅分館の情報を地域の人達に直接届けることから始めました。具体的には手作りの白梅分館だよりを発行し、第二小学校の校門のところで下校する子ども達に手渡したり、また、白梅分館の周辺の家々や福生団地や熊川団地へ配付して回りました。

白梅分館の初めての事業は、「白梅親子映画会」でした。白梅分館の門出という意味から「ピッピーの新しい冒険」を選び上映しましたが、当日は250人を越える人が集まり、会場内は熱気で包まれました。

月日が経つにつれ、自主グループも一つ二つと利用するようになりましたが、この地域の特性だったのでしょうか、民謡や詩吟のグループの数が多かったことが印象的でした。

そして、2年後の昭和57年5月には白梅分館を利用している19グループの参加により、「第1回白梅会館利用者発表会」を開くまでになりました。この利用者発表会は、昭和56年10月に開いた利用者交流会の席で、参加者の一人が「白梅分館で活動している人が発表できる場を設けたらどうか」と発言したことから始まったもので、準備会から発表会まで11回もの集まりを持ち、プログラム作成・ポスター書き・舞台作りまで、利用者みんなの力を合わせて作り上げたものでした。

開館当時の2、3年を振り返らせてもらいましたが、私が勤務した5年間は、一本の梅の木が土に中から芽を出してみたものの、それが紅梅なのか白梅なのか分からない状態でした。それから、数人の職員や多くの利用者の手によって大きく育てられてきたことでしょう。花が咲き白梅の匂いが福生中に香る日を待ち望んでいます。



事務所の窓から～開館当時を振り返る～

名取明美

槌音のひびく中で

白梅分館のオープンは工事の最中だった。昭和55年5月8日だったと記憶している。

当時、職員は私と金子さんの二人で、外回り、庭の仕事などは非常勤の斎藤さんが受け持っていた。斎藤さんは職員と同じ午後5時までの勤務で、5時以降10時までは山本さん（故人）が勤務していた。

その年、私は新卒採用で白梅分館勤務となったのだったが、学校で真面目に勉強したわけでもなく、また、公民館での仕事の経験もなかったのも、まるで分からない状態からの出発であった。

4月1日に採用されたものの白梅分館は未完成であったから、公民館本館に仮住まいした。何をしてもよく分からなかったのも、「何をしたらよいか」と野沢館長（当時）に尋ねたところ、「新聞でも読んでいればいいよ」と言われ、大まじめで新聞を読んだことが忘れられない。

やっと白梅分館に移れるという時は、これからだぞ！という気持ちで嬉しかった。白梅分館はまだ工事の車が出入りしていて、その中での事務所開きと重なった。

まずは、3人で建物の仕組みを覚えたり警備用のカードの操作練習などをしたり、何もかも全員が初めてで緊張したが、張り合いもあった。そして3人でこの白梅分館を守るのだ！と勢い込んでいた。

荷物の整理・利用台帳の整理など、やるべき仕事は山ほどあった。

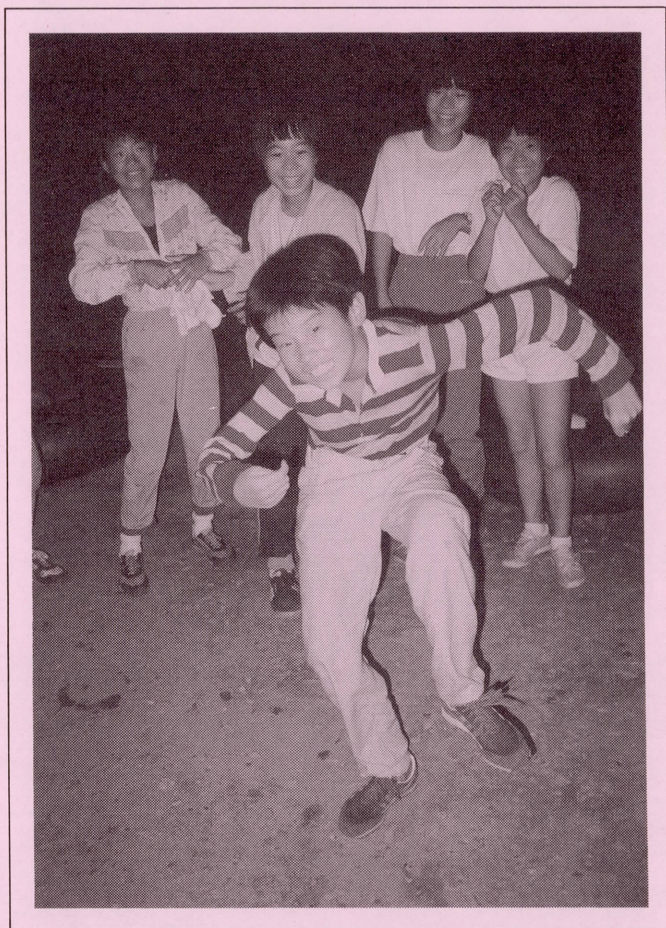
開館の年は梅雨の長雨で来る日も来る日も雨だったが、梅雨明け頃には基本的な仕事も片付き、いざ主催事業だということまでこぎつけていた。

白梅分館の事務所は日当たりがよく、利用者からいただいたハイビスカスが夏でもないのに花開いたこともあった。秋から冬にかけてぽかぽかと暖かい事務所では、会場の利用申請に訪れた近所の方々と話に花が咲くこともあり、個人的にも鉛筆立てやらなにやらいただいた。市民と職員というより、「近所のおじさん、お婆さんと娘」のような雰囲気であったような気がする。

本館に異動になってからも、それらの人達とはどうも娘のような気持ちになってしまい、お互いに懐しがったりする。

天気の良い日や昼休みなどには、斎藤さんとバドミントンをしたりした。そして、たんぼぼクラブ（第二小学校の学童保育）の小林・清水・佐藤先生達と「白梅分館」親睦会等を作って忘年会をしてみたり、たんぼぼクラブからもお茶に呼ばれたりして、実にのどかで楽しい4年間を過ごしました。

6 市民が語る「白梅分館と私」



白雲山記

温 故 知 新

熊川村あれこれ

立川 愛雄

白梅分館の10周年を祝い、輝かしい明日への思いを込めて、改めて「温故知新」白梅の花咲き薫る、ここ「熊川」のあれこれを書きつづることにしました。

熊川とは、誰が名付けたのでしょうか？

地名とは、むかしむかし、私達の祖先がこの地に住居を構えた時に、言い交わしたことからのはずで、柳田国男先生は「二人以上の人の間に、共同に使用せられる符号である」と言われました。まだ、文字もなかった頃から、人々の口から耳へと語り継がれた「くまがわ」ではないでしょうか？ハジメにコトバありきとは、「ヨハネ福音書」の初めにでる有名な言葉です。文字が出来てコトバを漢字に当てたことから、大変混乱してきました。

村に、こんな話が伝えられているそうです。

昔、多摩川に大水が出て、奥多摩の方から一頭の熊が流されて来ました。熊は「このままではオレは死んでしまう」と必死で泳ぎました。右の外れに小さな島がありました。熊は「これは助かった」とはい上がり、「ああよかった、よかった」と、喜びました。その時、熊の頭がこっちを向いていたから”熊川”となって、シッポが向いた方が”尾川一小川（秋川市）”になったんです。（引っ張りっこをしたという話もある）。話者は高水茂一さん（明治42年生）、乙津弥作さん（明治37年生）、増田昭子【多摩の昔話】・【福生市史資料編 民族下】から。

この話は、熊という字から生まれた伝承ですが、クマという字には、隈・曲・阿などがある。これらの意味には、湾曲して入り込んだ所、すみ、奥まって隠れた所、まがる、まげる、かど、などがある。多摩川の本流沿いに大きく弓なりに曲がった場所に出来た集落だから、”隈川”と呼ばれた。後年、強くたくましい”熊”の字に直したのではなかったか。九州、特に福岡県内には、川の曲がり込んだ奥、の意から出た地名として”隈”の字が多く用いられているという。

熊本城は、隈本城と言ったものを、加藤清正が慶長年間に「隈の字は、阜を畏るるは不可なり」として、改称・新築したという故事がある。韓国人の渡来や、韓国文化から生まれたなどと諸説がありますが、定説はないようです。

熊川の歴史

福生院に祀られている”板碑”をご存じですか。釈迦如来の種子（梵字）に、嘉元4年（1306）6月と刻まれています。板碑はこの外、福生市内では60基ほど発見され保存されています。

いずれも鎌倉・室町時代の頃、死者の追善、生前の逆修供養のために建立されたものです。

縄文の遺跡・遺物と共に、村の歴史を語る物言わぬ貴重なものですが、地名はまだ出てきません。

昭和57年5月、『神光仏言夢物語』が野島茂雄家文書の中から発見されました。

安永2年（1773）8月、福生村沢翁なる人の著作の写本ですが、次のことが語られています。

前文略——（現代かなに改めました）

そもそも、当村を開き初めの事。古来より申し伝え候事。昔、清水但嶋（馬）とい

う浪人壹人、野嶋兵五（庫）という浪人壹人、長田庄玄という浪人者三者集まりて相談して、当村（福生村）は、清水但馬開き初め、先ずは村の惣社氏神に「両体権現」御鎮座、本寺堂壹ヶ所、御本尊薬師如来入仏あり、今長沢に立ちたまう——中略——右三人の浪人、清水但馬は福生村を開き、長田庄玄は川崎村を開き、氏神に「神明」を原に祭る。所の惣社なり。然れども、その子孫なし。但し、原に庄げ（玄）という所字ありと言う。また、野嶋兵庫は熊川村を開き、氏神に「礼拝明神」を祭り、所の惣社なり。是も子孫なし。但し、村内に野嶋名字を名のり候人あり。右は諸色くわしく知らず、昔の人の申し伝え置く事を書き置くもの也。——後略——

これは大変興味津々、また、真実性のある内容から各方面からも高く評価されております。

熊川という地名などが見えましたが、他に、次の文献その他からも認められます。

”福生”については、平安時代の末期、寛治元年（1087）で、「日奉姓西党系図」（鹿児島県甑島塩田家旧蔵）に、「宗末 多衛郡福生村 寛治元 八苞」と見え、平山季重「保元3年（1158）福生村 賜御下文」とあり、更に平山俊重「文治3年（1187）9月13日 平山・福生両村を譲り受けた旨」を記されていると、「秋川市史」で発表されました。

五日市町の大悲願寺持ちの「横沢観音堂上葺の棟札」に、永禄11年（1568）3月2日に「寄進者 福生村 三郎左衛門」とあります。また、同寺「過去帳」の、天正19年（1591）8月5日に「道覚禅定門 福生村熊川当時旦那 野嶋兵庫の父」とあります。

天正19年10月17日、兵庫が「父母菩提のため弘法大師木像を、悲願寺に寄進した銘板には、福生村 野島兵庫輔」と墨書きされています。

これについては、熊川村石川元八家文書の、「北条氏照印判状」が解決いたします。

永禄4年（1561）西6月5日、氏照”如意成就”の朱印状には、「右於福生郷、当方軍勢甲乙人等、不可有乱妨狼藉、若違背者可封捨者也、よって如件」とあり、福生郷とは、福生村・熊川村の二村であることが判ります。

寛永21年（1644）の「石川衛門丞印可状」（石川弥八郎家文書）には、「武蔵多東郡福生郷熊川村人也」と、書き入れてありました。

後北条氏の五代67年間にわたる武蔵支配は、天正18年（1590）6月23日、八王子城落城から、小田原城開城、江戸城も豊臣軍に降伏し、家康の関東移封が決定します。

江戸期の熊川

天正18年（1590）8月朔日、徳川家康は江戸城に入り、関東240万石（他に近江に10万石）の領主になります。これを、「江戸御打入り」といい、あるいは、「関東御入国」と称し、八朔は江戸時代を通じて五節句に準ずる祝日になったのでした。

江戸時代になると、福生・熊川両村は、別々に独立した村となります。

寛永10年（1633）2月7日、武田家遺臣の田沢久左衛門正義、同長塩又左衛門正家は徳川家に仕え、旗本として知行をうけ、田沢は、内出246石あまりを、長塩は鍋ヶ谷戸118石の支配者として、家族や従者を連れて村入りをするのであります。このとき、南・牛浜は代官支配地となり、三給入合の村として、慶応3年（1867）大政奉還して、幕府瓦解の日まで、この体制が続くのでした。

慶安2年（1649）頃に出た『武蔵田園簿』によれば、

熊川村村高	4 9 3 石 0 0 1 合	皆畑（水田ナシ）
内	1 2 1 石 6 斗 0 1 合	設楽権兵衛御代官（南・牛浜）
内	2 4 6 石 4 斗 0 0	田沢久左衛門知行（内出）
内	1 2 8 石 0 0 0	長塩又左衛門知行（鍋ヶ谷戸）
	外求 4 5 0 文	野銭 設楽権兵衛御代官

玉川上水のこと (熊川分水)

承応2年(1653)玉川上水の開削工事が始まります。世界にも類のない大工事でした。これが竣工のかけには、労力を提供した農民・村の人達は、農繁期もお構いなしに駆り出されたことでしょう。村内で起こった水喰土事故のときなどのことが想いやられます。開通後も定普請とか草刈り、堀竣い、お伝馬、助郷などと、大変だったことでしょう。

協力した見返りとして、村々には分水を設けて報いたのですが、河畔にありながら高台のため、水利に恵まれない熊川の人々は、寛政3年(1791)に至り、村内三給の連名で、“上水の分水方”を願い出るのですが許されず、これが実現したのは、百年後の明治23年(1890)のことでした。

寛政12年(1800)「熊川村々内様子取調べ帳」からみたあれこれは、次の通り。

御料・私領入会村高	5 1 6 石 4 斗 5 合	(5 6 9 石 1 斗 8 合)
内 当御代官所分	1 5 3 石 7 斗 4 升 7 合	(1 6 9 石 9 斗 1 升 4 合)
田沢久左衛門知行分	2 4 4 石 6 斗 5 升 8 合	(2 8 1 石 1 斗 4 合)
長塩一郎左衛門知行分	1 1 8 石	(1 1 8 石 0 0 0)
御料所上畑田成	比取 6 斗 2 升 6 合	以上は、幕末時の
玉川上水縁萱銭	永 3 5 7 文 8 分	村高です
林銭	永 7 5 文	
鮎 運上	永 4 4 2 文	

- 1 村内、御料・私領 入会に御座候。(江戸へ道法10里)
- 1 村内平地 野方続き、土地悪敷畑の外打開き申候場所御座無く、川向山より出候哉、猪・鹿多く出で、畑作喰荒らし申候、一体村柄困窮の村方に御座候。
- 1 村方玉川付、但し石川にて川幅凡そ30間程福生村境にて山里往来の渡船来り、水深き処は5・6尺余もこれあり、浅き所は1尺位御座候、百姓の内にて農業の間、鮎鯿渡世致し候ものこれあり、水元は、甲州丹波山谷々より出、村下を流れ行き致し、荏原郡羽根田にて海に入り申し候、川丈ヶ凡そ30里余、村下に通船御座無く候。
- 1 農業の間、男は秣・薪を取り、女は養蚕致し、青梅嶋織申し候。
- 1 寺、大慈山千手院(南)。柚井山真福寺(内出)。玉応山福生院(鍋ヶ谷戸)社、礼拝大明神(鍋ヶ谷戸)。小社、熊野大権現。神明宮 稻荷社(南)
- 1 惣家数 1 4 5 軒 内御料所 6 1 軒。 田沢知行地 4 6 軒 長塩知行地 3 8 軒
人、 5 0 0 人 1 3 2 人 2 0 2 人 1 6 6 人
- 1 職、 大工 3 人。 木こり 1 人。 桶屋 1 人。 酒ソバ商 2 人。
穀物等外商 2 人。 塩肴等商 2 人。 市場へ出古着商 2 人。
修験 5 人。 道心 5 人。 市子 4 人。
- 1 長寿のもの 8 5 歳 男 1 人。 8 6 歳 女 1 人。 8 1 歳 男 1 人。

これで、当時の熊川村のあれこれが、想像出来ると思います。

時移り、さまざまな時代を経て、今日に至りました。熊川のあれこれは、“白梅分館だより”に連載してきました(長者堀のこと、牛浜橋のこと、熊川分水のこと、筆子塔のこと、牛浜ものがたり等など)ので、このへんでペンをおくことにいたします。

「ゆうあいふっさと私」

三枝子デューセッチ

私は「ゆうあいふっさ」という、国際交流を手助けする事を目的とするボランティア組織の一員です。「ゆうあいふっさ」では、毎週月曜日の午前中と金曜日の夜間、公民館を借りて外国人の日本語の学習を手助けしています。

私は、新聞の記事を見て福生での活動を知り、一応入会はしたものの一年近く活動に参加せずにいましたが、ちょっとしたきっかけで本格的に参加するようになりました。

ここ2・3年、日増しに外国人の方が勉強や出稼ぎ労働という形で日本に来ています。私は仕事の関係で外国人と接する機会があり、語学の面で困っている人が福生近郊にはたくさんいることを知り、ボランティア活動を始めたわけです。

語学とは言っても、英語をはじめスペイン語・ポルトガル語・中国語・インドネシア語、その他多国籍にわたって来日している外国人が多いため、私たちも手探り状態に必死でいろいろな本を探し集めたりしました。

初めの頃は、5・6名でスタートしましたが、月曜・金曜日とも現在では多い時には25名前後の外国人が参加し、公民館の一部屋では足りなくなって現在は二部屋を使わせてもらっています。

これ程までに外国人が増えて来ますと、今後私達だけではとても手助けできない悩みや相談も増えています。具体的には、家族で日本にやってきた人達にとっては、語学だけではなく子どもの学校教育の問題、日本の文化・生活習慣の事などです。特に彼らが抱えている一番の問題は、子どもの教育に関することです。

夜のクラスでは、ご夫婦ともに同じ国の出身者がほとんどですので、彼らだけでは学校の行事や子どものクラスの個人面談とかに対応できないことが多すぎます。

今日の学校教育の現場では、各クラス・学年・各小中学校に外国人が増えてきています。そして、その数は福生だけではなく西多摩圏内で猛烈に増加していますので、今後は一人二人の通訳を配置するような対処方法ではなく、外国人と日本人と一緒に学ぶことができるようなクラスというか、学校の様なものを作るという抜本的な対応が求められて来るでしょう。

今後の日本は、外国人抜き（特に自動車工場・電気関係・建築関係等）では、企業の活動にも支障が出る様な状態ですので、雇用する会社も採用している国の人達をもっと理解と配慮すべきだと思います。それは、勉強したくても公民館に来れない人は一杯いるわけで、会社側も企業責任として語学の面にもっとバックアップして欲しいと思います。

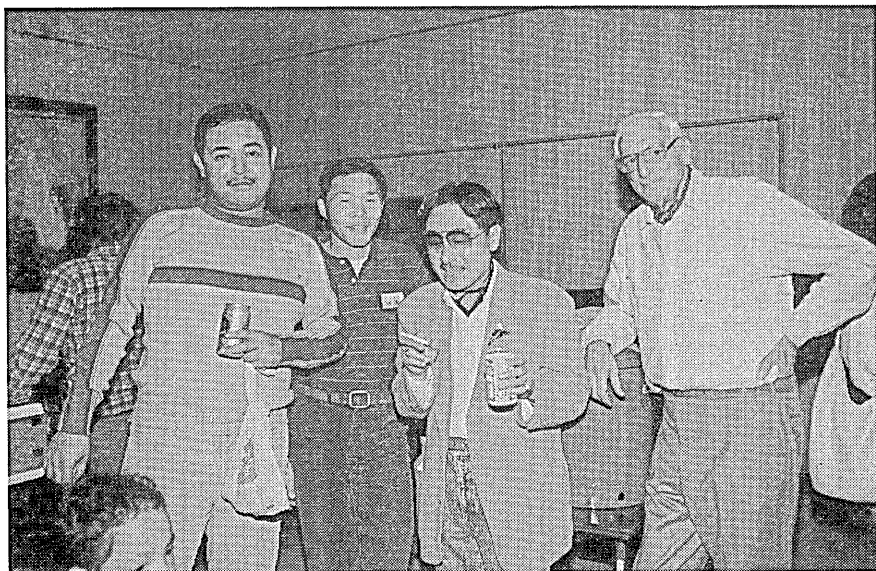
私が外国に初めて行ったカリフォルニア州では、州が外国人を対象として作った学校がありました。その学校ではクラスは4つに分けられ、それなりの勉強を教えますが、全部終了すると高校くらいのレベルに達することになり、その先、クラスごとの

単位を取得すれば、アメリカの高卒資格（証書）も与えられる素晴らしいシステムもあります。

日本（日本人）としては、もっと広い視野で外国人のために自分は何をしてあげられるかを考え、電車なりバスの中とか近くに住んでいるどこの国の方とでも気軽な気持ちで友達になって欲しいと思います。そうすれば、彼らももっと日本を理解することが出来ると思います。

福生市もこれから21世紀に向けて国際化に対応出来る素晴らしい市に成長して欲しいと思います。アメリカ人がいる横田基地というイメージだけではなく、いろいろな国のことをもっと理解し、お互いに勉強して日本の生活にとけ込もうとしている素晴らしい外国人のことを、もっともっと周囲の人達で助けてあげることが、これからの福生市の発展にもつながることだと思います。

白梅分館がこれからも市民のサークル活動において、素晴らしい憩いの場になるよう望みます。



詩吟を通して

田辺 千鶴子

サークルの歴史

昭和42年、青梅市の知人宅で詩吟同好者が集い、吼山流詩吟道青梅支部を結成。その後、代表者の亡きあと私が後任となり、青梅市内にて吼山流詩吟の普及に努めました。

昭和46年に福生市熊川の代表者宅に稽古場を移し、地元の方たちが詩吟仲間作りに協力してくださり、会員数も50余名となり、吼山流宗家の支部から吟詠会を認許され、碧州吟詠会と改称し、昭和57年に福生市民会館にて多数の来賓を招き、盛大に創立15周年記念大会を催しました。会員の方達と吟詠の修養に励み、今年で25年目を迎えた詩吟サークルです。

白梅分館との出会い

毎回の吟詠の練習は、狭い稽古場でした。肩を寄せあいながら、また、周囲の状況から思いきり大声での発生もままならずの稽古状態でした。

詩吟の稽古ばかりでなく日常の話題も豊富な人達の集まり、ゆったりとくつろげる場が欲しかったのです。

そのような時、思えば10年以上も前ですが、地元で公民館の分館が建設されたとの朗報に、早速高橋素子さんと新井たいさんが「詩吟同好会」という分かりやすく呼びやすい名称で、利用申し込みしてくださいました。

泰然としたたたずまいをみせて、その名もゆかしい白梅分館（白梅会館）の建設は、私達にとって大きな喜びでした。以来、毎週土曜日の午後のひととき、二階の和室を利用させていただき、家庭のお茶の間の雰囲気楽しく稽古したり、話に花を咲かせています。

活動内容

第1回目の「白梅分館利用者発表会」より参加し、以後、毎回出し物をみんなで考え参加しています。また、市民文化祭には福生市吟剣詩舞道連盟会員としてこぞって参加し、他流の方達との親睦交流の輪を広げています。また、吼山流詩吟道の種々の行事にも参加し、良い成果を取めて居ります。

人生を楽しく潤いのある生活をと、日本伝統芸道の詩吟道を趣味とし、先人の残された素晴らしい詩文を、健康によい腹式呼吸で思いきり吟じ上げられる場、また、人の和を作る憩いの場としての白梅分館に、私達のサークルの思い出を一杯残すことが出来ました。

私と白梅分館

綿貫 石三

吟詠サークル「鍋一詩吟愛好会」が誕生したのが今から15年前のこと、「歲月人を待たず」こんな言葉をサークル活動の反省材料としながら、取り組んでおります。

地域のグループとの出会いを振り返って見ると、たまたま自宅を選挙事務所に使用した折、部屋の中にあった吟詠の許状が地域の方の目に止まり、「ぜひこの地域で教場を始めてみてもらえないか」という要望をいただき、私も地域住民の一人として少しでもお役に立てるならばとお受けし、「選挙が取り持つ縁」とでも言いますか、今でも貴重な思い出として残って居ります。

もってこのような経験は初めてのことであり、対応に戸惑いしましたが、とりあえず会員さんのお宅を教場として、まず週2回の稽古がスタートしました。

初歩的な内容から始まり、時間の経過と共に段々と中身の濃いものに入っていく、対外的な接触活動も次第に加味され、吟界の動きを体験吸収する中で、今後この地域で根を下ろした活動を展開していくためには、地域の方が気楽に一人でも多く参加していただける教場をと探していたところ、白梅分館が開館というビッグニュースが飛び込み、早速利用させていただき、町内でしかもごく身近な場所に建設されたことを大変感謝して居ります。

近代的な諸設備で整備された公民館の利用者の一人として、創立10周年という一つの節目を振り返って見るとき、まずは対外的にも胸を張ってPR出来るのは、白梅分館利用者の手作りによる発表会ではなかったかと思います。

確か白梅分館が昭和55年に開館し、昭和57年に第1回の利用者発表会がスタートという、もちろん白梅分館職員の方々による熱心な実務的なサポートを受けながらの連携プレーは、白梅分館の運営を推進していく上で明るい材料になったのではないかと考えて居ります。

活動内容をそれぞれ異にするグループが目標を一つにしぼって活動することで、ふれ合いを深め交流を広げていくベースになったと考えて居ります。

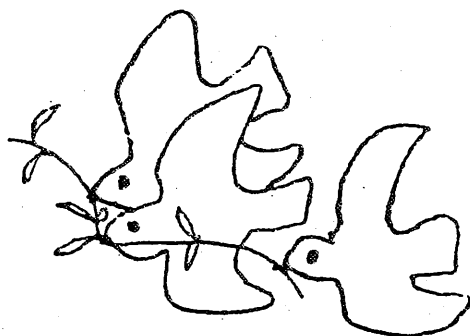
このような公民館活動を進める中で、特に強く印象に残ったのは、他の公民館ではおそらく例が無いと思われる「白梅音頭」の発表でした。

この音頭の歌詞をまず利用者から公募（一部修正されたが）に始まり、作曲は市内の文化連盟の民謡家に、そして振付けを白梅分館利用サークルの指導者に依頼するという形で実現しました。実行委員が生み出した結果であり、今後地域の方が来館され利用するきっかけとなることを、ぜひ期待したいものです。

以上のような活動経過の中で振り返ってみるとき、反省材料が全然無かったわけでもなく利用者の最も身近な代表者である公民館運営審議会委員の選出のための会合での対応と、選出後のフォロー、あるいは専門講師を招いての研修会が企画されても、なかなか出席者が集まらず、中身の薄い研修になってしまうなど、ややもするとサー

クル中心的な活動になりかねない面も感じられます。

しかし、現実には公民館活動の支える母体であることも否定できない。そこで、10年という節目を迎え、経過を振り返り、今後の活動の方向付けとして、やはりさきに触れた公民館運営審議会委員を中心とした活動について、見直しの時期に来ているのではないだろうか？そんな気がします。



白梅分館10年の利用に寄せて

佐久間 直冬

白梅分館10周年おめでとうございます。白梅分館には、福生自然観察グループの会合やいくつかのサークル活動、会議などで何十回と利用させていただいています。その中で、今回は私を含めた友人達と、職員の伊東静一氏についての話をさせていただこうかと思っています。

伊東氏——平素は伊東さんと呼んでいるのですが、今回ぐらいはこう呼ばさせていただきます——と私の交際は、今年で約20年の長きに及び、中でも白梅分館の職員として異動してきてから7年間は私の家から至近なことも手伝い、我々仲間のネットワークの中心地としての役割を担っていただいています。

デスクトップパソコンの前で、福生市の公共的業務の英訳パンフレットの作成や、野鳥観察会の資料をインプットしつつ、私達が何うときさくにお茶を出してくださいます。

会話も福生弁(?)を多用した環境論から、キングスイングリッシュ(?)をちりばめたスキー話まで、バラエティーさには事欠きません。

このようなアンバランスな感じが伊東氏の回りに若い市民をひきつけるのではないかと、勝手に私は推量を楽しんでいるのです。

さて、他の地域で社会教育に携わっている職員の方々からの質問や意見で、若い年齢層の市民活動の低下が叫ばれて久しいですが、現代の若者は一様に受動的で、能動的だった世代は地域、おもに会館(建物)に付きましたが、昨今の若者は、人・職員に付きます。これを市民活動の犬猫の推移と言います(嘘です)。しかし、同世代及び二十歳前後の人々を観るに、そう見当違いの話でもないのではないのでしょうか。

白梅分館で開いている伊東氏の講座で、彼が力を入れているのが子どもと環境(自然)です。たんけん教室は、以前の担当職員の加藤有孝氏——現在は松林分館職員で子どもや女性問題などの講座で大活躍されています——から含め、15年以上になります。なんと、私は一期生なのですが、他にも多数の若い世代の人間が活動を継続しています。

この教室では、1年を1クールとしておこなっているため、子ども同士の交わりやスタッフとの交流が非常にスムーズに行えます。2年3年と続けて参加していた子どもが、何年か過ぎてふらりと白梅分館に現れ、その後スタッフの仲間として地域の人間として活躍する。何人かは松林分館の子ども教室のスタッフとして、また、本館でのサークル活動を新規に始める者もいて、なかなか活気に富んでいます。

福生自然観察グループという市内の自然を観察したり調査しているグループがあります。私も参加していますが、東京都の緑の推進委員にこのグループから何人かです。この緑の推進委員に20代の若者が一番多いのは、この福生市ですし、冬の

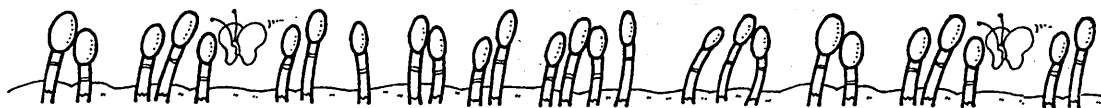
自然観察会のスタッフも多くの若者が集まってくれます。

また、「私達のまちを考えよう」といった講座にも人数こそ少ないけれど若者が参加しています。毎年素晴らしい講師の先生方のお話を伺うことが出来、楽しみにしている次第です。

社会教育は学校教育とは異なり、何回でも参加できます。何年でも、何人でも、誰でも。

ハードとしての建物や機会がどんなにたくさんあっても、それを使って作り上げていくソフト——人間は無くては何もなりません。

社会教育施設こそが今後の人々にとって、何物にも代え難い地域システムとなる、そんな予感がしているのです。入れ物だけで中身がないものは、「まっと、もこうだ」(もっと向こうの意味の福生弁)。そんな声で今日も伊東氏は、我々と遊んでくれるのです。そんな白梅分館へみなさんもぜひ一度……………。



高齢者の学習と公民館

川辺 進

日本社会の高齢化が他の諸外国に比して比較にならない速度で進み、ほどなく高齢化社会に到達すると言われ、各々の分野で対策が叫ばれて久しい。

そうした中で、高齢者の学習についても重視されてきているが、その拠点としての公民館の役割は大きなものがあると思います。

幼年期・青年期、そして壮年期まで、学校や会社等の集団で、組織人間化された人達が高齢期を迎えて、定年退職等の理由でその組織を離れると、家庭や地域組織に馴染めずに孤立してしまい、新しい生き方を見失ったり戸惑いを覚えるあまり、毎日を無為に過ごすことが少なくありません。

このような時期に、公民館による高齢者向けの学習機会の提供は意義あるものと思います。このことは、平成3年度寿市民ひろばの催しで「自分史を書く」「60歳からの生き方」等に参加して、高齢者が一様に「この講座の呼びかけを知って参加して良かった」「今までは自分一人で考えて悩んでいたが、これからは公民館に来て講師のお話を聞き、みんなでこれからの生き方を考える機会が出来た」と言っていることでも、うなずけます。

白梅分館の熟年ひろばも、高齢者の学習の場として重要な存在になって居ります。それは、毎年実施される「寿市民ひろば」の推進力の一つとなり、本館の「寿ひろば」松林分館の「さつきひろば」へと、その輪が広がっています。

これなどを館の「ひろば」を中心とした高齢者学習と考える時、やや受動的集まりを少しずつ改めていき、高齢者自身の学習ニーズを適切に取り上げ、自分達自身で人生を豊かに生きるための努力も必要と思います。

立川市の「中央寿大学」は、参加を班組織に編成して、班長・副班長を置き、役員研修や班長会議等で自らを高め、会員の学習ニーズを汲み上げ、講座に反映させている由である。

秋川市公民館の場合も高齢者の学習意欲は旺盛で、受講者増に苦勞しているということである。

ここで、高齢者の学習について少し考えてみます。

高齢者が学ぶということの意義は何なのだろうか。高齢者はどのようなことを、どのようにして学んでいったらよいのだろうか。

一説によると、脳生理学者の中には、人間は60歳になったときでも、自分の脳の1/4か1/2しか使っていないという。つまり、60歳になっても人々の脳はまだ半分も未使用部分が残っているということになり、高齢者はこの未使用の脳を大いに使用して学習しないと、はなはだもったいない、ということになります。

現代は、私達が過してきた時代に比べ、大きな進歩・変化をとげております。しかもその度合は急速であり、まさに日進月歩の感があります。

このことを考えると、高齢者は自らの人生体験を後世に伝えるという役割の中身が、大いに異なっていることに気付きます。

例えば、電子工業のめざましい発展により出現したコンピュータ機器を始めとする電子機器は、私達の想像も及ばない世界を出現させることができます。

高齢者は教える立場の一部を、習うこと、学習するということに置き換える必要があるでしょう。ここに高齢者学習の意義の一端があると思います。

もとより学習の中心は、人間性を豊かに高めて甲斐のある人生（生き甲斐）を見いだすことであることは、言うまでもありません。

従って、高齢者の学習ニーズが多種多様であります。公民館における高齢者活動は、これらのニーズをとらえて、多様な講座を組む必要があります。

公民館の事業計画を見ると、高齢者向けの事業があまりにも少ないようです。このことは高齢者の学習意欲が公民館に伝わっていないということが言えると思います。

やはり高齢者自身が受け身になっていて、館側の動機付けのみを待つのではなく、積極的自己表現の場を公民館に求めることが大切なことである、と思います。

また、公民館活動の中で、高齢者は進んで異世代との交流が必要と思います。



白梅分館と私

新井 恵子

私は20年程前に、白梅分館の横にある福生市立福生第二小学校を卒業しました。私達が在学中、現在白梅分館がある位置には第二小学校のプールがあり、夏の体育の授業時には水着を着たままキャーキャー言いながら、プールまで走って行ったことを思い出します。

プールまでの距離は、現在の白梅分館の門から玄関位の距離で空き地の様になっていたのですが、私達が5・6年生の時、「ここに畑を作ってみよう」と担任の先生が提案しました。

草ボウボウで固い土、おまけに石ころだらけ。ここに畑が出来るなんて想像もできない感じでしたが、盛り上がったクラスの子どもの気持ちは、休み時間や放課後を使って一生懸命草むしりや石拾い、石掘りをしました。先生はリヤカーに農機具や肥料を乗せて行ったり来たりしていました。

日曜日にも、先生の姿を見つけては作業を続けました。その甲斐あって、門を入ってすぐ左側に柔らかい土のなが細い畑が出来、みんな大喜びでした。その場所にかぼちゃとヘチマを植えて、大事に育てました。

今思えば子どもだった私達の力がどのくらい役に立ったのかと考えてしまいますが、とても充実し満足した気持ちを持った事を覚えています。私達により経験をさせてくださるように自分の労をいとわなかった先生にとっても感謝しています。白梅分館の前を通る時、そして小学校を思い出すとき、このことが必ず頭に浮かびます。

そんな思い出深い場所（白梅分館）を、息子が彼の友達に会うために走って入って行く様子を見るたび、なんだか不思議な気がします。

数年前、私は公民館保育室のお手伝いをさせていただいたことがあり、その時、初めて白梅分館に足を運びました。それまでは、公民館には無関心で若い人の行くところではないようなイメージを持っていたのです。

保育室の手伝いをするようになって戸惑ったのは、「何を決めるにも話合う」ということです。何でもない事なのですが、会社などで与えられた仕事をそのまますることに慣れてしまっていた私には、なかなか苦しいことでした。

考えてみれば、ずっと無気力無関心世代などと呼ばれてきた私達には、人とまじめにきちんと話しをする機会というもの余りなかったような気がします。

でも、苦しみながらも意見を言ったりしているうちに、徐々に相手の事を理解出来るようになり、みんなで話し合うことも徐々に楽しくなってきました。また、保育室に参加するお母さん方とも話す機会が増え、いろいろ勉強になりました。それは、当時独身だった私が自分の理想を押し付けていたような気もして、恥ずかしく思うこともありました。

あれほど子育てを勉強した私なのに、しばらく保育室の仕事から離れた今では頼りない母親になってしまいました。自分の子どもが自分の思うようにならないとすぐに落ち込んだり悩んだり。子どもや自分のためにも友達を作ろうと積極的に公園にも出かけましたが、意外にも公園で知り合う人は「その場だけ」という感じの人が多いようです。

そんな時、近所の友達に幼児を抱えるお母さんのサークルに誘われたので、すぐに仲間に入りました。

参加した当時は、町会の会館を有料で利用していたのですが、私の「公民館はタダよ」の声に、現在は白梅分館を中心に活動させていただくようになりました。

初めの頃は泣いていやがっていた息子ですが、今では「〇〇ちゃんが待っているよ」の声掛けに、「白梅に行く」と言って自宅の玄関を飛び出てきます。今まで誰も寄せ付けなかった子なのに、友達とキャーキャーじゃれあっている姿を見ると、本当によかったと思います。私自身もみんなに会えるかなと思うと、その日が待ち遠しく楽しみになっています。

子どもの事や自分のことを人に聞いてもらったり人の話を聞いたりすることで、子育ての些細なことを以前のように気にすることもなくなりました。

私達が子どもの頃は、年齢の大きい子・小さい子がいつも数人で外で遊んでいて、親が子どもの仲間作りをするなどということにはなかったと思います。私も自分に子どもが生まれるまで、「公民館に行かなくても友達なんか自然にできるわ……」と思っていましたが、最近では自分から進んで出かけて行かないと仲間や友達はなかなか出来ない時代かなあと、地元出身の私でさえも感じてしまいました。

そのような意味で、公民館の役割も年々増加していくと思います。明るい公民館のイメージをどんどんPRして、家に閉じ込もっているさみしいお母さんや子どもを誘いだしてあげてほしいと思います。

私も自分のため、そして子どものためにより時間が持てるように、これからも白梅分館を手に使わせていただこうと思っています。

自分が白梅分館の前を通る時小学生時代の充実した時間を思い出すように、子どもにもこ白梅分館で何か大事なものを得てくれれば……と思っています。



Community Centers-Great places to make friend

When I first came to Japan some 14 years ago, it was difficult to meet and make friends with Japanese women. Having a children helped, but participation in Civic Center and Community Center groups proved to be the key.

There is wealth of information and friendship exchange available at these Centers but you have to participate to reap the benefits. For example, there is the Sanpaguita group at the Civic Center on Monday morning from 10:00 to 11:30. This is a Japanese language class taught by volunteers of the Yu-ai Fussa group.

Currently we are divided into about 6 levels according to our Japanese language abilities and goals. The volunteers are very kind and eager to help us foreigners who are struggling with the language and adjusting to life in Japanese communities. They are providing not only language instruction, but also cooking lessons, friendly advice and pointers on how to understand the way of thinking and behaving in this country. A similar class is also offered on Friday nights from 7:00 to 9:00. Getting together with other people who are experiencing similar situations away from their own countries, families and friends affords an opportunity for the exchange of opinions and problem-solving discussions.

Another example, a Yoga class at Den-en Community Center, meets every Thursday morning from 10:00 to 12:00. I truly enjoy and value this time to be with our wise and talented instructor who guides us very gently in the stretches and poses and encourages us to become aware of every aspect of ourselves. She leads each of us to our own limits(and beyond) if we are willing and she always has a kind word for each of us. The other members are very supportive toward our mutual goals of centering ourselves and maintaining health through Yoga.

At Shiraume Community Center I was a member of the Puppetry group which met regularly from May, 1991 to October, 1991. It was a great experience learning to make the puppets through cooperation with other women, both foreigners and Japanese.

Nursery care was provided for small children, allowing us mothers to apply ourselves wholeheartedly to the puppet theater. Our Japanese male instructors were truly professionals who guided and encouraged us with patience from the

creation of the puppets to the final performance. Of course, the opportunity provided Japanese language practice but also shed light onto the dynamics of group behavior and decision-making *ala* Japan

A continuation, of sorts, of the Puppetry group was made possible through the forming of an English conversation class, also held at Shiraume Community Center. A few of the women, who wanted to study English but could not join existing classes with their small children, asked me to lead their group. So we formed a study group and now practice English amid the shouts, laughter and tears of our young children.

The Civic and Community Centers are truly the best places to go to find friends who have similar interests or concerns and to get involved in activities of interest to you. Toward this end, it would be very helpful for the Center to publish guidebooks with descriptions of all groups and their activities in English (and Spanish?) and to distribute them to all foreigners living here.

I hope that the variety of groups meeting will continue long into the future and that foreigners will always be welcomed as participants. Mr. Ito of Shiraume Community Center speaks English and is the person to contact for information about joining existing groups or starting one of your own liking.

Getting involved will bring you much enjoyment, satisfaction and some good friends -----things that will make your stay in Japan more fulfilling.

Evelyn Sasamoto

My experience with Yu-ai Fussa

The first(1st.) program sponsored by Shiraume Community Center I attended was the everyday conversation/writing in Japanese. And it helps me a lot.

The second(2nd.) one, and I hope not the last, was the "puppet making". It was fun, educational, and a success.

Our group performed the play "Saru-kani" three times now at different places.

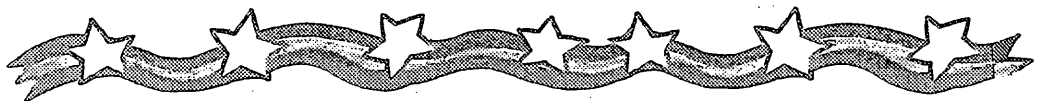
I remember I almost quit in the middle of making my puppet, which is the "otokonoko no kani". It is taking most of my time, and with 3 children and other things to attend to, I feel I am being pressured to finish on schedule. Thanks to my husband's encouragement and help.

Now, I never regret going through with it till the end. I enjoyed rehearsing the play's script with the group. Our two teachers(Mr. Harashima and Mr. Enomoto) and Mr. Ito were very supportive and a great help to us.

I hope Shiraume Community Center through the effort of Mr. Ito will continue sponsoring program like this open to everybody!!!

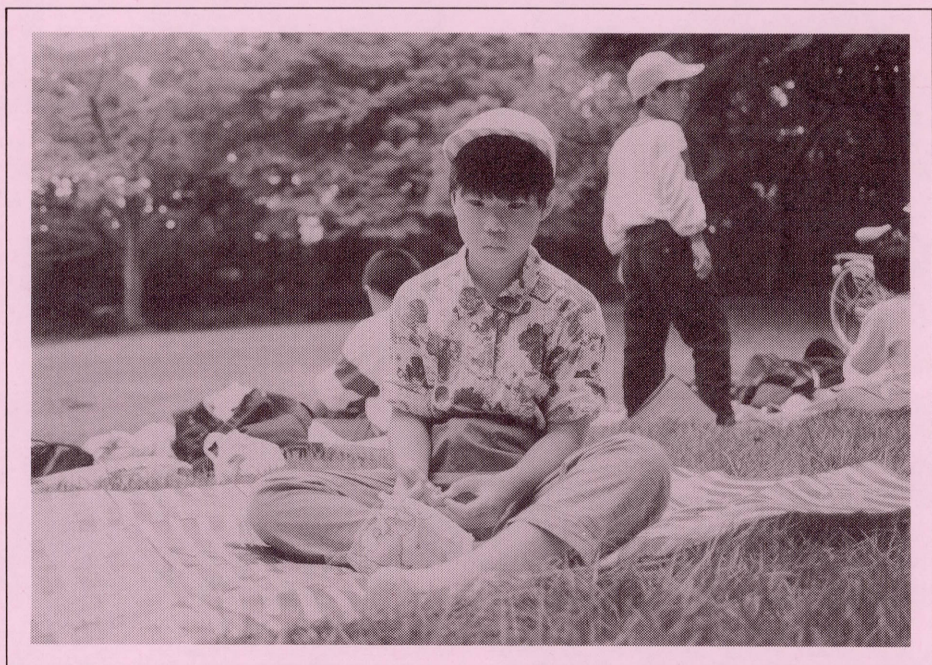
Thanks and more power!!!

Estrella L. Imai





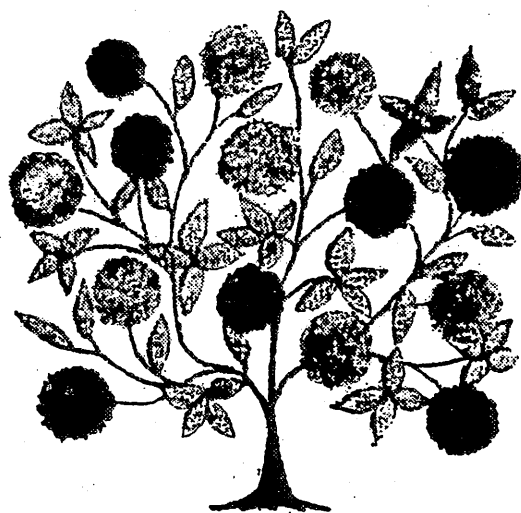
7 座談会



白雲山記

座 談 会
「白梅分館 10 年のあゆみを語る」

1991年10月19日



参加者プロフィール

- 斉藤 令子氏 籐細工愛好会で籐の製作を中心に、この白梅分館で活躍していただいています。
- 坂戸美佐子氏 福生市公民館白梅分館利用者代表3代目の公民館運営審議会委員をしていただき、今でも市民コーラスで活躍されています。
- 坂本千佳子氏 乳幼児を抱える若い主婦のサークルを代表して、参加していただきました。
- 佐久間登世子氏 福生市公民館白梅分館利用者代表初代の公民館運営審議会委員をしていただき、「うんしんおばさんだより」を出し続け、福生市以外にも大きな影響を与えた方です。
- 高橋登志江氏 子どもクッキングクラブの活動をはじめ、現在は国際交流ボランティア活動を積極的に進めています。現在の白梅分館利用者代表の公民館運営審議会委員をしていただいています。
- 高橋 洋子氏 子ども達に本の読み聞かせや貸し出し紙芝居など、「おしゃべり文庫」で20年近く活動しています。
- 立川 愛雄氏 高齢者の語らいの広場に参加していただいている他、福生市文化財保護審議会委員・福生市の市史編纂委員もお願いしている郷土史の研究者です。
- 野沢 久人氏 初代の公民館館長で、現在福生市役所企画財政部長。福生の社会教育計画の基礎から作成し、文字どおり今日の福生の社会教育全般を発展させた方です。
- 野島 俊一氏 今まで、公民館主催の自然観察会やたんけん教室などの教室に参加して、現在では指導的なことをお願いしています。地元で生まれ育った青年です。
- 宮岡 一雄氏 市内在住の明治大学教授で、初代の公民館運営審議会委員長をしていただき、現在でも公民館の各種講座の講師などをたびたびお願いしています。

写真 海老沢 泰弘（福生市公民館白梅分館）

司会 伊東 静一（福生市公民館白梅分館）

司会 本日は、夜間にも関わらず「白梅分館10年のあゆみ」のための座談会に参加していただき、本当にありがとうございます。中には小さな子どもさんを夫に見てもらって参加していただいた方もいらっしゃいます。

おかげ様で白梅分館も開館以来10年を過ぎ、多くのみなさんに利用していただきましたが、今晚は今までの白梅分館を振り返り、今後の白梅分館の方向性やありかたについて、日頃白梅分館に関心を寄せていただいているみなさんからご意見をいただければと思います。

最初にみなさん各自の公民館との出会い・関わりを話していただければと思います。



高橋(洋) 私と社会教育活動との関わりというのは、友達同士の読書会々場として福祉会館を利用し、その時初めて図書館の分館があることに気がきました。

以後、図書館分館に通うようになり、文庫の存在を知ったり文庫活動に関する勉強をした後、自分の上の子どもがちょうど幼稚園に通っていた昭和47年か48年に、自宅で文庫活動を始めました。

昭和52年に公民館本館が開館し、文庫の会議やコーラスの練習で公民館を利用するようになりました。

白梅分館との関わりは、自宅を改修することになって文庫の場所を変える必要が生じ、昭和57年からこの白梅分館を文庫の会場として利用させていただいています。

佐久間 1974年生まれの人達が作ったサークル活動への参加が、社会教育活動の始まりでした。それ以前は「公民館を創る市民の会」の署名のお手伝いをしたくらいです。

サークル活動の場は福祉会館が主でしたが、昭和52年に公民館本館が開館し利用できるようになってからは、ごく自然に本館を利用していました。

白梅分館は、昭和57年にヨガのサークルを始めるにあたって利用を始めました。

高橋(登) 昭和52年ごろ、下の息子の仲間の弟や妹の年代が私の家に集まることが多く、よくおやつを作って上げていたら、男の子も女の子も狭い台所で各自がクッキーなどを作りたがった。当時の野沢館長に会って事情を話したら調理室を借りることが出来るようになり、それ以来公民館の利用が始まったのです。

白梅分館には、昨年から国際交流のお手伝いをするようになりよく通うようになりました。

坂戸 私は生まれた場所がこの白梅分館の隣なのです。白梅分館の出来る前のこの場所は第2小学校のプールがあり、私の部屋がプールに接していました。渋谷の方に嫁いで実家に帰ってきた折、ちょうど白梅分館を作るためにプールを壊していて、その機械の大きな音がとても印象深く記憶されています。

子どもが生まれて実家の近くに住むようになり、子どもが7ヶ月（昭和56年）の時、おむつや哺乳びん持参で、公民館本館まで市民コーラスの練習に通うようになりました。子どもが近くの幼稚園に通うようになって、その幼稚園のお母さん方のコーラスグループが生まれ、その時以来白梅分館も利用するようになりました。

野島 今、坂戸さんが話されたように、プールが壊されたのは私が小学校を卒業する年でしたので、印象深く覚えています。私が公民館に関わりを持ったのは、小学校3年生の時に公民館主催の「夏休み自然教室」という事業に一人で参加してからです。翌年からは、友人を誘って自然教室に参加しました。その後、自然観察グループの仲間になって色々な人とつき合わせていただいています。

私が中学生の時、白梅分館には「英会話教室」があり、私一人中学校の教科書を持って参加させていただいたこともありました。

また、小学生の時、高橋（洋）さんの家で開かれていた「おしゃべり文庫」に通わせていただきました。

坂本 春に大阪で結婚し夫の勤務の関係ですぐにこちらに転居してきました。近所に夫と同じ会社に勤務する人の家族があり、その人がおしゃべり文庫に誘ってくれたので、白梅分館がどういう所なのかなど全く知らず、おしゃべり文庫の手伝いに参加するようになったのです。

自分の子どもがいない時に他の子どもといろいろとつき合うことが出来て、今の自分の子育てに役立っているのではないかと考えたりします。その時には、ただ自分が楽しみに来ていたという感じでしたが、2人の子どもを産んでからは、白梅分館とは密接な関係を持つようになりました。あっという間に5年間で過ぎました。

見知らぬ土地で生活することは非常に不安でしたが、白梅分館や仲間のみなさんのおかげで思ってもみなかった人の輪の広がりを感じています。

斉藤 12年前に子どもの小学校時代の同級生のお母さん同士が集まり、最初は家で簾細工を始めました。今から約9年前、白梅分館が出来てから2年目から利用させていただいています。

宮岡 昭和49年、私が文化財の委員で福生の林についての予備調査をした折、当時社会教育課で仕事をしておられた公民館松林分館の加藤さんが、その年の8月に小学生対象の自然教室を開き、福生の林の様子について話をする機会を作ってくれました。

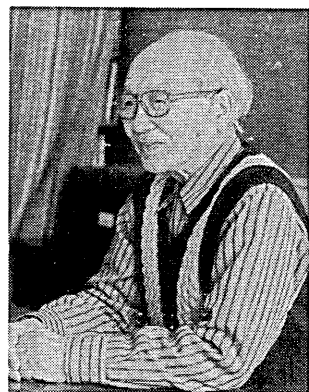
その後、地域の自然のことを少し勉強しようではないかということになり、昭和50年9月に「自然保護講座予備会」を3ヶ月にわたって開き、引き続いて勉強をするようになりました。

昭和52年に公民館本館が開館し、野沢館長（当時）と親しい間柄にあったことや、折にふれて社会教育について語り合っていた縁で最初の公民館運営審議会委員長を引き受けるはめになったわけです。

当時は、保育室予算と保育室事業の行方が不透明になって、公運審の努力如何でその帰趨が左右される状況に置かれていたことです。その状況を打開するために真剣な議論を重ね、数ヶ月間で20回以上の会議を開き、無事に打開できて、ほっとしたことを今でも昨日のように思い出します。

立川 私は昭和23年に福生にやってきました。郷土史に関心があります。昭和40年代の後半に公民館を創る市民の会の活動があり、当時活躍していた村野さん達と仲良くなりました。昭和55年ころ本館の事業で高齢者対象の講座を開くということで呼掛けがあり、水谷さん志村さん中村さんなどと一緒に運営委員を引き受け、発足いたしました。

しかし、担当者が白梅分館に異動し、昭和60年から白梅分館で活動を継続しています。「語らいの広場」には毎週30人以上、「人生を歌おう会」には40人以上が参加し、にぎやかに活動しています。



野沢 今までの皆さんの話から、人のつながりと広がりがあったことを聞くことが出来、とても嬉しく思いました。昭和57年、公民館保育室の問題を抱えた状態で一般行政職に移りましたが、それから来年の3月で8年が過ぎようとしています。

昭和37年当時には第一中学校しか体育館がなく、なんて教育の遅れた文化のないまちなのかと感じました。私は長野県の下伊那地方で生まれ育ったわけですが、私の生まれ育った地域では公民館はもちろん、学校には体育館やプールはみんなありましたので、そのように感じたのでしょう。

それで、昭和42年に市営プールを、昭和45年に福祉会館の社会教育施設を、昭和48年に体育館を作りました。最後に残ったのが公民館と市民会館でしたが、先ほどから話が出ていましたが、当時の青年団体連絡協議会（青連協）が中心になって、福生の社会教育をよくしていこうという動きがあり、もう一方では社会教育委員さん達や教育委員さん、市長はじめ議会のみなさんの理解が浸透した中から、昭和49年頃から社会教育委員が現在の福生の社会教育の基本構想を作り始めたわけです。

それは、公民館・図書館・体育館の本館各1つ、それに中学校区に各1つの分館をおき、それとかみあうようにすべての小学校区に地域会館が置かれるように構想が作られたわけです。当初は児童館が入っていたのですが必要が無いという意見が出ていて、進められなかったのです。今また必要な状況で、これから作ろうかという話が出ているような状態です。

白梅分館は、公民館の分館・地域会館としては最後に作られたので使いやすいのかどうか分かりませんが、先ほどからのみなさんの話を伺っていると、職員の努力と地域のみなさんの盛りたてがあって使いやすい方向に来ているのかもしれないね。

司会 みなさんに一通り白梅分館（公民館）との関わりを伺いましたが、高橋（洋）さんの家で開かれていた文庫に、小学生時代の野島さんが通っていたと言う話を聞き、地域の大人が人を育ててきた関係がよくわかりました。また、野沢部長からの話にもありましたが、公民館という所が、人が集まり・交わり・学びあい、人の関係が広がっていく場なのだとつくづく感じました。

さて、現在活動しているみなさんから、白梅分館（公民館）を利用してその活動が広がっている実態がいくつもあると思います。現在「ゆうあいふっさ」という国際交流ボランティアの活動で、同じ地域に住み日本の生活に馴染んでいない人々の手助けを進めている高橋さん、いかがでしょうか。



高橋 現在、月曜日の午前中と金曜日の夜間に、外国人対象に日本語や日本の文化を学ぶことを中心としたクラスを開いています。アメリカ・フランス・タイ・フィリピン・インドネシア・ペルーなどの国籍の方々が、大変熱心に学んでいます。

特に夜間の時間帯では、お母さんが学ぶ傍らで小中学生の子どもも一緒に学んでいるような状態です。

月曜日の午前中（10時～11時30分）には幼児を連れた若い母親中心のクラスになっていますが、ここでも次から次へと新しい外国の方が参加してきています。

今年の夏休みには、小中学生の子どもを対象に「サマーキャンプ」を開き、学力の面で問題のある子どものために学習の機会を開いたりもしました。

最近ではボランティアの人と外国人の方々が心を開きはじめ、日本に来て傷ついたことやこうあって欲しいといった願望などを、ボツボツと話し合えるようになってきています。

しかし、参加者にしてもボランティアにしても福生市民が少ないということが残念だなあと感じています。

参加者からは、「身近な所に日本の言葉や生活習慣を学ぶ場があったことを、大変助かっている」という声が多いのです。都内まで学びに行くのには時間と費用の面で難しいのと、子どもを連れて安心して参加出来る場というのは、他にはないからだそうです。そして、地域の中で彼らも外国人の妻であるけれど、自分の子どもを日本人の子どもとして育てて行く上では、やはり公民館で日本語教室だけにかかわるだけではなく、他の教室や新たな人間関係を作って行く機会や場が必要だと思います。

公民館の主催事業として幼児を抱えている母親対象のいくつかの教室を開いていますが、受け入れてくれるという姿勢があるので、とても安心しています。

公民館の主催事業に参加した外国人の女性の話では、たくさんの人と多様な交流やふれ合うことができて、言葉も話せるようになってきた。地域の住民として一緒に関わって行くことによって、言葉も生活習慣などもたくさん身につくようになっていくと聞い

ています。

毎日の生活では、アパートの中の自分の部屋に入ってしまうと隣近所の人との交流は少なく、一週間に一度でも公民館に来ることによって同国の人とも話せるし、また、色々な勉強を楽しむにしているそうです。

現在、参加者の中には「自分は日本に来て物にあふれている生活の中で暮らしていて幸せだけれども、祖国を思うと着るものも着れない子ども達のことを頭から離れない。日本の家庭では使わなくなってしまった古着などを、自分の本国の子ども達に送りたい」という希望が出て、社会福祉協議会に協力してもらって祖国へ送るような人もいます。勉強ばかり出来る人は幸せですが、祖国を思いやる気持ちも強く持っています。しかし、これも日本での生活に慣れゆとりが出てきたからだと思います。とにかく、外国人の方々の間では「公民館はありがたい」という言葉が出ています。

また、つい最近のことですが、毎回利用している部屋が人数の増加によって少々狭くなっていましたが、本館の職員から大きな部屋での利用を勧められました。職員の方が私達の活動にも関心を持っていてくれ、適切なアドバイスをいただくことが出来、とても嬉しく思いました。

司会 ありがとうございます。人ひとりが生きて行く上で公民館が本当に役に立っているのかという事を、職員としては日々反芻しながら仕事をしているつもりではいるのですが、まだまだ利用している人に教えてもらわないと分からないということが多い、というのも事実です。

坂戸 私達「市民コーラス」活動が乳幼児を抱えながらも今日まで続けられた理由を振り返って考えてみると、公民館本館では過去において自主活動にも若干の費用負担で託児をしてもらっていたことが大きかった。

自主的に幼児の保育をしたこともあります。それも経済的な負担が大きく長く続けることができませんでした。

コーラス活動は「学習」というようには受けとられていないようです。単独のコーラスサークルでは出来ないことも、他のサークルの人々の力を借りることによって、十数回の定期演奏会を開く事ができました。



高橋（洋） 私はここを利用して文庫活動してきましたが、今までは幼稚園から小学校低学年が対象だったのですが、今は幼児が中心の活動になっています。現実には、自主保育をしてるお母さん方のたまり場の様になっているわけですが、それはそれでよいと思っています。問題は子ども達がにぎやか過ぎて、周囲の利用者のみなさんに迷惑をかけているのではないかと心配しています。

そのこと自体は程度問題だと思うのですが、ただ、小さいうちからこの白梅分館を

利用していれば、そのまま抵抗なく利用が続くのではないかと考えています。少し周囲のみなさんに目をつぶってもらうということは出来ないことなのではないでしょうか。

文庫に來ているお母さんの中の一人が、つい先日この場所を利用申請をしようとしたら「また借りるの?」と言われちゃって、がっかりしたということです。「レストランやどこでも子どもを3人連れて入るといやな顔をされるけれど、この白梅分館だけは私達のいこいの場だと思っていたが、それは甘えだったのかな?」と話していました。

幼児の利用については色々な考え方があると思うのですが、どうなのでしょう。

坂本 私の子ども達もいうことを聞かない方なのですが、私の願いとしては、子どもが小学生くらいになったら自分から本を借りに来るようになって欲しいと、期待して日々過ごしています。現在では、白梅分館に通い続けるという習慣が出来れば、その先をどうすればよいか、楽しみに考えながら過ごしているところです。

高橋(登) サンバギータに來ている外国人の子どもケースでは、一番母親にべったりで泣き虫だった子どもが、子ども同士の中でお互いに注意されたり注意したり、また助け合ったりする事を通して、今では言葉の発達の遅れも解消し普通に遊べるようになってきています。幼児の世界では、ほんの一時期の事ではないかと思います。

佐久間 私も色々な方々との付き合いから、子どもの白梅分館利用の問題については両面から話を聞きました。母親の気持ちとしては「子どもが育つ過程では騒ぐのは当たり前で、どんな子どもにも自由にしてあげることが大切なことではないか」と公民館職員にかみついた事もありましたが、冷静に考えてみるとそればかりは言っていないということも事実でしょうね。



斉藤 簾細工で利用している時にも色々ありますよ。ものにもよりますが、他の大人のサークルでも色々な音が出ていたりすることもありますね。子どもが見にくることもかわいいと思いますよ。

簾細工の方では利用上問題は全く抱えていません。ただ、陶芸のサークルの方々が陶芸の窯を利用するのに申し込みが多くて大変だということと、本焼の時ずっとついていなければならず大変だという話を聞きました。

立川 この白梅分館の窯を利用する団体が増えているために、なお、利用が集中してしまっているのでしょう。

話は変わりますが、他市町村の高齢者対象の事業を比較してみますと、この白梅分館がやっている内容のもので十分なのですが、自主的にやれといわれるとなかなか出

来ませんので、ただ集まるだけでよいという中身のものを主催してもらえるとありがたいのです。

現在、熟年ひろばには69人、人生をうたおう会には79人が加入しているわけですが、歌をうまく歌おうということではなく楽しく歌おうということで、あまりにも歌のレベルが低く先生に恥をかかせてしまうので今年は文化祭にも参加しないようにと話していたのですが、それでもいいんだということなので、今年も出演することになったのです。

昨日老人会の芸能祭があり、参加者に一緒に唱歌を歌おうと呼びかけていましたが、そのようなものを企画していただければと思っています。高度の内容ではなく、高齢者を対象にしたものを高齢者のために企画して欲しいと思います。

司会 我々職員も色々と考えなければいけない点を感じました。地域に住む人間同士がお互いの情報も交流も不足し、特に若い世代の孤立化が進んでいるようですね。

乳幼児を抱えるお母さん方の託児や保育出来る施設を、公民館やそれ以外の機関にも拡充できれば良いのかも知れません。

休みをとれないサラリーマンの現状、先ほどの子どもの利用上の問題、高齢者の方には高齢者用の事業があつてよいのではないかなど、これからの白梅分館（公民館）としては、施設や職員それから事業の内容の問題も含めて、今後の地域を作っていくためにはどうあればよいのでしょうか。そのへんの所の話をしていただければ…………

野島 観察会などに参加していて、参加者が固定化しているような感じがあるように思います。子どもの遊びを見ても、遊び場の減少や家の中で遊ぶことが増えているようですが、10年くらい前の遊びも今では全く無くなってきてしまっているように思います。

家の中での遊びをいくらやっても、自分の記憶に残るということはないですね。むしろ、川や林の中を駆け回った記憶の方が強く残っています。

公民館の事業そのものを知らないと言うことが多いのではないのでしょうか。私は、小学校3年生の時に自分で広報記事を見て参加しましたが、子どもの間は広報を見るようなことは少ないと思います。一人で淋しく遊んでいる子どももいるのだから、学校の校門の前でチラシを配るなどの行動が必要なのではないのでしょうか。そのような、PR活動の拡充と実践を期待します。



高橋（洋） 自然の教室などをみていると、とても高度な内容に見えてしまいます。途中から入ろうにも入れないのではないかと感じてしまっています。それから、そのような内容に全然興味がないという子どももいます。ですから、講座や教室のメニューの幅を広げてほしいと思います。

数年前、白梅分館では「子どもまつり」を開いていました。内容的には本当にばかばかしいものでしたが、子ども達は結構楽しんでだれでも集まってくることができました。私達も割箸鉄砲を作るなどのお手伝いしましたが、だれでも集まって遊ぶ機会があればよいように思います。



佐久間 自然の教室などの話が出ていましたが、それは専門的な知識を身につけて来ている人が多くなって来ているからではないでしょうか。それはそれで大切ではないかと思います。私の場合、毎年「鳴く虫の観察会」を楽しみにしていますが、参加しようと準備していると雨で中止になってしまいます。ですから私はまだ一度も参加したことが無いのですが……。『〇〇講座』という形で入るより、野外で観察をしながら専門的な知識を持っている方々と気軽に話をすることが出来れば素晴らしい事だと思うし、そのような初歩的な機会をうまくPRしてもらえれば、公民館との付き

合いが気楽に始まると思います。自然観察会という事業は、そんな突破口的な事業と言えるのではないかと思います。

それから、「学校との連携プレー」がもう少しスムーズにならないかしら。もし、学校の中に公民館事業のポスターが1枚でも張ってあって、それを見て参加した子どもが観察会を手伝っているお兄さんとの付き合いが始まれば、公民館の存在が広がるのだと思います。広がりを持つPRの方法をもう少し考えた方がよいのではないのでしょうか。

坂戸 先日、福生「第九」市民合唱団の募集の事で市内の高校を訪ねました。学生が団費（4500円）を払って参加するのは大変では-----という先生方の話から、昨年度は市制20周年記念事業として無料の講習を受けられる時期にお知らせできなかったのが残念です。広報等でPRされていたので、皆さんがご存じなのかと考えがちです。

立川 学校の先生方から回覧が来ないとか広報が来ないという話を聞きました。しかし、ぜひ広報には目を通しておいて、参加くださるように希望する次第です。

司会 今までの話の中で、公民館事業についてのPR不足と学校との連携の重要性を指摘いただきました。

これからの福生市は、国際化・高齢化・情報化などを大きな行政課題として抱えているわけですが、今後の「まちづくり」に公民館の果たす役割を、利用しているみなさんから意見をいただけるとありがたいのですが……。

野沢 話をもう少し追加させていただこうかと思います。私のやってきた社会教育の

中身というのは、場作り＝ハードウェア作りと職員を増やしていくことだったわけです。地方では、戦後すぐに各地域に公民館が作られ今日まで様々な内容で継続的に活動されてきているわけですから、福生は地方に比べ社会教育の歴史は浅いと言わざるを得ません。

図書館を一番最初に作ろうという話になったとき、公立の図書館に行ったことのある市民は一体どの位いるだろうかという話になりました。学校図書館を除いて、公立図書館に行ったことのない人が多いという状況だったと思います。そのような地域状況の中で、公民館・図書館・体育館などの施設が、遊びでありながら遊びだけではないということがなかなか伝わっていかないという部分があったわけです。そのような意味で今日のみなさんの話を伺い大変な成長をしているという感じを持てたのは、宮岡先生をはじめ継続的に事業を支えていただいた方々の力があったからだと思います。

公民館の生成や歴史的な過程を見ると、まがりなりにも地方の公民館というのは地域に密着して動いているのに対して、東京の公民館というのは地域と離れて“勉強”してきたという経緯があるわけです。”都市型公民館”と呼ばれる三多摩の公民館が典型なのですが、地域のことと言うよりむしろ知的な学習というテーマを用意し、全市域から人を集めて講座や教室を開くというスタイルがあり、先ほど立川さんがお話ししていただいたものとは正反対に位置づけられるわけです。

そのような意味での反省が白梅分館の活動の中にあり、地域の人達とのつながりの中での仕事を進めてきたと言うことは、正直なところとても素晴らしいことで今後も伸ばして行って欲しいと思います。

それから、先ほどから話が出ていました子どもの問題ですが、都市型公民館では子どもは扱うものではないというのが一般論だったのです。

三多摩では福生の公民館が一番最初に子どものことを組織的に扱いだしたのではないかと思います。しかも、自然との関わりの中で子どもの異年齢集団の再生を復活させることがテーマになっていました。

保育室の問題も同じで、幼児や子どもにもそれぞれの場で学習する機会があってよいのだという考え方が定着していかなければおかしいという発想があったので、具体的な事業が始まったわけです。

しかし、そういう意味での活動の仕方を作り出せない＝一方では子どもがいるとうるさい。もう一方では子どもなんだから当然だという意見、本当はお互いが討論というか話しあえるような関係までいかないと、本物にならないのではないかと思います。そこまで話しあえるような状況を作り出せるようなことが、本来の公民館の役割ではないかと思うのです。

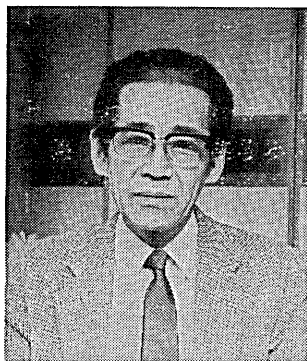
もう一つの白梅分館のよさですが、福生市のまちづくりの基本的な考え方として、「国際化」「美しいまち」ということが掲げられています。この中には当然高齢化の問題もあるわけですが、今、白梅分館で行われている様々な活動（主催・自主活動）



が、将来的に地域の問題を徐々に解決していくような方向性を持っていないかと思いません。

白梅分館で行われている主催事業や日常的な援助事業の中には、徐々に力を発揮してくればまちづくりに大いに貢献する人材を育てていると思えるようなものもありますので、今後の公民館の大きな役割の一つが明らかになって来るのではないかと思います。

一般行政側からの話ですが、よく「公民館としては一生懸命仕事をしている」という声を聞くのですが、外からみればやっているようには見えないのです。それは、活動の実態を外に出して行く方法とかPRの仕方とか学校とのつながりなど、もう少し時間を作って焦点を合わせて事業を実施したり援助したり考えてみたらどうだろうかと感じています。



宮岡 現在の野沢さんのお立場から具体的な話をというのは無理でしょうね。私など講座の講師として関わって来ていて、みなさんとはやや距離をおいた市民の立場で全体を見てきたわけです。ただ、公民館ということで感じていることは、公民館の出来たてのころは「条件整備」ということをよく言われたわけですが、私は条件整備の後にくる結果というものをいつも注視しています。今日の社会の中では、個人が社会から孤立しても生活できる条件が整っています。公民館も同じ事で、条件整備のあり方によってはむしろ整備が進みすぎたために、それぞれのサークルの孤立を可能に

して、自分達は整備された部分を摘み食いするだけの利用者であるということになりかねません。公民館活動でいう「利用」という表現は、本来、このようなものとは少し違うのではないかと考えています。

先ほど自然観察会の件で「専門家」ということが話題になっていましたが、私は両方あって良いのではないかと考えています。公民館運動には裾野を広げて「一般化」していくための事業が必要だし、もう一方では先ほど野沢部長がお話しされていたように、まちづくりなどの力になっていくために、市民が専門的な力量を育てていかないと行政を支え動かしていけないわけです。この背景には、根拠をもった訴えがないと行政は動かないし、動きにくいという実態があるからです。

このように地域社会の発展を考えて来ると、両方の人達が育っていて公民館の活動は生きていくのではないかと考えています。ただ、私は実践家ではないので理屈を言っているだけで、一般化と専門化については結論的な考えを持っていません。

いつもサークル活動などを見ており、「個」と「公」の関係で言えば、公民館は個（市民）がいないと成り立たない。しかし、個を通して個と地域をつなぐ意味での公民館であり、活動であって欲しいですね。

先ほど子どもがさわいでうるさいと言われたということですが、大人の意識が一番

大きな問題だと思います。私のサークルは良い状態で活動しているので、他のサークルの活動が目に入らないと言ったり、あるいは自分のサークル活動をじゃまされたとして他のサークルの活動を圧迫するような行動に出るとするのは、「公民館活動」ではなく、共に育つという点からみると単に公民館という建物を利用しているだけに留まってしまうと思うのです。そのへんは実践家のみなさんから具体的な話を出していただければ幸いです。

条件整備が進むことは結構なのですが、そのことがサークルの孤立化や甘えにつながったりして、単に公民館という建物を利用しているという形だけになるとしたら、私個人としての本音は「違う所で活動してください」と言いたいですよ。

「子どもには空気を吸わせろ。青年は未来を語り、大人は現在を語る。老人は過去を語る」という言葉がありますが、未来を語る層が現在では公民館に全然関与していない。現在、私たち大人は、ノウハウを追い求めてしまいがちです。高齢化社会の老人にとって、都市化の下では思い出に浸れる様な条件や語り合いの場が欠かせないが、青年と大人の部分ではやはり自分達の課題を心の隅に置き、少しでもよいから地域性を伴った語り合いの場と機会を自分たちで用意しないと、公民館が単なる娯楽施設になってしまうと思うのです。

娯楽施設が別に用意されていれば良いのですが、現状ではそれは過大な要求でしょう。現在、公民館を利用している団体が300近くもありながら、地域社会のボランティア活動につながっていかない。自分の趣味を楽しむだけでとぎれてしまう。これだけ多くのサークルが有りながら、何故つながっていかないのかいつも疑問に思っています。幼児教室でも同じで、自分の子どもの利用が終れば公民館の利用も終わりと言う実態が多く、次の世代の母親のためにどうしようかという意識を持っている人が少ない。私には具体的にどうしていったら良いのか分かりませんが、問題だけは感じています。それは、国民性だからとかあきらめないで地道に努力していくことが、社会教育としての公民館の存在意義でもあると思っております。

司会 ずいぶん心を揺さぶられる話を伺いました。公民館というのは、市民同士が教え教わることと通して自分が獲得した力を次の世代や地域社会に還元して行く場であり、その機会を通して地域を作ることやそのための市民の方への援助が公民館の仕事で、白梅分館という公民館の特徴を持ちながら、具体的な形にして行くことが公民館の仕事ではないかという話ではなかったかと思います。

野沢部長と宮岡先生からの話を聞き、今後の具体的な方向性のようなものを提案してもらえるとありがたいと思います……………

宮岡 一つ提案があります、というより感想ですが、あまりあせらないで着実に進めていくことが大事だと思います。特に社会教育では、時間というものを念頭に置いてやっていかないと、幅広い領域、多数の市民が対象ですから無理が生じてしまうと思います。何十年かの事業や援助といった公民館の継続的な仕事が積み上がって、果実が実るようなつもりでみなさんで手を取り合って活動していったらどうだろうかとい

うことです。

野沢 今日お話においでいただいた方の話を伺い、私が最初に公民館の仕事に携わっていた頃の活動内容に比べ、ずいぶん成長してきていると感じました。

正直なところ、福生という自治体は、景観や施設で他の市町村に誇れるものはありません。結局福生を誇れるものは「人」しかないと思っています。「人」を作っていくには社会教育の各々の施設が各々の立場や事業で行っていますが、公民館というのは人と人との関係の中で人を作り自分を作るという場所ですから、今までの社会でももちろん、これからの社会の中でも「人」を作っていくことの出来る場だと言うことが出来ます。

白梅分館というのは、福生の公民館のなかでも良くできていると思います。宮岡先生はゆっくりでいいと話されましたが、私はせっかちですから笑いながらさっとやれるスマートさを持ちながらやっていければすごいと思います。

宮岡 私は、公民館の「条件整備」の現状について言えば、生涯教育に向けた職制の確立を提唱したい。現場の職員は生涯教育の視点に立った情熱のある人でないと社会教育的な発展に期待が持てないと思います。突然他の係からやってきて、この職場で3～4年位いて、また他の職場へ回って行く形では専門性を持った公民館職員として育ちにくいと思います。公民館活動＝社会教育活動は現場に負うところが大きいんですね。白梅分館が活発にみえるのは、職員の情熱と行動力に支えられている部分が多いと思います。

司会 今まで社会教育の造詣が深くキャリアも長い野沢部長と、宮岡先生からは専門的な視点で話をさせていただいたわけですが、実際に現場で活動をしている市民のみなさんから日頃感じていることなどを話していただければありがたいのですが……



坂本 公民館が子どもと共にあるということを知り、とても安心しました。実は、白梅分館では、今後子どものことは田園会館に任せてしまうのかと心配していたのです。この近辺の乳幼児達にとっては、田園会館は少々遠すぎます。私達乳幼児を抱える母親にとっても、白梅分館を頼りにしていることも事実なのです。

白梅分館の場所や事業の中身を知らない人もいますが、私はたまたま保育室付の講座に参加することが出来ました。しかし、この白梅分館には松林分館のように専用の保育室がありません。今後も保育付の講座が続けられるのかどうか少々心配ですし、次の世代の母

親のためにも保育室があればよいと思います。

公民館で主催する保育付の講座のテーマがやや硬いという場合もありますが、参加

した人の中にはやる気を出したり元気が出てきたりということがあります。

それから、”白梅分館の図書館”として文庫自体を位置づけ出来ないかどうか、可能性として検討出来ないのかなぁと思います。

坂戸 本館の方では保育室の改修工事が始まると聞きました。トイレや手洗い場の新設という工事だそうですが、子どものしつけや動線を考えても、無くてはならないものだと思います。

司会 この白梅分館の保育条件は、確かに三館の中では一番悪いと思います。施設的なことや文庫の活動が白梅分館の事業として出来ないかなどの提案をいただきましたが、その他に皆さんの持っている想いみたいなものでも結構ですので……

坂戸 主催事業であったほうがよい部分と自主的にやったほうがよいという部分があるとすれば、全てを主催でやて行くということになると市民の力がつかない。市民の持つ独自性というか行政が関与しないほうがよい部分があると思います。

高橋（洋） 坂本さんから先ほど話が出たのは、私が水曜日忙しいのでそのような配慮をしてくれたからではないかと思っています。今のお母さん方に任せるには、少々子どもが小さいので少々無理ではないかと思っています。しかし、やっぱりこの文庫は市民の力で運営したほうがよいと思っています。

野沢 社会教育の活動は、それぞれの活動に波があっていいんだと思います。家庭の事情とか本人の体調とか、様々な理由で波があってよいと思います。

高橋（洋） だいたい3年くらいで活動をやめてしまうケースがほとんどで、私のように自分の子どもが小さい頃から始めて長く続けているというようなケースはほとんどないですね。

坂本 高橋さんの人柄に引かれて大人が参加してくる現状ですが、何年後かには子ども達が仲間を呼んでくる文庫になればよいと思っています。そこまで続いて欲しいと思っています。

佐久間 ここが出来て初めての公民館運営審議会委員になった頃は、本当によく白梅分館にきたものでした。当時、ここを利用しはじめた人達は、その昔「婦人会」などをこなしてきた人達が多かったので、いわゆる地域の「底力」の素晴らしさを目のあたりに見る事が多く、白状しますと、その方々の持っている力が「公民館の理念」「学習権」というような言葉でくくられていくことを恐れていた時期があります。言葉で表しにくい白梅分館特有の雰囲気のようなものを守りたかったのです。

今、野沢・宮岡両先生の話を知って、それはその流れの中で私達ここを使う人間

が長い時間かかって自然に答えを出していくものだと思います。私がこの白梅分館をいとおしくてたまらないように、白梅分館をいとおしく思う人達が増えていくだろうと思います。

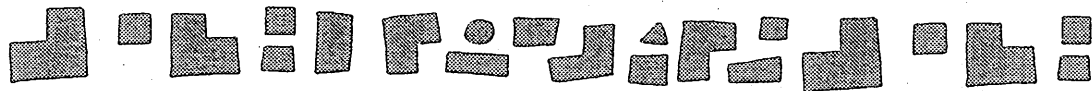
それから、公民館保育室事業としての白梅分館のコースに通った今の小さな子ども達は、すごく楽しみです。この白梅分館に馴染みながら育っていく若い力が必要だと思います。職員のみなさんや白梅分館を使う人達を信じながら、ますますよい形で成長して欲しいと思います。

司会 人が人を思いやる、いとおしく思う気持ちが、地域を作っていくのだと思います。私達職員はこの地域の方々に色々教えていただきました。形になった部分もあれば、これからの部分もあると思います。職員も市民に育てられると言えると思います。地域に住む市民の方もお互いに交流し人間関係を深めていく関係を、これからも作っていければと思います。

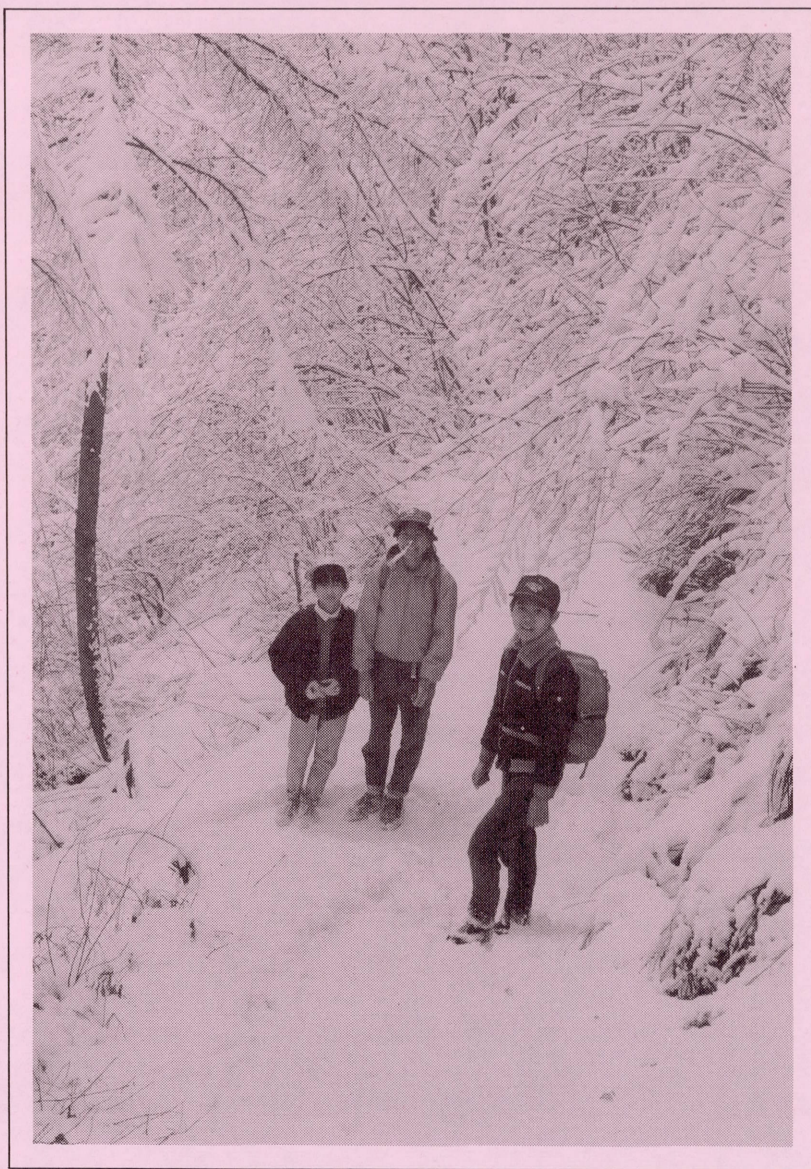
時間も無くなってきましたので、今日の座談会はこれで終了させていただきますが、今日話された事を実現していけるような仕事を、明日から地域のみなさんと一緒に実践していきたいと思います。

本日は多忙なところ座談会に参加していただき、本当にありがとうございました。

〔文責 白梅分館 伊東〕



8 記念講演「これからの白梅分館」



白雲山記

白梅分館利用者研修会・10周年記念講演記録

私たちは「大人らしく」学んでいるか

講師：島田修一氏（中央大学教授）

講師プロフィール

東京生まれ、1959（昭和34）年東京大学教育学部を卒業後、長野県喬木村にて社会教育の仕事に従事する。

11年勤務の後社会教育の研究の道に入り、現在社会教育研究では日本の第一人者。

（現在、中央大学教授）

著作は、以下の他多数。

「社会教育の自由と自治」（青木書店）

「地域を創る社会教育実践」（エイデル研究所）

「社会教育概論」（青木書店＝共著）

「行政改革と社会教育」（東洋館出版＝編）



1 公民館の役割 「本物の大人の学びを用意する」

今日は、公民館を利用している方々の集いだという事なので、2つのことをポイントにお話するつもりです。1つ目は、「大人らしい学びって何だろうか」ということです。これを確かめる中で、それが公民館で実現するにはどうしたらいいかということが、2つ目のポイントになると思います。

子どもの学びというのは、自主的に学べと言いながら将来本物の自主的な学びが出来るように、大人が教科書・学校・先生などを用意し育てています。

それとは異なり、「大人らしく学ぶ」というのはどういうことかと言えば、簡単に言えば、自分で学ぶことを自分で決めるということです。

大人の学習というのは、この場で言えば、この私は材料の提供者・学習の援助者であり、職員も援助者に過ぎません。それを皆さんがどの様に使いこなして自分のものにするのか、これが大人の学びなわけです。

自分にとって必要なことを自分で学ぶ。一人で心細ければ仲間と学ぶ。民謡・書道・社会問題を考えるグループでも中身は同じで、自分一人では心もとないし励まし合いの仲間が欲しいから仲間と学ぶわけです。自主的に作るグループで学ぶ場合も公民館

で開設する講座の場合も同じでしょう。講師の話もテキストも材料で、話し合う仲間も話し合う中身も材料なんですね。それらが全部自分の中に入って「よし次はこれを学ぼう」「もうちょっとこれを習おう」「今度はこんなことをやってみよう」と、自分の中に学びが作られていくことが実は本物の大人の学びなのです。

子どもの学びの場合は、文字もよく知らない、考え方の筋道もなかなか立てられない、他人のことを思いやる力も十分ではないので、大人が助けてあげる。その専門家として教師がいるわけです。しかし、教師だけではやれないことを、親や家族や周囲の人が助けてあげる、助けを受けるのは子どもですが、自分の中に学ぶ力を作っていくのが本物の学びなわけです。本質的には、「学び」は大人も子ども同じなわけです。

大人らしく学ぶというのは、自分にとって自分に必要なことを自分の力で身につけ、自分がどんな人間になっていったらよいかを思い描きながら進んでいく、これが大人の学びなわけです。後でもう一度詳しく申し上げたいと思います。

さて、公民館の役割は大人の学びの場を用意することです。上記のような学び、主体的な学びが出来る場を用意するのが公民館です。

公民館とは、みなさんの学習や文化活動のために場所を提供する。あるいは、主催の事業として場と事業を用意する。利用する人達の交流・親睦の場を用意し、そこがいつしか学び合いの場になることを期待して、集いの場を用意する。

公民館の主な3つのサービスの中身

一つひとつのグループにも場を提供する

全ての市民に色々な講座や事業を用意する

白梅分館に来た人がふれ合い、なごみあい、学びあえる場を用意する

これを通して大人の学びが発展していく様に用意するのが、公民館の役割だと思います。

公民館の誕生のころは……

公民館が始まったのは今から46年前ですが、当時の文部省は非常に張り切っていて、その時にはすでに公民館の目標が掲げられていました。

「日本がひどい戦争をして、みじめな結果を招いたのは、一人ひとりの国民が自主的にものを見、正しいことを主張し間違ったことを批判する力が無かったため、軍部独裁を許してしまったからだ。これからの日本は、民主的・文化的・平和的な国づくりを進めよう。そのためには、一人ひとりが自主的にものを考え、みんなが力を出し合ってよい世の中を作らなければならない。そのためには、みんなが学びを通して自主的で民主的な世の中を担える人間になろう」と、実は大人の学びを作ろうと言っていました。

とにかく寄り集まって勉強する場所を大いに作ろうと呼びかけたのが46年前です。

全国各地に広まったので、さらに進めようとして3年後の昭和24年に法律が出来ました。

初期の熱意の中で「公民館のうた」というのが募集されました。実は、私は昭和34年に長野県の喬木村という農村に公民館主事として就職しましたが、郡や県の集まりの始まりに、必ず公民館の歌を歌いました。古くさくてやぼったい歌に思えて、恥ずかしくてあまり歌いませんでした。ところが、前に立ってみなさん歌いましょうなんという立場になった時には、恥ずかしかったけれど歌っていました。しかし、いま改めて詩を見るとなかなか素晴らしいものですね。

「平和の春に新しく、郷土を興す喜びは公民館の集いから とけあう心和やかに、自由の朝をたたえよう」

平和の春に新しくというのは、戦争が終わりこれからは安心して家族と暮し、生産にいそしめる、安心して毎日を暮らせる。この平和の春に、郷土を地域をみんなの力で新しく作ろうというのは大きな喜びだし、張り切って取り組もう。とけあう心和やかにというのは現代的に考えれば、みんなで協力し心を合わせてよい地域づくりに励みましょう、という事ですね。そしてそれは公民館の集いからということです。自由の朝をたたえようというのは、言論統制はないし自由な学習をしてもお上に取り締まれることもない。男に遠慮して女が縮こまっている必要はない、子どもも自分の意見を言える、青年も大人の手下ではないということです。各地で青年会が封建的な村議会を変えようとして、青年代表や婦人代表を議会に送り込むという気運も高まりました。

自由で平和で民主的なこの世の中を讃え、ますますよい地域作りに励もうという歌が、一等に当選したのです。

メロディが古くさく照れくさかったけれど、いま詩を読んで当時の人の心に寄せて考えると、やはり大人の学び＝自分達の力で自分達が賢くなって、その賢くなった自分達がよい世の中を作ろうということを目指していたことが分かります。では、今はどうでしょうか？

つい先日保谷市で開かれました「東京都公民館大会」は、文部省が開いたわけではありません。各市に作られている公民館の連合体（東京都公民館連絡協議会）が主催した、自主的共同的な集いでした。しかも開催市の保谷市では、以前から社会教育研究大会は開かれていましたが、公民館大会というのは開いていなかったもので、第1回公民館大会を同時開催（共催）しようとして、準備会から市民が参加することになりました。

その時市民は市長から委嘱状が出たわけでも、公民館館長から泣いて頼まれたわけでもありません。市民が今までこの地域で公民館活動をやっていたが、さらに発展させるためには、全都のいろいろな公民館から経験を学ぼう。そしてそのためにはいろいろな公民館から経験を学ぶことが十分出来るように、自分達で力を尽くして分科会や準備会場を設営しようと努力しました。もちろん完璧な準備が出来なかったのも、

会場や運営についての苦情があったかもしれませんが、でも、精神について批判は無かったです。保谷市の市民が自分達の学びを自分達で一生懸命伸ばしてきたけれど、今度は全都のもっと多くの仲間と一緒に共に考えながら発展させようというふうに受け止めたのですから。その時の全体会は「仲間達がいれば喜びがある」という、東京の公民館活動40年の歴史を手際よくまとめた映画で幕が開いたわけです。

どんな喜びがあるのかというと、みんなが学んでみんなが賢くなっていくことを励まし合って進めていくという大人の学びで、今考えると初心は変わらない、初期の活動スタイルは古くさい姿を持っているけれど、心は同じで、今もそれは生きているというわけです。

しかし、良いことづくめではないのです。そういう風に公民館を考えているのが東京の公民館関係者の努力の中で、職員も努力し、市民も、職員不足を批判したり支えてきたりして作ってきましたから、みんなで作るみんなの学びというのが公民館での合言葉になってきていますけれども、全国に目を向けてみますと、やはり教育委員会とか公民館の職員がこれが大事だろうと思う講座を用意（準備）し、お知らせを流し、先着30名で打ち切るというような学びを用意する。来る方も用意された学びを享受する、これだけで終わっているタイプが、割と多いのです。

しかも残念なことに、率直に言って初期のころはお金も材料も建物も無いのでみんなで作ろうと言っていましたが、今は職員もある程度いて、建物も立派だし材料も情報化時代になって豊富にある。職員がちょこちょこっと才覚を働かせて準備すれば、女性講座でも子ども祭りでも、青年の集いや高齢者の集いだろうが大体出来る。

そうすると、市民の方も今日はコンサートホールへ行こうか公民館の市民講座へ行こうか、それとも子どもと一緒にファミリードライブでも行こうかと、いろいろと考えた上で、では「今日は公民館」へ行ってみようかというふうに、よりどりみどりの中で選んでいますから、手間ひまかけて自分は何を学ばなければいけないかなんて考える必要がなくなってきました。自由に選ぶことで豊かな気分になれるような世の中になってきましたので、公民館は利用者が集まって知恵を出し合って公民館を使いやすくするにはどうすればよいのか、などとやっているのは一見野暮ったく見え、もっとスマートに学ぶことが出来る世の中になってきています。そういうわけで、現在の公民館活動には大きく言って“2色”あります。

公民館職員や教育委員会側が準備して提供してるタイプ

利用者が公民館職員と一緒に知恵を出し合って中身を作っているタイプ

残念ながら、後の方が数が少ないのです。それだけに、今日のように日頃公民館を利用している人が一つの場集まり、ある材料をもとにみんなで勉強し合うということは、野暮ったいけれどもとても大事なことなんです。その理由は、くどいようですが大人の学びをするからです。

与えられたものを吸収してそれでいいとは思ってしまわない自分。ある時には与えられているが、ある時には自分で探したりして、いろいろな場合があるだろうけれども、それらを自分で自分のものにしていく学びということになると、やはり今言った

ような公民館の姿がほんとうではないかと考えるわけです。

2 公民館の利用者って

さて、そういうようなことを考えてレジュメの二番目に書いてあります、「公民館の利用者って」という話に移りますが、もう一番目で話をしてしまいましたね。公民館の利用者ってというのは、言うならば、利用させていただいているのか、公民館を積極的に利用している人間なのかということになりますね。

「公民館はこうあるべきだよ」「公民館はこうあって欲しいよ」、「だったらみんなでこういう活動をやりましょう」というように、目標や方法を決めていく主人公が真の利用者なんだろうと思います。

これを作ったから食べなさい」「これを用意したからご覧なさい」「こういう企画があるから聞きなさい」というのでは、お客様扱いどころか子ども扱いですね。では、これを作りました、いかがでしょうか？ 食べていただけますでしょうか？ 受け入れていただけますでしょうか？ 喜んでいただけますでしょうか？ というのも、少し変です。大変丁寧に扱われて自分が偉いような気分になりますけれども、決して自分で作ったものではありません。

本当の主人公というのは、やっぱりこれがしたい、あれがしたい、と言って、みんなで作っていける創造者であり決定者であるというのでしょうかね。

今日話を聞いていただいているみなさんから私を見ると、リラックスして話しているように見えるかも知れませんが、私はどう評価されるだろうかと内心びくびくしているのです。終ってから、今日の話ではあそこが足らなかったとか、面白そうにへらへら喋っていたけれど一本芯が抜けていたとか、終ってからみなさん方が評価しみなさん方が話し合っても良いし、職員にこここのところはこうだったのではないかと行っていくことが、お互いが発展していく“大人の学び” だろうと思います。

公民館の利用者というのは本当の意味での主人公、だから公民館を利用させていただくというのではなく、公民館をとともども利用することによって自分が太って行く。そういうのがほんとうの利用者であると思います。

3 どういう主人公が求められているのか

それでは、どのような主人公が求められてきているのかということですが、それは今言ってきた事なのです。

しかし、私が言葉巧みにみなさん方を誘導して言うものではありません。ここにも書きましたが、社会教育法の第三条に「国や都道府県や市町村は、施設を作ったり資料を用意していろいろ条件を整えて、それを通して全ての国民が自ら實際生活に即する文化的教養を高める」ための環境を整えなければいけません、と書かれています。

すべての国民というのは、大人も子どももですから、今「生涯学習」という言葉が使われていますが、実はこの時から生涯学習の観点は入っていたわけです。

全ての国民が自ら實際生活に即してという意味は、食生活や健康も福祉も環境もみんなそうです。フロンガスの使用を止めようというのも、外国からの農産物で収穫後に農薬をたっぷりかけられてしまうものが無制限に入ってきてしまうことを止めてくれというのも、實際生活です。それから、消費税導入で困ったどうしたらいいか、と考えるのも實際生活ですから、實際生活というのは、身近なこととそれにつながるすべてのことで、政治は遠い世界なんて言うてはいられません。観念的な勉強ではなく、実際に自分が毎日の生活の中で切り開いていける、生活と文化と政治の主人公になるようにという思いがこの法律には込められているのです。

實際生活に即する文化的教養とは、ありきたりの知識の寄せあつめではなく、自分で考えられる力を持っているのが教養ですね。教養人というのは大学の先生などだからというのではなく、その時代にふさわしく、ちゃんと時代を見て自分の暮らしについて自分の基準や方向を持ち、他人の生き方や考え方もよく理解出来て、協調していける人間のことを言うのではないかと思います。社会教育法は43年前に作られたけれども、しっかり生涯学習の観点を持っています。一人ひとりがしっかりと本物の学びをなさいと言っています。ですから、社会教育の主人公とは誰かと言えば、本物の学びの出来る人ということになります。

幸い、福生市は公民館が整っていますすけれど、無かった場合には整うように、そして整っている場合にはその中身の活動を良くさせるということが、本当の主人公でしょうね。

その意味では大変残念ですけれども、私は八王子市の社会教育の主人公にはなれないでいます。約47万人の人口を抱えながらも、公民館は「半分」しかありません。半分の意味は、市民会館の2階と3階に併設されているのが公民館だからです。今日も公民館運営審議会がありました、毎回のようそのことを言っています。でも、今日少し「主人公だな」と思えたのは、前々から公民館館長と話しあう時間を増やそうと言っていたのですが、そのことがずいぶんうまく行くようになって来たからです。

福生には「言葉の学級」という名前の事業（松林分館が開いている識字教室）がありますが、八王子では47万人の中に約3千人の外国人がいるのですね。その外国人のために日本語学校を公民館で開くことが、ようやく出来ました。

「国際交流事業」といって、留学生を呼んで若人の集いなんていうものだけやっていたので、交際交流ってもっと深いことをやりましようと言っていたら、公民館で日本語学校をやりましようということになりました。

それから、平和とスポーツの問題ということで、近いうちに講演会を開くということです。それは「まぼろしのオリンピック」という題で、平和の祭典＝オリンピックをナチズムドイツが主催することを認めるわけにはいかないと、ドイツに踏みにじられていた23ヶ国6千人がスペインのバルセロナでオリンピックを開こうと準備していたわけです。直前になってフランコ将軍率いる独裁政権がスペインに内戦を興し、民主的な政府をひっくり返すというクーデターがおき、そのためにオリンピックはまぼろしになってしまいました。

その話をスライドを交えて講演会を開くということで、私達も大賛成した。こうし

て市民の意見が通ったり一緒に考えられる、ということになり、市民の代表が公民館運営審議会委員としてああいうこともやろう、こういうこともやろうと、意見を出して協力して事業を考えていけるようになってきました。そのような努力をする、福生ではこうだったよとか八王子ではこうだったよという交流が出来るようなれば、一つひとつの公民館がお互いに支えられていくのだと思っています。

さて、今年の9月から、学校では月1回土曜日が休みになります。今日の公民館運営審議会では、その受け皿をどうしようかと熱心にそのことを話しました。

受け皿というと、土曜日に学校から追い出された子どもを受け止めるというように考えてしまいますが、そのようなのでいいのでしょうか？子どもにしてみれば、5日間はこちらへおいで、あとの2日間はボイ。仕方ないから子どもはこっちへおいで、と地域が受けとめるような状態では、子どもはあちこちへ回されているみたいでおかしいんじゃない？こうしてみんなで子どものことを考えるということが大事じゃないのと言うことになりました。

保育園の園長さんが、子どもにあまり手をかけすぎている。子どもは持って生まれた伸びる力を持っていて、そのことをうんと大事にしてあげないと、本当の子どもを育てることにならないのではないかと話すなど、ずいぶん話が深まりました。来年の公民館活動の一つの重要なポイントとして、地域で子どもをどう育てるのか、大人もその中で人間らしく、人間らしい大人によみがえろうと、こういうことをテーマにしようと言いました。さて、そこからどういう講座が生まれるかわかりませんが、そういう風に市民が話すことはほんの初歩的なことですが、公民館利用者の集いなどで皆さん方もこれまでとりくんで来たのではないかと思います。ですから、振り返ってみると、あれこれやりたいと言いながら結果として自ら実際生活に即す文化的教養を高めてきた。これが本物の主人公なのだと思います。

三多摩（都市型）公民館の光と影

先ほど、司会の方から私が三多摩の公民館のことを詳しいと紹介していただいたんですが、私よりもっと詳しい方が一杯います。正直なところ余り詳しくはないのですが、自慢ではなく三多摩の「良さ」も「ちょっとおかしいところ」も「みえる」のです。何故かと言えば、私は農村の公民館で11年間も仕事をしていましたから、都会の公民館の「よさ」と「不十分さ」がよく見えるのです。

これはと思う職員にはかなりきついことを言います。例えば、「みなさんは市民のため住民のためにサービスしていると言っているけれど、実は住民の上澄み部分と違いますか？」。もちろん、東京では一人の職員が何十万人もの対象市民人口を抱えているので、農村のような対応は無理でしょう。

しかし、農村では忙しい農作業を終え疲れて家に帰り、家族の食事を作り子どもを風呂に入れては慌ただしく公民館に集まって来るお母さん達と勉強会をやろうということになれば、いくら小さな村でも役場の2階で腕組をして、「ちっとも来ないな」とは言えないですよ。やっぱり地区へ出かけて行って、冬だったらお茶を沸かし茶碗

を並べて待っているようにしているわけです。米の作柄などの地域の話題に入ってつき合いを深めていくようになると、その日來ないかあちゃんが気がかりになるような人間になっていきます。

呼びかけて集まってきた人で手一杯の都市部の職員を見ていると、熱心でいいなあと思いながらも、その職員の頭に中に「呼びかけられても行けない、行きたくてもいけない」という人が浮かんでいるのかなと、つい言いたくなってしまう。

そのことはとても大事なことです。職員が急に百人に増えることなど無いわけですから、職員もみなさんに率直に言えばいいんですよ。近所には子どもが小さくてとか寝たきりの親を抱えて出たくても出られないという人がいるようですから、そのような人に皆さんが学習したことをなんらかの形で伝わるとういいますねとか、地域の自治会の集まりや近所の生協の集まりの時などにも、仲間が広がるとういいますね。そうすれば、ここに集まっている15人が3人ずつ話していけば、45人分の勉強していることになるね、というような働きかけがあれば、実際に公民館につながる人が増えていくわけです。そして、新たなことを呼びかけてみると、一緒に行けなくとも呼びかけられて嬉しかった、呼びかけられて嬉しいと思った人が、毎月配られて来る公民館だよりを見て、先月とは違う印象で公民館だよりを見るということもありますね。

三多摩の公民館をみていて、単に人口が増えてきたからではなく、そういう学びの中での輪が広がったことを示していると思いますが、しかし、三多摩では、どうしても学習意欲の強い人が公民館に来る多数派でしょうから、そこに来た人がPTAや子ども会を通してでもよいから、もう少し広い人達にふれあえないだろうかとしきりに思います。

三多摩の公民館というのは、建物が大きく立派で圧倒されるというのではなく、大きいだけにそのスペースを生かし、入りやすさにいろいろな工夫がされています。それから、色々な種類の部屋が用意され、使いやすさに心がけています。それから講座も、趣味の内容からかなり高度な市民講座まで多種多様ですね。そして、全国的にも非常に優れているのは、今日のような市民自身が利用者としてのつながりを持っていて、あるところでは公民館利用者懇談会とか連絡協議会などのいろいろなつながりを持ってこのような学び合いの場を持っていることと、公民館の事業や運営について意見を述べたり協力したり注文したり、住民参加を実現しています。

それからだれもが立ち寄りやすく使いやすい、色々な学びが用意されている。それについて市民が提案や意見や協力が出来る制度を持っている。初心は変わらないけれど、初期の公民館から大いに発展した姿だと思います。

住民が参加して協力しているという姿は、三多摩が一番進んでいます、似たような姿は全国でいろいろな形で存在しています。でも数は少ないのです。

ところが公民館が始まった頃、お金も建物も無かった頃はほとんどが住民参加だったのです。

当時文部省が作った「公民館のすすめ」＝設置・運営についての文章には、公民館には住民による専門部を持つとよいと書いてあります。

当時の公民館はちゃんとした職員制度があるわけではありませんでしたので、住民

参加で事業を組んでいたのです。ですから、文化部主催の文化祭というと文化部員と協力委員で文化祭を開き、運動会は体育部が開き、講座は教養部が開くとか、図書の貸し出しは図書部員がおこなうなど、今風に言うところ「行政改革」で職員費を計上せず住民に転嫁するということになってしまいますけど、当時は何もかも不足していましたので、そのような形で出発していました。

しかも当時のもっとよい所は、公民館には公民館運営審議会ではなく『公民館委員会』があり、各地区各団体から代表を選びその人達が公民館活動を実施する委員会を開いていました。公民館委員会で館長を公選し、公選された館長に市町村長は辞令を出しなさい。館長は自分の手となり足となる職員を主事に委嘱しなさい。その際には、公民館委員会にかけて承認をもらいなさいと、民間で選び民間で作るのが公民館という指導を文部省がしていたのです。

ですから熱心な所は燃えに燃えましたが、不熱心で形式的なとりくみをした所や村長が威張っているような所は、戦時中の大政翼賛会がまた出来たのかという批判を受ける様な所もありました。地域によって様々だったので、後で社会教育法が出来たのです。社会教育法が出来たために、かえって住民参加・住民選出・住民本位という部分が無くなってしまいました。ただ、全部なくしてしまうとまずいということで、市町村立の公民館館長の任命は、予め公民館運営審議会の意見を聞かなければならないという一項目があり、教育委員会が一方的に任命出来ません。

うっかりすると「あっ忘れた」などと言われることもあるので、私の市の八王子の場合、前館長が変わるとき、公民館運営審議会で、予め委員会の意見を聞くということになっているわけだからこちらからこういう館長を選んでくださいという条件を出しておきましょうということになりました。ある人が決ってから「この人を押したいと思いますがどうですか」と言われたときに、ちょっといやだなと思っても反対とは言いにいくのですから、事前にこのような人を館長に選んでくださいということを、運営審議会の名前で出してしましましょうということです。諮問があつてから協議するのも一つの方法でしょうが。

いずれにしても、公民館館長を選ぶときに意見を聞かなければならないということが、麗々しく条例に掲げられているわけです。公務員を任命する際に住民代表の機関に諮りなさいと書いてある法律は、日本ではこれだけで、立派な法律です。何故、この法律が出来たかという、当初文部省が公民館を作りなさいと言っていた裏には、公民館は皆さんが主人公、だから運営の責任者はみなさんが選びなさいと言って始まったおかげなのです。

そうすると、今は地元で選ばれて公民館館長が腹心の部下を主事に選ぶなどという、時には偏ったりしますから、今のように公務員として主事が採用され、専門職として待遇され、その主事は主事同士研究研さんに励む。このようなシステムは大いに生かされてよいと思います。

しかし主人公である皆さん方が、常々寄り集まって館長や職員に皆さんの意見を伝えたり協議をしたりという、初心は忘れられてはいけないと思います。それでこそ、わがまちの公民館、わが市の公民館と言えるわけです。

4 どういう「学び」が求められているのか

表のように受動的学習、主体的学習、自己創造的学習というように、私が分けてしまうことはまずいのですが、あえて提案してみますから、皆さん方は「自分はこう思う」と、とらえなおしていただきたいです。

受動的学習というのは、用意されたものを受身で学ぶ。主体的学習というのは、自分はこれをやるぞと決めていく学習。そして自己創造的学習というのは、あれこれ学ぼうと思っていても、自分の学習が足らないと一つのことをよいと思っても、もしかすると不十分なのですね。偏ってしまうかもしれません。すると、絶えず自分で創造する＝これをやりたいけれどこれでいいのかな？とか、このようにやりたいけれどこれでいいのかな？これもやりたいけれどあっちもやった方がいいのかな？と自分の中で作っていく学習というのを、私は一番望ましい学習とおいてみました。これは私の意見ですから、皆さん方はそれぞれで検討してみてください。

では、受身的学習というのはどうかということですが、「新たに付け足す学習」としました。

例えば、公民館で平和問題の学習を用意すると、自分はあまり知らないから学びに行こうかな？とか、油絵教室に参加してみようかなという行動パターンで、これは悪いことではなくよいことなのですが、用意されたもので自分が足りないと思うことを埋めるわけですから自分が付け足す学習としたのです。実際にはこのような参加の形の割合は多いのですが、そこに留まっていいていいのだろうかと思って、書いたのです。

次に、「時代に合わせる学習」です、自分にとって何が必要なのかを問う内発的な学習ではなく、「みんながやっているから」「時代に遅れそうだ」といった、よそからの刺激や誘いに合わせてしまう。それから、自分を変える＝今までの自分に自信がない。子育てに不安があるからこの先生の話聞いてみよう、その際に、自分を変えるというのはかなり主体的ではありますが用意されたものから選ぶというのでは、学習の第一段階に留まるものだろうと思います。

だから私は、今日みなさんに「そんなことあたりまえよ」と言われてしまうかもしれませんが、もう一歩次の段階と、また一つ次の段階を提案してみたのです。

例えば、新たに付け足す学習＝英会話や太極拳をやっているが、今自分にとって必要なのは何かと思いつきながら選ぶ方が、もっとよいのではないかと、これが第一ですね。

公民館はいろいろな注文をつけられるからいいのですが、私もカルチャーセンターに行こうと考えたのですが、自分の都合のよい時間が無かったりで行けませんでした。

カルチャーセンターのプログラムを見ると、ありとあらゆるものがあるように書いてあります。そうすると、その中から選ぶと何か満足出来るのです。ところが、いつしか自分がいないということに気が付きます。自分でじっと考えたときに、自分がこれを学びたい、それはどこかにないかと探すのはよいのだけれども、いきなりカルチャーセンターのプログラムを見て、あれこれやりたいということになると、いつしかいっぱい教養を身に付けていても、「なんだ並べてくれたのはよその人か」ということになってしまいます。結果的に同じでも、用意されたものから選んで付け足すの

か、自分はこうしたいという気持ちがあつて何か選ぶのかは、ずいぶん違うだろうと思うのです。

結果的には同じでも、学習の構えとしては違うと思います。理屈っぽいようですが、新たに何か付け足す学習でも「自分にとって何が必要なのか」「自分は何を求めているのか」を考えてみるのが、大人の学びの本質だろうと思います。

それから、時代がそうだからと時代にあわせる学習だけではない。これが第二ですね。それを身につけてどうするのか、自分の子どもが言うことを聞かず悩んで子育てをしているとき、今時の子どもはこうにして子育てをする必要がありますと言われ、あゝそうだなと思つても、子育てに問題があるのは、子どもにも自分の側にも問題があるかも知れないし、家庭の雰囲気や学校の勉強についていけなかつたりいじめがあるのかも知れない。一人ひとりの子どもは全部違うわけだから、だれかが作ってくれた子育て講座でぴたり合うとは限らないわけで、自分としてはどこをどう切りひらき、何を学び、どのように働きかけたらよいかということをつかみとらなければ、本当の学習にはならないですね。

私も今から二十数年前、子どもが生まれた頃は「主体的学習」になっていなかったですよ。時代に合わせる学習しかしていなかった。「泣いても子どもはほっとけ。抱いたりすると自立心が育たない」という育児論に合わせて、ほっといたわけです。しかし、後になって育児書を読んだら、いつまでも泣かしておくで情緒不安定になると書いてあるではないですか。いろいろな育児経験を持ったおばあちゃんが思わず抱く、でもあまり抱いてばかりではいけないから時には突き放すというような姿を見ながら、どうして自分の親から一つひとつを学ぼうとしなかったのかと、思い出すと私は今でも顔が熱くなります。

子育てという人類の知恵は、時にはおせっかいに見えることもあります。いろいろな人の知恵に学び自分の足りないところはどこだろうと学んでいかなければいけないものなんですね。自分を変えようとして和尚さんや牧師さんなどのエライ人の話を聞いても、受身の学習だったらどう変えていったらよいか分からない。やはりつまるところ、自分はどんな人間になったらよいかという観点が必要だと思うのです。

今までのことを整理してみますと、今の自分には何が足りないのか、どんな自分になったらよいのかと、自分を見つめながら学ぶという主体的な学習が第一です。

しかし、一人だと思ひ違いや一人合点もあるし動揺もある。そこで、一人で学ぶことも大事だけれども、時にはグループとか学習会とかで相談し合うこともあるだろうし、仲間の中の人と人とのつながりの中で、知らずに教えてもらうこともあるだろう。絶えず自分を高めていく、自分が自分を作っていく。これが、自己的創造と書いたわけで、外国などでもよく言われていることで、生涯学習も本当はこれで無ければいけないとよく言われています。

自分自身で方向付けていく学び＝自分で作っていく学び、どんな自分を目指し、すなわち何をどう学ぶかを自分であるいは自分達で選びとり、自分であるいは自分達で力にしていける。このような学びが「大人」の学びではないかと思ひます。決して「おとなしい」学びではありませんね。疾風怒涛というか荒れ狂うというか思い悩むとい

うか、しかし楽しくてにぎやかで、自分もまんざら捨てたものではないじゃない。

考えてみれば、以前はあれもこれも大事だと思うたびに学んでいたが、今は「まてよ本当にそうかな？」と言いながら学ぶ自分になっているなと思っていくような学びというのが、公民館での学びではないかと思います。もちろん、公民館だけではないと思います。学校でもどこでもそういうことがあればいいと思います。公民館というのはだれでも利用できて、いろいろなグループがあって、グループの中だけで閉じ込もっている必要がなくて、他のグループとの交流もあって、特に地区館になると主事さんとはいろいろ話し合えるような仲になっていくことは、自分を確かめる場を持っていることになるんだと思います。

思い出すのは「やまびこ学校」で、著者の無着さんは後には教育評論家として有名になってしまいましたが、貧しい山形県の山村で、子ども達を相手に「この村やこの子らの将来の見通しだって暗いかも知れない、でも自分の頭で考えみんなで力を合わせて生きる子どもにしていくことが『学び』を育てる教師の仕事だ」という、観点を据えた立派な教育実践をしました。

やまびこ学校という作文集で大変な評判になったのは、今から40年以上前のことです。本の中に登場する子ども達は、ちょうど私と同じ歳なんですね。私もああいう教育を受けていたらもう少しまともになっていたかも……（と考えること自体が他力本願でだめなんですよ。）

あの時の卒業生の佐藤くんが、「私たちが中学校で学んだのは、いつも何故と考える。どうしたらいいか考える。みんなで力を合わせていこうということでした」と、答辞で述べています。無着さんは、やはり本物の勉強に向けて子ども達を育てたのだと思います。子ども達の中に本物の学習がこのように入っているのですね。このようなものが学びの本質だと思います。

5番目に書きましたが、みんなで何かを生み出し、それがもっとよくなるということが目指されていく、これが公民館の本質ではないかなと思います。みんなが日頃お友達でなくても、こういう時にうなづきあったり考えあったり、いや違うんじゃないかと思ったりするこのような営みもそうなのですが、みんなで支え合い励ましあうという関係が大事なのですね。

とりあえず、今日の話はこれくらいにして、後はみなさんと一緒に話を進めてみたいと思います。

〔文責 白梅分館 伊東〕



9 資 料



白雲山記

現在白梅分館で活動中のサークル一覧表

1992年1月現在

	サークル名	活動内容・目的など	利用状況
1	アップル	英会話	毎週木曜日午前
2	アーサスターズ	少年野球	不定期
3	あんぱんまん	幼児共同保育	毎週水曜日午前
4	おしゃべり文庫	地域文庫	毎週水曜日午後
5	ガールスカウト191団	ガールスカウト	不定期
6	菊民会	津軽民謡	毎週日月夜間
7	熊川子ども囃子連	囃子	毎週土曜日夜間
8	熊川スポーツサークル	健康維持	不定期
9	暮らしを考える会	日常の暮らしを考える	不定期
10	クレヨン	幼児の創作活動	隔週土曜日午後
11	圭穂会	琵琶	最終金曜日夜間
12	子ども手話	手話学習	毎週月曜日午後
13	混声コーラス	混声コーラス	隔週日曜日夜間
14	サークル七宝	七宝焼	隔週木曜日午前
15	サークルステップ	社交ダンス	毎週日曜日午後
16	詩吟同好会	詩吟	毎週土曜日午後
17	市民コーラス	コーラス	不定期*
18	三味線愛好会	三味線	毎週水曜日午後
19	熟陶会	陶芸	不定期
20	熟年ひろば	高齢者の話し合い	毎週金曜日午前
21	人生を歌おう会	高齢者のコーラス	月一回土曜日午前
22	親風会	民謡	月3回土曜日夜間
23	静華会	生け花	隔週水曜日夜間
24	誠吟会	詩吟	月3回金曜日夜間
25	たけのこクラブ	幼児共同保育	毎週月曜日午前
26	淡浙会	民謡	毎週月曜日午後
27	淡楓会	民謡	毎週月曜日夜間
28	チャット	英会話	毎週木曜日午後
29	チャンピオン	英会話	毎週土曜日午前
30	ちぎり絵の会	ちぎり絵	月1回不定期
31	つくの会	陶芸	不定期

32	手描き染めの会	手描き染め	隔週水曜日午前
33	簾細工愛好会	簾細工	隔週月曜日午前
34	永田橋陶芸同好会	陶芸	不定期
35	鍋一詩吟詩吟愛好会	詩吟	毎週金曜日夜間
36	鍋一囃子連	囃子	毎週日曜日夜間
37	ニュー熊川クラブ	野球	不定期
38	はだかんぼう	幼児共同保育	毎週月曜日午前
39	はながたみ	大正琴	毎週金曜日午後
40	パペット	英会話と人形劇	毎週金曜日午前
41	ピノキオ	幼児共同保育	毎週水曜日午前
42	ぴよんぴよんちびっ子	リトミック	毎週木曜日午前
43	ピンクッション	パッチワーク	毎週木曜日午後
44	福生FCイレブン	サッカークラブ	不定期
45	福生市ゲートボール協会	ゲートボール	不定期
46	福武剣道会	剣道	不定期
47	婦人のひろば	婦人の話し合い	毎週月曜日夜間
48	鵬城会	詩吟	毎週水曜日夜間
49	ホーイスカウト福生第2団カブ隊	ホーイスカウト	不定期
50	ホーイスカウト福生第2団ビーバー隊	ホーイスカウト	不定期
51	ホーイスカウト福生第2団BS隊	ホーイスカウト	不定期
52	みふじ会	民謡	毎週金曜日夜間
53	やよい会	民謡	毎週水曜日午前
54	ゆうあいふっさ	国際交流ボランティア	不定期
55	ゆりの会	健康体操	毎週水曜日夜間
56	陽青会	茶道	隔週金曜日夜間
57	ヨガサークル・オーム	ヨガ	毎週木曜日夜間
58	レザークラフト	革細工	隔週土曜日午前
59	レディーススポーツ	健康体操	毎週金曜日午前

* 定例活動が公民館本館のため



英会話サークル 「アップル」

<毎週木曜日 午前9時30分～11時まで>



主婦ばかりの初級英会話サークルです。中学生程度の会話を身振り手振りで楽しくおしゃべり（日本語？）しながら、英会話を学んでいます。

先生はアメリカ人男性で、ときどき日本語でジョークも言う、とてもユーモアのある先生です。

英会話は発音や単語の数より、知識・教養の広さが一番の会話上手と言えます。英会話を通して少しでもアメリカの文化を学んでいけたらと思っています。

名前の由来 apple（アップル）

先生の出身のミシガン州の木であることと、Aのつく（最初の意味）単語
いつもなかなか単語が出てこなくてアップアップしていること（ジョークです）

公民館白梅分館10周年おめでとうございます。

二小の隣にあるということで、常日頃アーサスターズの卒業式、総会、納会やミーティングまで良く利用させてもらっています。特に雨降りの時など、無理なお願いも聞いていただき大変助かっています。また、最近は印刷機も入り大いに利用させていただいています。我がチームも15周年を終え、今後も白梅分館を利用させていただく機会も多いと思いますので、よろしくお願いします。

少年軟式野球 U☆S アーサ・スターズのあゆみ

創 立 昭和51年10月 スターズという名で部員35名で結成。この年の11月に福生市少年軟式野球連盟発足に際し加盟する。チーム名をアーサ・スターズ（URSA-STARS：熊座）としたのは、昭和55年1月から。
チーム結成5周年を記念して、球団マーク（熊）、球団旗、球団歌を制作、球団機関誌アーサ通信がスタート。

現 況 代表、監督、コーチ（11名）、顧問（4名）
部員児童 1年～6年まで66名
日曜日、祭日を中心に二小の校庭で練習

チームの主な行事

必勝祈願初詣（1月） 6年生卒業送別会（3月） 定期総会（4月）
他球団とのナイター試合（7月） 夏季合宿・親子大会（8月）
納会（12月） 連盟等各種大会に参加

チームの方針

素直で明るくあいさつのできる子供に、そして、将来に向けて各部員の能力をのばし、野球を通じて競争に勝つ意欲を持たせると同時に、一人の落後者もつけないチームづくりを心がけている。

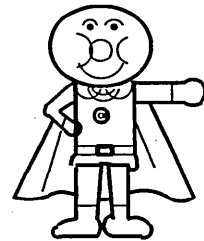
入団希望の方はご連絡ください。

代 表 中 原 昭 徳

TEL 51-8162

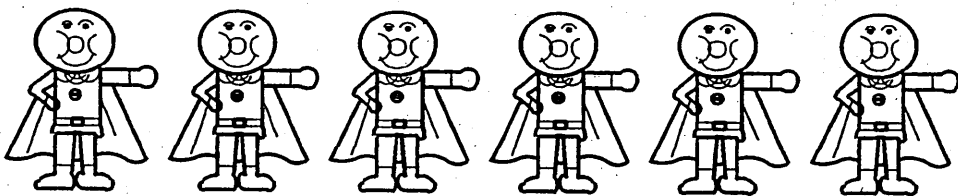
「アンパンマン」

活動日	毎週月曜日
時間	AM 10:30~PM 2:00
会場	白梅分館
活動内容	自主保育



“集団生活の楽しさを味わう”という目的で、「社会・自然・言語・音楽・絵画・運動」といったあらゆる分野で、年間を通して活動を深めようと、お母さん同士が事前に話し合い、具体的に進めています。

子供達も「今日は何やるの？」と目を輝かせてくれています。これからもいろいろとチャレンジしていきたいと思います。

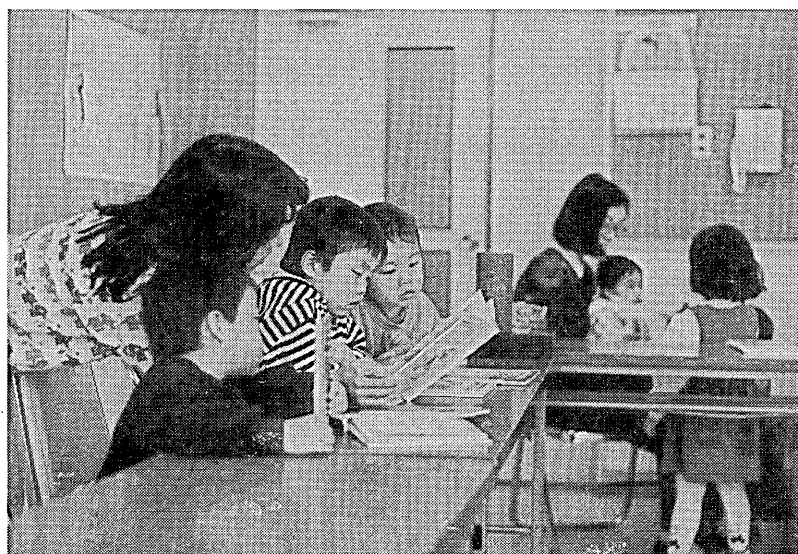


おしゃべり文庫(子供文庫)

「子供文庫」ってしてありますか？ 本の貸し出しを柱にして、読みきかせをしてもらったり、紙しばいを見たり、手遊びをしたり、自由に好きな事が出来るところです。

「おしゃべり文庫」の本は、あかちゃんから小学校中学年位までの子供向きです。

白梅会館には、昭和57年頃からお話しになっていますが、今「おしゃべり文庫」は、乳幼児をもつおかあさんたちの情報交換の場ともなっています。子供達は、元気に遊んだり、本を読んでもらったり、けんかをしたり、泣いたり、笑ったり大変にぎやかです。小さい子供のおかあさん、お暇をつくって一度のぞいてみませんか！それから小学生のお兄さん、お姉さんたちも大歓迎です。遊びに来てください。お待ちしております。



・文庫の開いている日時

毎週水曜日

午後2時～

4時30分

・文庫の場所

白梅会館(学習室)

連絡先 高橋

TEL 52-1632(校)

社団法人・ガールスカウト日本連盟

東京都第191団

* 活動の歴史

ボーイスカウト運動の創始者、イギリスのバーデン・ボウエルが、少女達の希望にこたえて、1910年に始めたものです。

日本では、1920年に始められ、現在6万人の少女と3万人の大人が全国で活動しています。

* 活動目的

少女達が精神的・道徳的価値を学び、進んで奉仕し責任ある市民として人類の平和と幸福につくすことができる人に育つよう、自ら学ぶ楽しい機会を与えることにあります。

* 活動内容

自己開発・人とのまじわり・自然とともに、の三本の柱にポイントをおき、年間の活動を行います。

(さまざまな体験、広い地域の人達との交流、海外派遣等)

- ・ 奉仕活動 (老人ホーム訪問、募金、清掃、七夕、市民体育祭など)
- ・ 野外活動 (キャンプ、ハイキング等)
- ・ ミーティング (クラフト、諸問題等)

* 活動

土・日曜日を中心に月2～3回

* 入団者募集中。希望の方は以下までご連絡ください。

団委員長 鮫島 正子 TEL 52-7141

写真 1 老人ホーム訪問

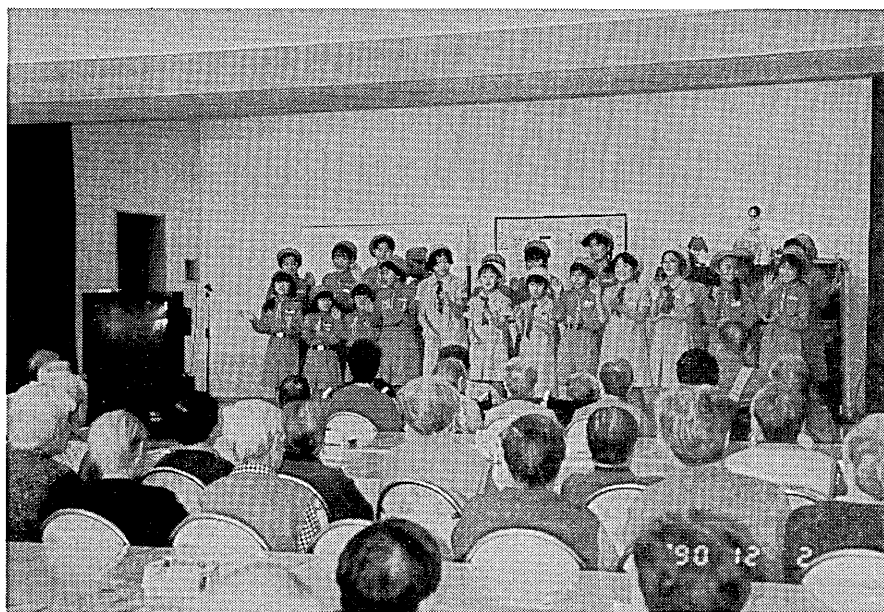


写真2 日の出山ハイキング



菊民会

菊民会56名の会員のうち、9名程で白梅分館の開館と同時に利用させていただいて居ります。みんな仲良く楽しくマイペースで稽古に励んで居り、人の輪を大切にしています。

津軽三味線・尺八・太鼓に合わせて歌の個人指導を行っており、家庭から解放されたひとときは憩いの時間・場所であり、一日の疲れも忘れます。そんな雰囲気大切に稽古して居ります。

毎年5月には白梅会館利用者発表会、春秋には福生市文化連盟の発表会、そして秋には菊民会のおさらい会と、日頃の稽古の成果を披露できることも楽しみの一つです。

みなさんの中で、三味線と民謡の唄を習ってみたいと思う方がございましたら、毎週日曜日の夜6時～10時まで、唄の場合は毎週月曜日の夜6時～10時まで練習をして居りますので、稽古している場所に遊びに来てみてください。



熊川子ども囃子連



みなさん、熊川子ども囃子連をご存じですか？

昭和61年4月に親子20名で発足したのが最初でした。その後、メンバーの入れ替わりはありましたが、社会人となった子や中学生を中心に毎週土曜日に練習し、その成果を地元の夏祭りや春秋の禮大祭に発揮しています。去年は八王子祭りやびっくり市にも出演しました。

今後も練習を積み重ねて、技を向上させると共に、みんなで楽しい囃子連にしていきたいと思っていますので、ご声援をよろしくお願いいたします。

くらしを考える会

私達「くらしを考える会」は ヤングミセスから 年配のミセス達の集まりです。

定期的な 活動は ありません。

活動を 始めて一年を、ようやく過ぎたばかりのグループですが、私達のグループを中心に 少しでも 地域の方々にも自由に 参加していただけたらと思い活動を はじめました。

いままでの 活動内容は 捨ててしまうような トレー・牛乳パック・ハリ針ハンガーを使って使用できる物に。

幼児教育セミナー・菓子・飲料水添加物セミナーを開催してきました。

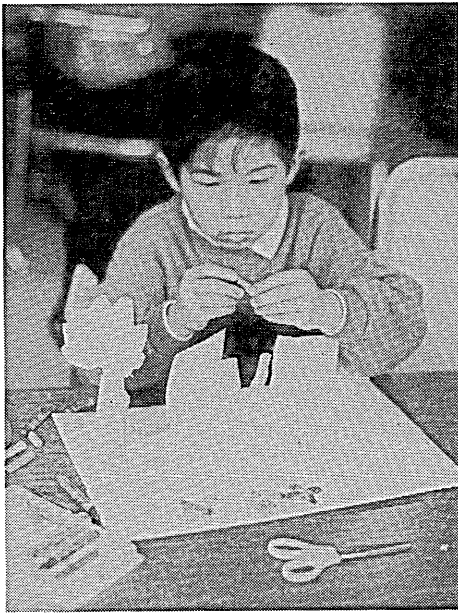
これからも サークル活動を おすすめしていきますので気軽な気分で参加しませんか。

クレヨン

クレヨンは、昭和59年11月より、創造性豊かな子に育って欲しいと願う母親と、絵画制作の大好きな子ども達の集まったサークルです。

現在は、小学生・幼児（4歳から）合わせて20人程の子ども達が、月2回の土曜日の午後2:00～4:00頃まで、楽しく絵を描いていたり、作品の制作をしています。

作品は、一年に一度世界児童画展に出品されたり、白梅会館利用者発表会にも毎年力作を展示しています。



←絵画 町づくり（幼児）



造形ミニミニ展覧会→

みんなの大好きな先生は、青木きみ先生。

クレヨン3代目の先生です。20代半ばぐらい

の若い先生ですが、日頃何かと子どもをせきたててしまう母親とちがい、一人ひとりのペースを大切にする大変包容力のある先生です。

内容もとても充実していて、親も子も毎回楽しみにしています。

先生からの一言

とにかく楽しくやりましょう！！

未来の絵かきさん達へ

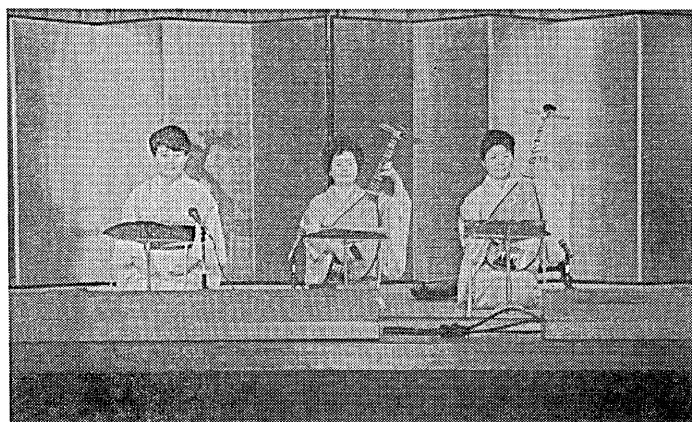
琵琶主穂会 白梅

私達のサークルは、平成元年9月に会が設立されました。毎月第4金曜日の夜7時から練習をしています。

会員の中の一人が筑前琵琶の音色に魅了され、教えてくださる方を市内はもちろん各方面を調べ探すがなかなか居らず困っていました。そんな時に筑前琵琶の演奏では日本でも第一任者とも言える広瀬圭穂先生の演奏がNHKで放送された



のを聞き、また舞台上素晴らしい琵琶の演奏を拝聴した後、広瀬圭穂先生と親しく話す機会が到来し、仲間を募り無理を覚悟で3日日参し、外に一切教えに出で居られない先生に懇願し、白梅分館まで出かけていただき教えてもらうことの了承を得ることができました。市内で琵琶の優雅な音質に気軽にふれることはまたとないチャンスと訴え、当初から白梅分館を利用してのスタートでした。

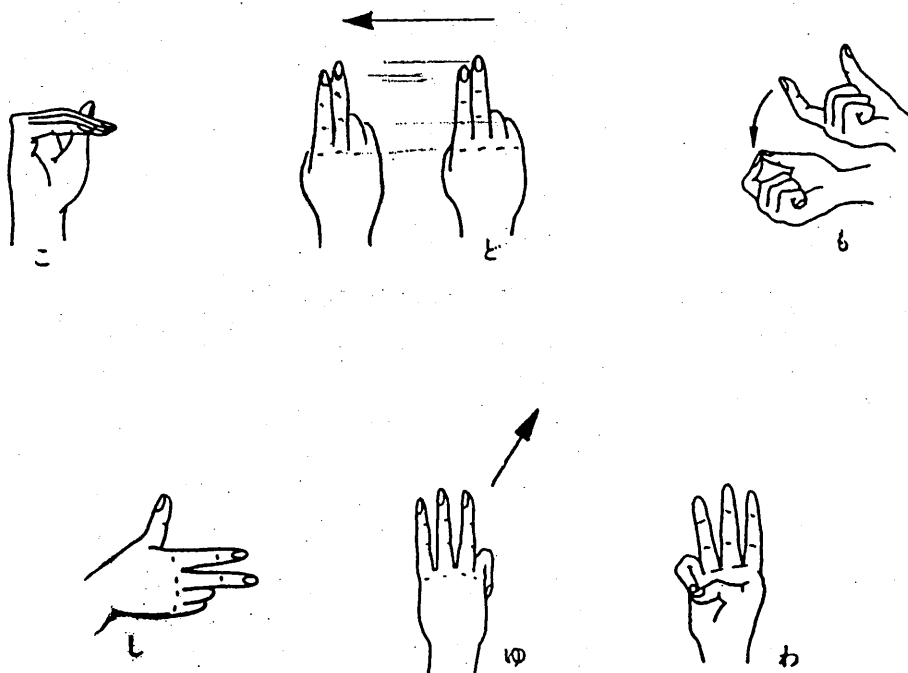


現在、道具類は使用せず琵琶歌を主体に古典物、現代にアピールする先生独自の作曲品をととても楽しい雰囲気の中で練習して居り、習い始めてから日は浅いのですが、もう各地で会員一同が活躍を始めています。新しい仲間は、いつでも

歓迎します。

白梅分館への要望としましては、各会の紹介ビデオを常設しておいていただければと思います。

子ども手話



毎週月曜日 午後2時30分～4時00分

時間のある方は、ぜひ一度のぞいてみてください





こんにちは、福生混声コーラスです。白梅会館10周年 おめでたいございます。
私たちのサークルの歴史は、長すぎて(?) はっきりしませんが、現在の最古参の
メンバーが 15年のコーラス歴ですから、20年ほどになるのでしょうか。

はじめは、福祉会館で歌っていました。そこは、ピアノがなく、柴田先生の
アコーディオンで歌った記憶があります。

次に、市民会館の音楽室を借りられるようになり、明るく立派な部屋で歌える
幸せを味わいました。

その次は、松林会館で歌うようになりましたが、毎回、メンバーが なかな
か そろわず、苦しい時代でした。柴田先生に励まされながら歌いつづけていた。

会が希望に燃えて歌いはじめたのは、オフオンに間もない白梅会館に
移ってからでした。白梅会館の近くには、歌の好きな方がたくさん住んで
いらっやるのでしょうか、メンバーも一人、また一人と増えてきました。お腹の底
から声を出し、仲間の声との響きあいを快く感じて歌ううちに、心も通いあうよう
になります。2週間に1回のコーラスが待ち遠しくなりました。

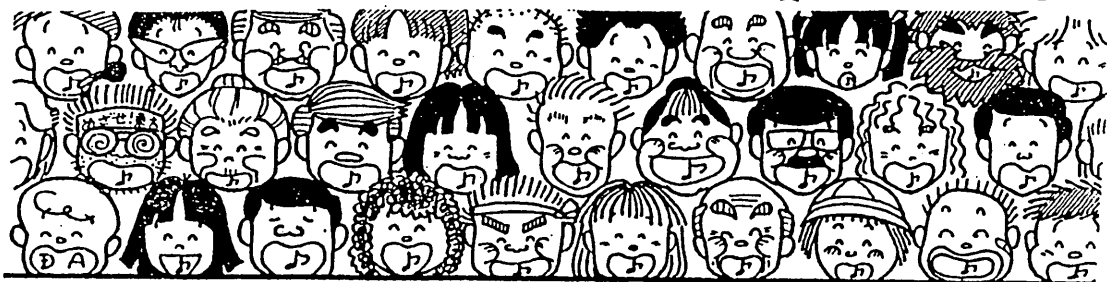
こうした活動ができるようになったのも、白梅会館のおかげです。1日の
いろいろな仕事を終えてやって来る私たち、夜の利用者を笑顔で迎えてくれ、
こまかい心配りをしてくれる職員の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。
これからも どうぞ よろしく お願ひいたします。

福生混声コーラス

隔週日曜日 午後7:30~9:30

連絡先

榎本 51-6556



サークル七宝

私達のサークルは、白梅分館で主催された七宝教室から始まりました。今から6年前の事だったと思います。

七宝焼というのは高価で難しいという印象でしたが、趣味としては意外に金額が張らず、簡単にきれいなアクセサリ等が出来上がります。

手軽なものから手の込んだものにつきつめていけば難くなるのはどの道も同じですが、きれいなものを作る楽しみは格別なものです。

活動は月2回ほど。会員も3名と少ないのですが、きれいなガラスの輝きに励まされ、出来る限り続けていきたいと思っています。



テーマ：わたしのサークル

名称：サークル「ステップ」……………（社交ダンス愛好者の輪）

白梅会館設立10周年おめでとうございます。

記念誌発行にあたり貴重な紙面をお借りし、「わたくしのサークル」の私たちと会館との出逢い、わたくしたちのサークル活動のテーマと方針について、紹介させていただきます。

当サークルの歴史はそのまま白梅会館の歴史であると云えます。その頃福生市在住の社交ダンス愛好者は中央公民館を足場とし講習会を中心としたサークル運営を主流として活動して居りました。

これが当時のダンスブームを反映し年々増加する愛好者に手狭となり、また当然のことながら講習会・教習所で受けたレッスン等が復習できる会場・独習の場としての会場等のニーズを生み、これ等多様化する内容に対応出来ない結果となりました。

これ等はやがて地域的・同好的なつながりを持つグループ化へと進み中規模な各地域別公民館の利用が解決の手段として求められてきました。

こんな折、当熊川地区にも立派な白梅会館が完成、我々が待ち望んでいた適度な大きさをもつ集会室が有ること知りこれを利用させて頂く事になりました。

ここに主催団体の登録名称として名付けられたのがサークル「ステップ」であります。

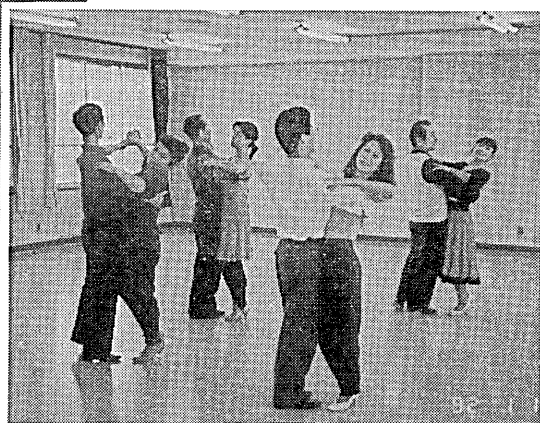
以来、当サークルは創立時の意思を尊重し活動の母体をベテランからビギナー迄幅広いメンバーにより構成・自主的な練習・復習の場として、またベテランのアドバイス・教習等を通して、より高い技術の習得・レベルアップの場として、規律ある自由な雰囲気の中かで活動を進めて参りました。

今ここに白梅会館と共にサークル創立10周年を迎えるに当り今後より以上に地域社交ダンス愛好者の発掘と交流に努め、特定な年齢・レベル・カップル構成等に制限を設けず、広く門戸を開き活動の輪を広げる様努力する、と共にさらなる白梅会館の設備の拡充と発展を期待したいと考えております。

会長：渡辺定司 代表：原島一夫（文責） 以下登録会員28名

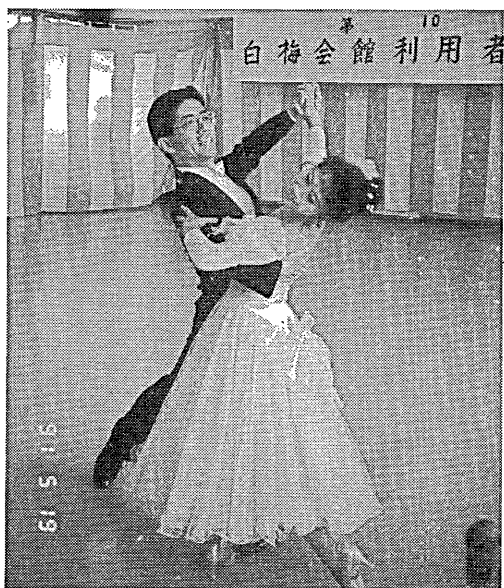
サークル「ステップ」活動状況

1、ある日の練習風景



2、白梅会館利用者発表会「演示のひろば」

出演風景（デモンストレーションダンス）



野沢・石井組による「ワルツ」



渡辺・橋本組による「タンゴ」

詩吟同好会

私のサークルは、日本の伝統で共通の詩吟道を愛する人達の集まりです。地元で白梅分館が建設され、早速利用させていただき、毎週土曜日の午後の一時、和室を利用して楽しく吟詠の稽古に励んでいます。

毎年開かれている「白梅分館利用者発表会」にも必ず参加しています。（もう少しよい舞台が常設されていたら……と思っています）



福生市詩吟剣詩舞道連盟会員として、毎年福生市の市民文化祭にはこぞって参加し、他流の方達と吟道を通じて交流して居ります。
吟声は小ホール一杯に！

サークル詩吟同好会（正式名吼山流詩吟道碧州吟詠会）は、発足以来今年で25年目を迎えました。はじめは舞台に立つと目



はくらくら足はぶるぶるでしたが、多くの経験と種々の大会に出場しよい結果を収められて、会員一同で喜び合うことも多くなりました。これからは白梅分館の弥栄と共に、私のサークルも人の和と吟の精進をモットーとして頑張ります。

福生市民コーラス

私達のコーラスグループがスタートして、今年で15年になります。福生市はもとより、秋川市・羽村市・五日市町などからもメンバーが集まって来ています。

年齢も30代～60代と幅広く、共通しているのは歌をうたうことが3度の食事と同じくらいに大好き、そして必要なのかな？ということでしょうか。

ここまで活動が続けられたのは、指導者に恵まれているから、そして地域の方々の協力に支えられて来たからです。

演奏会で20数曲歌い終えた喜びが、実生活の活力の源になっているのだと思います。

主な活動場所は公民館本館ですが、ときどき白梅分館を利用しています。玄関の自動ドアを過ぎ2階の集会室へ向かう階段の途中で、ふと母校に帰ってきたような錯覚にとらわれてしまいます。いつまでも、そんな暖かな白梅分館であってほしいと思います。

福生市民コーラスのあゆみ

1976年4月 福生市教育委員会主催合唱講座 講師：小林光氏

10月 自主サークル「福生市民コーラス」誕生

1977年7月 福生市民会館こけら落しの行事に参加

9月 ボニージャックスとジョイントコンサート

1989年10月 特別養護老人ホーム「サンシャインビラ」にてコンサート

1990年10月 同 上



毎年、定期演奏会を開催。今年14回目を予定しています

三多摩合唱祭に参加日本のうたごえ祭典全国大会にて入賞

市制20周年記念事業「第九合唱」にメンバーの多数が参加

以上の他に、市主催の「市民文化祭」「公民館のつどい」、音楽愛好者連絡会主催の「福生市民音楽祭」に毎年参加

三味線愛好会

三味線を弾いてみたい。

美しい音色に憧れて、グループが出来ました。

なかなか自分の思うようにならない楽器です。

?年か経ちましたが、でもみなさんそれなりに上達されたと思っています。
仕事をしている方、主婦の方、子育ての終わった私達、孫のために今度は素敵なおばあちゃんでありたいと思って居ります。



熟陶会

私が熟陶会に仲間入りさせていただいて丸3年過ぎましたが、最初6、7人だった会員も、現在では26人と盛況です。したがって作品を焼く窯の方も忙しく回数を重ねるが、作品の方はなかなか出来映えのしない失敗の連続です。しかし、不思議なことにその都度「今度こそもう少し良いものを作ろう」と言う闘志みたいなものが沸いてきて、再度挑戦をして見るものの未だ思うような作品が出来ない。

雑念を忘れ、土をこねたり丸めたり伸ばしたりする感触に、小川で遊んだ遠い幼時の頃が蘇る。

土の塊が、お皿・どんぶり・湯呑・花瓶などに形を変え、どうか割れずに焼けますようにと、踊る胸を押え石油窯で炎の具合を見ながら焼くこと四時間あまり、八百度の温度で火を止める。

出来映えを想定してあの色この色とゆう薬を選定し、慎重にゆう薬掛けしていいよ本焼き。

約8時間で1250度まで窯の温度を上げるが、その間、同好の志のよもやま話が楽しい。

期待と不安が交錯する一瞬、窯の蓋を開け喜びの歓声と思わぬ色具合に考え込むこともある。陶芸の出来栄えの不思議さや失敗は、次回への闘志に結び付く。

やがて、我々の同好の仲間達からも立派な家宝と、数千年後の国の重要文化財が誕生するかもしれない。

まずは、みなさんも実際にやってみてはいかがでしょうか。

熟年ひろば

～もっと輪をひろげたい～

私が「熟年ひろば」に参加したのは、昭和61年の春ころだったと思います。福生市の広報に記事が出ていたのを見て飛び込みで参加したのですが、正直言って全く未知の所へ紹介もなしに入るのですから、かなりの勇気を必要としました。

以来約6年、今では毎週金曜日の定例会が楽しく、待ち遠しくてなりません。現在では、つくづく参加して良かったと思っています。

ただ、今日の熟年ひろばの現状を見ますと、男性が少なく毎回女性の方の3分の1程の参加しかありませんし、メンバーも固定化してきて新参加の方がほとんどないのは、大変残念です。

今年はもっともっと参加者を増やしたい。それには、現メンバーの一人ひとりがクチコミで勧誘することが有効な方法ではないかという気がいたしますが、みなさんのご意見はいかがでしょうか。

それから、会合の進め方中身なども若干マンネリ気味のようにも思えますので、みんなでも話し合って出席者の増加につながる方法や中身を考え、実行に移すといったこともあってよいように思います。

人生をうたおう会

白梅会館で開かれている熟年ひろばから
“人生をうたおう会”が結成されました。

民謡とコーラスと二部編成で歌っておりまして
今では山下也子先生の歌唱指導のもと
童謡・唱歌と元気な声をうたっています。

時代は過ぎて行きますが

美しい曲は残ります。

これから歌い続けて
行きたいと思っています。



親風会

昔から歌い継がれた民謡は
一つ一つが叙情詩で、穏やかに
表現され、趣も格段と違うのに
はなりのしやうか。



磐梯一泊旅行にて。

わが親風会は、昭和五十六年
三月発会、斎太郎節を第一声に
週末の一時、三味線、尺八に合
せて小節きかせて拾式年目を迎
えます。ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
イ新聞多摩版に親風会が掲載さ
れました。が、発表会は苦手でも
反省会には全員参加、そんな零
回気の基に、和気あいあいと創
意工夫を凝らし楽しんでいきます
。発表会も年々盛ん、昨年は、
秋川のキララホールで、章風会
十五周年記念大会に賛助出演し
たり、当会の十周年記念式典が
開催され充実した一年でした。
お互いに研さんと親睦を深め
心身の活性化に役立ててゆきた
いと頑張っています。
H3、12記

静華会

私たちのサークルは” いけ花”

振り返ってみますと、昭和36年熊川婦人学級の学習の一つとして華道部が発足、折しも熊川神社境内に明神会館が完成したのを機会に、お稽古が始まりました。

当初は20名位の参加者でしたでしょうか。月2回のお稽古が待ち遠しいくらい、和気あいあい楽しい集いでした。

そして、昭和55年公民館白梅分館が開館しました。地理的に便がよく” 私たちの公民館” という事で、いち早く自主グループ静華会として参加し、白梅分館とともに現在に至って居ります。

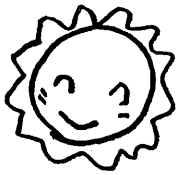
発足以来32年、山田玉静先生の変わらぬご指導をいただいて居ります。会員の方は、母から娘へ姑から嫁へと二代を継いで居られる方もあり、当初よりの古狸あり、新会員も多数居られ、地域の公民館ならではのものと、嬉しくもありがたいことと思つて居ります。

明神会館当初の会員の赤ちゃんが、今は立派なお父さんになって居られるとか30余年の重みを改めて感じて居ります。花を愛し、美しさを求める心が支えてくれたものと思っています。これからもこのサークルを大切に育てていきたいと願つて居ります。

白梅分館の利用者発表会には、日頃の成果を皆様に見ていただいて居り、この発表の場を作ってくださった公民館職員の皆様に深く感謝して居ります。

ご希望の方はいつでもお出かけください。お待ちしております。





ハイこんにちは、“たけのこくらぶ”です。

私たちのサークルは、0歳から幼稚園・保育園就学前の子供たちとお母さん合わせて30名で、毎週10時～12時まで、歌をうたったり、踊ったり、制作をしたり、楽しく遊んでいます。そして、その中で、家事や育児のイライラを発散し、子育ての悩みを話し合いながら、親子のコミュニケーションを、大切にしています。

お友達募集中です。いつでも気軽に、遊びに来て下さい。

淡浙会

楽しい民謡サークル淡浙会です。

健康のために、おなかから大きな声を出して、三味線・尺八に合わせて歌ったり、お茶を飲みながらおしゃべりに花が咲く楽しい会です。

毎年1回おさらい会を開き、また、他の会にも年4、5回出席させていただき、大変勉強になっております。

親睦と交流を深める楽しい会です。どうぞお気軽に入会ください。

練習日	月曜日	午後2:00~5:00
連絡先	田 中	TEL 51-3078



淡楓会

私達の民謡会は、昭和53年5月、大谷光寿先生を迎えて明神会館で歌いはじめたのが、現在まで続いています。

大声を出して歌うことで、健康増進・ストレスの解消になり、人の心を和ませるメロディの民謡にみんなが集まり、林喜久子会長を中心に、寒い日には石油ストーブ2台で板の間にごぞを敷、机を並べて昔の寺小屋のようにして歌の勉強をしました。

一番先に習った曲は、あんこ節「エーエ東京大島は針金便り、エンヤラヤノヤ」で、今は簡単に歌えますが、当初は難しくて覚えられず、一ヶ月経っても一人で歌うと曲になりませんでした。今になってみると、大谷先生が苦勞していたと思います。

それから、当初40人近かった人数も徐々に減り、現在は9名です。大谷先生が病気になる会も解散寸前になりましたが、現在の安西淡楓先生に教えていただくことになって、すでに10年経ちました。この間、淡楓会15周年に参加し、舞台にせいぞろいして写真を撮影しました。

暑い日も寒い日も、気持ちよく利用でき民謡の勉強ができる白梅分館には感謝しています。



ちぎり絵の会

平均年齢60歳、精神年齢20歳の私たちのグループは、会としての歴史は浅いのですが、いつも若々しく落ち着いた会です。

和紙のやわらかい感触と日本的なところに魅せられて「ちぎり絵の会」として発足したのは、昭和62年9月でした。白梅分館を利用させていただき、ありがたく思いました。

月1回原則として第一月曜日午前10時から午後4時まで昼食に家に帰る方、お弁当を持ってくる方、一日和紙をちぎり四季の花・景色などを色紙に貼って作るのですが、時間の過ぎるのも忘れ夢中になってしまいます。

初めの頃は和紙をちぎるのに指先に力を入れ身体も固くなり、先生に優しくと注意もされました。でも出来上がった時の喜びは格別、また家に不出来ながら飾って眺める時に何とも言えない満足感、一人悦に浸る時もあります。また、心の和む一時でもあるのです。

家に持ち帰り作るということではなく、その場で出来上がる様にするので気分も軽くなります。

仲間の方達とのコミュニケーションと、和紙をちぎり指先を動かすことで頭の老化防止に役立てばと思い、上手下手ではなく、続けることが大切なところからも前向きに楽しく続けたいと思います。



チャット

福生市の広報でふと目にした、市主催の英会話講座の記事から始まって早5年。あつという間に経ってしまいました。

最初の頃は、全員学生時代からかなり時を経ていたので、英会話どころか簡単な単語もすっかり忘れており、冷や汗の連続でした。

熱心なチュン先生の指導と職員の伊東さんのサポートにより、あつと言う間に3ヶ月が過ぎこのまま終わってしまうのは惜しいと有志達で話し合い、自主運営を始めました。それが、今日まではそばそと続いております。

サークル名「チャット」は、英語で少しでも「おしゃべり」が出来たらどんなに楽しいだろうという願いを込めて名付けられました。

先生の努力のおかげで、近ごろは先生のお話しもずいぶん分かるようになり、少しずつ「おしゃべり」に近づいています。

毎週、各自が身近な出来事や印象に残った事などを自分の英語力で話しています。時には、唯一人の男性のメンバーから政治や経済の問題なども飛び出して、びっくりしてしまうこともあります。話を通して日米の考え方や文化の相違あるいは共通点など、毎回新鮮なインプレッションを得られ、とても勉強になります。

何度もメンバーが減り存続の危機も経験しましたが、残りのメンバーの続けていきたいという熱意で、切り抜けて来ました。

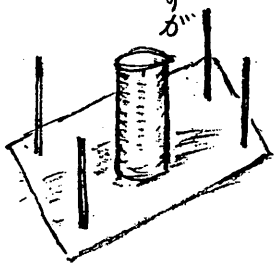
先生のお宅でのクリスマス会、横田基地でのクラフトバザーへの招待など、楽しい思い出も一杯。

みなさんも、ぜひ一緒に学びませんか。お待ちしております。

陶芸つくの会

私達の会は陶芸つくの会です。現在会員は五人です。昭和五十八年に公民館主催の市民文化教室にて週一回、全十回の講習会に出席し、陶芸家此田先生の指導を受け始めました。当時は三人もいました。公民館の片隅でテントをはって、建物が窯を出して素焼、本焼しました。窯は重くて、出し入が大変でした。雨が降ると、テントに雨水が溜まり、テントが倒れようになりまして。その水を棒でつき落したり、冬は寒く、夏は暑く大変でした。その後数年して白梅会館に建物が出来て、窯を買って頂き、雨風に心配なく焼く事が出来るようになりました。作品は花瓶、茶碗、皿、コーヒーカップ。本焼は年五回ぐらい。最初は本焼が終って、あくる日窯を開ける時の楽みと、不安が何となく言えない気持ちです。色が出なかったり、割れたり、歪んだり、気に入った作品はいくつも出来ません。でもそれを積み重ねて十年近くになりました。小さなサークルですが皆で力をあわせてまだまだ続けて行きたいと思っています。さてつくの会の、つくですが窯で作品を焼く時に窯に陶板を入れ、その上に作品をのせて、板の四隅みに柱みなりに置いて次の板をのせて、積みかさねる時に使う物を、つくと言うのだそうです。その私達のつくも年々伸びて、一年一センチ、十年十センチ伸びたかな？

秋の市民文化祭には福生駅に隣接して出来ましたプチギャラリー、夢のギャラリーに作品を展示する事が出来ました。バザーもさせて頂きました。その売上金も少いですが、市の福祉に用立て頂きまして、ちょっと気分を良くしている此の頃です。



手描き染めの会

知人の方に手描き染めを見せていただいてから、ずっとあこがれていました。私も挑戦してみたいと思いつつ、月日ばかりが流れてしまいました。それでも平成3年10月、会員7名の方とご一緒できましたので、岸田先生のご指導の下で発足させていただきました。

近くに白梅分館があり気軽に利用させていただくことになり、本当にありがたく思っております。

今まで、私は絵とは全く無関係で絵を描くことに自信がなく迷いましたが、岸田先生の「大丈夫ですよ、描けますよ」との優しいお言葉について、その気になって教えていただくこととなりました。

初めての絵は「椿の花」でした。布に描けた時の素晴らしさにうれしく、胸がどきどきし本当に感激致しました。まだ始めて3ヶ月。日が浅いのですが会員みんなで頑張り励ましあいながら、毎回活気にあふれています。

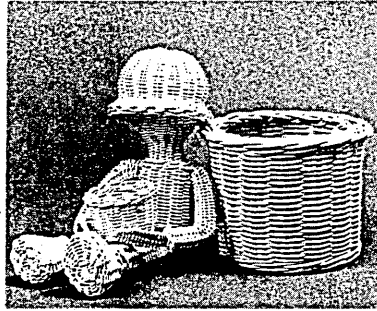
「手描き染めの会」、横文字、カナ文字の多い近年、あたたかくなごやいだこの語感が大好きで、大切にしたいと思います。

戦争を乗り越え、結婚後も家事育児にと頑張って参りましたが、二人の子どもも手を離れてふと自分を振り返った時、何の趣味もない自分に気が付きました。

その時、白梅分館があり色々なサークルがあることを知りました。それまで外に出かける機会が少なかった私には、サークルに入ること自体、とても勇気のいることでした。やっとの思いで白梅分館を利用させていただくことになり、今では豊かでゆとりのある生活に生きがいを感じて居ります。

白梅分館の職員さんも親切で気さくな方々なので、気楽に利用させていただいて居ります。今後ともよろしくお願い致します。

籐細工愛好会



活動の歴史

白梅分館が開館してから少し経って、たしか昭和58年3月ですから今年でちょうど10年になります。

はじめは籐細工の好きな人同士、昭島の会場で2～3年の間手ほどきを受けていましたが、白梅分館が利用させていただけるということが分かり、福生の人達で活動しようということになって、発足したわけです。

活動日

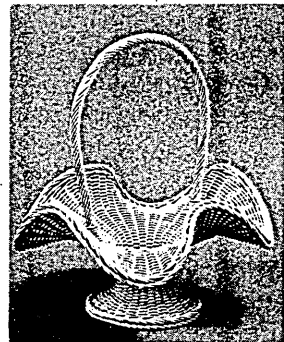
毎月第1, 3月曜日

隔週ということで、無理なく編むことができます。日常、身の回りで役に立つ小物からインテリアまで、幅広く作成しています。

今までの思い出

夏休み白梅分館で小学生を対象に籐手芸教室・籐手芸の教室を開き、また、いろいろな地域（立川・秋川）での籐手芸教室で、みなさんと籐編みを楽しんだ事です。

白梅分館での利用者発表会では、毎年その出品のために頑張って作ったものが多数あります。利用者発表会は私達の励みでもあり、そのために少しずつ上達していく様に思います。



永田橋陶芸同好会



作品作り風景

- ・ 陶芸好きな人が集まって7年目！
- ・ 作品作り
毎週金曜日
午前9時～午後4時30分
- ・ 会場
島田宅
- ・ 焼成
白梅分館

平成2年までは友達に焼成してもらっていましたが、やっぱり仕上げまで自分達でやらなくては駄目だと気づき、白梅分館で焼成しています。

出来上がった作品を見て喜んだりがっかりしたり？…………

とにかく楽しくやっています



初めての火入れの日

鍋一詩吟愛好会

地域に根付いた活動を目標に、一つの趣味を通して語り合うサークル活動がスタートしてから、気が付いてみると早くも15年が経過、歳月の流れの早いのに驚いている今日この頃です。

振り返ってみますと、サークルにとって大変残念なことです、今は故人になられた東山さんと現在連盟の理事をしている鶴本さんの要望をいただき、サークルとしての活動がスタートしました。

最初の頃は、少し厳しさを感じながらの週2回という稽古の中、吟に心が集中し楽しさを味わいながら過ごした思い出を懐かしく噛みしめております。

もともと吟の愛好者の集まりでもあり、順調に進んで行く中で、地域の方に少しでも多く参加してもらうために、気軽に利用可能な場所をさがしていたところ、白梅分館がオープンという条件に出会い、今日まで利用させていただいて居ります。日頃、地域文化の振興に対する配慮とご支援に感謝しながら、白梅分館を拠点とした活動を展開していきたいと考えて居ります。

白梅分館利用についてはいろいろの要望がありますが、今後機会をとらえて提起させていただき、開館以来10年という一つの節目を迎え、改めて本来の公民館について見直していきたいと考えて居ります。

はだかんぼう

1989年11月からの白梅会館にて行われた『楽しい子育て広場』に参加した親子が中心となり、人数を増やして翌1990年4月より共同保育サークル“はだかんぼう”が誕生する。(0才~4才)

水、木、金頃を活動日としたかったが、すでに白梅分館は満員。

日曜の翌日で、ちょっと辛いものがあるが月曜日に活動日を設定する。

週に1回、10:30AM~2:00PM、お弁当を持って集合する。

ジュース禁止以外は、それ程の決まりもない。毎月、担当者を決めて1ヶ月のスケジュールを作成する。寒くなってからは、もっばらシチュー、カレー、うどん、すいとん、とん汁などを作りながら遊んでいる。

子供達もおだんごを丸めたり、うどん作りを手伝ったりと“ねんど気分”で楽しんでいる。

最初の頃は、本を読んでもくれるのを静かに聞くのもやっとだったが、この頃は興味を持って本読み当番のお母さんの回りを囲んで座っている。

先日、子供が和室で走り回っていてボードの角にぶつかり、目にケガをした。幸い大事には至らず、3年目に入るところで改めて気持ちを引き締めていこうと、皆で確認し合ったところである。

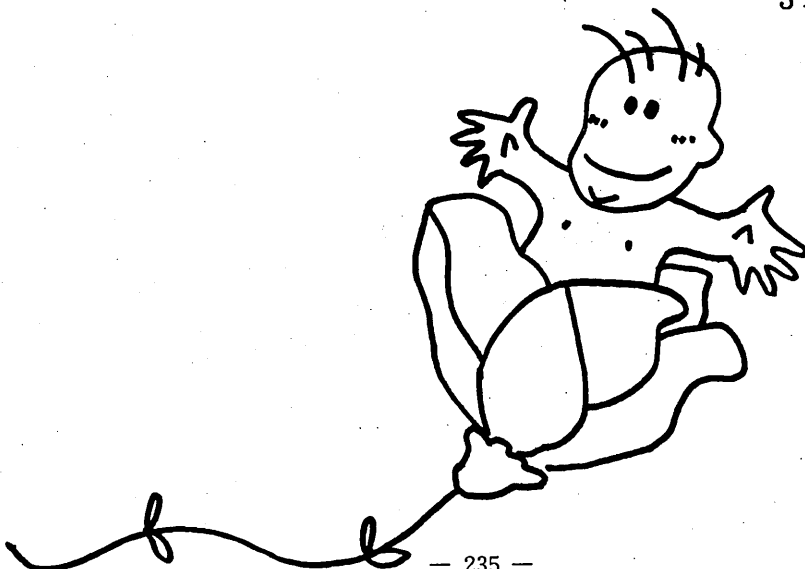
最後に白梅分館に期待することとして、もう少し幼児のいる利用者にも

『利用者発表会』などに進んで参加できるよう配慮いただきたい。

夜に利用される方々と昼に利用するサークルとの上手なパイプ役になって話を進めて頂けるようご努力願います。サークルメンバー・・・大人15人、

3才以上15人、

0才以上9人、



大正琴 花が長み (白梅)

白梅会館十周年記念おめでとうございます
大正琴の大好きな仲間が集まって楽しく和
気あいあいの仲で練習しております

美しい音色は楽しく和やかな触れ合いの中
に生まれそれぞれの心が一つになつて

初めて素晴らしい演奏になるものと考えて
います 認定試験などもあり励みにもなり

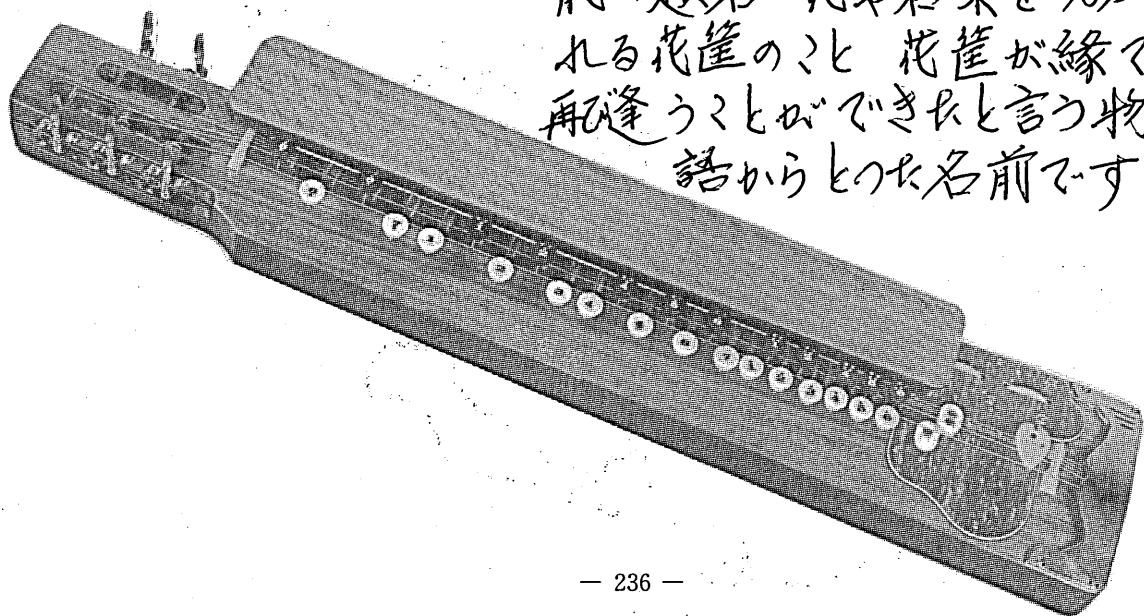
大勢の方々に楽しみを知ってもらいたいと思います

♪ おけいこ日 月 ㄥ 回

月曜日(金) ㄥ時～ㄥ時

グループ名 花が長み (白梅)

能の題名 花や若葉をつみ入
れる花筐のこゝと 花筐が縁で
再び逢うくとができ長と言う物
語からとつた名前です



パペット (人形劇&英会話)

私たちのサークルは、白梅分館主催の人形劇づくり講座(1991年5月～9月)に参加した仲間が中心になって活動しています。「保育室に子どもをあずかってもらいながら、自分も日本語を勉強したい!」という、外国人女性の一言から出発したこの講座。日本人8名、外国人6名で、人形作りから発表会まで長い道のりでした。今までに至る思い出や、感想をちょっと紹介します。

* 通うのに少し遠かったけれど、人形づくりも楽しくお友達も出来てうれしかった
(ヘディ=イラン)

* 家事や子どもの世話をしながらの人形作りはとても大変でした。途中で投げ出してしまったときに主人が励ましてくれたり手伝ってくれて、やっと完成することが出来ました。なれない言葉での人形劇の発表は、私にとってはとても大変なことでしたが、やり終えた今は、誇りにさえ感じ満足しています(エステル=フィリピン)



* 人形作りだけだと思っていたので、人形劇の台本をもらったときにはびっくりしたりいやになりました。でも、がんばって発表会まで参加できてとてもうれしかった。また、娘が保育室でたくさんのお友達ができ、毎週楽しみでした(マウリタ=フィリピン)

* 子どものために人形劇を習いたくて参加しました。

日本語を使って日本人の女性=主婦と交流するよい機会でした。次は、英語で人形劇をやりたいです。
(エヴァリン=アメリカ)

* 小道具や背景を作るのがとても大変でした。でも、人形劇は楽しかったです(フローハンス=フランス)

* 普通の主婦が、人形劇を通して一味違った主婦になりました(川久保)

* 外国の方々と一緒に人形劇を作りながら、出身国の生活習慣や日本にきてからの印象などの話を聞くことができ、とても楽しかった(佐藤)

* 各々の国や言葉を越えた人間同士のふれあいがとても大切なんだと痛感させられました。主婦になると失われがちな喜びや感動を体験でき、とても嬉しかった。
(飯田)

* 大変だったけど、何とか完成できてよかった（松崎）

上記のような思い出を残しながら、人形劇サークルバベットは、メンバーの一人から英会話を習うことになり、「英会話サークルバベット」が誕生しました。以下に、メンバーからの一言です。

* 一緒に人形劇を作りあげた仲間がほとんどなので、楽しんで勉強できます。子どもがうるさくて大変なのですが、せっかくのチャンスなので続けたいと思います（坂本）

* 子どもがバタバタしている状況の中で必死に先生の会話について行こうと頑張っています（石内）

* 人形劇は思ったより大変な作業でしたが、得るものもたくさんありました。これからは、英会話を通じて主婦同士が手をつないでいけたらと思います（中村）

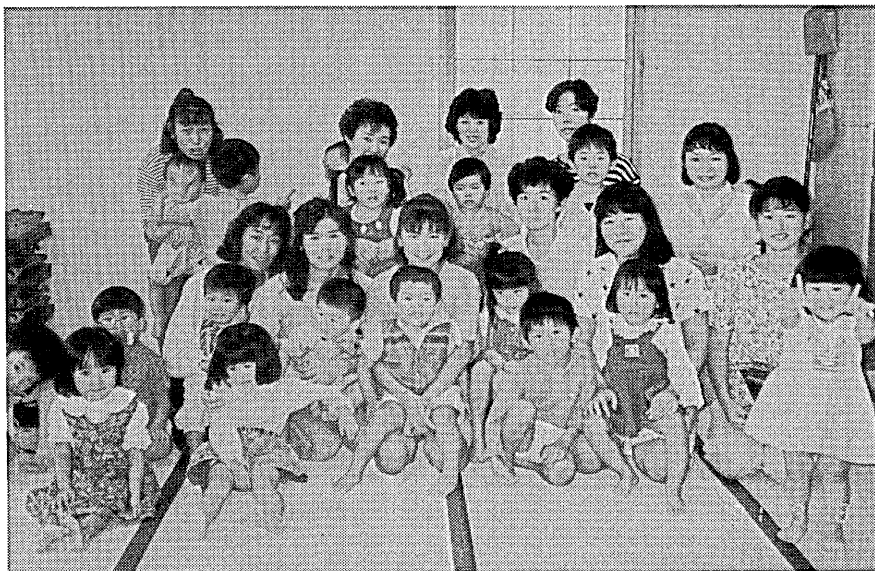
* いつも図々しい私が英会話のクラスではおとなしくなってしまう。もっと流暢に照れずに！を目標に（藤岡）

* 何かに使う訳でもない英会話なのに、話したい英語。小さな子どもがいても参加できる幸せを感じています（南條）

現在は、笹本エヴァリン先生のもとで約10名が週に1回、子ども達の騒音にも負けずに会話に励んでいます。人形劇も英会話も人と人とのふれあい、コミュニケーションだと思います。これからもコミュニケーションを大切に活動していきたいと考えています。



サークル「ピノキオ」



幼稚園入園前の子どもが集まり、和室の遊具を使って遊んだり、
天気のよい日は庭に出て砂場遊びもします。はじめは母親の助
言も必要でしたが、今では仲間意識も深まり、子ども同士で楽
しく遊べるようになりました。

これからも”友達”を大切にする気持ちを持ち、サークル活動
を進めていきたいと思っています。

びよんびよん　ちびっ子

私達の活動内容は、名前のとおり音楽に合わせてびよんびよんと飛び跳ねて遊ぶちびっ子（2・3歳児）と、お母さんのグループです。

リトミックという言葉をご存じの方も多いと思いますが、簡単に説明しますと、音楽を身体で感じることで、リズム感・音感・集中力を培います。

ここに集まってくる子ども達は、音楽が大好きです。ピアノの音やタンバリンの音などが聞こえてくると、自然に体が動きだします。歩いたり走ったり、ボールをころがしたり音楽ゲームをしたりで、体をいっぱい使って遊びます。



活動日は毎週木曜日の午前中です。南向きの集会室は、晴れた日には午前中の柔らかな日差しがいっぱい差し込み、子ども達の活動には最適です。広い部屋で伸び伸びと身体を動かし、大きな声で歌いこのような場所に出会えたことを嬉しく思っています。今後の白梅分館の発展を、心よりお祈り申し上げます。



キルトサークル・ピンフッション



私達のサークルも、平成3年11月で10周年を迎えました。パッチワーク教室に通っていた仲間が教室終了後も、時々仲間の家に集って活動していましたが、白梅分館が出来ましたのを機に活動の場を白梅分館に移し、現在に至っています。

白梅会館利用者発表会もオノ回から参加させていただき、10年間の数々の作品がよっかく想い出されます。

これから、みんなで楽しく作品を作り続けたいと思っています。



活動日

毎木曜日

P.M. 2:00 ~ 4:00



婦人のひろば

カラオケ・手芸・体操と、月3回の集まりです。今まで歌った事がなかったカラオケを習い始めてバス旅行が楽しくなりました。ぜひ続けたいと張り切っている方や、数少ない集まりの中で仲間の輪を大切に、また、雑談の中にも何かを得たいと、月3回の集まりを大切にしています。

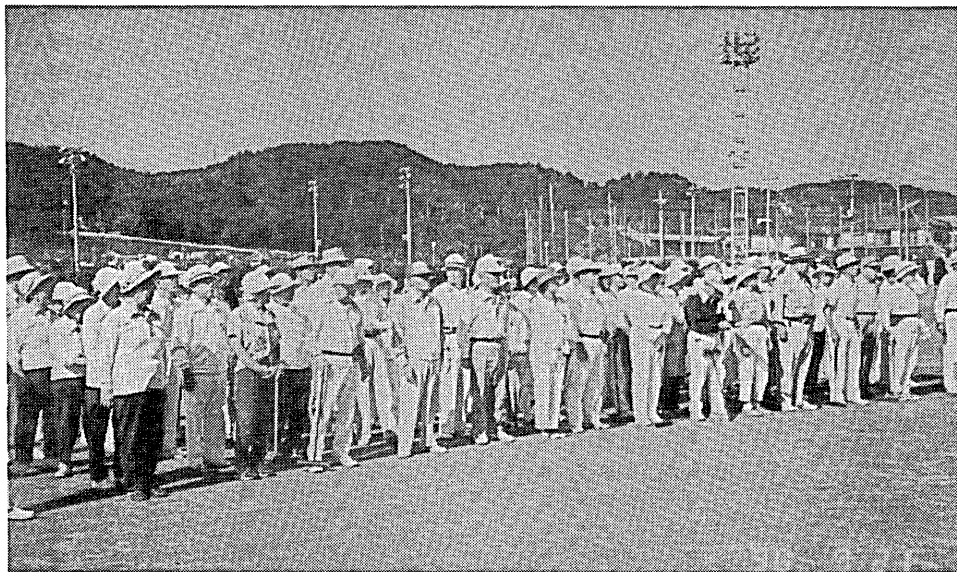
福生市ゲートボール協会

「東京ゲートボール連合福生市ゲートボール協会」が正式名称です。日本で生まれたゲートボールは、昭和55年頃から三多摩に普及されました。高齢者のスポーツとして、各地の老人会の方々が始められ、健康と親睦が目的でした。福生市も昭和57年頃から組織され、年々内容が充実され発展してきました。

当協会は、「日本ゲートボール」傘下の東京ゲートボール連合に加盟し、4年目を迎えます。会員数は130余名、南・内出・武蔵野・富玉・熊牛・福栄・鍋一・鍋二・牛一・原ヶ谷戸・レインボー・永田・本八第一・本六・福美・さくらの16チームの編成です。

各地域に練習場があり、親睦と健康増進に努めています。会の運営にあたっては、公民館白梅分館を多く使わせていただいています。年度の定期総会、理事会、審判員研修に役立て、会員のよりよい充実と発展を目指しています。会長＝粕谷栄治、理事長＝斉藤久守、役員24名により月例の親善競技会、春夏秋冬の各季節の大会、昭島市との交流試合、西多摩ブロック、東京ゲートボール大会などに参加し盛況裏に実施されています。

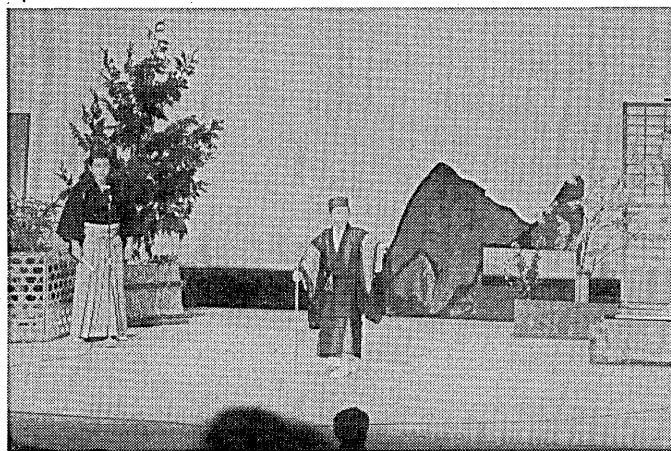
白梅分館は当協会にとってありがたい施設であり、また、高齢者の生きがいの場所であって欲しいと思う。お茶を飲むのにもいつでもお湯が沸いているボイラーがあれば、会議に夢中になりやかんのかけ忘れの心配がなくなり便利です。終戦時の生活を思うと、今は天国であるが、便利な生活もしたいものです。



吟詠 鵬城会

昭和49年10月に会が発足しました。毎週水曜日の夜7時半から同好の会員で大声を出し、健康保持、そして詩の内容を掘り下げ、心身共に栄養を摂って居ります。

外部的にも大きなイベントでは、団体、個人とも幾つもの賞に輝いて、名実共に素晴らしい会と高く評価を受けて居ります。



会員の要望で、志茂町会々館から白梅分館に移り10年近くなります。

市民文化祭へ毎年参加し他にない程の構成番組を演示し、年々期待されています。また、それに応えるべく努力し力を発揮しています。会員の統一した結束力は類を見ません。また、白梅分館利用者発表会も、今年で10

回目を迎えました。この発表会は、利用者のお互いの良き親睦の場であり、情報交換の場でもあります。

白梅分館に対しての要望は、無理とは思っていますが舞台の増設です。

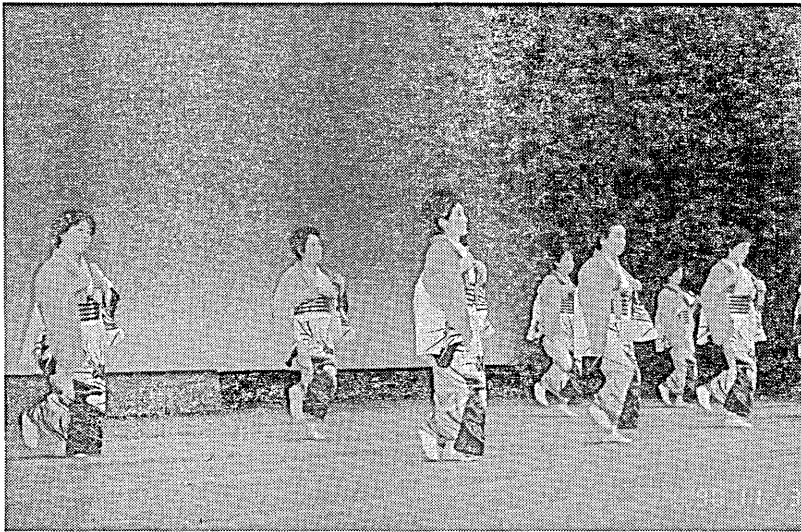


みふじ会

踊り好きな仲間が集まって和気あいあいと、毎週金曜日の夜の一時を楽しんで居ります。

昭和56年、市民文化教室に参加した人達を中心になって生まれたサークルですが、三藤流の名前から「みふじ会」と名付けました。

サークルとして活動を初めてから早や10余年になりますが、その間に仲間入りした人は30名を数えます。



民謡舞踊・歌謡舞踊が主ですが白梅分館の利用者発表会をはじめ、市民文化祭、七夕まつり、熊川神社の祭礼等に参加したり老人ホームの慰問等のボランティア活動にも積極的に意欲をみせ、活動しています。

「白梅音頭」は、三藤祥泰先生が振付けをしてくださいました。背筋を伸ばして、リズムにのって身体を動かすことは健康によく、ボケの防止にもなります。

踊りを通して温かい人の輪を広げていきたいと思えます。毎週金曜日、午後7時30分より9時30分まで、皆様もぜひお出かけください。



やよい会

白梅分館を利用し、三藤先生に教えてもらうようになって、早くも10余年の月日も過ぎ、毎週水曜日午前10時から12時まで楽しい時間を過ごしています。

春は桜まつり、夏には七夕まつり、秋には文化祭にも出演し、みんなで協力しあっています。また、踊り仲間で旅行にも行き、人生の1ページとして私たち自身の心に残る会です。

白梅分館の職員のみなさんにはいつもお世話をいただき、感謝いたしております。





☆ 外国人対象の日本語教室

○ 月曜午前“サンパギータ”

○ 金曜夜間“ともだち”

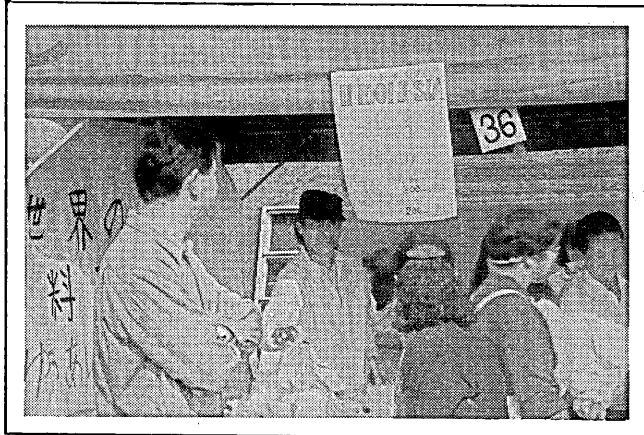
☆ 交流のためのパーティー
など“など”を
開いています

国際交流ボランティア

ゆうあいふさは

福生市公民館白梅分館 ★ 福生市 1559-1

☎ 0425-53-3454 伊東 記



11月3日 市営球場にて

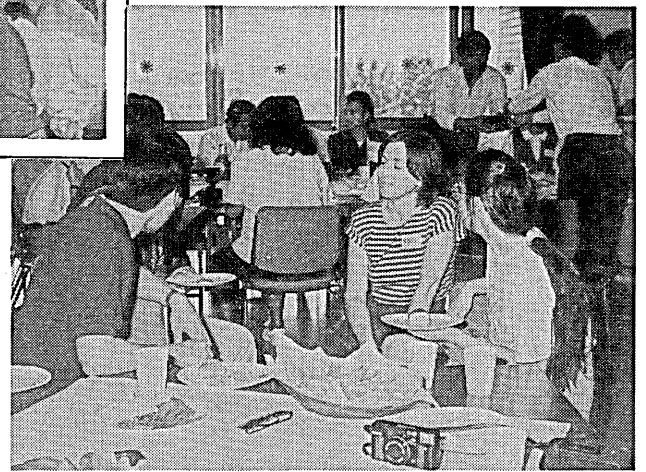
ふれあいフェスティバル

世界各国の料理を出品

7月14日 公民館にて

“公民館のつどい”

『外国人から見たふさは』分科会



ゆうあいふさは.....

日本にやってきた外国人の方々の日常生活を手助けするボランティアサークルです。
参加している人は、みんなふつうの人々です。特別な知識や能力などは全く
必要とされていません。

国籍の別なく、ごくふつうのくらしができるまち“ふさは”をめざし、参加者
全員で楽しくきびしい毎日をすごしています。

あなたの一歩が困っている外国人を助けます

サークル「ゆりの会」

昭和61年に生まれたサークルで、毎週水曜日の夜8:00~9:30分まで健康のために体操をしています。今年で6歳になります。

昼間には、仕事や用事で時間の取れない方が集まって、週に一度仲間と一緒に素敵な曲に合わせて身体を動かしています。年齢に関係なく無理せずマイペースで、徐々に体力をつけていきます。

当サークルで頑張っている仲間のコメントを一言……。



Aさん 「いつも気ままにさせていただき、楽しませてもらっています」

Mさん 「マイペースで楽しくやっています」

MSさん 「楽しい友達とおしゃべりと、運動不足解消をかねて参加させてもらっています」

TMさん 「毎回、素晴らしい友達と会えて楽しみです」

RMさん 「少しでもスマートになれたらと思って、楽しく汗を流して頑張っています」

EMさん 「硬い身体が柔らかくなるように始めました」

SMさん 「サークルのおかげで頭痛・肩こり・解消！体力の続くかぎり、がんばりマース」

MKさん 「今更瘦せようとか若返ろうとかは思いませんが、最新のポップスのリズムに乗って身体を動かし、いつまでも年をとらないようにと、なるべく続けたいと思っています」

YMさん 「いつもなごやかに楽しくやっています。心と身体の健康のために続けたいと思っています」

YYさん 「家庭生活の中で自分だけの時間を作ることも、夕食後の一時から飛び出てくることも大変なこと。でも、永く続けていればきっと後で答えが出ます」

陽青会

月に2回、久田流のお茶のお点前を練習しているサークルです。

昭和58年に白梅分館の文化教室に参加した仲間が、ずっと練習を続けたいと始まったのです。

いつもの練習は普段着でやっています。ですから、福生市の市民文化祭と白梅分館利用者発表会で、着物（ワンピースの時も）を着たりすると、とても緊張してしまうのです。

練習していて楽しいことは、先生の世間話と季節に合ったおいしいお菓子を食べることです。

何年習っていても、目新しい作法が出てきて、お茶は奥が深いとみんなで感心しているのです。

釜の湯がチンチンと沸く音を聞きながら、ちょっとつらい正座をしてお茶を飲むひとときは、忙しい日々の暮らしの中でほっとする大切な時間です。

いろいろな年齢の方に、この楽しさを味わっていただけたら………と思うのです。



着物で緊張している様子

ヨガサークル「オーム」

活動の歴史

発足当時の様子はよく分かりませんが、活動の様子の一部が分かる出納簿によれば、昭和58年8月から記帳が始まっています。この時、すでに繰越がありますので、これは二人目の先生を迎え会計をSさんが引き継いでからのものらしい。

しかし、一年半後には在籍者は多いのに参加者が少なく財政面で行き詰まり、その苦悩を隠すかのように記帳が中止されていました。その場は力のある個人が不足を補い継続してきました。

昭和63年度に会計交代があり、以後は会費の前払い・値上げと、募集記事の広報ふっさ掲載、ポスター作成と口こみ等の努力で増員を計りました。その後、手がぶつかり合う程になったので、平成元年1月に会費の値上げをし、また、その年の6月には初めて利用者発表会に参加し、日頃の成果を展示を通して発表しました。

平成2年11月、7年間お世話になった藤森先生が遠方に転居されることになり、名残惜しい別れをしました。12月からは大浜先生を新しくお迎えできほっとしましたが、再び会員数が減少し、平成2年の半ばにはもう解散かと思いましたが、広報に募集記事を掲載したところ、数人の新会員を迎えることが出来ました。そして、現在は平均年齢がちょっと高めの専業主婦や仕事を持っている主婦の合計28名で少しずつ力を出し合って、魅力ある活動内容、世話役輪番制、出席者数確保、ホットな人間関係をはかって公民館活動の中にヨガサークル・オームの位置を確保し続けたいと思っています。

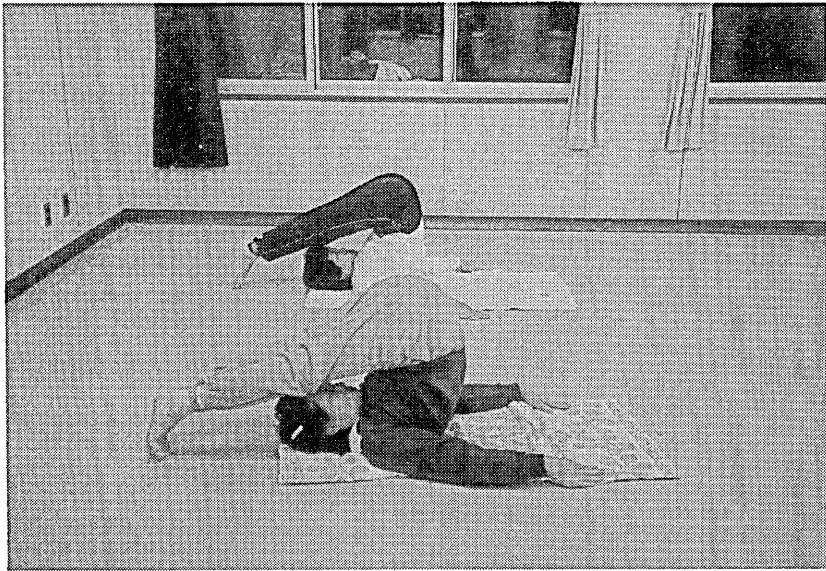
毎回の風景

平均出席者数20名弱、先生の美しい声に従い手足など末端を揉みほぐすところから始め、無理をしたら痛みを伴うポーズでもほほえんでいられるところまでで止め、時間をかけて緊張している身体をほぐしていきます。呼吸をしながらポーズをとりますから、女性の好きなおしゃべりは聞こえません。休息のポーズの一瞬かすかな寝息を聞くときがありますが、静寂そのもの。ですから、お互いに何処の誰なのかを知るには時間がかかります。

しかし、ここにはこすり合わせた両手のひらを相手の硬くて伸びにくい背にあてて伸びるようにと心を込めて念じます。二人の息が合うと温かな手を通して思いが通じ、本当に伸ばしたり曲げたりしやすくなります。また、失いつつある注意力・集中力・精神統一力などを保持出来る健康法ですから、老化の訪れを少しでも先に延ばしたいと頑張っているようです。

スキのポーズ

全身のうっ血をとり、内臓
諸器官の働きを高めます。
背中・腹部・脚のゼイ肉を
取り、すっきりします。
老化減少を防ぐので、若返
りのポーズとされています。



レザークラフト

私達はレザークラフト作りを楽しむ会です。指導してくださっているのは、鍋一町会にお住まいの馬場先生です。現在7人で毎月第一、第三土曜日の午前9時～午後1時30分まで活動しています。

レザークラフトって見たことはあるけれど、どんなふうに使っているかは、たぶんご存じないと思いますので、以下に簡単に作り方を説明します。

- ① まず自分が作りたい図案を決め、トレーシングペーパーに写します
- ② 皮の上にこのトレーシングペーパーをのせ、鉄筆で図案を写します
- ③ 図案を写し終った皮に打ち工具を使い彫りを入れていきます
- ④ 彫り上がった皮に色付けをします（レザークラフト作りの行程で、この行程が一番楽しみでもあり、難しい行程でもあります）
- ⑤ 作るものの型に皮を裁断します（市販のパーツなどを利用します）
- ⑥ 裁断した皮をパーツと一緒に縫い合わせ出来上り

出来上がったときの嬉しいこと！よろしければ見にきてください。お待ちしております。

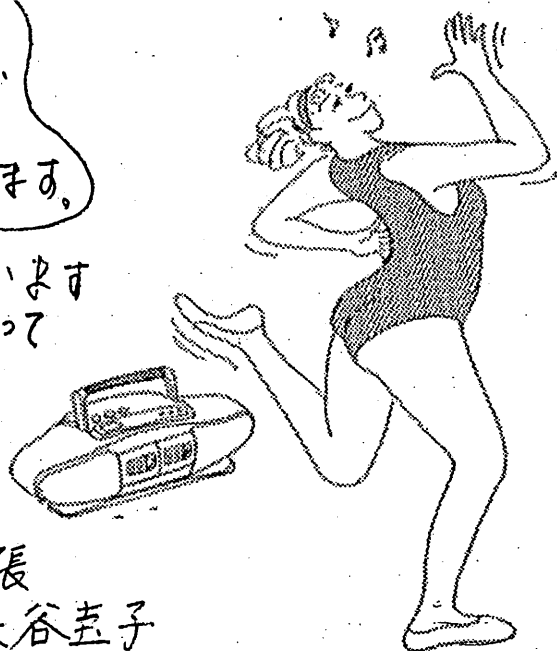


レディース・スポーツサークル

S.57年10月に 3人で はじめた このサークルも 10年目に入りました。いままでに 数多くの仲間が 出ましたが いろんな事情で 途中でやめてしまう人が多く 体を動かすことは いいことだとわかっていても 続けるということは 必ずかいてお

でも…… 一生つきあう体だから 体にいいことづけよう。 いつものこれをモットーに たのしく体を動かしています。

白梅会館十周年おめでとうございませう
私もレディース・スポーツサークルに入って
もう二年になります。ダンスをしたり、
体を動かしたりして体が軽くなります。たまにはサークルの友達と
食事に行ったりして、毎週金
曜日が楽しみです。これから頑張
ります。とっても楽しいサークルです 森谷圭子



白梅会館ではいまだに
私達の体操が、今年
今年十月で満十年に
なりませう。音楽に合
せてのリズム体操は、
れで体調をくづし寝
込む事の多かった私に
は、とてもよい健康体操
でした。楽しく、ストレス
解消にもなり、仲間も
でき、四十肩、五十肩も
知らず、年齢をかさねて
いりませう。
皆さんもぜひ参加下
さい。白梅会館で毎週
金曜日は十時半から正
午までの一時間半と
ここちよい汗を流して
みませうか。

青山明美

PTAや町会、そして学校・地方自治体などの行事や利用はカウントしていない

— 255 ~ 256 —

[illegible]

ひこばえ食べ物を考える会				12		Q				
ひだまり	18		Q							
ひまわり								3Q		
ひまわり井戸端会				5		Q				
ひよこの会			5				Q			
ひま							12			
ひまわり		11								
ひまわり愛好会									2Q	
ひまのどう						7		C C		
ひまのどう	9									C
ひまのどう	14									
ひまのどう									9	
ひまのどう	5 Q									
ひまのどう	20		Q							
ひまのどう			13							
ひまのどう	28			Q						
ひまのどう		8Q							21	
ひまのどう										C
ひまのどう				4Q						
ひまのどう										C
ひまのどう	15									
ひまのどう		6							Q	
ひまのどう	15							Q		
ひまのどう				11Q						
ひまのどう		21 Q								
ひまのどう					12					
ひまのどう					15Q					
ひまのどう	11	Q								
ひまのどう			6			Q				
ひまのどう				9Q						
ひまのどう			1Q							
ひまのどう									2Q	
ひまのどう		14			Q					
ひまのどう						22				
ひまのどう	3									
ひまのどう		20								
ひまのどう			26							
ひまのどう						7		C C Q		
ひまのどう				14Q						
ひまのどう			8							
ひまのどう		14	Q							
ひまのどう				3 Q						
ひまのどう						27			C	
ひまのどう					7					
ひまのどう									1	
ひまのどう				28						
ひまのどう			1							
ひまのどう	2Q									
ひまのどう	19				6					
ひまのどう								9		
ひまのどう	13				Q					
ひまのどう		9		Q						

白梅分館10年のあゆみ

福生市公民館白梅分館10年の足跡

発行 1992年(平成4年)3月発行

発行者 福生市公民館白梅分館
東京都福生市熊川559-1

Tel 0425-53-3454

印刷/製本 有限会社 セイビ印刷所

Tel 0425-52-0505

